

Linux From Scratch

Version 7.4

製作：Gerard Beekmans

編集：Matthew Burgess、Bruce Dubbs

日本語訳：松山 道夫 (20130908 版)

Linux From Scratch: Version 7.4

製作： Gerard Beekmans, 編集： Matthew Burgess、Bruce Dubbs、日本語訳： 松山 道夫 (20130908 版)
製作著作 © 1999–2013 Gerard Beekmans

Copyright © 1999–2013, Gerard Beekmans

All rights reserved.

本書は クリエイティブコモンズライセンス に従います。

本書のインストール手順のコマンドを抜き出したものは MIT ライセンス に従ってください。

Linux® は Linus Torvalds の登録商標です。

目次

序文	vii
i. はしがき	vii
ii. 対象読者	vii
iii. LFS が対象とする CPU アーキテクチャー	viii
iv. LFS と各種標準	viii
v. 各パッケージを用いる理由	ix
vi. 必要な知識	xiii
vii. ホストシステム要件	xiv
viii. 本書の表記	xv
ix. 本書の構成	xvi
x. 正誤情報	xvii
xi. 日本語訳について	xvii
I. はじめに	1
1. はじめに	2
1.1. LFS をどうやって作るか	2
1.2. 前版からの変更点	2
1.3. 変更履歴	3
1.4. 変更履歴 (日本語版)	7
1.5. 情報源	9
1.6. ヘルプ	10
II. ビルド作業のための準備	12
2. 新しいパーティションの準備	13
2.1. はじめに	13
2.2. 新しいパーティションの生成	13
2.3. ファイルシステムの生成	14
2.4. 新しいパーティションのマウント	15
3. パッケージとパッチ	16
3.1. はじめに	16
3.2. 全パッケージ	17
3.3. 必要なパッチ	22
4. 準備作業の仕上げ	24
4.1. \$LFSについて	24
4.2. \$LFS/tools ディレクトリの生成	24
4.3. LFS ユーザーの追加	24
4.4. 環境設定	25
4.5. SBU 値について	26
4.6. テストスイートについて	27
5. 一時的環境の構築	28
5.1. はじめに	28
5.2. ツールチェーンの技術的情報	28
5.3. 一般的なコンパイル手順	29
5.4. Binutils-2.23.2 - 1回め	31
5.5. GCC-4.8.1 - 1回め	33
5.6. Linux-3.10.10 API ヘッダー	36
5.7. Glibc-2.18	37
5.8. Libstdc++-4.8.1	40
5.9. Binutils-2.23.2 - 2回め	41
5.10. GCC-4.8.1 - 2回め	43
5.11. Tcl-8.6.0	46
5.12. Expect-5.45	48
5.13. DejaGNU-1.5.1	49
5.14. Check-0.9.10	50
5.15. Ncurses-5.9	51
5.16. Bash-4.2	52
5.17. Bzip2-1.0.6	53
5.18. Coreutils-8.21	54
5.19. Diffutils-3.3	55
5.20. File-5.14	56

5.21.	Findutils-4.4.2	57
5.22.	Gawk-4.1.0	58
5.23.	Gettext-0.18.3	59
5.24.	Grep-2.14	60
5.25.	Gzip-1.6	61
5.26.	M4-1.4.16	62
5.27.	Make-3.82	63
5.28.	Patch-2.7.1	64
5.29.	Perl-5.18.1	65
5.30.	Sed-4.2.2	66
5.31.	Tar-1.26	67
5.32.	Texinfo-5.1	68
5.33.	Xz-5.0.5	69
5.34.	ストリップ	70
5.35.	所有者の変更	70
III.	LFSシステムの構築	71
6.	基本的なソフトウェアのインストール	72
6.1.	はじめに	72
6.2.	仮想カーネルファイルシステムの準備	72
6.3.	パッケージ管理	73
6.4.	Chroot 環境への移行	76
6.5.	ディレクトリの生成	77
6.6.	基本的なファイルとリンクの生成	77
6.7.	Linux-3.10.10 API ヘッダー	80
6.8.	Man-pages-3.53	81
6.9.	Glibc-2.18	82
6.10.	ツールチェーンの調整	88
6.11.	Zlib-1.2.8	90
6.12.	File-5.14	91
6.13.	Binutils-2.23.2	92
6.14.	GMP-5.1.2	94
6.15.	MPFR-3.1.2	95
6.16.	MPC-1.0.1	96
6.17.	GCC-4.8.1	97
6.18.	Sed-4.2.2	101
6.19.	Bzip2-1.0.6	102
6.20.	Pkg-config-0.28	104
6.21.	Ncurses-5.9	105
6.22.	Shadow-4.1.5.1	107
6.23.	Util-linux-2.23.2	110
6.24.	Psmisc-22.20	114
6.25.	Procps-ng-3.3.8	115
6.26.	E2fsprogs-1.42.8	117
6.27.	Coreutils-8.21	120
6.28.	Iana-Etc-2.30	124
6.29.	M4-1.4.16	125
6.30.	Flex-2.5.37	126
6.31.	Bison-3.0	127
6.32.	Grep-2.14	128
6.33.	Readline-6.2	129
6.34.	Bash-4.2	130
6.35.	Bc-1.06.95	132
6.36.	Libtool-2.4.2	133
6.37.	GDBM-1.10	134
6.38.	Inetutils-1.9.1	135
6.39.	Perl-5.18.1	137
6.40.	Autoconf-2.69	140
6.41.	Automake-1.14	141
6.42.	Diffutils-3.3	143
6.43.	Gawk-4.1.0	144
6.44.	Findutils-4.4.2	145

6.45.	Gettext-0.18.3	146
6.46.	Groff-1.22.2	148
6.47.	Xz-5.0.5	150
6.48.	GRUB-2.00	152
6.49.	Less-458	154
6.50.	Gzip-1.6	155
6.51.	IPRoute2-3.10.0	156
6.52.	Kbd-1.15.5	158
6.53.	Kmod-14	160
6.54.	Libpipeline-1.2.4	162
6.55.	Make-3.82	163
6.56.	Man-DB-2.6.5	164
6.57.	Patch-2.7.1	167
6.58.	Sysklogd-1.5	168
6.59.	Sysvinit-2.88dsf	169
6.60.	Tar-1.26	171
6.61.	Texinfo-5.1	172
6.62.	Udev-206 (systemd-206 から抽出)	174
6.63.	Vim-7.4	176
6.64.	デバッグシンボルについて	179
6.65.	再度のストリップ	179
6.66.	仕切り直し	179
7.	ブートスクリプトの設定	181
7.1.	はじめに	181
7.2.	一般的なネットワークの設定	181
7.3.	/etc/hosts ファイルの設定	183
7.4.	LFS システムにおけるデバイスとモジュールの扱い	184
7.5.	デバイスへのシンボリックリンクの生成	188
7.6.	LFS-ブートスクリプト-20130821	190
7.7.	ブートスクリプトはどのようにして動くのか	192
7.8.	システムのホスト名の設定	193
7.9.	Setclock スクリプトの設定	194
7.10.	Linux コンソールの設定	194
7.11.	Sysklogd スクリプトの設定	197
7.12.	rc.site ファイル	197
7.13.	Bash シェルの初期起動ファイル	199
7.14.	/etc/inputrc ファイルの生成	201
8.	LFS システムのブート設定	203
8.1.	はじめに	203
8.2.	/etc/fstab ファイルの生成	203
8.3.	Linux-3.10.10	205
8.4.	GRUB を用いたブートプロセスの設定	208
9.	作業終了	210
9.1.	作業終了	210
9.2.	ユーザー登録	210
9.3.	システムの再起動	210
9.4.	今度は何?	211
IV.	付録	213
A.	略語と用語	214
B.	謝辞	216
C.	パッケージの依存関係	218
D.	ブートスクリプトと sysconfig スクリプト version-20130821	226
D.1.	/etc/rc.d/init.d/rc	226
D.2.	/lib/lsb/init-functions	230
D.3.	/etc/rc.d/init.d/functions	243
D.4.	/etc/rc.d/init.d/mountvirtfs	256
D.5.	/etc/rc.d/init.d/modules	257
D.6.	/etc/rc.d/init.d/udev	258
D.7.	/etc/rc.d/init.d/swap	260
D.8.	/etc/rc.d/init.d/setclock	261
D.9.	/etc/rc.d/init.d/checkfs	262

D.10.	/etc/rc.d/init.d/mountfs	264
D.11.	/etc/rc.d/init.d/udev_retry	266
D.12.	/etc/rc.d/init.d/cleanfs	267
D.13.	/etc/rc.d/init.d/console	269
D.14.	/etc/rc.d/init.d/localnet	271
D.15.	/etc/rc.d/init.d/sysctl	272
D.16.	/etc/rc.d/init.d/sysklogd	273
D.17.	/etc/rc.d/init.d/network	274
D.18.	/etc/rc.d/init.d/sendsignals	276
D.19.	/etc/rc.d/init.d/reboot	277
D.20.	/etc/rc.d/init.d/halt	278
D.21.	/etc/rc.d/init.d/template	278
D.22.	/etc/sysconfig/modules	279
D.23.	/etc/sysconfig/createfiles	280
D.24.	/etc/sysconfig/udev-retry	280
D.25.	/sbin/ifup	281
D.26.	/sbin/ifdown	283
D.27.	/lib/services/ipv4-static	285
D.28.	/lib/services/ipv4-static-route	286
E.	Udev 設定ルール	289
E.1.	55-lfs.rules	289
F.	LFS ライセンス	290
F.1.	クリエイティブコモンズライセンス	290
F.2.	MIT ライセンス (The MIT License)	293
	項目別もくじ	294

序文

はしがき

私が Linux について理解し学び始めたのは 1998 年頃からです。Linux ディストリビューションのインストールを行ったのはその時が初めてです。そして即座に Linux 全般の考え方や原理について興味を抱くようになりました。

何かの作業を完成させるには多くの方法があるものです。同じことは Linux ディストリビューションについても言えます。この数年の間に数多くのディストリビューションが登場しました。あるものは今も存在し、あるものは他のものへと形を変え、そしてあるものは記憶の彼方へ追いやられたりもしました。それぞれが利用者の求めに応じて、さまざまに異なる形でシステムを実現してきたわけです。最終ゴールが同じものなのに、それを実現する方法がたくさんあるものです。したがって私は一つのディストリビューションにとられることが不要だと思い始めました。Linux が登場する以前であれば、オペレーティングシステムに何か問題があったとしても、他に選択肢はなくそのオペレーティングシステムで満足する以外にありませんでした。それはそういうものであって、好むと好まざるは関係がなかったのです。それが Linux になって “選ぶ” という考え方が出てきたわけです。何かが入らなかつたら、いくらでも変えたら良いし、そうすることがむしろ当たり前なのです。

数多くのディストリビューションを試してみましたが、これという 1 つに決定できるものはありませんでした。個々のディストリビューションは優れたもので、それぞれを見てみれば正しいものです。ただこれは正しいとか間違っているとかの問題ではなく、個人的な趣味の問題へと変化しているのです。こうしたさまざまな状況を通じて明らかになってきたのは、私にとって完璧なシステムは 1 つもないということです。そこで私は自分自身の Linux を作り出して、自分の好みを満足させるものを目指したのです。

本当に自分自身のシステムを作り出すため、私はすべてをソースコードからコンパイルすることを目指し、コンパイル済のバイナリパッケージは使わないことにしました。この「完璧な」Linux システムは、他のシステムが持つ弱点を克服し、逆にすべての強力さを合わせ持つものです。当初は気の遠くなる思いがしていましたが、そのアイデアは今も持ち続けています。

パッケージが相互に依存している状況やコンパイル時にエラーが発生するなどを順に整理していく中で、私はカスタムメイドの Linux を作り出したのです。この Linux は今日ある他の Linux と比べても、十分な機能を有し十分に扱いやすいものとなっています。これは私自身が作り出したものです。いろいろなものを自分で組み立てていくのは楽しいものです。後は個々のソフトウェアまでも自分で作り出せば、もっと楽しいものになるのでしょうか、それは次の目標とします。

私の求める目標や作業経験を他の Linux コミュニティの方々とも共有する中で、私の Linux への挑戦は絶えることなく続いていくことを実感しています。このようなカスタムメイドの Linux システムを作り出せば、独自の仕様や要求を満たすことができるのはもちろんですが、さらにはプログラマーやシステム管理者の Linux 知識を引き伸ばす絶好の機会となります。壮大なこの意欲こそが Linux From Scratch プロジェクト誕生の理由なのです。

Linux From Scratch ブックは関連プロジェクトの中心に位置するものです。皆さんご自身のシステムを構築するために必要となる基礎的な手順を提供します。本書が示すのは正常動作するシステム作りのための雛形となる手順ですので、皆さんが望んでいる形を作り出すために手順を変えていくことは自由です。それこそ、本プロジェクトの重要な特徴でもあります。そうしたとしても手順を踏み外すものではありません。我々は皆さんが挑戦する旅を応援します。

あなたの LFS システム作りが素晴らしいひとときとなりますように。そしてあなた自身のシステムを持つ楽しみとなりますように。

--
Gerard Beekmans
gerard@linuxfromscratch.org

対象読者

本書を読む理由はさまざまにあると思いますが、よく挙がってくる質問として以下があります。「既にある Linux をダウンロードしてインストールすれば良いのに、どうして苦労してまで手作業で Linux を構築しようとするのか。」

本プロジェクトを提供する最大の理由は Linux システムがどのようにして動作しているのか、これを学ぶためのお手伝いをするからです。LFS システムを構築してみれば、さまざまなものが連携し依存しながら動作している様子を知ることができます。そうした経験をした人であれば Linux システムを自分の望む形に作りかえる手法も身につけることができます。

LFS の重要な利点として、他の Linux システムに依存することなく、システムをより適切に制御できる点が挙げられます。LFS システムではあなたが運転台に立って、システムのあらゆる側面への指示を下していきます。

さらに非常にコンパクトな Linux システムを作る方法も身につけられます。通常の Linux ディストリビューションを用いる場合、多くのプログラムをインストールすることになりますが、たいいていのプログラムは使わないものですし、その内容もよく分からないものです。それらのプログラムはハードウェアリソースを無駄に占有することになります。今日のハードドライブや CPU のことを考えたら、リソース消費は大したことはないと思うかもしれません。しかし問題がなくなったとしても、サイズの制限だけは気にかける必要があることでしょう。例えばブータブル CD、USB スティック、組み込みシステムなどのことを思い浮かべてください。そういったものに対して LFS は有用なものとなるでしょう。

カスタマイズした Linux システムを構築するもう一つの利点として、セキュリティがあります。ソースコードからコンパイルしてシステムを構築するということは、あらゆることを制御する権限を有することになり、セキュリティパッチは望みどおりに適用できます。他の人がセキュリティホールを修正しバイナリパッケージを提供するのを待つ必要がなくなるということです。他の人がパッチとバイナリパッケージを提供してくれたとしても、それが本当に正しく構築され、問題を解決してくれているかどうかは、調べてみなければ分からないわけですから。

Linux From Scratch の最終目標は、実用的で完全で、基盤となるシステムを構築することです。Linux システムを一から作り出すつもりのない方は、本書から得られるものはないかもしれません。

LFS を構築する理由はさまざまですから、すべてを列記することはできません。学習こそ、理由を突き詰める最大最良の手段です。LFS 構築作業の経験を積むことによって、情報や知識を通じてもたらされる意義が十二分に理解できるはずです。

LFS が対象とする CPU アーキテクチャー

LFS が対象としている CPU アーキテクチャーは AMD/インテル x86 CPU (32ビット) と x86_64 CPU (64ビット) です。Power PC CPU については、本書の手順を多少修正することで動作することが確認されています。これらの CPU を利用したシステムをビルドする場合は、この後に示す諸条件を満たす必要がありますが、まずはそのアーキテクチャーをターゲットとする、LFS システムそのものや Ubuntu、Red Hat/Fedora、SuSE などの Linux システムが必要です。ホストが 64 ビット AMD/インテルによるシステムであったとしても 32 ビットシステムは問題なくインストールできます。

64 ビットシステムにて明らかなことをここに記しておきます。32 ビットシステムに比べると、実行プログラムのサイズは多少大きくなり、実行速度は若干速くなります。例えば Core2Duo CPU をベースとするシステム上に、LFS 6.5 をビルドしてみたところ、以下のような情報が得られました。

アーキテクチャー	ビルド時間	ビルドサイズ
32 ビット	198.5 分	648 MB
64 ビット	190.6 分	709 MB

ご存知かと思いますが 64 ビットによってビルドを行っても、32 ビットのときのビルドに比べて 4% 早くなるだけで 9% は大きなものになります。つまり 64ビットシステムによって得られることは比較的小さいということです。もちろん 4GB 以上の RAM を利用していたり、4GB を超えるデータを取り扱いたいならば、64 ビットシステムを用いるメリットが大きいのは間違いありません。

LFS の手順に従って作り出す 64 ビットシステムは、“純粋な”64 ビットシステムと言えます。つまりそのシステムは 64 ビット実行モジュールのみをサポートするということです。“複数のライブラリ”によるシステムをビルドするのなら、多くのアプリケーションを二度ビルドしなければなりません。一度は 32 ビット用であり、一度は 64 ビット用です。現時点にて本書はこの点をサポートしませんが、後々のリリースに向けて検討中です。さしあたりそのような応用的なトピックに関しては Cross Linux From Scratch プロジェクトを参照してください。

最後に 64 ビットシステムについても一つ述べておきます。古いパッケージの中には現時点にて“純粋な”64 ビットシステム上でビルドできないものがあり、あるいは特別なビルド手順を必要とするものがあります。一般的に言えば、そのようなパッケージには 32 ビット固有のアセンブリ言語の命令が含まれるからであり、だから 64 ビットシステムでのビルドに失敗するということです。例としては <http://xorg.freedesktop.org/releases/individual/driver/> にある、古いビデオカードに対応する Xorg ドライバーなどです。このような問題はたいいていは解消していくことができますが、中には特別なビルド手順やパッチを要するものとなるかもしれません。

LFS と各種標準

LFS の構成は出来る限り Linux の各種標準に従うようにしています。主な標準は以下のものです。

- POSIX.1-2008
- Filesystem Hierarchy Standard (FHS)
- Linux Standard Base (LSB) Specifications

LSB はさらに以下の 5 つの標準から構成されます。コア (Core)、C++、デスクトップ (Desktop)、ランタイム言語 (Runtime Languages)、印刷 (Printing) です。また一般的な要求事項に加えて、アーキテクチャーに固有の要求事項もあります。LFS では前節にて示したように、各アーキテクチャーに適合することを目指します。



注記

LSB の要求に対しては異論のある方も多いでしょう。LSB を定義するのは、私有ソフトウェア (proprietary software) をインストールした場合に、要求事項を満たしたシステム上にて問題なく動作することを目指すためです。LFS はソースコードから構築するシステムですから、どのパッケージを利用するかをユーザー自身が完全に制御できます。また LSB にて要求されているパッケージであっても、インストールしない選択をとることもできます。

LFS の構築にあたっては LSB に適合していることを確認するテスト (certifications tests) をクリアするように構築することも可能です。ただし LFS の範囲外にあるパッケージ類を追加しなければ実現できません。そのような追加パッケージ類については、おおむね BLFS にて導入手順を説明しています。

LFS 提供のパッケージで LSB 要求に従うもの

LSB コア: Bash, Bc, Binutils, Coreutils, Diffutils, File, Findutils, Gawk, Grep, Gzip, M4, Man-DB, Ncurses, Procps, Psmisc, Sed, Shadow, Tar, Util-linux, Zlib

LSB C++: Gcc

LSB デスクトップ: なし

LSB ランタイム言語: Perl

LSB 印刷: なし

LSB マルチメディア: なし

BLFS 提供のパッケージで LSB 要求に従うもの

LSB コア: At, Batch (At の一部), Cpio, Ed, Fcfrontab, Initd-tools, Lsb_release, PAM, Sendmail (または Postfix または Exim)

LSB C++: なし

LSB デスクトップ: ATK, Cairo, Desktop-file-utils, Freetype, Fontconfig, Glib2, GTK+2, Icon-naming-utils, Libjpeg, Libpng, Libxml2, MesaLib, Pango, Qt4, Xorg

LSB ランタイム言語: Python

LSB 印刷: CUPS

LSB マルチメディア: Alsa 関連ライブラリ, NSPR, NSS, OpenSSL, Java, Xdg-utils

LFS, BLFS で提供しないパッケージで LSB 要求に従うもの

LSB コア: なし

LSB C++: なし

LSB デスクトップ: Qt3

LSB ランタイム言語: なし

LSB 印刷: なし

LSB マルチメディア: なし

各パッケージを用いる理由

既に説明しているように LFS が目指すのは、完成した形での実用可能な基盤システムを構築することです。LFS に含まれるパッケージ群は、パッケージの個々を構築していくために必要となるものばかりです。そこからは最小限の基盤となるシステムを作り出します。そしてユーザーの望みに応じて、より完璧なシステムへと拡張していくものとなります。LFS は極小システムを意味するわけではありません。厳密には必要のないパッケージであっても、重要なものとして含んでいるものもあります。以下に示す一覧は、本書内の各パッケージの採用根拠について説明するものです。

- Autoconf

このパッケージは、以下に示すようなシェルスクリプトを生成するプログラムを提供します。つまり開発者が意図しているテンプレートに基づいて、ソースコードを自動的に設定する (configure する) ためのシェルスクリプトです。特定のパッケージのビルド方法に変更があった場合は、パッケージ再構築を行うことになるため、その場合に本パッケージが必要となります。

- Automake

このパッケージは、テンプレートとなるファイルから Makefile を生成するためのプログラムを提供します。特定のパッケージのビルド方法に変更があった場合は、パッケージ再構築を行うことになるため、その場合に本パッケージが必要となります。

- Bash

このパッケージは、システムとのインターフェースを実現する Bourne シェルを提供し、LSB コア要件を満たします。他のシェルを選ばずにこれを選ぶのは、一般的に多用されていることと、基本的なシェル関数における拡張性が高いからです。

- Bc

このパッケージは、任意精度 (arbitrary precision) の演算処理言語を提供します。Linux カーネルの構築に必要となります。

- Binutils

このパッケージは、リンカー、アセンブラーのような、オブジェクトファイルを取り扱うプログラムを提供します。各プログラムは LFS における他のパッケージをコンパイルするために必要となり、さらに LFS にて示される以外のパッケージでも必要となります。

- Bison

このパッケージは yacc (Yet Another Compiler Compiler) の GNU バージョンを提供します。LFS において利用するプログラムの中に、これを必要とするものがあります。

- Bzip2

このパッケージは、ファイルの圧縮、伸張 (解凍) を行うプログラムを提供します。これは LFS パッケージの多くを伸張 (解凍) するために必要です。

- Check

このパッケージは、他のプログラムに対するテストハーネス (test harness) を提供します。これは一時的なツールチェーンにおけるのみインストールします。

- Coreutils

このパッケージは、ファイルやディレクトリを参照あるいは操作するための基本的なプログラムを数多く提供します。各プログラムはコマンドラインからの実行によりファイル制御を行うために必要です。また LFS におけるパッケージのインストールに必要となります。

- DejaGNU

このパッケージは、他のプログラムをテストするフレームワークを提供します。これは一時的なツールチェーンプログラムをインストールする際にだけ必要となります。

- Diffutils

このパッケージは、ファイルやディレクトリ間の差異を表示するプログラムを提供します。各プログラムはパッチを生成するために利用されます。したがってパッケージのビルド時に利用されることが多々あります。

- E2fsprogs

このパッケージは ext2, ext3, ext4 の各ファイルシステムを取り扱うユーティリティを提供します。各ファイルシステムは Linux がサポートする一般的なものであり、十分なテストが実施されているものです。

- Expect

このパッケージは、スクリプトで作られた対話型プログラムを通じて、他のプログラムとのやりとりを行うプログラムを提供します。通常は他のパッケージをテストするために利用します。本書では一時的なツールチェーンの構築時にしかインストールしません。

- File

このパッケージは、指定されたファイルの種類を判別するユーティリティプログラムを提供します。他のパッケージにおいて、ビルド時にこれを必要とするものもあります。

- Findutils

このパッケージは、ファイルシステム上のファイルを検索するプログラムを提供します。これは他のパッケージにて、ビルド時のスクリプトにおいて利用されています。

- Flex

このパッケージは、テキスト内の特定パターンの認識プログラムを生成するユーティリティを提供します。これは lex (字句解析; lexical analyzer) プログラムの GNU 版です。LFS 内の他のパッケージの中にこれを必要としているものがあります。

- Gawk

このパッケージはテキストファイルを操作するプログラムを提供します。プログラムは GNU 版の awk (Aho-Weinberg-Kernighan) です。これは他のパッケージにて、ビルド時のスクリプトにおいて利用されています。

- Gcc

これは GNU コンパイラコレクションパッケージです。C コンパイラと C++ コンパイラを含みます。また LFS ではビルドしないコンパイラも含まれています。

- GDBM

このパッケージは GNU データベースマネージャライブラリを提供します。LFS が扱う Man-DB パッケージがこれを利用しています。

- Gettext

このパッケージは、各種パッケージが国際化を行うために利用するユーティリティやライブラリを提供します。

- Glibc

このパッケージは C ライブラリです。Linux 上のプログラムはこれがなければ動作させることができません。

- GMP

このパッケージは数値演算ライブラリを提供するもので、任意精度演算 (arbitrary precision arithmetic) についての有用な関数を含みます。これは GCC をビルドするために必要です。

- Grep

このパッケージはファイル内を検索するプログラムを提供します。これは他のパッケージにて、ビルド時のスクリプトにおいて利用されています。

- Groff

このパッケージは、テキストを処理し整形するプログラムをいくつか提供します。重要なものプログラムとして man ページを生成するものを含みます。

- GRUB

これは Grand Unified Boot Loader です。ブートローダーとして利用可能なものの中でも、これが最も柔軟性に富むものです。

- Gzip

このパッケージは、ファイルの圧縮と伸張 (解凍) を行うプログラムを提供します。LFS において、パッケージを伸張 (解凍) するために必要です。

- Iana-etc

このパッケージは、ネットワークサービスやプロトコルに関するデータを提供します。ネットワーク機能を適切に有効なものとするために、これが必要です。

- Inetutils

このパッケージは、ネットワーク管理を行う基本的なプログラム類を提供します。

- IProute2

このパッケージは、IPv4、IPv6 による基本的な、あるいは拡張したネットワーク制御を行うプログラムを提供します。IPv6 への対応があることから、よく使われてきたネットワークツールパッケージ (net-tools) に変わって採用されました。

- Kbd

このパッケージは、米国以外のキーボードに対してのキーテーブルファイルやキーボードユーティリティを提供します。また端末上のフォントも提供します。

- **Kmod**
このパッケージは Linux カーネルモジュールを管理するために必要なプログラムを提供します。
- **Less**
このパッケージはテキストファイルを表示する機能を提供するものであり、表示中にスクロールを可能とします。また Man-DB において man ページを表示する際にも利用されます。
- **Libpipeline**
Libpipeline パッケージは、サブプロセスのパイプラインを柔軟にかつ容易に操作するライブラリを提供します。これは Man-DB パッケージが必要としています。
- **Libtool**
このパッケージは GNU の汎用的なライブラリに対してのサポートスクリプトを提供します。これは、複雑な共有ライブラリの取り扱いを単純なものとし、移植性に優れた一貫した方法を提供します。LFS パッケージのテストスイートにおいて必要となります。
- **Linux Kernel**
このパッケージは "オペレーティングシステム" であり GNU/Linux 環境における Linux です。
- **M4**
このパッケージは汎用的なテキストマクロプロセッサであり、他のプログラムを構築するツールとして利用することができます。
- **Make**
このパッケージは、パッケージ構築を指示するプログラムを提供します。LFS におけるパッケージでは、ほぼすべてにおいて必要となります。
- **Man-DB**
このパッケージは man ページを検索し表示するプログラムを提供します。man パッケージではなく本パッケージを採用しているのは、その方が国際化機能が優れているためです。このパッケージは man プログラムを提供しています。
- **Man-pages**
このパッケージは Linux の基本的な man ページを提供します。
- **MPC**
このパッケージは複素数演算のための関数を提供します。GCC パッケージがこれを必要としています。
- **MPFR**
このパッケージは倍精度演算 (multiple precision) の関数を提供します。GCC パッケージがこれを必要としています。
- **Ncurses**
このパッケージは、端末に依存せず文字キャラクターを取り扱うライブラリを提供します。メニュー表示時のカーソル制御を実現する際に利用されます。LFS の他のパッケージでは、たいていはこれを必要としています。
- **Patch**
このパッケージは、パッチ ファイルの適用により、特定のファイルを修正したり新規生成したりするためのプログラムを提供します。パッチファイルは diff プログラムにより生成されます。LFS パッケージの中には、構築時にこれを必要とするものがあります。
- **Perl**
このパッケージは、ランタイムに利用されるインタープリター言語 PERL を提供します。LFS の他のパッケージでは、インストール時やテストスイートの実行時にこれを必要とするものがあります。
- **Pkg-config**
このパッケージは、既にインストールされたライブラリやパッケージのメタデータを取得するプログラムを提供します。
- **Procps-NG**
このパッケージは、プロセスの監視を行うプログラムを提供します。システム管理にはこのパッケージが必要となります。また LFS ブートスクリプトではこれを利用しています。

- Psmisc

このパッケージは、実行中のプロセスに関する情報を表示するプログラムを提供します。システム管理にはこのパッケージが必要となります。

- Readline

このパッケージは、コマンドライン上での入力編集や履歴管理を行うライブラリを提供します。これは Bash が利用しています。

- Sed

このパッケージは、テキストの編集を、テキストエディターを用いることなく可能とします。LFS パッケージにおける configure スクリプトは、たいていこれを必要としています。

- Shadow

このパッケージは、セキュアな手法によりパスワード制御を行うプログラムを提供します。

- Sysklogd

このパッケージは、システムメッセージログを扱うプログラムを提供します。例えばカーネルが出力するログや、デーモンプロセスが異常発生時に出力するログなどです。

- Sysvinit

このパッケージは init プログラムを提供します。これは Linux システム上のすべてのプロセスの基点となるものです。

- Tar

このパッケージは、アーカイブや圧縮機能を提供するもので LFS が扱うすべてのパッケージにて利用されています。

- Tcl

このパッケージはツールコマンド言語 (Tool Command Language) を提供します。LFS が扱うパッケージにてテストスイートの実行に必要となります。これは一時的なツールチェーンの構築時にのみインストールします。

- Texinfo

このパッケージは Info ページに関しての入出力や変換を行うプログラムを提供します。LFS が扱うパッケージのインストール時には、たいてい利用されます。

- Udev

このパッケージはデバイスノードの動的生成を行うプログラムを提供します。/dev ディレクトリに、デバイスを静的にいくつも作り出す方法を取らないためのものです。

- Util-linux

このパッケージは数多くのユーティリティプログラムを提供します。その中には、ファイルシステムやコンソール、パーティション、メッセージなどを取り扱うユーティリティがあります。

- Vim

このパッケージはテキストエディターを提供します。これを採用しているのは、従来の vi エディタとの互換性があり、しかも数々の有用な機能を提供するものだからです。テキストエディターは個人により好みはさまざまですから、もし別のエディターを利用したいなら、そちらを用いても構いません。

- XZ Utils

このパッケージはファイルの圧縮、伸張 (解凍) を行うプログラムを提供します。一般的に用いられるものの中では高い圧縮率を実現するものであり、特に XZ フォーマットや LZMA フォーマットの伸張 (解凍) に利用されます。

- Zlib

このパッケージは、圧縮や解凍の機能を提供するもので、他のプログラムがこれを利用しています。

必要な知識

LFS システムの構築作業は決して単純なものではありません。ある程度の Unix システム管理の知識が必要です。問題を解決したり、説明されているコマンドを正しく実行することが求められます。ファイルやディレクトリのコピー、それらの表示確認、カレントディレクトリの変更、といったことは最低でも知っていなければなりません。さらに Linux の各種ソフトウェアを使ったりインストールしたりする知識も必要です。

LFS ブックでは、最低でも そのようなスキルがあることを前提としていますので、数多くの LFS サポートフォーラムは、ひょっとすると役に立たないかもしれません。フォーラムにおいて基本的な知識を尋ねたとしたら、誰も回答してくれないでしょう。そうするよりも LFS に取り掛かる前に以下のような情報をよく読んでください。

LFS システムの構築作業に入る前に、以下の「ハウツー」を読むことをお勧めします。

- ソフトウェア構築のハウツー (Software-Building-HOWTO) <http://www.tldp.org/HOWTO/Software-Building-HOWTO.html>
これは Linux 上において「一般的な」Unix ソフトウェアを構築してインストールする方法を総合的に説明しています。だいぶ前に書かれたものですが、ソフトウェアのビルドとインストールを行うために必要となる基本的な方法が程よくまとめられています。
- Linux ユーザーガイド (The Linux Users's Guide) <http://tldp.org/pub/Linux/docs/ldp-archived/users-guide/>
このガイドには Linux ソフトウェアの利用方法が分類され説明されています。若干古いものですが内容に間違いはありません。
- 基本的な事前ヒント情報 (The Essential Pre-Reading Hint) http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/essential_prereading.txt
これは Linux 初心者に向けて書かれた LFS ヒントです。ここには非常に多くの有用なトピックへのリンクがあります。LFS を構築しようとするなら、これらのヒントに示されている内容は、出来るだけ多く理解しておくことが必要でしょう。

ホストシステム要件

ホストシステムには以下に示すソフトウェアが必要であり、それぞれに示されているバージョン以降である必要があります。最近の Linux ディストリビューションを利用するなら、あまり問題にはならないはずです。ディストリビューションによっては、ソフトウェアのヘッダーファイル群を別パッケージとして提供しているものが多々あります。例えば「<パッケージ名>-devel」であったり「<パッケージ名>-dev」といった具合です。お使いのディストリビューションがそのような提供の仕方をしている場合は、それらもインストールしてください。

各パッケージにて、示しているバージョンより古いものでも動作するかもしれませんが、テストは行っていません。

- Bash-3.2 (/bin/sh が bash に対するシンボリックリンクまたはハードリンクである必要があります。)
- Binutils-2.17 (2.23.2 以上のバージョンは、テストしていないためお勧めしません。)
- Bison-2.3 (/usr/bin/yacc が bison へのリンクか、bison を実行するためのスクリプトである必要があります。)
- Bzip2-1.0.4
- Coreutils-6.9
- Diffutils-2.8.1
- Findutils-4.2.31
- Gawk-4.0.1 (/usr/bin/awk が gawk へのリンクである必要があります。)
- GCC-4.1.2 と C++ コンパイラである g++ (4.8.1 以上のバージョンは、テストしていないためお勧めしません。)
- Glibc-2.5.1 (2.18 以上のバージョンは、テストしていないためお勧めしません。)
- Grep-2.5.1a
- Gzip-1.3.12
- Linux Kernel-2.6.32

カーネルのバージョンを指定しているのは、第6章にて glibc をビルドする際にバージョンを指定するからであり、開発者の勧めに従うためです。これは udev においても必要になります。

ホストシステムのカーネルバージョンが 2.6.32 より古い場合は、ここに示した条件に合致するカーネルに置き換えることが必要です。これを実施するには2つの方法があります。お使いの Linux システムのベンダーが 2.6.32 以上のバージョンのカーネルを提供しているかを調べることです。提供していれば、それをインストールします。もしそれが無い場合や、あったとしてもそれをインストールしたくない場合、カーネルをご自身でコンパイルする必要があります。カーネルのコンパイルと (ホストシステムが GRUB を利用しているとして) ブートローダーの設定方法については 第8章 を参照してください。

- M4-1.4.10
- Make-3.81
- Patch-2.5.4
- Perl-5.8.8
- Sed-4.1.5
- Tar-1.18
- Texinfo-4.9

- Xz-5.0.0

上で示しているシンボリックリンクは、本書の説明を通じて LFS を構築するために必要となるものです。シンボリックリンクが別のソフトウェア（例えば dash や mawk）を指し示している場合でもうまく動作するかもしれませんが。しかしそれらに対して LFS 開発チームはテストを行っていませんしサポート対象としていません。そのような状況に対しては作業手順の変更が必要となり、特定のパッケージに対しては追加のパッチを要するかもしれません。

ホストシステムに、上のソフトウェアの適切なバージョンがインストールされているかどうか、またコンパイルが適切に行えるかどうかは、以下のスクリプトを実行して確認することができます。

```
cat > version-check.sh << "EOF"
#!/bin/bash
# Simple script to list version numbers of critical development tools

export LC_ALL=C
bash --version | head -n1 | cut -d" " -f2-4
echo "/bin/sh -> `readlink -f /bin/sh`"
echo -n "Binutils: "; ld --version | head -n1 | cut -d" " -f3-
bison --version | head -n1
if [ -e /usr/bin/yacc ];
  then echo "/usr/bin/yacc -> `readlink -f /usr/bin/yacc`";
  else echo "yacc not found"; fi

bzip2 --version 2>&1 < /dev/null | head -n1 | cut -d" " -f1,6-
echo -n "Coreutils: "; chown --version | head -n1 | cut -d")" -f2
diff --version | head -n1
find --version | head -n1
gawk --version | head -n1
if [ -e /usr/bin/awk ];
  then echo "/usr/bin/awk -> `readlink -f /usr/bin/awk`";
  else echo "awk not found"; fi

gcc --version | head -n1
g++ --version | head -n1
ldd --version | head -n1 | cut -d" " -f2- # glibc version
grep --version | head -n1
gzip --version | head -n1
cat /proc/version
m4 --version | head -n1
make --version | head -n1
patch --version | head -n1
echo Perl `perl -V:version`
sed --version | head -n1
tar --version | head -n1
echo "Texinfo: `makeinfo --version | head -n1`"
xz --version | head -n1

echo 'main(){}' > dummy.c && g++ -o dummy dummy.c
if [ -x dummy ]
  then echo "g++ compilation OK";
  else echo "g++ compilation failed"; fi
rm -f dummy.c dummy
EOF

bash version-check.sh
```

本書の表記

本書では、特定の表記を用いて分かりやすく説明を行っていきます。ここでは Linux From Scratch ブックを通じて利用する表記例を示します。

```
./configure --prefix=/usr
```

この表記は特に説明がない限りは、そのまま入力するテキストを示しています。またコマンドの説明を行うために用いる場合もあります。

場合によっては、1行で表現される内容を複数行に分けているものがあります。その場合は各行の終わりにバックスラッシュ（あるいは円記号）を表記しています。

```
CC="gcc -B/usr/bin/" ../binutils-2.18/configure \
--prefix=/tools --disable-nls --disable-werror
```

バックスラッシュ（または円記号）のすぐ後ろには改行文字がきます。そこに余計な空白文字やタブ文字があると、おかしい結果となるかもしれないため注意してください。

```
install-info: unknown option '--dir-file=/mnt/lfs/usr/info/dir'
```

上の表記は固定幅フォントで示されており、たいていはコマンド入力の結果として出力される端末メッセージを示しています。あるいは `/etc/ld.so.conf` といったファイル名を示すのに利用する場合もあります。

Emphasis

上の表記はさまざまな意図で用いています。特に重要な説明内容やポイントを表します。

<http://www.linuxfromscratch.org/>

この表記は LFS コミュニティ内や外部サイトへのハイパーリンクを示します。そこには「ハウツー」やダウンロードサイトなどが含まれます。

```
cat > $LFS/etc/group << "EOF"
root:x:0:
bin:x:1:
.....
EOF
```

上の表記は設定ファイル類を生成する際に示します。1行目のコマンドは `$LFS/etc/group` というファイルを生成することを指示しています。そのファイルへは2行目以降 EOF が記述されるまでのテキストが出力されます。したがってこの表記は通常そのままタイプ入力します。

<REPLACED TEXT>

上の表記は入力するテキストを仮に表現したものです。これをそのまま入力するものではないため、コピー、ペースト操作で貼り付けないでください。

[OPTIONAL TEXT]

上の表記は入力しなくてもよいオプションを示しています。

`passwd(5)`

上の表記はマニュアルページ（man ページ）を参照するものです。カッコ内の数字は man の内部で定められている特定のセクションを表しています。例えば `passwd` コマンドには2つのマニュアルページがあります。LFS のインストールに従った場合、2つのマニュアルページは `/usr/share/man/man1/passwd.1` と `/usr/share/man/man5/passwd.5` に配置されます。`passwd(5)` という表記は `/usr/share/man/man5/passwd.5` を参照することを意味します。man `passwd` という入力に対しては「passwd」という語に合致する最初のマニュアルページが表示されるものであり `/usr/share/man/man1/passwd.1` が表示されることとなります。特定のマニュアルページを見たい場合は `man 5 passwd` といった入力を行う必要があります。マニュアルページが複数あるケースはまれですので、普通は `man <プログラム名>` と入力するだけで十分です。

本書の構成

本書は以下の部から構成されます。

第 I 部 - はじめに

第I部では LFS 構築作業を進めるための重要事項について説明します。また本書のさまざまな情報についても説明します。

第 II 部 - ビルド作業のための準備

第II部では、パーティションの生成、パッケージのダウンロード、一時的なツールのコンパイルといった、システム構築の準備作業について説明します。

第 III 部 - LFSシステムの構築

第III部では LFS システムの構築作業を順に説明していきます。ここでは全パッケージのコンパイルとインストール、ブートスクリプトの設定、カーネルのインストールを行います。出来上がる Linux システムをベースとして、他のソフトウェアを必要に応じて導入し、このシステムを拡張していくことができます。本書の終わりには、インストール対象のプログラム、ライブラリ、あるいは重要なファイル類についてのさくいんも示します。

正誤情報

LFS システムを構築するためのソフトウェアは日々拡張され更新されています。LFS ブックがリリースされた後に、セキュリティフィックスやバグフィックスが公開されているかもしれません。本版にて説明するパッケージや作業手順に対して、セキュリティフィックスやバグフィックス等が必要かどうか、ビルド作業を行う前に <http://www.linuxfromscratch.org/lfs/errata/7.4/>を確認してください。そして LFS ビルド作業を進めながら、対応する節においての変更を確認し適用してください。

日本語訳について



日本語訳情報

本節はオリジナルの LFS ブックにはないものです。日本語訳に関する情報を示すために設けました。

はじめに

本書は LFS ブック 7.4 の日本語版-20130908 です。オリジナルの LFS ブックと同様に DocBook を用いて構築しています。

日本語版の提供について

日本語版 LFS ブックは SourceForge.jp 内に開発の場を設け <http://lfsbookja.sourceforge.jp/>にて「LFSブック 日本語版」のプロジェクト名で提供するものです。

HTML ファイル類や日本語化のために構築しているソース類について、あるいはそれらの取り扱い（ライセンス）については上記サイトを参照してください。

日本語版の生成について

日本語版 LFS ブックの生成は、以下のようにして行っています。

- そもそも LFS ブックのソースは、LFS のサイト <http://www.linuxfromscratch.org/>において、Static 版として公開されていると同時に Subversion により、日々開発更新されているソース（XMLソース）が公開されています。日本語版はその XML ソースに基づいて作成しています。
- XML ソースは DocBook XML DTD の書式に従ったファイル形式です。日本語版では、ソースに記述された原文を日本語訳文に変えて、同様の処理により生成しています。ソース内に含まれる INSTALL ファイルには、処理に必要なツール類の詳細が示されています。それらのツール類はすべて BLFS にてインストールする対象となっており、興味のある方は参照してください。
- 日本語訳にあたっては、原文にて「地の文」として表現されている文章を日本語化しています。逆に各手順におけるコマンド説明（四角の枠囲いで示されている箇所）は、日本語化の対象とはしていません。コマンド類や設定記述が英単語で行われるわけですから、これは当たり前のことです。ただ厳密に言えば、その四角の枠囲いの中でシェルのコメント書きが含まれる場合があり、これは日本語化せずそのまま表記しています。

日本語版における注意点

日本語版 LFS ブックを参照頂く際には、以下の点に注意してください。

- 本ページの冒頭にあるように、原文にはない記述は「日本語訳情報」として枠囲い文章で示すことにします。
- 訳者は Linux に関する知識を隅から隅まで熟知しているわけではありません。したがってパッケージのことや Linux の仕組みに関して説明されている原文の、真の意味が捉えられず、原文だけを頼りに訳出している箇所もあります。もし誤訳、不十分な訳出、意味不明な箇所に気づかれた場合は、是非ご指摘、ご教示をお願いしたいと思います。
- 日本語訳にて表記しているカタカナ用語について触れておきます。特に語末に長音符号がつく（あるいはつかない）用語です。このことに関しては訳者なりに捉えているところがあるのですが、詳述は省略します。例えば「ユーザー (user)」という用語は語末に長音符号をつけるべきと考えます。一方「コンピュータ (computer)」とい

う用語は、情報関連その他の分野では長音符号をつけない慣用があるものの、昨今これをつけるような流れもあり情勢が変わりつつあります。このように用語表記については、大いに”ゆれ”があるため、訳者なりに取り決めて表記することにしていきます。なじみの表記とは若干異なるものが現れるかもしれませんが、ご了承くださいたいと思います。

第I部 はじめに

第1章 はじめに

1.1. LFS をどうやって作るか

LFS システムは、既にインストールされている Linux ディストリビューション (Debian, Mandriva, Red Hat, SUSE など) を利用して構築していきます。この既存の Linux システム (ホスト) は、LFS 構築のためにさまざまなプログラム類を利用する基盤となります。プログラム類とはコンパイラー、リンカー、シェルなどです。したがってそのディストリビューションのインストール時には「開発 (development)」オプションを選択し、それらのプログラム類が利用できるようにしておく必要があります。

コンピューター内にインストールされているディストリビューションを利用するのではなく、他に提供されている LiveCD を利用することもできます。

第2章では、新しく構築する Linux のためのパーティションとファイルシステムの生成方法について説明します。そのパーティション上にて LFS システムをコンパイルインストールします。第3章では LFS 構築に必要なパッケージとパッチについて説明します。これらをダウンロードして新たなファイルシステム内に保存します。第4章は作業環境の準備について述べています。この章では重要な説明を行っていますので、第5章以降に進む前に是非注意して読んでください。

第5章では数多くのパッケージをインストールします。これらは基本的な開発ツール (ツールチェーン) を構成するものであり、第6章において最終的なシステムを構築するために利用します。パッケージの中には自分自身を循環的に必要とするような依存関係を持つものがあります。例えばコンパイラーをコンパイルするためにはコンパイラーが必要となります。

第5章ではツールチェーンの第1回目の構築方法を示します。そこではまず Binutils と GCC を構築します。(第1回目と表現しているということは、つまりこれら2つのパッケージは後に再構築します。) 次に C ライブラリである Glibc を構築します。Glibc は第1回目のツールチェーンを用いてコンパイルされます。そして第2回目のツールチェーン構築を行います。この時のツールチェーンは新たに構築した Glibc をリンクします。それ以降の第5章に示すパッケージは第2回目のツールチェーンプログラムを用いて構築します。上の作業をすべて終わったら LFS のインストール作業はもはやホストディストリビューションに依存しません。ただし作動させるカーネルだけは使い続けます。

ホストシステムのツール類から新しいシステムを切り離していくこの手順は、やり過ぎのように見えるかもしれませんが。5.2. 「ツールチェーンの技術的情報」にて詳細に説明しているので参照してください。

第6章にて LFS システムが出来上がります。chroot (ルートをチェンジする) プログラムを使って仮想的な環境に入り LFS パーティション内のディレクトリをルートディレクトリとしてシェルを起動します。これは LFS パーティションをルートパーティションとするシステム再起動と同じことです。ただ実際にはシステムを再起動はしません。再起動できるシステムとするためにはもう少し作業を必要としますし、この時点ではまだそれが必要ではないので chroot を行う方法を取ります。chroot を使うメリットは、LFS 構築作業にあたって引き続きホストシステムを利用できることです。パッケージをコンパイルしている最中には、通常どおり別の作業を行うことができます。

インストールの仕上げとして第7章にて LFS ブートスクリプトを設定し、第8章にてカーネルとブートローダーを設定します。第9章では LFS システム構築経験を踏まえて、その先に進むための情報を示します。本書に示す作業をすべて実施すれば、新たな LFS システムを起動することが出来ます。

上はごく簡単な説明にすぎません。各作業の詳細はこれ以降の章やパッケージの説明を参照してください。内容が難しいと思っていても、それは徐々に理解していけるはずで。読者の皆さんには、是非 LFS アドベンチャーに挑んで頂きたいと思います。

1.2. 前版からの変更点

以下に示すのは前版から変更されているパッケージです。

アップグレード:

-
- Automake 1.14
- Binutils 2.23.2
- Bison 3.0
- Check 0.9.10
- DejaGNU 1.5.1
- Diffutils 3.3
- E2fsprogs 1.42.8

- File 5.14
- Gawk 4.1.0
- GCC 4.8.1
- Gettext 0.18.3
- Glibc 2.18
- GMP 5.1.2
- Gzip 1.6
- IPRoute2 3.10.0
- Kmod 14
- Less 458
- LFS-Bootscripts 20130821
- Libpipeline 1.2.4
- Linux 3.10.10
- Man-DB 2.6.5
- Man-pages 3.53
- MPFR 3.1.2
- Perl 5.18.1
- Procps-ng 3.3.8
- Texinfo 5.1
- Tzdata 2013d
- Udev 206 (systemd-206 からの抽出)
- Util-Linux 2.23.2
- Vim 7.4
- XZ-Utils 5.0.5
- Zlib 1.2.8

追加:

-
- automake-1.14-test-1.patch
- bc 1.06.95
- bash-4.2-fixes-12.patch
- perl-5.18.1-libc-1.patch
- tar-1.26-manpage-1.patch
- texinfo-5.1-test-1.patch

削除:

-
- bash-4.2-fixes-11.patch
- binutils-2.23.1-testsuite_fix-1.patch
- flex-2.5.37-bison-2.6.1-1.patch
- perl-5.16.2-libc-1.patch

1.3. 変更履歴

本書は Linux From Scratch ブック、バージョン 7.4 です。本書が 6ヶ月以上更新されていなければ、より新しい版が公開されているはずですが、以下のミラーサイトを確認してください。 <http://www.linuxfromscratch.org/mirrors.html>

以下は前版からの変更点を示したものです。

変更履歴:

- 2013-09-08

- [bdubbs] - LFS-7.4 リリース。
- 2013-09-07
- [matthew] - ホスト上にて必要となる Gawk のバージョンを 4.0.1 に。Ubuntu-12.04 の Gawk-3.1.8 では、Glibc のビルド中にハングする。報告をあげてくれた Walter P. Little に感謝。
- 2013-08-31
- [bdubbs] - tar において Man ページを生成するためのパッチとその説明を追加。パッチを提供してくれた Igor に感謝。
- 2013-08-30
- [bdubbs] - 特定アーキテクチャーにて問題が発生するため、glibc に対する修正を sed コマンドにより元に戻すことに。
- [bdubbs] - Linux-3.10.10 へのアップグレード。#3393 を Fix に。
- 2013-08-22
- [bdubbs] - ホスト要件として、最低必要となるカーネルバージョンを 2.6.34 とする。
- 2013-08-21
- [matthew] - Linux-3.10.9 へのアップグレード。#3391 を Fix に。
- [matthew] - Texinfo にてテストの失敗を回避するためのパッチを追加。
- [matthew] - Automake にて断続的に発生するテストの失敗を回避するためのパッチを追加。
- 2013-08-15
- [bryan] - 新しい devpts のマウントオプションについての説明を追加。
- [bdubbs] - 縮退テストの失敗に関しての説明をいくつか修正。
- [bdubbs] - 6.2節にて、仮想ファイルシステムを生成する際の、/dev/pts のマウントオプションを追加。
- [bdubbs] - linux-3.10.7 へのアップデート。#3388 を Fix に。
- 2013-08-13
- [bdubbs] - glibc-2.18 へのアップデート。
- [bdubbs] - perl-5.18.1 へのアップデート。
- 2013-08-12
- [bdubbs] - linux-3.10.6 へのアップデート。#3387 を Fix に。
- 2013-08-11
- [bdubbs] - vim-7.4 へのアップデート。
- 2013-08-02
- [bdubbs] - linux-3.10.5 へのアップデート。
- [bdubbs] - lfs-bootscripts-20130805 へのアップデート。ipv4-static-route に関する問題を解消。
- 2013-08-02
- [bdubbs] - util-linux-2.23.2 へのアップデート。#3386 を Fix に。
- [bdubbs] - man-pages-3.53 へのアップデート。#3385 を Fix に。
- 2013-07-29
- [bdubbs] - linux-3.10.4 へのアップデート。#3383 を Fix に。
- [bdubbs] - bison-3.0 へのアップデート。#3382 を Fix に。
- 2013-07-27
- [bdubbs] - systemd-206/udev-lfs-206-1 へのアップデート。#3384 を Fix に。
- 2013-07-20
- [bdubbs] - カーネル設定時の make defconfig の利用について説明を追加。#3379 を Fix に。
- [bdubbs] - iproute2-3.10.1 へのアップデート。
- [bdubbs] - linux-3.10.1 へのアップデート。#3380 を Fix に。
- 2013-07-11
- [bdubbs] - kmod-14 へのアップデート。#3373 を Fix に。
- [bdubbs] - systemd-205 へのアップデート。#3375 を Fix に。

- [bdubbs] - man-pages-3.52 へのアップデート。 #3376 を Fix に。
- [bdubbs] - tzdata-2013d へのアップデート。 #3377 を Fix に。
- [bdubbs] - gettext-0.18.3 へのアップデート。 #3378 を Fix に。
- 2013-07-06
 - [bdubbs] - glibc にて --enable-kernel パラメーターを 2.6.34 に。 現状の udev パッケージ にて必要となる最小バージョンを採用。
- 2013-06-30
 - [bdubbs] - man-db-2.6.5 へのアップデート。 #3370 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-3.10 へのアップデート。 #3371 を Fix に。
 - [bdubbs] - xz-5.0.5 へのアップデート。 #3372 を Fix に。
- 2013-06-24
 - [bdubbs] - e2fsprogs-1.42.8 へのアップデート。 #3368 を Fix に。
 - [bdubbs] - man-db-2.6.4 へのアップデート。 #3369 を Fix に。
 - [bdubbs] - automake-1.14 へのアップデート。 #3366 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-3.9.7 へのアップデート。 #3367 を Fix に。
- 2013-06-16
 - [bdubbs] - automake-1.13.4 へのアップデート。 #3364 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-3.9.6 へのアップデート。 #3363 を Fix に。
- 2013-06-10
 - [bdubbs] - gzip-1.6 へのアップデート。 #3362 を Fix に。
- 2013-06-09
 - [bdubbs] - libpipeline-1.2.4 へのアップデート。 #3360 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-3.9.5 へのアップデート。 #3361 を Fix に。
- 2013-06-05
 - [bdubbs] - automake-1.13.3 へのアップデート。 #3358 を Fix に。
 - [bdubbs] - file パッケージのプログラム内容を更新。
- 2013-06-03
 - [bdubbs] - Util-linux-2.23.1 へのアップデート。 #3355 を Fix に。
 - [bdubbs] - gcc-4.8.1 へのアップデート。 #3356 を Fix に。
- 2013-05-27
 - [bdubbs] - procps-3.3.8 へのアップデート。 #3354 を Fix に。
 - [bdubbs] - perl-5.18.0 へのアップデート。 #3344 を Fix に。
 - [bdubbs] - automake-1.13.2 へのアップデート。 #3347 を Fix に。
 - [bdubbs] - gmp-5.1.2 へのアップデート。 #3352 を Fix に。
 - [bdubbs] - linux-3.9.4 へのアップデート。 #3348 を Fix に。
 - [bdubbs] - カーネル設定方法の解説本のリンクを追加。
 - [bdubbs] - check プログラムの依存パッケージを更新。 パッチを提供してくれた Gilles Espinasse に感謝。 #3353 を Fix に。
- 2013-05-19
 - [bdubbs] - ファイルシステムタイプの説明を充足。 また LFS のパーティションタイプとして ext4 を例示。 #3346 を Fix に。
- 2013-05-15
 - [bdubbs] - mtab を変更したことから、ブートスクリプトにおける不要なオプションを削除。
- 2013-05-14
 - [bdubbs] - /etc/mtab に対し、/proc/self/mounts へのシンボリックリンクとする。
- 2013-05-12
 - [matthew] - Linux-3.9.2 へのアップグレード。 #3345 を Fix に。

- 2013-05-11
 - [bdubbs] - ブートスクリプト mountfs を修正。適切にシャットダウンできるように。
 - [bdubbs] - gawk-4.1.0 へのアップグレード。 #3343 を Fix に。
- 2013-05-10
 - [bdubbs] - linux-3.9.1 へのアップグレード。 #3342 を Fix に。
 - [bdubbs] - systemd/udev-lfs-204 へのアップグレード。 #3341 を Fix に。
 - [bdubbs] - gettext-0.18.2.1 へのアップグレード。 #3298 を Fix に。
- 2013-05-04
 - [matthew] - IPRoute2-3.9.0 へのアップグレード。 #3339 を Fix に。
- 2013-05-01
 - [ken] - linux-3.9.0 へのアップグレード。 #3336 を Fix に。
 - [ken] - zlib-1.2.8 へのアップグレード。 #3337 を Fix に。
- 2013-04-29
 - [bdubbs] - Linux-3.9 に対応するために、第6章に bc パッケージを追加。 #3338 を Fix に。
- 2013-04-28
 - [matthew] - Linux-3.8.10 へのアップグレード。 #3335 を Fix に。
- 2013-04-26
 - [bdubbs] - less-458 へのアップグレード。 #3334 を Fix に。
 - [bdubbs] - util-linux-2.23 へのアップグレード。 #3311 を Fix に。
- 2013-04-24
 - [matthew] - Libpipeline-1.2.3 へのアップグレード。 #3333 を Fix に。
 - [matthew] - Tzdata-2013c へのアップグレード。 #3332 を Fix に。
 - [matthew] - Man-Pages-3.51 へのアップグレード。 #3331 を Fix に。
 - [matthew] - Check-0.9.10 へのアップグレード。 #3330 を Fix に。
- 2013-04-23
 - [bdubbs] - kbd パッケージにてデフォルトのインストールディレクトリを利用することに。別に指示したディレクトリをブートスクリプトが利用していたが、それが無用となったため。
- 2013-04-19
 - [bdubbs] - udev-202 (systemd-202) へのアップデート。 #3329 を Fix に。
- 2013-04-17
 - [bdubbs] - Linux-3.8.8 へのアップデート。 #3322 を Fix に。
 - [bdubbs] - Kmod-13 へのアップデート。 #3324 を Fix に。
 - [bdubbs] - Bison-2.7.1 へのアップデート。 #3327 を Fix に。
- 2013-04-16
 - [bdubbs] - GMP のインストールライブラリを更新。
 - [bdubbs] - udev-201 (systemd-201) へのアップデート。
- 2013-04-03
 - [bdubbs] - procps-ng でのテストスイート実行の失敗を修正。
- 2013-04-01
 - [bdubbs] - Linux-3.8.5 へのアップグレード。 #3320 を Fix に。
 - [bdubbs] - Systemd-200 へのアップグレード。 #3317 と #3321 を Fix に。
 - [bdubbs] - tcl のテストにおいて正規表現の処理に必要な容量を増やす。
 - [bdubbs] - g++ の libmudflap のテストが常に失敗するため無効化する。
- 2013-03-29
 - [matthew] - GCC と Binutils にてデフォルトで利用可能な LTO サポートに関するメモを削除。
 - [matthew] - Binutils の 1 回目、2 回目にて、texinfo ファイルに対しての sed 処理を追加。ホストによっては最新の Texinfo により問題が発生することがあるため。

- [matthew] - GCC にて `--disable-install-libiberty` を指定することにより、`libiberty.a` をインストールしないように。(指摘を上げてくれた Armin K. に感謝。) フラグがまだ正常動作しないため、それまでの `sed` コマンドは残す。
- [matthew] - GCC にて `info` ファイルを生成する、不要な手順を削除。GCC-4.8.0 にはアップストリームによる修正が含まれるため。
- 2013-03-28
 - [matthew] - Binutils-2.23.2 へのアップグレード。 #3318 を Fix に。
 - [matthew] - Systemd-199 へのアップグレード。 #3317 を Fix に。
 - [matthew] - Procps-NG-3.3.7 へのアップグレード。 #3316 を Fix に。
 - [matthew] - Diffutils-3.3 へのアップグレード。 #3315 を Fix に。
 - [matthew] - File-5.14 へのアップグレード。 #3313 を Fix に。
 - [matthew] - GCC-4.8.0 へのアップグレード。 #3312 を Fix に。パッチ報告を上げてくれた Pierre Labastie に感謝。
 - [matthew] - Linux-3.8.4 へのアップグレード。 #3310 を Fix に。
- 2013-03-20
 - [matthew] - BLFS での `libdrm` のインストールに問題が発生するため、`Udev-lfs-198-3` へのアップグレード。報告を上げてくれた Nico P および修正を上げてくれた Armin に感謝。
- 2013-03-16
 - [matthew] - BLFS での `keymap` のインストールに問題が発生するため、`Udev-lfs-198-2` へのアップグレード。
 - [matthew] - Man-Pages-3.50 へのアップグレード。 #3308 を Fix に。
 - [matthew] - Linux-3.8.3 へのアップグレード。 #3307 を Fix に。
 - [matthew] - MPFR-3.1.2 へのアップグレード。 #3306 を Fix に。
 - [matthew] - Dejavu-1.5.1 へのアップグレード。 #3305 を Fix に。
 - [matthew] - Texinfo-5.1 へのアップグレード。 #3304 を Fix に。
- 2013-03-13
 - [matthew] - 特定のホストでの `Check-0.9.9` のビルドの問題を解消するために、Binutils に "sysroot" 機能を追加。報告をあげてくれた Billy O'Connor, Yaacov-Yoseph Weiss, Pierre Labastie に感謝。また再修正をあげてくれた Pierre に感謝。
 - [matthew] - Perl-5.16.3 へのアップグレード。 #3303。
 - [matthew] - Bash-4.2.45 へのアップグレード。 #3301。
 - [matthew] - Systemd-198 へのアップグレード。 #3300。
 - [matthew] - Man-Pages-3.48 へのアップグレード。 #3299。
 - [matthew] - Linux-3.8.2 へのアップグレード。 #3297。
 - [matthew] - Tzdata-2013b へのアップグレード。 #3296。
- 2013-03-03
 - [matthew] - Kbd の手順にて無用なアンパサントを削除。報告してくれた Jason Daly に感謝。
- 2013-03-01
 - [bdubbs] - LFS-7.3 リリース。

1.4. 変更履歴（日本語版）

ここに示すのは LFS ブック 7.4 日本語版（バージョン 20130908）の変更履歴です。



日本語訳情報

本節はオリジナルの LFS ブックにはないものです。LFS ブック日本語版の変更履歴を示すために設けています。

「SVN-20130123」という表記は、オリジナル LFS ブック SVN 版のバージョン番号を意味します。また「Changeset 12345」という表記は、オリジナル XML ソースファイルの Subversion 管理下でのリビジョン（その参照ページ）を意味します。

変更履歴：

- 2013-09-09
 - [matsuand] - 7.4 対応。
- 2013-09-08
 - [matsuand] - SVN-20130907, Changeset 10337 対応。
- 2013-09-05
 - [matsuand] - SVN-20130831, Changeset 10335, 10336 対応。
- 2013-09-01
 - [matsuand] - SVN-20130831, Changeset 10332, 10333 対応。
- 2013-08-31
 - [matsuand] - SVN-20130830, Changeset 10330 対応。
- 2013-08-24
 - [matsuand] - SVN-20130822, Changeset 10327, 10328 対応。
- 2013-08-22
 - [matsuand] - SVN-20130821, Changeset 10323 ~ 10326 対応。
- 2013-08-21
 - [matsuand] - SVN-20130815, Changeset 10321 ~ 10322 対応。
- 2013-08-20
 - [matsuand] - SVN-20130815, Changeset 10320 対応。
- 2013-08-17
 - [matsuand] - SVN-20130815, Changeset 10314 ~ 10318 対応。
- 2013-08-13
 - [matsuand] - SVN-20130812, Changeset 10311 ~ 10313 対応。
- 2013-08-06
 - [matsuand] - 訳出漏れ修正。(src/packages.ch)
 - [matsuand] - SVN-20130805, Changeset 10310 対応。
- 2013-08-03
 - [matsuand] - SVN-20130802, Changeset 10309 対応。
- 2013-07-31
 - [matsuand] - SVN-20130727, Changeset 10307, 10308 対応。
- 2013-07-21
 - [matsuand] - SVN-20130720, Changeset 10305, 10306 対応。
- 2013-07-12
 - [matsuand] - SVN-20130711, Changeset 10302 ~ 10304 対応。
- 2013-07-02
 - [matsuand] - SVN-20130630, Changeset 10299 ~ 10301 対応。
- 2013-06-29
 - [matsuand] - SVN-20130624, Changeset 10297 対応。
- 2013-06-21
 - [matsuand] - SVN-20130616, Changeset 10296 対応。
- 2013-06-10
 - [matsuand] - SVN-20130610, Changeset 10292 ~ 10294 対応。
- 2013-06-09
 - [matsuand] - SVN-20130605, Changeset 10290, 10291 対応。
- 2013-06-01
 - [matsuand] - SVN-20130527, Changeset 10287, 10288 対応。
- 2013-05-20

- [matsuand] - SVN-20130519, Changeset 10286 対応。
- 2013-05-17
- [matsuand] - SVN-20130515, Changeset 10274, 10275 対応。
- 2013-05-13
- [matsuand] - SVN-20130512, Changeset 10273 対応。
- 2013-05-12
- [matsuand] - SVN-20130511, Changeset 10272 対応。
- 2013-05-11
- [matsuand] - SVN-20130511, Changeset 10271 対応。
- [matsuand] - SVN-20130510, Changeset 10268 ~ 10270 対応。
- 2013-05-05
- [matsuand] - SVN-20130504, Changeset 10262 ~ 10263 対応。
- 2013-05-02
- [matsuand] - SVN-20130501, Changeset 10259 ~ 10261 対応。
- 2013-04-30
- [matsuand] - SVN-20130429, Changeset 10258 対応。
- 2013-04-29
- [matsuand] - SVN-20130428, Changeset 10248 ~ 10256 対応。
- 2013-04-20
- [matsuand] - SVN-20130419, Changeset 10246 ~ 10247 対応。
- 2013-04-18
- [matsuand] - SVN-20130417, Changeset 10242 ~ 10245 対応。
- 2013-04-03
- [matsuand] - SVN-20130401, Changeset 10235 ~ 10238 対応。
- 2013-03-31
- [matsuand] - SVN-20130330, Changeset 10234 対応。
- 2013-03-30
- [matsuand] - SVN-20130329, Changeset 10228 ~ 10233 対応。
- 2013-03-29
- [matsuand] - SVN-20130328, Changeset 10219 ~ 10227 対応。
- 2013-03-25
- [matsuand] - SVN-20130320, Changeset 10205 ~ 10218 対応。
- 2013-03-15
- [matsuand] - SVN-20130313, Changeset 10197 ~ 10204 対応。
- 2013-03-11
- [matsuand] - SVN-20130303, Changeset 10189 対応。
- 2013-03-04
- [matsuand] - SVN-20130303, Changeset 10184, 10186, 10188 対応。
- 2013-03-02
- [matsuand] - 7.3 リリース対応。 Changeset 10181 対応。

1.5. 情報源

1.5.1. FAQ

LFS システムの構築作業中にエラー発生したり、疑問を抱いたり、あるいは本書の誤記を発見した場合、まず手始めに <http://www.linuxfromscratch.org/faq/> に示されている「よく尋ねられる質問」(Frequently Asked Questions; FAQ) を参照してください。

1.5.2. メーリングリスト

linuxfromscratch.org サーバーでは、LFS 開発プロジェクトのために多くのメーリングリストを立ち上げています。このメーリングリストは主となる開発用とは別に、サポート用のものもあります。FAQ だけでは問題解決に至らなかった場合に、次の手としてメーリングリストを検索する以下のサイトを参照してください。 <http://www.linuxfromscratch.org/search.html>

これ以外に、投稿の方法、アーカイブの配置場所などに関しては <http://www.linuxfromscratch.org/mail.html> を参照してください。

1.5.3. IRC

LFS コミュニティのメンバーの中には、インターネットリレーチャット (Internet Relay Chat; IRC) によるサポートを行っている者もいます。ここに対して質問を挙げる場合は、FAQ やメーリングリストに同様の質問や答えがないかどうかを必ず確認してください。IRC は irc.freenode.net において、チャンネル名 #LFS-support により提供しています。

1.5.4. ミラーサイト

LFS プロジェクトは世界中にミラーサイトがあります。これらを使えばウェブサイト参照やパッケージのダウンロードがより便利に利用できます。以下のサイトによりミラーサイトの情報を確認してください。 <http://www.linuxfromscratch.org/mirrors.html>

1.5.5. 連絡先

質問やコメントは (上に示した) メーリングリストを活用してください。

1.6. ヘルプ

本書に基づく作業の中で問題が発生したり疑問が生まれた場合は <http://www.linuxfromscratch.org/faq/#generalfaq> にある FAQ のページを確認してください。質問への回答が示されているかもしれませんが、そこに回答が示されていないのなら、問題の本質部分を見極めてください。トラブルシューティングとして以下のヒントが有用かもしれません。 <http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/errors.txt>

FAQ では問題解決ができない場合、メーリングリスト <http://www.linuxfromscratch.org/search.html> を検索してください。

我々のサイトにはメーリングリストやチャットを通じての情報提供を行う LFS コミュニティがあります。(詳細は 1.5. 「情報源」を参照してください。) 我々は日々数多くのご質問を頂くのですが、たいていの質問は FAQ やメーリングリストを調べてみれば容易に答えが分かるものばかりです。したがって我々が最大限の支援を提供できるよう、ある程度の問題はご自身で解決するようにしてください。そうして頂くことで、我々はもっと特殊な状況に対するサポートを手厚く行っていくことができるからです。いくら調べても解決に至らず、お問い合わせ頂く場合は、以下に示すように十分な情報を提示してください。

1.6.1. 特記事項

問題が発生し問い合わせをする場合には、以下に示す基本的な情報を含めてください。

- お使いの LFS ブックのバージョン。(本書の場合 7.4)
- LFS 構築に用いたホスト Linux のディストリビューションとそのバージョン。
- version-check [xv] の出力結果。
- 問題が発生したパッケージまたは本書内の該当の章または節。
- 問題となったエラーメッセージや状況に対する詳細な情報。
- 本書どおりに作業しているか、逸脱していないかの情報。



注記

本書の作業手順を逸脱していたとしても、我々がお手伝いしないわけではありません。つまるところ LFS は個人的な趣味によって構築されるものです。本書の手順とは異なるやり方を正確に説明してください。そうすれば内容の評価、原因究明が容易になります。

1.6.2. Configure スクリプトの問題

configure スクリプトの実行時に何か問題が発生した時は `config.log` ファイルを確認してみてください。
configure スクリプトの実行中に、端末画面に表示されないエラーが、このファイルに出力されているかもしれません。問合せを行う際には 該当する 行を示してください。

1.6.3. コンパイル時の問題

コンパイル時に問題が発生した場合は、端末画面への出力とともに、数々のファイルの内容も問題解決の糸口となります。configure スクリプトと make コマンドの実行によって端末画面に出力される情報は重要です。問い合わせの際には、出力されるすべての情報を示す必要はありませんが、関連する情報は十分に含めてください。以下に示すのは make コマンドの実行時に出力される情報を切り出してみた例です。

```
gcc -DALIASPATH="/mnt/lfs/usr/share/locale:."
-DLOCALEDIR="/mnt/lfs/usr/share/locale"
-DLIBDIR="/mnt/lfs/usr/lib"
-DINCLUDEDIR="/mnt/lfs/usr/include" -DHAVE_CONFIG_H -I. -I.
-g -O2 -c getopt1.c
gcc -g -O2 -static -o make ar.o arscan.o commands.o dir.o
expand.o file.o function.o getopt.o implicit.o job.o main.o
misc.o read.o remake.o rule.o signame.o variable.o vpath.o
default.o remote-stub.o version.o opt1.o
-lutil job.o: In function `load_too_high':
/lfs/tmp/make-3.79.1/job.c:1565: undefined reference
to `getloadavg'
collect2: ld returned 1 exit status
make[2]: *** [make] Error 1
make[2]: Leaving directory `/lfs/tmp/make-3.79.1'
make[1]: *** [all-recursive] Error 1
make[1]: Leaving directory `/lfs/tmp/make-3.79.1'
make: *** [all-recursive-am] Error 2
```

たいていの方は、上のような場合に終わりの数行しか示してくれません。

```
make [2]: *** [make] Error 1
```

問題を解決するにはあまりに不十分な情報です。そんな情報だけでは「何かがオカしい結果となった」ことは分かっていても「なぜオカしい結果となった」のかが分からないからです。上に示したのは、十分な情報を提供して頂くべきであることを例示したものであり、実行されたコマンドや関連するエラーメッセージが十分に含んだ例となっています。

インターネット上に、問い合わせを行う方法を示した優れた文章があります。 <http://catb.org/~esr/faqs/smart-questions.html> この文章に示される内容やヒントを参考にして、より確実に回答が得られるよう心がけてください。

第II部 ビルド作業のための準備

第2章 新しいパーティションの準備

2.1. はじめに

この章では LFS システムをインストールするパーティションを準備します。パーティションを生成しファイルシステムを構築した上で、これをマウントします。

2.2. 新しいパーティションの生成

どのようなオペレーティングシステムでも同じことが言えますが、本システムでもインストール先は専用のパーティションを用いることにします。LFS システムを構築していくには、利用可能な空のパーティションか、あるいはパーティション化していないものをパーティションとして生成して利用することにします。

最小限のシステムであれば 2.8 GB 程度のディスク容量があれば十分です。これだけあればパッケージやソースの収容に十分で、そこでコンパイル作業を行っていくことができます。しかし主要なシステムとして LFS を構築するならば、さらにソフトウェアをインストールすることになるはずなので、さらなる容量が必要となります。10 GB ほどのパーティションがあれば、増量していくことを考えても十分な容量でしょう。LFS システムそのものがそれだけの容量を要するわけではありません。これだけの容量は十分なテンポラリ領域のために必要となるものです。パッケージをインストールした後はテンポラリ領域は開放されますが、コンパイルの間は多くの領域を利用します。

コンパイル処理において十分なランダムアクセスメモリ (Random Access Memory; RAM) を確保できるとは限りませんので、スワップ (swap) 領域をパーティションとして設けるのが普通です。この領域へは利用頻度が低いデータを移すことで、アクティブな処理プロセスがより多くのメモリを確保できるようにカーネルが制御します。swap パーティションは、LFS システムのものとホストシステムのものも共有することもできます。その場合は新しいパーティションを作る必要はありません。

ディスクのパーティション生成は `cdisk` コマンドや `fdisk` コマンドを使って行います。コマンドラインオプションにはパーティションを生成するハードディスク名を指定します。例えば IDE (Integrated Drive Electronics) ディスクであれば `/dev/sda` といったものになります。そして Linux ネイティブパーティションと、必要なら swap パーティションを生成します。プログラムの利用方法について不明であれば `cdisk(8)` や `fdisk(8)` を参照してください。



注記

上級者の方であれば別のパーティション設定も可能です。最新の LFS システムは、ソフトウェア RAID アレーや、LVM 論理ボリュームを利用することができます。ただしこれらを実現するには `initramfs` が必要であり、高度なトピックです。こういったパーティション設定は、LFS 初心者にはお勧めしません。

新しく生成したパーティションの名前を覚えておいてください。(例えば `sda5` など。) 本書ではこのパーティションを LFS パーティションとして説明していきます。また swap パーティションの名前も忘れないでください。これらの名前は、後に生成する `/etc/fstab` ファイルに記述するために必要となります。

2.2.1. パーティションに関するその他の問題

LFS メーリングリストにてパーティションに関する有用情報を望む声をよく聞きます。これは個人の趣味にもよる極めて主観的なものです。既存ディストリビューションが採用しているデフォルトのパーティションサイズとえば、たいていはスワップパーティションを小容量で配置した上で、そのドライブ内の残容量すべてのサイズを割り当てています。このようなサイズ設定は LFS では最適ではありません。その理由はいくつかあります。そのようにしてしまうと、複数のディストリビューションの導入時や LFS 構築時に、柔軟さを欠き、構築がしにくくなります。バックアップを取る際にも無用な時間を要し、ファイルシステム上にて不適当なファイル配置を生み出すため、余計なディスク消費を発生させます。

2.2.1.1. ルートパーティション

ルートパーティション (これを `/root` ディレクトリと混同しないでください) は 10 GB もあれば、どんなシステムであっても妥当なところでしょう。それだけあれば LFS 構築も、また BLFS においてもおそらく十分なはずです。実験的に複数パーティションを設けるとしても、これだけのサイズは必要です。

2.2.1.2. スワップパーティション

既存のディストリビューションは、たいていはスワップパーティションを自動的に生成します。一般にスワップパーティションのサイズは、物理 RAM サイズの二倍の容量とすることが推奨されています。しかしそれだけの容量はほとんど必要ありません。ディスク容量が限られているなら、スワップパーティションの容量を 2GB 程度に抑えておいて、ディスクスワップがどれだけ発生するかを確認してみてください。

スワップは好ましいことではありません。一般にスワップが発生しているかどうかは、ディスクアクセスの様子やコマンド実行時にシステムがどのように反応するかを見てみれば分かります。例えば 5GB くらいのファイルを編集するといった極端なコマンド実行を行ってみて、スワップが起きるかどうかを確認することが重要です。スワップがごく普通に発生するようであれば、RAMを増設するのが適切です。

2.2.1.3. 有用なパーティション

この他にも、必要のないパーティションというものがいくつかあります。しかしディスクレイアウトを取り決めるには考えておく必要があります。以下に示すのは十分な説明ではありませんが、一つの目安として示すものです。

- /boot - 作成することが強く推奨されます。カーネルやブート情報を収納するために利用するパーティションです。容量の大きなディスクの場合、ブート時に問題が発生することがあるので、これを回避するには、一つ目のディスクドライブの物理的に一番最初のパーティションを選びます。パーティションサイズを 100MB とすればそれで十分です。
- /home - 作成することが強く推奨されます。複数のディストリビューションや LFS の間で、ホームディレクトリおよびユーザー固有の設定を共有することができます。パーティションサイズは、ある程度大きく取ることとなりますが、利用可能なディスク残容量に依存します。
- /usr - /usr ディレクトリを別パーティションとして設けるのは、一般にはシンクライアント (thin client) 向けサーバーやディスクレスワークステーションにおいて行われます。普通 LFS では必要ありません。5 GB くらいの容量があれば、たいいていアプリケーションをインストールするのに十分なものでしょう。
- /opt - このディレクトリは BLFS などにおいて、Gnome や KDE といった巨大なパッケージをいくつもインストールする際に活用されます。/usr ディレクトリ以外にインストールする場合です。これを別パーティションとするなら、一般的には 5 ~ 10 GB 程度が適当でしょう。
- /tmp - /tmp ディレクトリを別パーティションとするのは普通は行いません。ただしシンクライアント (thin client) では有効です。別パーティションとする場合であっても、数GB程度あれば十分です。
- /usr/src - このパーティションは LFS のパッケージソースを収容し LFS ビルド工程にて共用するものとして有効に利用することができます。さらに BLFS パッケージソースを収容しビルドする場所としても利用可能です。30~50GB くらいの容量があれば、十分なものです。

ブート時に自動的にパーティションをマウントしたい場合は /etc/fstab ファイルにて設定します。パーティションの設定方法については 8.2. 「/etc/fstab ファイルの生成」で説明しています。

2.3. ファイルシステムの生成

空のパーティションが準備できたのでファイルシステムを作ります。LFS では Linux カーネルが識別できるならどのようなファイルシステムを用いるのでも構いません。ただ最も標準的なものとして ext3 と ext4 があります。ファイルシステムをどのようにするかは単純な話ではなく、収容するファイルの性質やパーティションサイズにも依存します。例えば以下のとおりです。

ext2

比較的小容量のパーティションで、/boot のようにあまり更新されないパーティションに対して適しています。

ext3

ext2 の拡張でありジャーナルを含みます。このジャーナルとは、不測のシャットダウン時などに、パーティション状態の復元に用いられます。汎用的なファイルシステムとして用いることができます。

ext4

パーティションタイプとして用いられる ext 系の最新バージョンです。新たな機能として、ナノ秒単位のタイムスタンプの提供、大容量ファイル (16 TB) の生成利用、処理性能の改善が加えられています。

この他のファイルシステムとして、FAT32, NTFS, ReiserFS, JFS, XFS などがあり、それぞれに特定の目的に応じて活用されています。ファイルシステムの詳細については http://en.wikipedia.org/wiki/Comparison_of_file_systems を参照してください。

LFS ではルートファイルシステム (/) として ext4 を用いるものとします。LFS 用のパーティションに対して ext4 ファイルシステムを生成するために以下のコマンドを実行します。

```
mkfs -v -t ext4 /dev/<xxx>
```

既に存在している swap パーティションを用いることにした場合は、初期化操作を行う必要はありません。新しい swap パーティションを作成した場合は、以下のコマンドを実行して初期化を行う必要があります。

```
mkswap /dev/<yyy>
```

<yyy> の部分は swap パーティションの名に合わせて置き換えてください。

2.4. 新しいパーティションのマウント

ファイルシステムが生成できたら、パーティションをアクセスできるようにします。これを行うためにはマウントポイントを定める必要があります。本書ではファイルシステムを `/mnt/lfs` にマウントすることにします。このディレクトリは各自で取り決めて変えることもできます。

マウントポイントを定めたら、そのディレクトリを指し示すような環境変数 `LFS` を以下のようにして設定します。

```
export LFS=/mnt/lfs
```

次にマウントポイントを生成し、`LFS` ファイルシステムをマウントします。

```
mkdir -pv $LFS  
mount -v -t ext4 /dev/<xxx> $LFS
```

`<xxx>` の部分は `LFS` パーティション名に合わせて置き換えてください。

`LFS` に対して複数のパーティションを用いる場合（例えば `/` と `/usr` が別パーティションである場合）は、以下を実行してそれぞれをマウントします。

```
mkdir -pv $LFS  
mount -v -t ext4 /dev/<xxx> $LFS  
mkdir -v $LFS/usr  
mount -v -t ext4 /dev/<yyy> $LFS/usr
```

`<xxx>` や `<yyy>` の部分は、それぞれ適切なパーティション名に置き換えてください。

この新しいパーティションは特別な制限オプション（`nosuid`、`nodev` など）は設定せずにマウントします。`mount` コマンドの実行時に引数を与えずに実行すれば、`LFS` パーティションがどのようなオプション設定によりマウントされているかが分かります。もし `nosuid`、`nodev`、`noatime` といったオプションが設定されていたら、マウントし直してください。

`swap` パーティションを用いる場合は、`swapon` コマンドを使って利用可能にしてください。

```
/sbin/swapon -v /dev/<zzz>
```

`<zzz>` の部分は `swap` パーティション名に置き換えてください。

こうして動作環境が整いました。次はパッケージのダウンロードです。

第3章 パッケージとパッチ

3.1. はじめに

この章では基本的な Linux システム構築のためにダウンロードすべきパッケージの一覧を示します。各パッケージのバージョンは動作が確認されているものを示しており、本書ではこれに基づいて説明します。ここに示すバージョンよりも新しいものは使わないようお勧めします。あるバージョンでビルドしたコマンドが、新しいバージョンでも動作する保証はないからです。最新のパッケージの場合、何かの対処を要するかもしれません。そのような対処方法は本書の開発版において開発され安定化が図られるかもしれません。

ダウンロードサイトは常にアクセス可能であるとは限りません。本書が提供された後にダウンロードする場所が変更になっていたら Google (<http://www.google.com/>) を使って検索してみてください。たいていのパッケージを見つけ出すことが出来るはずです。それでも見つけれなかったら <http://www.linuxfromscratch.org/lfs/packages.html#packages> に示されている方法に従って入手してください。

ダウンロードしたパッケージやパッチは、ビルド作業を通じて常に利用可能な場所を選んで保存しておく必要があります。またソース類を伸張してビルドを行うための作業ディレクトリも必要です。そこで本書では `$LFS/sources` ディレクトリを用意し、ソースやパッチの保存場所とし、そこでビルドを行う作業ディレクトリとします。このディレクトリにしておけば LFS パーティションに位置することから LFS ビルドを行う全工程において常に利用することが出来ます。

ダウンロードを行う前にまずはそのようなディレクトリを生成します。root ユーザーとなって以下のコマンドを実行します。

```
mkdir -v $LFS/sources
```

このディレクトリには書き込み権限とスティッキーを与えます。「スティッキー (Sticky)」は複数ユーザーに対して書き込み権限が与えられても、削除については所有者しか実行出来ないようにします。以下のコマンドによって書き込み権限とスティッキーを定めます。

```
chmod -v a+wt $LFS/sources
```

パッケージとパッチのダウンロードを簡単に行う方法として `wget-list` を利用する方法があります。これは以下のように `wget` の入力引数に指定し利用します。

```
wget -i wget-list -P $LFS/sources
```



日本語訳情報

オリジナルの LFS ブックでは、wget-list 内に含まれる、各種パッケージの入手 URL が主に米国サイトとなっています。一方、日本国内にて作業する方であれば、例えば GNU のパッケージ類は国内に数多くのミラーサイトが存在するため、そちらから取得するのが適切でしょう。これはネットワークリソースを利用する際のマナーとも言えるものです。堅苦しい話をするつもりはありません。国内サイトから入手することにすればダウンロード速度が断然早くなります。メリットは大きいと思いますのでお勧めします。

国内から入手可能なものは国内から入手することを目指し、訳者は以下の手順により wget-list を書き換えて利用しています。一例として国内には理化学研究所のサイト (ftp.riken.jp) があります。そこでは GNU パッケージ類がミラー提供されています。そこで wget-list にて ftp.gnu.org を指し示している URL を ftp.riken.jp に置き換えます。また同じ方法で Linux カーネル、Perl、Vim の入手先も変更します。

```
mv wget-list{,.orig}
cat > wget-list-ja.sed << "EOF"
s|ftp\.gnu\.org/gnu/|ftp.riken.jp/GNU/gnu/|g
s|www\.kernel\.org/pub/linux/|ftp.riken.jp/Linux/kernel.org/linux/|g
s|www\.cpan\.org|ftp.riken.jp/lang/CPAN|g
s|ftp\.vim\.org|ftp.jp.vim.org|g
EOF
sed -f wget-list-ja.sed wget-list.orig > wget-list
rm wget-list-ja.sed
```

上記はあくまで一例です。しかもすべてのパッケージについて、国内サイトからの入手となるわけではありません。ただし上記を行うだけでも、大半のパッケージは国内サイトを向くこととなります。上記にて国内のミラーサイトは、ネットワーク的に ”より近い” ものを選んでください。サイトを変えた場合は、パッケージの URL が異なることが多々あるため、適宜 sed 置換内容を書き換えてください。

注意する点として各パッケージが更新されたばかりの日付では、国内ミラーサイトへの同期、反映が間に合わず、ソース類が存在しないことが考えられます。その場合にはパッケージ取得に失敗してしまいます。そこで wget-list と wget-list.orig を順に利用し、かつ wget コマンドにて -N オプションを使って (取得済のものはスキップするようにして) 以下のコマンドを実行すれば、確実にすべてのパッケージを入手することができます。

```
wget -N -i wget-list -P $LFS/sources
wget -N -i wget-list.orig -P $LFS/sources
```

さらに LFS-7.0 からは md5sums というファイルを用意しています。このファイルは、入手した各種パッケージのファイルが正しいことを確認するために用いることができます。このファイルを \$LFS/sources に配置して以下を実行してください。

```
pushd $LFS/sources
md5sum -c md5sums
popd
```

3.2. 全パッケージ

以下に示すパッケージをダウンロードするなどしてすべて入手してください。

- Autoconf (2.69) - 1,186 KB:
ホームページ: <http://www.gnu.org/software/autoconf/>
ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/autoconf/autoconf-2.69.tar.xz>
MD5 sum: 50f97f4159805e374639a73e2636f22e
- Automake (1.14) - 1,452 KB:
ホームページ: <http://www.gnu.org/software/automake/>
ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/automake/automake-1.14.tar.xz>
MD5 sum: cb3fba6d631cddf12e230fd0cc1890df
- Bash (4.2) - 6,845 KB:
ホームページ: <http://www.gnu.org/software/bash/>
ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/bash/bash-4.2.tar.gz>
MD5 sum: 3fb927c7c33022f1c327f14a81c0d4b0

- Bc (1.06.95) - 288 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/bc/>
 ダウンロード: <http://alpha.gnu.org/gnu/bc/bc-1.06.95.tar.bz2>
 MD5 sum: 5126a721b73f97d715bb72c13c889035
- Binutils (2.23.2) - 20,938 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/binutils/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/binutils/binutils-2.23.2.tar.bz2>
 MD5 sum: 4f8fa651e35ef262edc01d60fb45702e
- Bison (3.0) - 1,872 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/bison/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/bison/bison-3.0.tar.xz>
 MD5 sum: a2624994561aa69f056c904c1ccb2880
- Bzip2 (1.0.6) - 764 KB:
 ホームページ: <http://www.bzip.org/>
 ダウンロード: <http://www.bzip.org/1.0.6/bzip2-1.0.6.tar.gz>
 MD5 sum: 00b516f4704d4a7cb50a1d97e6e8e15b
- Check (0.9.10) - 635 KB:
 ホームページ: <http://check.sourceforge.net/>
 ダウンロード: <http://sourceforge.net/projects/check/files/check/0.9.10/check-0.9.10.tar.gz>
 MD5 sum: 6d10a8efb9a683467b92b3bce97aeb30
- Coreutils (8.21) - 5,248 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/coreutils/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/coreutils/coreutils-8.21.tar.xz>
 MD5 sum: 065ba41828644eca5dd8163446de5d64
- DejaGNU (1.5.1) - 566 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/dejagnu/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/dejagnu/dejagnu-1.5.1.tar.gz>
 MD5 sum: 8386e04e362345f50ad169f052f4c4ab
- Diffutils (3.3) - 1,170 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/diffutils/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/diffutils/diffutils-3.3.tar.xz>
 MD5 sum: 99180208ec2a82ce71f55b0d7389f1b3
- E2fsprogs (1.42.8) - 5,852 KB:
 ホームページ: <http://e2fsprogs.sourceforge.net/>
 ダウンロード: <http://prdownloads.sourceforge.net/e2fsprogs/e2fsprogs-1.42.8.tar.gz>
 MD5 sum: 8ef664b6eb698aa6b733df59b17b9ed4
- Expect (5.45) - 614 KB:
 ホームページ: <http://expect.sourceforge.net/>
 ダウンロード: <http://prdownloads.sourceforge.net/expect/expect5.45.tar.gz>
 MD5 sum: 44e1a4f4c877e9ddc5a542dfa7ecc92b
- File (5.14) - 633 KB:
 ホームページ: <http://www.darwinsys.com/file/>
 ダウンロード: <ftp://ftp.astron.com/pub/file/file-5.14.tar.gz>
 MD5 sum: c26625f1d6773ad4bc5a87c0e315632c



注記

File パッケージ (5.14) は上記の場所から入手できなくなっているかもしれません。これはサイト管理者が、新バージョンのリリースと同時に古いバージョンを削除することがあるためです。適切なバージョンをダウンロードするためには、以下に示す別のサイトを参照してください。 <http://www.linuxfromscratch.org/lfs/download.html#ftp>

- Findutils (4.4.2) - 2,100 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/findutils/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/findutils/findutils-4.4.2.tar.gz>
 MD5 sum: 351cc4adb07d54877fa15f75fb77d39f

- Flex (2.5.37) - 1,280 KB:
 ホームページ: <http://flex.sourceforge.net>
 ダウンロード: <http://prdownloads.sourceforge.net/flex/flex-2.5.37.tar.bz2>
 MD5 sum: c75940e1fc25108f2a7b3ef42abdae06
- Gawk (4.1.0) - 2,004 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/gawk/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/gawk/gawk-4.1.0.tar.xz>
 MD5 sum: b18992ff8faf3217dab55d2d0aa7d707
- GCC (4.8.1) - 84,724 KB:
 ホームページ: <http://gcc.gnu.org/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/gcc/gcc-4.8.1/gcc-4.8.1.tar.bz2>
 MD5 sum: 3b2386c114cd74185aa3754b58a79304
- GDBM (1.10) - 640 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/gdbm/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/gdbm/gdbm-1.10.tar.gz>
 MD5 sum: 88770493c2559dc80b561293e39d3570
- Gettext (0.18.3) - 15,796 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/gettext/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/gettext/gettext-0.18.3.tar.gz>
 MD5 sum: 3fa4236c41b7e837355de144210207ec
- Glibc (2.18) - 10,892 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/libc/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/glibc/glibc-2.18.tar.xz>
 MD5 sum: 88fbbceafee809e82efd52efa1e3c58f
- GMP (5.1.2) - 1,780 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/gmp/>
 ダウンロード: <ftp://ftp.gmplib.org/pub/gmp-5.1.2/gmp-5.1.2.tar.xz>
 MD5 sum: 06fe2ca164221c59ce74867155cfc1ac
- Grep (2.14) - 1,172 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/grep/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/grep/grep-2.14.tar.xz>
 MD5 sum: d4a3f03849d1e17ce56ab76aa5a24cab
- Groff (1.22.2) - 3,926 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/groff/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/groff/groff-1.22.2.tar.gz>
 MD5 sum: 9f4cd592a5efc7e36481d8d8d8af6d16
- GRUB (2.00) - 5,016 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/grub/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/grub/grub-2.00.tar.xz>
 MD5 sum: a1043102fbc7bcedbf53e7ee3d17ab91
- Gzip (1.6) - 712 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/gzip/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/gzip/gzip-1.6.tar.xz>
 MD5 sum: da981f86677d58a106496e68de6f8995
- Iana-Etc (2.30) - 201 KB:
 ホームページ: <http://freshmeat.net/projects/iana-etc/>
 ダウンロード: <http://anduin.linuxfromscratch.org/sources/LFS/lfs-packages/conglomeration//iana-etc/iana-etc-2.30.tar.bz2>
 MD5 sum: 3ba3afb1d1b261383d247f46cb135ee8
- Inetutils (1.9.1) - 1,941 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/inetutils/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/inetutils/inetutils-1.9.1.tar.gz>
 MD5 sum: 944f7196a2b3dba2d400e9088576000c

- IPRoute2 (3.10.0) - 412 KB:
 ホームページ: <http://www.kernel.org/pub/linux/utils/net/iproute2/>
 ダウンロード: <http://www.kernel.org/pub/linux/utils/net/iproute2/iproute2-3.10.0.tar.xz>
 MD5 sum: 45fb5427fc723a0001c72b92c931ba02
- Kbd (1.15.5) - 1,690 KB:
 ホームページ: <http://ftp.altlinux.org/pub/people/legion/kbd>
 ダウンロード: <http://ftp.altlinux.org/pub/people/legion/kbd/kbd-1.15.5.tar.gz>
 MD5 sum: 34c71feead8ab9c01ec638acea8cd877
- Kmod (14) - 1,408 KB:
 ダウンロード: <http://www.kernel.org/pub/linux/utils/kernel/kmod/kmod-14.tar.xz>
 MD5 sum: 38009d0d6f10678a3ec22ccd29210d13
- Less (458) - 308 KB:
 ホームページ: <http://www.greenwoodsoftware.com/less/>
 ダウンロード: <http://www.greenwoodsoftware.com/less/less-458.tar.gz>
 MD5 sum: 935b38aa2e73c888c210dedf8fd94f49
- LFS-Bootscripts (20130821) - 34 KB:
 ダウンロード: <http://www.linuxfromscratch.org/lfs/downloads/7.4/lfs-bootscripts-20130821.tar.bz2>
 MD5 sum: 9666b931d43a3a3fc39ecaccb59bd0ab
- Libpipeline (1.2.4) - 748 KB:
 ホームページ: <http://libpipeline.nongnu.org/>
 ダウンロード: <http://download.savannah.gnu.org/releases/libpipeline/libpipeline-1.2.4.tar.gz>
 MD5 sum: a98b07f6f487fa268d1ebd99806b85ff
- Libtool (2.4.2) - 2,571 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/libtool/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/libtool/libtool-2.4.2.tar.gz>
 MD5 sum: d2f3b7d4627e69e13514a40e72a24d50
- Linux (3.10.10) - 71,492 KB:
 ホームページ: <http://www.kernel.org/>
 ダウンロード: <http://www.kernel.org/pub/linux/kernel/v3.x/linux-3.10.10.tar.xz>
 MD5 sum: 647f76225dd6bc112369ba573ba3de18



注記

Linux カーネルはわりと頻繁に更新されます。多くの場合はセキュリティ脆弱性の発見によるものです。特に正誤情報 (errata) のページにて説明がない限りは、入手可能な最新の 3.10.x カーネルを用いてください。

低速度のネットワークや高負荷の帯域幅を利用するユーザーが Linux カーネルをアップデートしようとする場合は、同一バージョンのカーネルパッケージとそのパッチを個別にダウンロードする方法もあります。その場合、時間の節約を図ることができ、あるいはマイナーバージョンが同一であれば複数パッチを当ててアップグレードする作業時間の短縮が図れます。

- M4 (1.4.16) - 1,229 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/m4/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/m4/m4-1.4.16.tar.bz2>
 MD5 sum: 8a7cef47fecab6272eb86a6be6363b2f
- Make (3.82) - 1,213 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/make/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/make/make-3.82.tar.bz2>
 MD5 sum: 1a11100f3c63fcf5753818e59d63088f
- Man-DB (2.6.5) - 1,380 KB:
 ホームページ: <http://www.nongnu.org/man-db/>
 ダウンロード: <http://download.savannah.gnu.org/releases/man-db/man-db-2.6.5.tar.xz>
 MD5 sum: 36f59d9314b45a266ba350584b4d7cc1
- Man-pages (3.53) - 1,144 KB:
 ホームページ: <http://www.kernel.org/doc/man-pages/>
 ダウンロード: <http://www.kernel.org/pub/linux/docs/man-pages/man-pages-3.53.tar.xz>
 MD5 sum: c3ab5df043bc95de69f73cb71a3c7bb6

- MPC (1.0.1) - 610 KB:
 ホームページ: <http://www.multiprecision.org/>
 ダウンロード: <http://www.multiprecision.org/mpc/download/mpc-1.0.1.tar.gz>
 MD5 sum: b32a2e1a3daa392372fbd586d1ed3679
- MPFR (3.1.2) - 1,049 KB:
 ホームページ: <http://www.mpfr.org/>
 ダウンロード: <http://www.mpfr.org/mpfr-3.1.2/mpfr-3.1.2.tar.xz>
 MD5 sum: e3d203d188b8fe60bb6578dd3152e05c
- Ncurses (5.9) - 2,760 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/ncurses/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/ncurses/ncurses-5.9.tar.gz>
 MD5 sum: 8cb9c412e5f2d96bc6f459aa8c6282a1
- Patch (2.7.1) - 660 KB:
 ホームページ: <http://savannah.gnu.org/projects/patch/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/patch/patch-2.7.1.tar.xz>
 MD5 sum: e9ae5393426d3ad783a300a338c09b72
- Perl (5.18.1) - 13,732 KB:
 ホームページ: <http://www.perl.org/>
 ダウンロード: <http://www.cpan.org/src/5.0/perl-5.18.1.tar.bz2>
 MD5 sum: 4ec1a3f3824674552e749ae420c5e68c
- Pkg-config (0.28) - 1,892 KB:
 ホームページ: <http://www.freedesktop.org/wiki/Software/pkg-config>
 ダウンロード: <http://pkgconfig.freedesktop.org/releases/pkg-config-0.28.tar.gz>
 MD5 sum: aa3c86e67551adc3ac865160e34a2a0d
- Procps (3.3.8) - 544 KB:
 ホームページ: <http://sourceforge.net/projects/procps-ng>
 ダウンロード: <http://sourceforge.net/projects/procps-ng/files/Production/procps-ng-3.3.8.tar.xz>
 MD5 sum: aecbeeda2ab308f8d09dddc4cb9a572
- Psmisc (22.20) - 422 KB:
 ホームページ: <http://psmisc.sourceforge.net/>
 ダウンロード: <http://prdownloads.sourceforge.net/psmisc/psmisc-22.20.tar.gz>
 MD5 sum: a25fc99a6dc7fa7ae6e4549be80b401f
- Readline (6.2) - 2,225 KB:
 ホームページ: <http://cnswww.cns.cwru.edu/php/chet/readline/rltop.html>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/readline/readline-6.2.tar.gz>
 MD5 sum: 67948acb2ca081f23359d0256e9a271c
- Sed (4.2.2) - 1,035 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/sed/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/sed/sed-4.2.2.tar.bz2>
 MD5 sum: 7ffe1c7cdc3233e1e0c4b502df253974
- Shadow (4.1.5.1) - 2,142 KB:
 ホームページ: <http://pkg-shadow.alioth.debian.org/>
 ダウンロード: <http://pkg-shadow.alioth.debian.org/releases/shadow-4.1.5.1.tar.bz2>
 MD5 sum: a00449aa439c69287b6d472191dc2247
- Sysklogd (1.5) - 85 KB:
 ホームページ: <http://www.infodrom.org/projects/sysklogd/>
 ダウンロード: <http://www.infodrom.org/projects/sysklogd/download/sysklogd-1.5.tar.gz>
 MD5 sum: e053094e8103165f98ddaef828f6ae4b
- Sysvinit (2.88dsf) - 108 KB:
 ホームページ: <http://savannah.nongnu.org/projects/sysvinit>
 ダウンロード: <http://download.savannah.gnu.org/releases/sysvinit/sysvinit-2.88dsf.tar.bz2>
 MD5 sum: 6eda8a97b86e0a6f59dabbf25202aa6f

- Tar (1.26) - 2,285 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/tar/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/tar/tar-1.26.tar.bz2>
 MD5 sum: 2cee42a2ff4f1cd4f9298eeeb2264519
 - Tcl (8.6.0) - 8,435 KB:
 ホームページ: <http://tcl.sourceforge.net/>
 ダウンロード: <http://prdownloads.sourceforge.net/tcl/tcl8.6.0-src.tar.gz>
 MD5 sum: 573aa5fe678e9185ef2b3c56b24658d3
 - Time Zone Data (2013d) - 216 KB:
 ホームページ: <http://www.iana.org/time-zones>
 ダウンロード: <http://www.iana.org/time-zones/repository/releases/tzdata2013d.tar.gz>
 MD5 sum: 65b6818162230fc02f86f293376c73df
 - Texinfo (5.1) - 3,665 KB:
 ホームページ: <http://www.gnu.org/software/texinfo/>
 ダウンロード: <http://ftp.gnu.org/gnu/texinfo/texinfo-5.1.tar.xz>
 MD5 sum: 52ee905a3b705020d2a1b6ec36d53ca6
 - Systemd (206) - 2,288 KB:
 ホームページ: <http://www.freedesktop.org/wiki/Software/systemd/>
 ダウンロード: <http://www.freedesktop.org/software/systemd/systemd-206.tar.xz>
 MD5 sum: 89e36f2d3ba963020b72738549954cbc
 - Udev-lfs Tarball (206) - 32 KB:
 ダウンロード: <http://andu.in.linuxfromscratch.org/sources/other/udev-lfs-206-1.tar.bz2>
 MD5 sum: e70a3402af8ad79f526d8c07c3fd5080
 - Util-linux (2.23.2) - 3,304 KB:
 ホームページ: <http://userweb.kernel.org/~kzak/util-linux/>
 ダウンロード: <http://www.kernel.org/pub/linux/utils/util-linux/v2.23/util-linux-2.23.2.tar.xz>
 MD5 sum: b39fde897334a4858bb2098edcce5b3f
 - Vim (7.4) - 9,632 KB:
 ホームページ: <http://www.vim.org>
 ダウンロード: <ftp://ftp.vim.org/pub/vim/unix/vim-7.4.tar.bz2>
 MD5 sum: 607e135c559be642f210094ad023dc65
 - Xz Utils (5.0.5) - 894 KB:
 ホームページ: <http://tukaani.org/xz>
 ダウンロード: <http://tukaani.org/xz/xz-5.0.5.tar.xz>
 MD5 sum: aa17280f4521dbeebed0fbd11cd7fa30
 - Zlib (1.2.8) - 441 KB:
 ホームページ: <http://www.zlib.net/>
 ダウンロード: <http://www.zlib.net/zlib-1.2.8.tar.xz>
 MD5 sum: 28f1205d8dd2001f26fec1e8c2cebe37
- 全パッケージのサイズ合計: 約 315 MB

3.3. 必要なパッチ

パッケージに加えて、いくつかのパッチも必要となります。それらのパッチはパッケージの不備をただすもので、本来なら開発者が修正すべきものです。パッチは不備修正だけでなく、ちょっとした修正を施して扱いやすいものにする目的のものもあります。以下に示すものが LFS システム構築に必要なパッチすべてです。



日本語訳情報

各パッチには簡略な名称がつけられていますが、これを日本語に訳してしまうと、パッチの特定ができなくなるのが考えられるため、訳出せずそのまま表記することにします。

- Automake Test Fix Patch - 2.5 KB:
 ダウンロード: <http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/automake-1.14-test-1.patch>
 MD5 sum: 1bc501443baee55bca4d6552ed18a757

- Bash Upstream Fixes Patch - 56 KB:
ダウンロード: <http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/bash-4.2-fixes-12.patch>
MD5 sum: 419f95c173596aea47a23d922598977a
- Bzip2 Documentation Patch - 1.6 KB:
ダウンロード: http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/bzip2-1.0.6-install_docs-1.patch
MD5 sum: 6a5ac7e89b791aae556de0f745916f7f
- Coreutils Internationalization Fixes Patch - 132 KB:
ダウンロード: <http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/coreutils-8.21-il8n-1.patch>
MD5 sum: ada0ea6e1c00c4b7e0d634f49827943e
- Kbd Backspace/Delete Fix Patch - 12 KB:
ダウンロード: <http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/kbd-1.15.5-backspace-1.patch>
MD5 sum: f75cca16a38da6caa7d52151f7136895
- Make Upstream Fixes Patch - 10 KB:
ダウンロード: http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/make-3.82-upstream_fixes-3.patch
MD5 sum: 95027ab5b53d01699845d9b7e1dc878d
- Perl Libc Patch - 1.6 KB:
ダウンロード: <http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/perl-5.18.1-libc-1.patch>
MD5 sum: daf5c64fd7311e924966842680535f8f
- Tar Manpage Patch - 7.8 KB:
ダウンロード: <http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/tar-1.26-manpage-1.patch>
MD5 sum: 321f85ec32733b1a9399e788714a5156
- Readline Upstream Fixes Patch - 1.3 KB:
ダウンロード: <http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/readline-6.2-fixes-1.patch>
MD5 sum: 3c185f7b76001d3d0af614f6f2cd5dfa
- Texinfo Test Patch - 5.6 KB:
ダウンロード: <http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/7.4/texinfo-5.1-test-1.patch>
MD5 sum: c50d9319a471b6ebd98900b852f5fb38

全パッチの合計サイズ: 約 230.4 KB

上に挙げた必須のパッチに加えて LFS コミュニティが提供する任意のパッチが数多くあります。それらは微小な不備改修や、デフォルトでは利用できない機能を有効にするなどを行います。 <http://www.linuxfromscratch.org/patches/downloads/> にて提供しているパッチ類を確認してください。そして自分のシステムにとって必要なものは自由に適用してください。

第4章 準備作業の仕上げ

4.1. \$LFSについて

本書の中では環境変数 `LFS` を利用していきます。この変数は常に定義しておく必要があります。これは `LFS` パーティションとして選んだマウントポイントを定義します。変数 `LFS` が適切に定義できているかどうかは、以下を実行すれば確認できます。

```
echo $LFS
```

上の出力結果が `LFS` パーティションのマウントポイントであることを確認してください。本書に示す例に従っている場合は `/mnt/lfs` が表示されるはずですが、出力が正しくない場合は、以下のようにして変数をセットします。

```
export LFS=/mnt/lfs
```

上のよう変数を定義しておくこと、例えば `mkdir $LFS/tools` といったコマンドを、この通りに入力することで実行できるので便利です。これが実行されると、シェルが「`$LFS`」を「`/mnt/lfs`」に（あるいは変数にセットされている別のディレクトリに）置換して処理してくれます。

`$LFS` が常にセットされていることを忘れずに確認してください。特に、別ユーザーでログインし直した場合（`su` コマンドによって `root` ユーザーや別のユーザーでログインした場合）には、忘れずに確認してください。

4.2. \$LFS/tools ディレクトリの生成

第5章にてビルドしていくプログラムは、すべて `$LFS/tools` ディレクトリ配下にインストールされます。これらは第6章にてコンパイル生成されるプログラムとは区別されます。ここでコンパイルするプログラムは一時的なものであり、最終的な `LFS` システムを構成するものではありません。これらのプログラムを分離したディレクトリに置いておけば、後に必要がなくなった時には簡単に削除できます。またホストシステムの実行環境に入り混じってしまうことを避ける意味もあります。（第5章の作業でついうっかり、といった失敗がなくなります。）

`$LFS/tools` ディレクトリは `root` ユーザーになって以下のコマンドを実行して生成します。

```
mkdir -v $LFS/tools
```

次にホストシステム上に `/tools` のシンボリックリンクを作成します。これは `LFS` パーティションに生成されたディレクトリを指し示すものです。 `root` ユーザーのまま以下を実行します。

```
ln -sv $LFS/tools /
```



注記

上のコマンドに間違いはありません。 `ln` コマンドにはいくつか文法の異なるバージョンがあります。間違いがあると思った場合には `info coreutils ln` や `ln(1)` をよく確認してください。

シンボリックリンクを作成することで、ツールチェーンをコンパイルする準備が整いました。これにより常に `/tools` ディレクトリを参照したツールチェーンが生成できます。コンパイラー、アセンブラー、リンカーは本章において動作し（いくつかのツール類は依然ホストシステムのものを利用しますが）、次章においても同様に動作します。（次章では「`chroot`」によって `LFS` パーティションに移動して利用します。）

4.3. LFS ユーザーの追加

`root` ユーザーでログインしていると、ちょっとした誤操作がもとで、システムを破壊する重大な事態につながる可能性があります。そこでパッケージのビルドにあたっては通常のユーザー権限にて作業することにします。あなた自身のユーザーを利用するのも構いませんが、全く新しいユーザー環境として `lfs` というユーザーを作成するのが分かりやすいでしょう。所属するグループも `lfs` という名で作成します。ビルド作業においてはこのユーザーを利用していきます。そこで `root` ユーザーになって、新たなユーザーを追加する以下のコマンドを実行します。

```
groupadd lfs
useradd -s /bin/bash -g lfs -m -k /dev/null lfs
```

コマンドラインオプションの意味:

`-s /bin/bash`

`lfs` ユーザーが利用するデフォルトのシェルを `bash` にします。

`-g lfs`

`lfs` ユーザーのグループを `lfs` とします。

`-m`

`lfs` ユーザーのホームディレクトリを生成します。

`-k /dev/null`

このパラメーターは、ディレクトリ名をヌルデバイス (null device) に指定しています。こうすることでスケルトンディレクトリ (デフォルトは `/etc/skel`) からのファイル群のコピーを無効とします。

`lfs`

生成するグループおよびユーザーの名称を与えます。

`lfs` ユーザーとしてログインするために `lfs` に対するパスワードを設定します。(root ユーザーでログインしている時に `lfs` へのユーザー切り替えを行なう場合には `lfs` ユーザーのパスワードは設定しておく必要はありません。)

```
passwd lfs
```

`$LFS/tools` ディレクトリの所有者を `lfs` ユーザーとすることで、このディレクトリへのフルアクセス権を設定します。

```
chown -v lfs $LFS/tools
```

前述したような作業ディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリに対しても `lfs` ユーザーを所有者とします。

```
chown -v lfs $LFS/sources
```

`lfs` でログインします。これはディスプレイマネージャーを通じて仮想端末を用いることができます。また以下のコマンドを実行するのでも構いません。

```
su - lfs
```

パラメーター「-」は `su` コマンドの実行において、非ログイン (non-login) シェルではなく、ログインシェルを起動することを指示します。ログインシェルとそうでないシェルの違いについては `bash(1)` や `info bash` を参照してください。

4.4. 環境設定

作業しやすい動作環境とするために `bash` シェルに対するスタートアップファイルを二つ作成します。`lfs` ユーザーでログインして、以下のコマンドによって `.bash_profile` ファイルを生成します。

```
cat > ~/.bash_profile << "EOF"
exec env -i HOME=$HOME TERM=$TERM PS1='\u:\w\$ ' /bin/bash
EOF
```

`lfs` ユーザーとしてログインした時、起動されるシェルは普通はログインシェルとなります。この時、ホストシステムの `/etc/profile` ファイル (おそらく環境変数がいくつか定義されている) と `.bash_profile` が読み込まれます。`.bash_profile` ファイル内の `exec env -i.../bin/bash` というコマンドが、起動しているシェルを全くの空の環境として起動し直し `HOME`、`TERM`、`PS1` という環境変数だけを設定します。これはホストシステム内の不要な設定や危険をはらんだ設定を、ビルド環境に持ち込まないようにするためです。このようにすることできれいな環境作りを実現できます。

新しく起動するシェルはログインシェルではなくなります。したがってこのシェルは `/etc/profile` ファイルや `.bash_profile` ファイルは読み込まず、代わりに `.bashrc` ファイルを読み込みます。そこで以下のようにして `.bashrc` ファイルを生成します。

```
cat > ~/.bashrc << "EOF"
set +h
umask 022
LFS=/mnt/lfs
LC_ALL=POSIX
LFS_TGT=$(uname -m)-lfs-linux-gnu
PATH=/tools/bin:/bin:/usr/bin
export LFS LC_ALL LFS_TGT PATH
EOF
```

`set -h` コマンドは `bash` のハッシュ機能を無効にします。通常このハッシュ機能は有用なものです。実行ファイルのフルパスをハッシュテーブルに記憶しておき、再度そのパスを探し出す際に `PATH` 変数の探査を省略します。しかしこれより作り出すツール類はインストール直後にすぐ利用していきいます。ハッシュ機能を無効にすることで、プログラム実行が行われる際に、シェルは必ず `PATH` を探しにいきます。つまり `$LFS/tools` ディレクトリ以下に新たに構築したツール類は必ず実行されるようになるわけです。そのツールの古いバージョンがどこか別のディレクトリにあったとしても、その場所を覚えていて実行されるということがなくなります。

ユーザーのファイル生成マスク (`file-creation mask`; `umask`) を `022` にセットするのは、新たなファイルやディレクトリの生成はその所有者にのみ許可し、他者は読み取りと実行を可能とするためです。(システムコール `open(2)` にてデフォルトモードが適用される場合、新規生成ファイルのパーミッションモードは `644`、同じくディレクトリは `755` となります。)

環境変数 `LFS` は常に指定したマウントポイントを指し示すように設定します。

`LC_ALL` 変数は特定のプログラムが扱う国情報を制御します。そのプログラムが出力するメッセージを、指定された国情報に基づいて構成します。ホストシステムの `Glibc` が `2.2.4` よりも古いものであって、この `LC_ALL` を(本章の作業中に)「`POSIX`」でもなく「`C`」でもない値にセットしていた場合、`chroot` 環境からの `exit` と再度の環境移行を行う際に問題が発生します。`LC_ALL` 変数は「`POSIX`」か「`C`」にセットしてください。(両者は同じです。) そのようにセットしておけば、`chroot` 環境下での作業が問題なく進められます。

`LFS_TGT` 変数は標準にないマシン名称を設定します。しかしこれはこの先、クロスコンパイラやクロスリンカーの構築、これを用いたツールチェーンの構築の際に、うまく動作させるための設定です。詳しくは `5.2. 「ツールチェーンの技術的情報」` にて説明しているので参照してください。

`/tools/bin` ディレクトリを `PATH` 変数の先頭に設定します。第5章にてインストールするプログラムは、インストールした直後からシェルによって実行指示が下されます。この設定は、ハッシュ機能をオフとしたことと連携して、古いプログラムが実行されないようにします。たとえホストシステムとの間で同一の実行プログラムがあったとしても、第5章の作業環境下では適切なプログラム実行が実現されます。

一時的なツールを構築する準備の最後として、今作り出したユーザープロファイルを `source` によって取り込みます。

```
source ~/.bash_profile
```

4.5. SBU 値について

各パッケージをコンパイルしインストールするのにどれほどの時間を要するか、誰も知りたくなるどころです。しかし `Linux From Scratch` は数多くのシステム上にて構築可能であるため、正確な処理時間を見積ることは困難です。最も大きなパッケージ (`Glibc`) の場合、処理性能の高いシステムでも `20` 分はかかります。それが性能の低いシステムとなると `3` 日はかかるかもしれません! 本書では処理時間を正確に示すのではなく、標準ビルド単位 (`Standard Build Unit`; `SBU`) を用いることにします。

`SBU` の測定は以下のようにします。本書で最初にコンパイルするのは第5章における `Binutils` です。このパッケージのコンパイルに要する時間を標準ビルド時間とし、他のコンパイル時間はその時間からの相対時間として表現します。

例えばあるパッケージのコンパイル時間が `4.5 SBU` であったとします。そして `Binutils` の1回目のコンパイルが `10` 分であったとすると、そのパッケージは およそ `45` 分かかることを意味しています。幸いにも、たいいていのパッケージは `Binutils` よりもコンパイル時間は短いものです。

一般にコンパイル時間は、例えばホストシステムの `GCC` のバージョンの違いなど、多くの要因に左右されるため `SBU` 値は正確なものになりません。`SBU` 値は、インストールに要する時間の目安を示すものに過ぎず、場合によっては十数分の誤差が出ることもあります。

特定マシンにおける実際の処理時間については、以下の `LinuxFromScratch SBU` ホームページに示していますので参照してください。 <http://www.linuxfromscratch.org/~sbu/>



注記

最新のシステムは複数プロセッサ（デュアルコアとも言います）であることが多く、パッケージのビルドにあたっては「同時並行のビルド」によりビルド時間を削減できます。その場合プロセッサ数がいくつなのかを環境変数に指定するか、あるいは `make` プログラムの実行時に指定する方法があります。例えばコア2デュオであれば、以下のようにして同時並行の二つのプロセスを実行することができます。

```
export MAKEFLAGS='-j 2'
```

あるいはビルド時の指定として以下のようにすることもできます。

```
make -j2
```

上のようにして複数プロセッサが利用されると、本書に示している SBU 単位は、通常の場合に比べて大きく変化します。したがってビルド結果を検証するにしても話が複雑になります。複数のプロセスラインがインターリーブにより多重化されるためです。ビルド時に何らかの問題が発生したら、単一プロセッサ処理を行ってエラーメッセージを分析してください。

4.6. テストスイートについて

各パッケージにはたいいていテストスイートがあります。新たに構築したパッケージに対しては、テストスイートを実行しておくのがよいでしょう。テストスイートは「健全性検査 (sanity check)」を行い、パッケージのコンパイルが正しく行われたことを確認します。テストスイートの実行によりいくつかのチェックが行われ、開発者の意図した通りにパッケージが正しく動作することを確認していきます。ただこれは、パッケージにバグがないことを保証するものではありません。

テストスイートの中には他のものにも増して重要なものがあります。例えば、ツールチェーンの要である GCC、Binutils、Glibc に対してのテストスイートです。これらのパッケージはシステム機能を確実なものとする重要な役割を担うものであるためです。GCC と Glibc におけるテストスイートはかなりの時間を要します。それが低い性能のマシンであればなおさらです。でもそれらを実行しておくことを強く推奨します。



注記

作業を進めてみれば分かることですが、第5章の作業においてテストスイートを実行することはあまり意味がありません。というのも、この章において実施するテストに対しては、ホストシステムによるある程度の影響があるためです。時には不可解なエラーが発生することもあります。第5章にて生成するツール類は一時的なものであり、その後には利用しなくなります。したがって普通のユーザーであれば第5章においてはテストスイートを実行しないことをお勧めします。テストスイートを実行する手順を説明してはいますが、それはテスターの方、開発者の方のために説明しているものであって、それらは全くのオプションです。

Binutils と GCC におけるテストスイートの実行では、擬似端末 (pseudo terminals; PTY) を使い尽くす問題が発生します。これにより相当数のテストが失敗します。これが発生する理由はいくつかありますが、もっともありがちな理由としてはホストシステムの `devpts` ファイルシステムが正しく構成されていないことがあげられます。この点については <http://www.linuxfromscratch.org/lfs/faq.html#no-ptys> においてかなり詳しく説明しています。

パッケージの中にはテストスイートに失敗するものがあります。しかしこれらは開発元が認識しているもので致命的なものではありません。以下の <http://www.linuxfromscratch.org/lfs/build-logs/7.4/> に示すログを参照して、失敗したテストが実は予期されているものであるかどうかを確認してください。このサイトは、本書におけるすべてのテストスイートの正常な処理結果を示すものです。

第5章 一時的環境の構築

5.1. はじめに

この章では最小限の Linux システムを構築していく方法を示します。このシステムは、最終的に第6章にて LFS システムを構築するためのもので、そのために必要なツール類をすべて含んでいます。最小限とは言いつつも、取り扱いやすい実行環境を提供します。

最小限のシステムを構築するために、以下の二段階の手順を踏みます。初めにホストシステムに依存しない新しいツールチェーン（コンパイラー、アセンブラー、リンカー、ライブラリ、その他の有用なユーティリティ）を構築します。次にこのツールチェーンを使って、他の重要なツール類を構築していきます。

この章にて生成されるファイル群は `$LFS/tools` ディレクトリ配下にインストールされます。これらのファイルは、次章にてインストールされるファイル群や、ホスト環境にあるファイル群とは区分けされます。ここで構築されるパッケージ類は、あくまで一時的なものであるため、この後に構築する LFS システムを汚したくないためにこのようにします。

5.2. ツールチェーンの技術的情報

本節ではシステムをビルドする原理や技術的な詳細について説明します。この節のすべてをすぐに理解する必要はありません。この先、実際の作業を行っていけば、いろいろな情報が明らかになってくるはずです。各作業を進めながら、いつでもこの節に戻って読み直してみてください。

第5章の最終目標は一時的なシステム環境を構築することです。この一時的なシステムには、システム構築のための十分なツール類を有し、ホストシステムとは切り離されたものです。この環境へは `chroot` によって移行します。この環境は第6章において、クリーンでトラブルのない LFS システムの構築を行う土台となるものです。構築手順の説明においては、初心者の方であっても失敗を最小限にとどめ、同時に最大限の学習材料となるように心がけています。



注記

これより先に進む前に、作業するプラットフォームの「三つの組 (target triplet)」で表される名称を確認してください。「三つの組」は `config.guess` スクリプトを実行することで簡単に確認できます。そのスクリプトは多くのパッケージのソースに含まれています。Binutils パッケージのソースを伸張（解凍）し `./config.guess` スクリプトを実行してその出力を確認してみてください。例えば最近の 32 ビット Intel プロセッサでは `i686-pc-linux-gnu` のような出力が得られます。

利用しているプラットフォームに応じたダイナミックリンカー (dynamic linker) の名前についても確認してください。ダイナミックローダー (dynamic loader) とも表現されるものです。(Binutils が提供する標準的なリンカー `ld` とは異なりますので注意してください。) Glibc が提供するこのダイナミックリンカーは、プログラムが必要としている共有ライブラリを見つけ出してロードし、実行のための準備を行った上で実際に実行します。32 ビットマシンのダイナミックリンカーの名前は `ld-linux.so.2` といったものになります。確実にその名前を調べるなら、ホストシステム内のどれでも良いので実行モジュールを選んで `readelf -l <実行モジュール名> | grep interpreter` と入力します。出力される結果を確認してください。あらゆるプラットフォームの情報を知りたいなら Glibc のソースディレクトリのルートにある `shlib-versions` ファイルに記されています。

第5章におけるビルド手順がどのように機能するのか、その技術的な情報を以下に示します。

- 動作させているプラットフォームの名前を微妙に変えます。三つの組の “ベンダー” フィールドを変更するもので、`LFS_TGT` 変数に定め利用します。こうしておいて Binutils と GCC の初回の構築を行えば、互換性のあるクロスコンパイラー、クロスリンカーを確実に構築できるようになります。もう一つ別のアーキテクチャーに対する実行モジュールを作らなくても、そのクロスコンパイラーとクロスリンカーを使えば、生成される実行モジュールは現在のハードウェアに適合したものとなります。
- 一時的に構築するライブラリはクロスコンパイルにより生成します。クロスコンパイラーというものは元来、ホストシステムへ依存するものではないためです。こうすることで、ホストシステムのヘッダーやライブラリが、一時的なツール類を壊してしまうような危険を減らすことができ、同時に 64 ビットマシンにて 32 ビットあるいは 64 ビットの双方のライブラリを構築することができるようになります。
- `gcc` のソースを適切に調整することで、どのダイナミックリンカーを用いるのかをコンパイラーに指示します。

Binutils をまず初めにインストールします。この後の GCC や Glibc の `configure` スクリプトの実行ではアセンブラーやリンカーに対するさまざまな機能テストが行われるため、そこではどの機能が利用可能または利用不能であるかが確認されます。ただ重要なのは Binutils を一番初めにビルドするという点だけではありません。Gcc や Glibc の `configure` が正しく処理されなかったとすると、ツールチェーンがわずかながら不完全な状態で生成されてしまい

ます。この状態は、すべてのビルド作業を終えた最後になって、大きな不具合となって現れてくることになります。テストスイートを実行することが欠かせません。これを実行しておけば、この先に行う多くの作業に入る前に不備があることが分かるからです。

Binutils はアセンブラーとリンカーを二箇所にインストールします。 `/tools/bin` と `/tools/$LFS_TGT/bin` です。これらは一方が他方のハードリンクとなっています。リンカーの重要なところはライブラリを検索する順番です。 `ld` コマンドに `--verbose` オプションをつけて実行すれば詳しい情報が得られます。例えば `ld --verbose | grep SEARCH` を実行すると、検索するライブラリのパスとその検索順を示してくれます。ダミープログラムをコンパイルして `ld` に `--verbose` オプションをつけてリンクを行うと、どのファイルがリンクされたが分かります。例えば `gcc dummy.c -Wl,--verbose 2>&1 | grep succeeded` と実行すれば、リンカーの処理中にオープンに成功したファイルがすべて表示されます。

次にインストールするのは GCC です。 `configure` の実行時には以下のような出力が行われます。

```
checking what assembler to use... /tools/i686-lfs-linux-gnu/bin/as
checking what linker to use... /tools/i686-lfs-linux-gnu/bin/ld
```

これを示すのには重要な意味があります。GCC の `configure` スクリプトは、利用するツール類を探し出す際に `PATH` ディレクトリを参照していないということです。しかし `gcc` の実際の処理にあたっては、その検索パスが必ず使われるわけでもありません。 `gcc` が利用する標準的なリンカーを確認するには `gcc -print-prog-name=ld` を実行します。

さらに詳細な情報を知りたいときは、ダミープログラムをコンパイルする際に `-v` オプションをつけて実行します。例えば `gcc -v dummy.c` と入力すると、プリプロセッサ、コンパイル、アセンブルの各処理工程が示されますが、さらに `gcc` がインクルードした検索パスとその読み込み順も示されます。

次に健全化された (sanitized) Linux API ヘッダーをインストールします。これにより、標準 C ライブラリ (Glibc) が Linux カーネルが提供する機能とのインターフェースを可能とします。

次のパッケージは Glibc です。Glibc 構築の際に気にかけるべき重要なものは、コンパイラー、バイナリツール、カーネルヘッダーです。コンパイラーについては、一般にはあまり問題にはなりません。Glibc は常に `configure` スクリプトにて指定される `--host` パラメーターに関連づけしたコンパイラーを用いるからです。我々の作業では `i686-lfs-linux-gnu-gcc` になります。バイナリツールとカーネルヘッダーは多少複雑です。従って無理なことはせず有効な `configure` オプションを選択することが必要です。 `configure` 実行の後は `glibc-build` ディレクトリにある `config.make` ファイルに重要な情報が示されているので確認してみてください。なお `CC="i686-lfs-gnu-gcc"` とすれば、どこにある実行モジュールを利用するかを制御でき `-nostdinc` と `-isystem` を指定すれば、コンパイラーに対してインクルードファイルの検索パスを制御できます。これらの指定は Glibc パッケージの重要な面を示しています。Glibc がビルドされるメカニズムは自己完結したビルドが行われるものであり、ツールチェーンのデフォルト設定には基本的に依存しないことを示しています。

Binutils の2回目のビルドにおいては `ld` コマンドのライブラリ検索パスを設定するために `configure` の `--with-lib-path` スイッチを指定します。

GCC の第2回目のビルドにおいても、ソースを修正して新しいダイナミックリンカーが用いられるようにします。これをもし誤ってしまうと、ホストシステムの `/lib` ディレクトリが埋め込まれたダイナミックリンカーを用いるものとして GCC が生成されてしまいます。こうしてしまうと、ホストシステムに依存しない形を目指すという目的が達成できません。これ以降、コアとなるツールチェーンは、自己完結し (self-contained)、自分だけで処理できる (self-hosted) ものとなります。第5章の残りのパッケージは `/tools` にある新たな Glibc を用いてビルドされます。

第6章での `chroot` による環境下では、実質的なパッケージとして Glibc を初めにビルドします。これは上に述べているように自己完結した性質を目指すためです。 `/usr` に Glibc をインストールしたら、ツールチェーンのデフォルトディレクトリの変更を行い LFS システムを構築する残りのパッケージをビルドしていきます。

5.3. 全般的なコンパイル手順

パッケージをビルドしていく際には、以下に示す内容を前提とします:

- パッケージの中には、コンパイルする前にパッチを当てるものがあります。パッチを当てるのは、そのパッケージが抱える問題を回避するためです。本章と次章の双方でパッチを当てるものがあり、あるいは本章と次章のいずれか一方でパッチを当てるものもあります。したがってパッチをダウンロードする説明が書かれていないなら、何も気にせず先に進んでください。パッチを当てた際に `offset` や `fuzz` といった警告メッセージが出る場合がありますが、これらは気にしないでください。このような時でもパッチは問題なく適用されています。
- コンパイルの最中に、警告メッセージが画面上に出力されることがよくあります。これは問題はないため無視して構いません。警告メッセージは、メッセージ内に説明されているように、C や C++ の文法が誤りではないものの推奨されていないものであることを示しています。C 言語の標準はよく変更されますが、パッケージの中には古い基準に従っているものもあります。問題はないのですが、警告として画面表示されることになるわけです。

- もう一度、環境変数 `LFS` が正しく設定されているかを確認します。

```
echo $LFS
```

上の出力結果が `LFS` パーティションのマウントポイントのディレクトリであることを確認してください。本書では `/mnt/lfs` ディレクトリとして説明しています。

- 最後に以下の二つの点にも注意してください。



重要項目

ビルドにあたっては、ホストシステム要件にて示す要件やシンボリックリンクが、正しくインストールされていることを前提とします。

- `bash` シェルの利用を想定しています。
- `sh` は `bash` へのシンボリックリンクであるものとします。
- `/usr/bin/awk` は `gawk` へのシンボリックリンクであるものとします。
- `/usr/bin/yacc` は `bison` へのシンボリックリンクであるか、あるいは `bison` を実行するためのスクリプトであるものとします。



重要項目

ビルド作業では以下の点が重要です。

1. ソースやパッチファイルを配置するディレクトリは `/mnt/lfs/sources/` などのように `chroot` 環境でもアクセスが出来るディレクトリとしてください。 `/mnt/lfs/tools/` ディレクトリにソースを置くことはやめてください。
2. ソースディレクトリに入ります。
3. 各パッケージについて：
 - a. `tar` コマンドを使ってパッケージの `tarball` を伸張（解凍）します。第5章では、パッケージを伸張（解凍）するのは `lfs` ユーザーとします。
 - b. パッケージの伸張（解凍）後に生成されたディレクトリに入ります。
 - c. 本書の手順に従ってビルド作業を行っていきます。
 - d. ソースディレクトリに戻ります。
 - e. ビルド作業を通じて生成されたパッケージディレクトリを削除します。さらに `<package>-build` なるディレクトリを生成していた場合は、特に指定がない限りはそれも削除します。

5.4. Binutils-2.23.2 - 1回め

Binutils パッケージは、リンカーやアセンブラーなどのようにオブジェクトファイルを取り扱うツール類を提供します。

概算ビルド時間: 1 SBU
必要ディスク容量: 404 MB

5.4.1. クロスコンパイル版 Binutils のインストール



注記

前の節に戻って再度説明をよく読み、重要事項として説明している内容をよく理解しておいてください。そうすればこの後の無用なトラブルを減らすことができるはずです。

Binutils は一番最初にビルドするパッケージです。ここでビルドされるリンカーやアセンブラーを使って、Glibc や GCC のさまざまな機能が利用できるかどうかを判別することになります。

Texinfo-5.1 によりドキュメントをビルドする際の文法エラーを修正します。

```
sed -i -e 's/@colophon/@@colophon/' \  
-e 's/doc@cygnus.com/doc@@cygnus.com/' bfd/doc/bfd.texinfo
```

Binutils のドキュメントでは Binutils をビルドする際に、ソースディレクトリではなく、ビルド専用のディレクトリを使ってビルドすることを推奨しています。

```
mkdir -v ../binutils-build  
cd ../binutils-build
```



注記

本節以降で SBU値を示していきます。これを活用していくなら、本パッケージの configure から初めのインストールまでの処理時間を計測しましょう。具体的には処理コマンドを time で囲んで **time { ./configure ... && ... && make install; }** と入力すれば実現できます。



注記

概算ビルド時間と必要ディスク容量は、この第5章ではテストスイートに関わる時間や容量は含めないことにします。

Binutils をコンパイルするための準備をします。:

```
../binutils-2.23.2/configure \  
--prefix=/tools \  
--with-sysroot=$LFS \  
--with-lib-path=/tools/lib \  
--target=$LFS_TGT \  
--disable-nls \  
--disable-werror
```

configure オプションの意味

`--prefix=/tools`

configure スクリプトに対して Binutils プログラムを /tools ディレクトリ以下にインストールすることを指示します。

`--with-sysroot=$LFS`

クロスコンパイル時に、ターゲットとして必要となるシステムライブラリを \$LFS より探し出すことを指示します。

`--with-lib-path=/tools/lib`

リンカーが用いるべきライブラリパスを指定します。

```
--target=$LFS_TGT
```

変数 `LFS_TGT` に設定しているマシン名は `config.guess` スクリプトが返すものとは微妙に異なります。そこでこのオプションは、Binutils のビルドにあたってクロスリンカーをビルドするように `configure` スクリプトに指示するものです。

```
--disable-nls
```

一時的なツール構築にあたっては `i18n` 国際化は行わないことを指示します。

```
--disable-werror
```

ホストのコンパイラーが警告を発した場合に、ビルドが中断することがないようにします。

パッケージをコンパイルします。

make

コンパイルが終了しました。通常ならここでテストスイートを実行します。しかしシステム構築初期のこの段階ではテストスイートのフレームワーク (Tcl, Expect, DejaGNU) が準備できていません。さらにこの時点で生成されるプログラムは、すぐに次の生成作業によって置き換えられますから、この時点でテストを実行することはあまり意味がありません。

`x86_64` にて作業をしている場合は、ツールチェーンの切り分けを適切に行うためにシンボリックリンクを作成します。

```
case $(uname -m) in
  x86_64) mkdir -v /tools/lib && ln -sv lib /tools/lib64 ;;
esac
```

パッケージをインストールします。

make install

本パッケージの詳細は 6.13.2. 「Binutils の構成」を参照してください。

5.5. GCC-4.8.1 - 1回め

GCC パッケージは C コンパイラーや C++ コンパイラーなどの GNU コンパイラーコレクションを提供します。

概算ビルド時間: 5.5 SBU
必要ディスク容量: 1.4 GB

5.5.1. クロスコンパイル版 GCC のインストール

最近の GCC は GMP、MPFR、MPC の各パッケージを必要とします。これらのパッケージはホストシステムに含まれていないかもしれないため、以下を実行してビルドの準備をします。個々のパッケージを GCC ソースディレクトリの中に伸張（解凍）し、ディレクトリ名を変更します。これは GCC のビルド処理においてそれらを自動的に利用できるようにするためです。



注記

本節においては誤解が多く発生しています。ここでの手順は他のものと同様であり、手順の概要（パッケージビルド手順）は説明済です。まず初めに gcc の tarball を伸張（解凍）し、生成されたソースディレクトリに移動します。それに加えて本節では、以下の手順を行うものとなります。

```
tar -Jxf ../mpfr-3.1.2.tar.xz
mv -v mpfr-3.1.2 mpfr
tar -Jxf ../gmp-5.1.2.tar.xz
mv -v gmp-5.1.2 gmp
tar -zxf ../mpc-1.0.1.tar.gz
mv -v mpc-1.0.1 mpc
```

以下のコマンドは GCC のデフォルトのダイナミックリンカーの配置ディレクトリを、既にインストールされている /tools とします。また GCC のインクルードパスから /usr/include を除きます。

```
for file in \
$(find gcc/config -name linux64.h -o -name linux.h -o -name sysv4.h)
do
cp -uv $file{,.orig}
sed -e 's@/lib\((64)\)\?@(32)\)\?/ld@/tools&@g' \
-e 's@/usr@/tools@g' $file.orig > $file
echo '
#undef STANDARD_STARTFILE_PREFIX_1
#undef STANDARD_STARTFILE_PREFIX_2
#define STANDARD_STARTFILE_PREFIX_1 "/tools/lib/"
#define STANDARD_STARTFILE_PREFIX_2 ""' >> $file
touch $file.orig
done
```

上のコマンドがよく分からない場合は一つ一つ読み下して行ってください。まず gcc/config ディレクトリには linux.h, linux64.h, sysv4.h といったファイルのいずれかがあります。それらが存在したら、ファイル名称の末尾に「.orig」をつけたファイルとしてコピーします。そして一つめの sed コマンドでは、そのファイル内にある「/lib/ld」, 「/lib64/ld」, 「/lib32/ld」という記述部分の頭に「/tools」を付与します。また二つめの sed コマンドによってハードコーディングされている「/usr」という部分を書き換えます。そしてここで加えるべき定義文をファイルの末尾に追加し、検索パスと startfile プリフィックスを変更します。この際に「/tools/lib/」の終わりには「/」が必要となります。最後に touch によってコピーしたファイルのタイムスタンプを更新します。cp -u を用いるのは、誤ってコマンドを二度起動したとしてもオリジナルファイルを壊さないようにするためです。

GCC はスタックプロテクション (stack protection) を正しく検出しません。このことは Glibc-2.18 においてビルドする際には問題となります。そこで以下のコマンドを実行することで解消します。

```
sed -i '/k prot/agcc_cv_libc_provides_ssp=yes' gcc/configure
```

GCC のドキュメントでは、ソースディレクトリ以外の専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v ../gcc-build
cd ../gcc-build
```

GCC をコンパイルするための準備をします。

```

../gcc-4.8.1/configure \
  --target=$LFS_TGT \
  --prefix=/tools \
  --with-sysroot=$LFS \
  --with-newlib \
  --without-headers \
  --with-local-prefix=/tools \
  --with-native-system-header-dir=/tools/include \
  --disable-nls \
  --disable-shared \
  --disable-multilib \
  --disable-decimal-float \
  --disable-threads \
  --disable-libatomic \
  --disable-libgomp \
  --disable-libitm \
  --disable-libmudflap \
  --disable-libquadmath \
  --disable-libsanitizer \
  --disable-libssp \
  --disable-libstdc++-v3 \
  --enable-languages=c,c++ \
  --with-mpfr-include=$(pwd)/../gcc-4.8.1/mpfr/src \
  --with-mpfr-lib=$(pwd)/mpfr/src/.libs

```

configure オプションの意味:

`--with-newlib`

この時点では利用可能な C ライブラリがまだ存在しません。したがって libgcc のビルド時に `inhibit_libc` 定数を定義します。これを行うことで、libc サポートを必要とするコード部分をコンパイルしないようにします。

`--without-headers`

完璧なクロスコンパイラを構築するなら、GCC はターゲットシステムに互換性を持つ標準ヘッダーを必要とします。本手順においては標準ヘッダーは必要ありません。このスイッチは GCC がそういったヘッダーを探しにいかないようにします。

`--with-local-prefix=/tools`

ローカルプリフィクス (local prefix) は、GCC がローカルにインストールされているインクルードファイルを探しにいくディレクトリを意味します。そのデフォルトは `/usr/local` です。この設定を `/tools` とすることで、GCC が探し出すパスから `/usr/local` を除外します。

`--with-native-system-header-dir=/tools/include`

GCC がシステムヘッダーを探し出すデフォルトのパスは `/usr/include` です。後に `root` を変更する際には、このディレクトリは `$LFS/usr/include` となります。しかしこの直後の2つの作業を通じて、ヘッダーをインストールする先は `$LFS/tools/include` としています。つまり本スイッチは GCC がヘッダーを正しく見つけ出せるようにするものです。GCC の2回目のビルドでは、同じスイッチを用いて、ホストシステムのヘッダーは一切見つけ出さないようにします。

`--disable-shared`

このオプションは内部ライブラリをスタティックライブラリとしてリンクすることを指示します。ホストシステムに関係しそうな問題を回避するためです。

`--disable-decimal-float`, `--disable-threads`, `--disable-libatomic`, `--disable-libgomp`, `--disable-libitm`, `--disable-libmudflap`, `--disable-libquadmath`, `--disable-libsanitizer`, `--disable-libssp`, `--disable-libstdc++-v3`

これらのオプションは順に、十進浮動小数点制御、スレッド処理、libatomic, libgomp, libitm, libmudflap, libquadmath, libsanitizer, libssp, C++ 標準ライブラリのサポートをいずれも無効にすることを指示します。これらの機能を含めると、クロスコンパイラをビルドする際にはコンパイルに失敗します。またクロスコンパイルによって一時的な libc ライブラリを構築する際には不要なものです。

`--disable-multilib`

`x86_64` に対して LFS は まだ multilib のサポートをしていません。このオプション指定は `x86` には無関係です。

```
--enable-languages=c,c++
```

このオプションは C コンパイラおよび C++ コンパイラのみビルドすることを指示します。この時点で必要なのはこの言語だけだからです。

GCC をコンパイルします。

make

コンパイルが終了しました。この時点でもテストスイートを実行することはできます。ただ前にも述べているように、テストスイートのフレームワークがまだ準備できていません。さらにこの時点で生成されるプログラムは、すぐに次の生成作業によって置き換えられますから、この時点でテストを実行することはあまり意味がありません。

パッケージをインストールします。

make install

`--disable-shared` オプションを指定すると `libgcc_eh.a` を生成せずインストールしません。Glibc パッケージはこのライブラリに依存しており、ビルドの際に `-lgcc_eh` を指定することで利用されます。依存している点は `libgcc.a` へのシンボリックリンクを生成しておけば問題はありません。 `libgcc_eh.a` に含まれるオブジェクトが、最終的には `libgcc.a` の中にも含まれることになるからです。

```
ln -sv libgcc.a `${LFS_TGT-gcc -print-libgcc-file-name} | sed 's/libgcc/&_eh/'`
```

本パッケージの詳細は 6.17.2. 「GCC の構成」を参照してください。

5.6. Linux-3.10.10 API ヘッダー

Linux API ヘッダー (linux-3.10.10.tar.gz 内) は Glibc が利用するカーネル API を提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 584 MB

5.6.1. Linux API ヘッダー のインストール

Linux カーネルはアプリケーションプログラミングインターフェース (Application Programming Interface) を、システムの C ライブラリ (LFS の場合 Glibc) に対して提供する必要があります。これを行うには Linux カーネルのソースに含まれる、さまざまな C ヘッダーファイルを「健全化 (sanitizing)」して利用します。

これより前に一度処理を行っていたとしても、不適切なファイルや誤った依存関係を残さないように、以下を処理します。

```
make mrproper
```

そしてユーザーが利用するカーネルヘッダーファイルをテストし、ソースから抽出します。それらはいったん中間的なローカルディレクトリに置かれ、必要な場所にコピーされます。ターゲットディレクトリに既にあるファイルは削除してからソースからの抽出処理が行われます。

```
make headers_check  
make INSTALL_HDR_PATH=dest headers_install  
cp -rv dest/include/* /tools/include
```

本パッケージの詳細は 6.7.2. 「Linux API ヘッダー の構成」を参照してください。

5.7. Glibc-2.18

Glibc パッケージは主要な C ライブラリを提供します。このライブラリは基本的な処理ルーチンを含むもので、メモリ割り当て、ディレクトリ走査、ファイルのオープン、クローズや入出力、文字列操作、パターンマッチング、算術処理、等々があります。

概算ビルド時間: 4.7 SBU
必要ディスク容量: 567 MB

5.7.1. Glibc のインストール

例えば LFS 7.1 などにおいて、rpc ヘッダーが適切にインストールされていない場合があります。ホストシステムにそれらがインストールされているかを確認し、なければそれらをインストールするようにします。

```
if [ ! -r /usr/include/rpc/types.h ]; then
  su -c 'mkdir -p /usr/include/rpc'
  su -c 'cp -v sunrpc/rpc/*.h /usr/include/rpc'
fi
```

アップストリームの変更の中に、元に戻すことが必要なものがあります。

```
sed -i -e 's/static __m128i/inline &/' sysdeps/x86_64/multiarch/strstr.c
```

Glibc のドキュメントでは、ソースディレクトリ以外の専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v ../glibc-build
cd ../glibc-build
```

次に Glibc をコンパイルするための準備をします。

```
../glibc-2.18/configure \
  --prefix=/tools \
  --host=$LFS_TGT \
  --build=$(../glibc-2.18/scripts/config.guess) \
  --disable-profile \
  --enable-kernel=2.6.32 \
  --with-headers=/tools/include \
  libc_cv_forced_unwind=yes \
  libc_cv_ctors_header=yes \
  libc_cv_c_cleanup=yes
```

configure オプションの意味:

`--host=$LFS_TGT, --build=$(../glibc-2.18/scripts/config.guess)`

このようなオプションを組み合わせることで /tools ディレクトリにあるクロスコンパイラ、クロスリンカーを使って Glibc がクロスコンパイルされるようになります。

`--disable-profile`

プロファイル情報を含めずにライブラリをビルドすることを指示します。一時的なツールにてプロファイル情報が必要な場合は、このオプションを取り除いてください。

`--enable-kernel=2.6.32`

Linux カーネル 2.6.32 以上のサポートを行うよう指示します。これ以前のカーネルは利用することができません。

`--with-headers=/tools/include`

これまでに tools ディレクトリにインストールしたヘッダーファイルを用いて Glibc をビルドすることを指示します。こうすればカーネルにどのような機能があるか、どのようにして処理効率化を図れるかなどの情報を Glibc が得られることとなります。

`libc_cv_forced_unwind=yes`

5.4. 「Binutils-2.23.2 - 1回め」においてインストールしたリンカーは、クロスコンパイルにより生成したものです。これは Glibc をインストールするまでは使えません。これはつまり force-unwind サポートに対するテストは失敗することを意味します。正しく動作するリンカーに依存するためです。libc_cv_forced_unwind=yes の変

数設定は、configure スクリプトに対してテストを実行しなくても force-unwind サポート機能を利用可能とすることを指示します。

```
libc_cv_c_cleanup=yes
```

上と同様に configure スクリプトに対して libc_cv_c_cleanup=yes を指示します。これによりテストが省略され、C のクリーンアップハンドリング (cleanup handling) のサポートを指定します。

```
libc_cv_ctors_header=yes
```

さらに configure スクリプトに対して libc_cv_ctors_header=yes も指示します。これによりテストがスキップされ gcc コンストラクターが設定されます。

ビルド中には以下のようなメッセージが出力されるかもしれません。

```
configure: WARNING:
*** These auxiliary programs are missing or
*** incompatible versions: msgfmt
*** some features will be disabled.
*** Check the INSTALL file for required versions.
```

msgfmt プログラムがない場合 (missing) や互換性がない場合 (incompatible) でも特に問題はありません。msgfmt プログラムは Gettext パッケージが提供するもので、ホストシステムに含まれているかもしれません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートは存在しますが、ここで実行することはできません。この時点ではまだ C++ コンパイラーを構築していないためです。



注記

テストスイートを正しく実行するためには、さらにロケールデータも必要になります。ロケールデータは、システム内の各種ユーティリティが、日付、時刻、通貨などの情報を利用したり出力したりするために用いられるものです。テストスイートの実行は不要と説明していることから、これに従って実行しない場合はロケールデータをここでインストールする必要はありません。適切なロケールデータは次章にてインストールします。それでもここでインストールするなら 6.9、「Glibc-2.18」に示される手順に従ってください。

パッケージをインストールします。

```
make install
```



注意

この時点で以下を必ず実施します。新しいツールチェーンの基本的な機能 (コンパイルやリンク) が正常に処理されるかどうかを確認することです。健全性のチェック (sanity check) を行うものであり、以下のコマンドを実行します。

```
echo 'main(){' > dummy.c
$LFS_TGT-gcc dummy.c
readelf -l a.out | grep ': /tools'
```

すべてが正常に処理され、エラーが発生しなければ、最終のコマンドの実行結果として以下が出力されるはずで

```
[Requesting program interpreter: /tools/lib/ld-linux.so.2]
```

ダイナミックリンカーのプリフィックスは /tools/lib、あるいは 64 ビットマシンであれば /tools/lib64 となります。

出力結果が上とは異なったり、あるいは何も出力されなかったりした場合は、どこかに不備があります。どこに問題があるのか調査、再試行を行って解消してください。解決せずにこの先に進まないでください。

すべてが完了したら、テストファイルを削除します。

```
rm -v dummy.c a.out
```




注記

次々節にてビルドする Binutils では、ツールチェーンが正しく構築できたかどうかを再度チェックすることになります。Binutils のビルドに失敗したとしたら、それ以前にインストールしてきた Binutils, GCC, Glibc のいずれかにてビルドがうまくできていないことを意味します。

本パッケージの詳細は 6.9.4. 「Glibc の構成」を参照してください。

5.8. Libstdc++-4.8.1

Libstdc++ は標準 C++ ライブラリです。これは g++ コンパイラーの処理制御を適正に行うために必要となります。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 734 MB

5.8.1. Libstdc++ のインストール



注記

Libstdc++ のソースは GCC に含まれます。したがってまずは GCC の tarball を伸張（解凍）した上で gcc-4.8.1 ディレクトリに入って作業を進めます。

Libstdc++ のためのディレクトリを新たに生成して移動します。

```
mkdir -pv ../gcc-build
cd ../gcc-build
```

Libstdc++ をコンパイルするための準備をします。

```
../gcc-4.8.1/libstdc++-v3/configure \
  --host=$LFS_TGT \
  --prefix=/tools \
  --disable-multilib \
  --disable-shared \
  --disable-nls \
  --disable-libstdcxx-threads \
  --disable-libstdcxx-pch \
  --with-gxx-include-dir=/tools/$LFS_TGT/include/c++/4.8.1
```

configure オプションの意味

`--host=...`

利用するクロスコンパイラーを指示するものであり、`/usr/bin` にあるものではなく、まさに先ほど作り出したものを指定するものです。

`--disable-libstdcxx-threads`

C スレッドライブラリはまだ生成していないため、C++ スレッドライブラリも生成しないようにします。

`--disable-libstdcxx-pch`

本スイッチは、既にコンパイルされたインクルードファイルをインストールしないようにします。これはこの時点では必要ないためです。

`--with-gxx-include-dir=/tools/include/c++/4.8.1`

C++ コンパイラーが標準インクルードファイルを探すディレクトリを指定します。通常のビルドにおいてそのディレクトリ情報は、最上位ディレクトリの `configure` のオプションにて指定します。ここでの作業では、上のようにして明示的に指定します。

libstdc++ をコンパイルします。

```
make
```

ライブラリをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.17.2. 「GCC の構成」を参照してください。

5.9. Binutils-2.23.2 - 2回め

Binutils パッケージは、リンカーやアセンブラーなどのようにオブジェクトファイルを取り扱うツール類を提供します。

概算ビルド時間: 1.1 SBU
必要ディスク容量: 417 MB

5.9.1. Binutils のインストール

Texinfo-5.1 によりドキュメントをビルドする際の文法エラーを修正します。

```
sed -i -e 's/@colophon/@@colophon/' \  
-e 's/doc@cygnus.com/doc@@cygnus.com/' bfd/doc/bfd.texinfo
```

ビルドのためのディレクトリを再び生成します。

```
mkdir -v ../binutils-build  
cd ../binutils-build
```

Binutils をコンパイルするための準備をします。

```
CC=$LFS_TGT-gcc \  
AR=$LFS_TGT-ar \  
RANLIB=$LFS_TGT-ranlib \  
../binutils-2.23.2/configure \  
--prefix=/tools \  
--disable-nls \  
--with-lib-path=/tools/lib \  
--with-sysroot
```

configure オプションの意味:

```
CC=$LFS_TGT-gcc AR=$LFS_TGT-ar RANLIB=$LFS_TGT-ranlib
```

Binutils をネイティブにビルドすることが目的なので、ホストシステムに存在しているクロスコンパイラーや関連ツールは使わず、ビルドしているシステム内のものを用いるように指定します。

```
--with-lib-path=/tools/lib
```

configure スクリプトに対して Binutils のコンパイル中でのライブラリパスを指定します。リンカーに対して /tools/lib ディレクトリを指定するものです。こうすることでリンカーがホスト上のライブラリを検索しないようにします。

```
--with-sysroot
```

sysroot 機能は、特定の共有オブジェクトを必要とする他の共有オブジェクトを、リンカーが見つげ出せるようにする機能です。その場合には明示的にリンカーのコマンドラインにて、共有オブジェクトを指定する必要があります。コマンドラインでのその指定がない場合には、特定のホストにてパッケージビルドに失敗するものが出てきます。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

次章で行う「再調整」の作業に向けてリンカーを準備します。

```
make -C ld clean  
make -C ld LIB_PATH=/usr/lib:/lib  
cp -v ld/ld-new /tools/bin
```

make パラメーターの意味:

```
-C ld clean
```

サブディレクトリ ld にコンパイル生成されたプログラムをすべて削除します。

```
-C ld LIB_PATH=/usr/lib:/lib
```

サブディレクトリ `ld` の中に生成されるべきプログラムを再生成します。Makefile ファイル内の変数 `LIB_PATH` をコマンドラインから与えることで、一時的なツール類の設定を上書き指定し、適切なパスを指示します。この変数の設定はリンカーに対するデフォルトの検索パスを指定するものであり、次章に向けた準備となります。

本パッケージの詳細は 6.13.2. 「Binutils の構成」を参照してください。

5.10. GCC-4.8.1 - 2回め

GCC パッケージは C コンパイラーや C++ コンパイラーなどの GNU コンパイラーコレクションを提供します。

概算ビルド時間: 7.1 SBU
必要ディスク容量: 1.8 GB

5.10.1. GCC のインストール

第1回めの GCC のビルドでは、内部的なシステムヘッダーをインストールしています。その1つ `limits.h` は、これに対応づくシステムヘッダー `limits.h` を読み込みます。そのファイルは実際には `/tools/include/limits.h` となります。しかし1回めの GCC のビルド時には `/tools/include/limits.h` は存在しません。したがって GCC がインストールする内部ヘッダーは、部分的で自己完結した (self-contained) もののみとなり、システムヘッダーが持つ拡張機能は含まれません。一時的な `libc` を構築するならこれは正しかったのですが、この段階での GCC のビルドでは、内部ヘッダーが完全な形のものでなければなりません。完全な内部ヘッダーを生成するために、GCC ビルドシステムが通常行っている方法と同じようにするための、以下のコマンドを実行します。

```
cat gcc/limitx.h gcc/glimits.h gcc/limity.h > \
`dirname ${LFS_TGT-gcc -print-libgcc-file-name}`/include-fixed/limits.h
```

x86 マシンにおいてブートストラップビルドを行うと、コンパイラーフラグ `-fomit-frame-pointer` が設定されます。しかしブートストラップではないビルドの場合はデフォルトではこのフラグが無効化されてしまいます。ここで実現したいのは、ブートストラップビルドを行った場合とまったく同じコンパイラーをビルドすることです。そこで以下の `sed` コマンドにより、強制的に上のフラグを利用するようにします。

```
cp -v gcc/Makefile.in{,.tmp}
sed 's/^T_CFLAGS =$/& -fomit-frame-pointer/' gcc/Makefile.in.tmp \
> gcc/Makefile.in
```

もう一度、GCC のデフォルトのダイナミックリンカーの配置ディレクトリを、既にインストールされている `/tools` とします。

```
for file in \
$(find gcc/config -name linux64.h -o -name linux.h -o -name sysv4.h)
do
cp -uv $file{,.orig}
sed -e 's@/lib\ (64\)\? \ (32\)\? /ld@/tools&@' \
-e 's@/usr@/tools@' $file.orig > $file
echo '
#undef STANDARD_STARTFILE_PREFIX_1
#undef STANDARD_STARTFILE_PREFIX_2
#define STANDARD_STARTFILE_PREFIX_1 "/tools/lib/"
#define STANDARD_STARTFILE_PREFIX_2 "" >> $file
touch $file.orig
done
```

GCC を初めてビルドする際には GMP、MPFR、MPC の各パッケージを必要とします。tarball を解凍して、所定のディレクトリ名に移動させます。

```
tar -Jxf ../mpfr-3.1.2.tar.xz
mv -v mpfr-3.1.2 mpfr
tar -Jxf ../gmp-5.1.2.tar.xz
mv -v gmp-5.1.2 gmp
tar -zxf ../mpc-1.0.1.tar.gz
mv -v mpc-1.0.1 mpc
```

専用のディレクトリを再度生成します。

```
mkdir -v ../gcc-build
cd ../gcc-build
```

GCC のビルドに入る前に、デフォルトの最適化フラグを上書きするような環境変数の設定がないことを確認してください。

GCC をコンパイルするための準備をします。

```
CC=$LFS_TGT-gcc \
CXX=$LFS_TGT-g++ \
AR=$LFS_TGT-ar \
RANLIB=$LFS_TGT-ranlib \
../gcc-4.8.1/configure \
  --prefix=/tools \
  --with-local-prefix=/tools \
  --with-native-system-header-dir=/tools/include \
  --enable-clocale=gnu \
  --enable-shared \
  --enable-threads=posix \
  --enable-__cxa_atexit \
  --enable-languages=c,c++ \
  --disable-libstdcxx-pch \
  --disable-multilib \
  --disable-bootstrap \
  --disable-libgomp \
  --with-mpfr-include=$(pwd)/../gcc-4.8.1/mpfr/src \
  --with-mpfr-lib=$(pwd)/mpfr/src/.libs
```

configure オプションの意味:

`--enable-clocale=gnu`

このオプションはあらゆる状況において C++ ライブラリに対するロケールモデルが正しく設定されるようにします。configure スクリプト実行時に `de_DE` ロケールがインストール済みであることが分かれば、正しい GNU ロケールモデルが設定されます。しかし `de_DE` ロケールがインストールされていなかったら、誤った汎用ロケールモデルが設定されてしまうため、アプリケーションバイナリインターフェース (Application Binary Interface; ABI) とは非互換の C++ ライブラリが生成されてしまう可能性があります。

`--enable-threads=posix`

マルチスレッドコードを扱う C++ の例外処理を有効にします。

`--enable-__cxa_atexit`

このオプションは `atexit` を使用せず `__cxa_atexit` の使用を有効にします。これによりローカルなスタティックオブジェクトおよびグローバルオブジェクトに対する C++ デストラクターを登録します。このオプションは、標準に完全準拠したデストラクタ実装のために必要です。またこれは C++ ABI に影響するものであり C++ 共有ライブラリ、C++ プログラムを作り出し、他の Linux ディストリビューションとの互換性を実現します。

`--enable-languages=c,c++`

C と C++ の両コンパイラーを生成することを指示します。

`--disable-libstdcxx-pch`

`libstdc++` に対してプリコンパイルヘッダー (pre-compiled header; PCH) をビルドしないように指示します。これを含めるとサイズが増えることになり、そもそも利用する必要がありません。

`--disable-bootstrap`

GCC のネイティブビルドを行うには、デフォルトでは "ブートストラップ" ビルドを行いません。これは単に GCC をコンパイルするのではなく、数回のコンパイルを繰り返します。つまり一回めにビルドされたプログラムを使って二回め、三回めのコンパイルを行うものです。二回め、三回めとコンパイルを繰り返すのは、これによって自分自身を再生成して完璧なものを作り出すためです。このことによってコンパイルが正確に行われたことを暗に示すことにもなります。しかし LFS のビルドでは、何度もブートストラップを行う必要のない、手堅い (solid) コンパイラーを作り出します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

最後にシンボリックリンクを作成します。プログラムやスクリプトの中には `gcc` ではなく `cc` を用いるものが結構あります。シンボリックリンクを作ることで各種のプログラムを汎用的にすることができ、通常 GNU C コンパイラーがインストールされていない多くの UNIX システムでも利用できるものになります。 `cc` を利用することにすれば、システム管理者がどの C コンパイラーをインストールすべきかを判断する必要がなくなります。

```
ln -sv gcc /tools/bin/cc
```



注意

この時点で、構築したツールチェーンの基本的な（コンパイルやリンクなどの）機能が正しく動作していることを確認する必要があります。健全性検査（sanity check）を行うために以下を実行してください。

```
echo 'main(){}' > dummy.c
cc dummy.c
readelf -l a.out | grep ': /tools'
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、最後のコマンドから出力される結果は以下のようになるはずです。

```
[Requesting program interpreter: /tools/lib/ld-linux.so.2]
```

ここでダイナミックリンカーのディレクトリが `/tools/lib` であることを確認してください。あるいは 64 ビットマシンであれば `/tools/lib64` であることを確認してください。

コマンドの出力結果が上と異なっていたり、あるいは何も出力されなかった場合は、何かがおかしいことを意味します。どこに問題があるのか調査、再試行を行って解消してください。解決せずにこの先に進まないでください。cc ではなく gcc を使って再度健全性検査を行ってみてください。これで解決したなら `/tools/bin/cc` のシンボリックリンクが正しくないということです。正しく生成し直してください。また環境変数 `PATH` が正しいかどうか確認してください。echo `$PATH` を実行して、実行パスリストの先頭が `/tools/bin` であるかどうか確認します。PATH が間違っていたなら、実はあなたは `lfs` ユーザーでログインしていないのかもしれませんが 4.4. 「環境設定」での作業に間違いがあったのかもしれませんが。

すべてが終了したらテストファイルを削除します。

```
rm -v dummy.c a.out
```

本パッケージの詳細は 6.17.2. 「GCC の構成」を参照してください。

5.11. Tcl-8.6.0

Tcl パッケージはツールコマンド言語 (Tool Command Language) を提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 33 MB

5.11.1. Tcl のインストール

本パッケージとこれに続く三つのパッケージ (Expect と DejaGNU と Check) は、GCC および Binutils などにおけるテストスイートを実行するのに必要となるためインストールするものです。テスト目的のためにこれら四つのパッケージをインストールするというのは、少々大げさなことかもしれません。ただ本質的ではないことであっても、重要なツール類が正常に動作するという確認が得られれば安心できます。本章ではテストスイートを実行することは必須ではないため、実行しないものとしていますが、それら四つのパッケージは第6章で行うテストのために必要となるものです。

縮退テスト (regression test) において正規表現の処理に必要な容量を増やしておきます。

```
sed -i s/500/5000/ generic/regc_nfa.c
```

Tcl をコンパイルするための準備をします。

```
cd unix
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをビルドします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するならば、以下を実行します。

```
TZ=UTC make test
```

Tcl のテストスイートは、特定のホスト環境において失敗することがありますが、その原因はよく分かっていません。したがってテストスイートの失敗は驚くことではなく、さして重大なことではありません。TZ=UTC はタイムゾーンを協定世界時間 (Coordinated Universal Time; UTC) あるいはグリニッジ標準時間としても知られる時間に設定します。ただしこれはテストスイートを実行する時だけの設定です。こうしておけば時刻に関するテストが正しく処理されます。環境変数 TZ については第7章にて詳しく説明しています。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

インストールされたライブラリを書き込み可能にします。こうすることで後にデバッグシンボルを削除できるようにします。

```
chmod -v u+w /tools/lib/libtcl8.6.so
```

Tcl のヘッダーファイルをインストールします。これらは次にビルドする Expect が必要とするファイルです。

```
make install-private-headers
```

必要となるシンボリックリンクを生成します。

```
ln -sv tclsh8.6 /tools/bin/tclsh
```

5.11.2. Tcl の構成

インストールプログラム: tclsh (tclsh8.6 へのリンク), tclsh8.6
インストールライブラリ: libtcl8.6.so, libtclstub8.6.a

概略説明

tclsh8.6	Tcl コマンドシェル
tclsh	tclsh8.6 へのリンク
libtcl8.6.so	Tcl ライブラリ

libtclstub8.6.a Tcl スタブライブラリ

5.12. Expect-5.45

Expect パッケージは、他のプログラムと対話的に処理を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 4.4 MB

5.12.1. Expect のインストール

Expect の `configure` スクリプトは、ホストシステムの `/usr/local/bin/stty` を利用しようとしませんが、`/bin/stty` を利用するように修正します。これを行うのは、ここで構築しているテストスイートのツール類を、ツールチェーンの最終構築まで正常動作してもらうために必要となるからです。

```
cp -v configure{,.orig}
sed 's:/usr/local/bin:/bin:' configure.orig > configure
```

Expect をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools --with-tcl=/tools/lib \
--with-tclinclude=/tools/include
```

`configure` オプションの意味:

`--with-tcl=/tools/lib`

Tcl のインストールモジュールを、ホストシステムに存在しているツール類の場所からではなく、一時的ツールを配置したディレクトリから探し出すことを指示します。

`--with-tclinclude=/tools/include`

Tcl の内部ヘッダーファイルを探し出す場所を指定します。 `configure` は自動的に Tcl ヘッダーファイルの場所を探し出さないため、これを明示します。

パッケージをビルドします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するならば、以下を実行します。

```
make test
```

Expect のテストスイートは、特定のホスト環境において失敗することがありますが、その原因はよく分かっています。したがってテストスイートの失敗は驚くことではなく、さして重大なことではありません。

パッケージをインストールします。

```
make SCRIPTS="" install
```

`make` パラメーターの意味:

`SCRIPTS=""`

Expect の補助的なスクリプトはインストールしないことを指示します。これらは必要ありません。

5.12.2. Expect の構成

インストールプログラム: `expect`
インストールライブラリ: `libexpect-5.45.a`

概略説明

`expect` スクリプトを通じて他の対話的なプログラムとの処理を行います。
`libexpect-5.45.a` Tcl 拡張機能を通じて、あるいは (Tcl が無い場合に) C や C++ から直接、Expect とのやりとりを行う関数を提供します。

5.13. DejaGNU-1.5.1

DejaGNU パッケージは、他のプログラムをテストするフレームワークを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 4.1 MB

5.13.1. DejaGNU のインストール

DejaGNU をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをビルドしてインストールします。

```
make install
```

コンパイル結果をテストするなら以下を実行します。

```
make check
```

5.13.2. DejaGNU の構成

インストールプログラム: runtest

概略説明

runtest expect シェルの適正な場所を特定し DejaGNU を実行するためのラッパースクリプト。

5.14. Check-0.9.10

Check は C 言語に対してのユニットテストのフレームワークです。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 6.9 MB

5.14.1. Check のインストール

Check をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをビルドします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するならば、以下を実行します。

```
make check
```

Check のテストスイートには比較的時間を要する点に注意してください。(4 SBU ほど)

パッケージをインストールします。

```
make install
```

5.14.2. Check の構成

インストールプログラム: checkmk
インストールライブラリ: libcheck.{a,so}

概略説明

checkmk Check ユニットテストフレームワークにて利用される、C 言語ユニットテストを生成するための Awk スクリプト。
libcheck.{a,so} テストプログラムから Check を呼び出すための関数を提供します。

5.15. Ncurses-5.9

Ncurses パッケージは、端末に依存しない、文字ベースのスクリーン制御を行うライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.5 SBU
必要ディスク容量: 35 MB

5.15.1. Ncurses のインストール

Ncurses をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools --with-shared \  
--without-debug --without-ada --enable-overwrite
```

configure オプションの意味

--without-ada

このオプションは Ncurses に対して Ada コンパイラーのサポート機能をビルドしないよう指示します。この機能はホストシステムでは提供されているかもしれませんが、chroot 環境に入ってしまうと利用できなくなります。

--enable-overwrite

このオプションは Ncurses のヘッダーファイルを `/tools/include/ncurses` ではなく `/tools/include` にインストールすることを指示します。これは他のパッケージが Ncurses のヘッダーファイルを正しく見つけ出せるようにするためです。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにはテストスイートがありますが、インストールした後に実行しなければなりません。テストスイートのためのファイル群はサブディレクトリ `test/` 以下に残っています。詳しいことはそのディレクトリ内にある `README` ファイルを参照してください。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.21.2. 「Ncurses の構成」を参照してください。

5.16. Bash-4.2

Bash は Bourne-Again SHell を提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 48 MB

5.16.1. Bash のインストール

まずはアップストリームにより提供されている以下のパッチを適用し、種々のバグを修正します。

```
patch -Np1 -i ../bash-4.2-fixes-12.patch
```

Bash をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools --without-bash-malloc
```

configure オプションの意味:

--without-bash-malloc

このオプションは Bash のメモリ割り当て関数 (malloc) を利用しないことを指示します。この関数はセグメンテーションフォールトが発生する可能性があるものとして知られています。このオプションをオフにすることで、Bash は Glibc が提供する malloc 関数を用いるものとなり、そちらの方が安定しています。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make tests
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

他のプログラム類がシェルとして sh を用いるものがあるためリンクを作ります。

```
ln -sv bash /tools/bin/sh
```

本パッケージの詳細は 6.34.2. 「Bash の構成」を参照してください。

5.17. Bzip2-1.0.6

Bzip2 パッケージはファイル圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。テキストファイルであれば、これまでよく用いられてきた gzip に比べて bzip2 の方が圧縮率の高いファイルを生成できます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 5.7 MB

5.17.1. Bzip2 のインストール

Bzip2 パッケージには `configure` がありません。コンパイルおよびテストを行うには以下を実行します。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make PREFIX=/tools install
```

本パッケージの詳細は 6.19.2. 「Bzip2 の構成」を参照してください。

5.18. Coreutils-8.21

Coreutils パッケージはシステムの基本的な特性を表示したり設定したりするためのユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.8 SBU
必要ディスク容量: 133 MB

5.18.1. Coreutils のインストール

Coreutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools --enable-install-program=hostname
```

configure オプションの意味:

`--enable-install-program=hostname`

このオプションは `hostname` プログラムを生成しインストールすることを指示します。このプログラムはデフォルトでは生成されません。そしてこれは Perl のテストスイートを実行するのに必要となります。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make RUN_EXPENSIVE_TESTS=yes check
```

パラメーター `RUN_EXPENSIVE_TESTS=yes` は、テストスイートの実行にあたって (CPU パワーとメモリ使用量の観点で) 比較的負荷の高いテストを追加で実行することを指示します。特定のプラットフォームに対してのテスト確認となりますが、一般に Linux 上において支障はありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.27.2. 「Coreutils の構成」を参照してください。

5.19. Diffutils-3.3

Diffutils パッケージはファイルやディレクトリの差分を表示するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 8.5 MB

5.19.1. Diffutils のインストール

Diffutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.42.2. 「Diffutils の構成」を参照してください。

5.20. File-5.14

File パッケージは、指定されたファイルの種類を決定するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 12.4 MB

5.20.1. File のインストール

File をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.12.2. 「File の構成」を参照してください。

5.21. Findutils-4.4.2

Findutils パッケージはファイル検索を行うプログラムを提供します。このプログラムはディレクトリツリーを再帰的に検索したり、データベースの生成、保守、検索を行います。（データベースによる検索は再帰的検索に比べて処理速度は速いものですが、データベースが最新のものに更新されていない場合は信頼できない結果となります。）

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 27 MB

5.21.1. Findutils のインストール

Findutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.44.2. 「Findutils の構成」を参照してください。

5.22. Gawk-4.1.0

Gawk パッケージはテキストファイルを操作するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 30 MB

5.22.1. Gawk のインストール

Gawk をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.43.2. 「Gawk の構成」を参照してください。

5.23. Gettext-0.18.3

Gettext パッケージは国際化を行うユーティリティを提供します。各種プログラムに対して NLS (Native Language Support) を含めてコンパイルすることができます。つまり各言語による出力メッセージが得られることになります。

概算ビルド時間: 0.6 SBU
必要ディスク容量: 119 MB

5.23.1. Gettext のインストール

ここで構築している一時的なツールに際して、Gettext パッケージからは1つのバイナリをビルドしてインストールするだけで十分です。

Gettext をコンパイルするための準備をします。

```
cd gettext-tools
EMACS="no" ./configure --prefix=/tools --disable-shared
```

configure オプションの意味:

EMACS="no"

特定のホストにて configure スクリプトが Emacs Lisp ファイルを見出せずにハングすることがあるため、これを回避します。

--disable-shared

Gettext の共有ライブラリはこの時点では必要でないため、それらをビルドしないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make -C gnulib-lib
make -C src msgfmt
```

1つのバイナリしかコンパイルしなかったため、その他のライブラリをコンパイルしない限り、テストスイートを成功させることはできません。したがってテストスイートをこの段階で実行することはお勧めしません。

msgfmt プログラムをインストールします。

```
cp -v src/msgfmt /tools/bin
```

本パッケージの詳細は 6.45.2. 「Gettext の構成」を参照してください。

5.24. Grep-2.14

Grep パッケージはファイル内の検索を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 21 MB

5.24.1. Grep のインストール

Grep をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.32.2. 「Grep の構成」を参照してください。

5.25. Gzip-1.6

Gzip パッケージはファイルの圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 10 MB

5.25.1. Gzip のインストール

Gzip をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.50.2. 「Gzip の構成」を参照してください。

5.26. M4-1.4.16

M4 パッケージはマクロプロセッサを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 16.6 MB

5.26.1. M4 のインストール

本パッケージと Glibc-2.18 との互換性がないため、これを修正します。

```
sed -i -e '/gets is a/d' lib/stdio.in.h
```

M4 をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.29.2. 「M4 の構成」を参照してください。

5.27. Make-3.82

Make パッケージは、パッケージ類をコンパイルするためのプログラムを提供します。

概算ビルド時間:	0.1 SBU
必要ディスク容量:	11.2 MB

5.27.1. Make のインストール

Make をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.55.2. 「Make の構成」を参照してください。

5.28. Patch-2.7.1

Patch パッケージは「パッチ」ファイルを適用することにより、ファイルの修正、生成を行うプログラムを提供します。「パッチ」ファイルは diff プログラムにより生成されます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 3.4 MB

5.28.1. Patch のインストール

Patch をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.57.2. 「Patch の構成」を参照してください。

5.29. Perl-5.18.1

Perl パッケージは Perl 言語 (Practical Extraction and Report Language) を提供します。

概算ビルド時間: 1.6 SBU
必要ディスク容量: 235 MB

5.29.1. Perl のインストール

以下のパッチを適用します。これは C ライブラリに対してのハードコーディングされたパスに対応するものです。

```
patch -Np1 -i ../perl-5.18.1-libc-1.patch
```

Perl をコンパイルするための準備をします。

```
sh Configure -des -Dprefix=/tools
```

パッケージをビルドします。

```
make
```

Perl にはテストスイートがありますが、次章にてインストールする際に実施するのがよいでしょう。

ユーティリティプログラムやライブラリの中で、特定のものはこの時点でインストールする必要があります。

```
cp -v perl cpan/podlators/pod2man /tools/bin  
mkdir -pv /tools/lib/perl5/5.18.1  
cp -Rv lib/* /tools/lib/perl5/5.18.1
```

本パッケージの詳細は 6.39.2. 「Perl の構成」を参照してください。

5.30. Sed-4.2.2

Sed パッケージはストリームエディターを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 10.5 MB

5.30.1. Sed のインストール

Sed をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.18.2. 「Sed の構成」を参照してください。

5.31. Tar-1.26

Tar パッケージはアーカイブプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 20.6 MB

5.31.1. Tar のインストール

本パッケージと Glibc-2.18 との互換性がないため、これを修正します。

```
sed -i -e '/gets is a/d' gnu/stdio.in.h
```

Tar をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.60.2. 「Tar の構成」を参照してください。

5.32. Texinfo-5.1

Texinfo パッケージは info ページへの読み書き、変換を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 94 MB

5.32.1. Texinfo のインストール

Texinfo をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.61.2. 「Texinfo の構成」を参照してください。

5.33. Xz-5.0.5

Xz パッケージは、ファイルの圧縮、伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。これは lzma フォーマットおよび新しい xz 圧縮フォーマットを取り扱います。xz コマンドによりテキストファイルを圧縮すると、従来の gzip コマンドや bzip2 コマンドに比べて、高い圧縮率を実現できます。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 16.3 MB

5.33.1. Xz-Uutils のインストール

Xz をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。しかしテストスイートを実行するならば、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.47.2. 「Xz の構成」を参照してください。

5.34. ストリップ

本節に示す作業は必須ではありません。ただ LFS パーティションの容量が比較的少ない場合には、不要なものは削除することを覚えておきましょう。ここまでにビルドしてきた実行ファイルやライブラリには、合計で 70 MB ほどの不要なデバッグシンボル情報が含まれています。それらを取り除くには以下を実行します。

```
strip --strip-debug /tools/lib/*
strip --strip-unneeded /tools/{,s}bin/*
```

上のコマンド実行ではいくつものファイルがフォーマット不明となって処理がスキップされます。それらはたいてい、バイナリではなくスクリプトであることを示しています。

`--strip-unneeded` パラメーターは絶対にライブラリに対して用いないでください。もし用いるとスタティックライブラリが破壊され、ツールチェーンを構成するパッケージをすべて作り直さなければならなくなります。

さらに容量を節約するためにドキュメント類を削除します。

```
rm -rf /tools/{,share}/{info,man,doc}
```

この時点において環境変数 `$LFS` の配下には最低でも 3 GB の空き容量が必要になります。これは次のフェーズにて `Glibc` と `Gcc` をビルドしインストールするためです。 `Glibc` のビルドとインストールができさえすれば、残りのものもすべてビルド、インストールができます。

5.35. 所有者の変更



注記

本書のこれ以降で実行するコマンドはすべて `root` ユーザーでログインして実行します。もう `lfs` ユーザーは不要です。 `root` ユーザーの環境にて環境変数 `$LFS` がセットされていることを今一度確認してください。

`$LFS/tools` ディレクトリの所有者は今は `lfs` ユーザーであり、これはホストシステム上に存在するユーザーです。この `$LFS/tools` ディレクトリをこのままにしておくということは、そこにあるファイル群が、存在しないアカウントに対するユーザーIDによって所有される形を生み出すことになります。これは危険なことです。後にユーザーアカウントが生成され同一のユーザーIDを持ったとすると `$LFS/tools` の所有者となってしまう、そこにあるファイルすべてを所有することになって、悪意のある操作に利用されてしまいます。

この問題を解消するためには、新しく作り出される LFS システムに `lfs` ユーザーを作成することが考えられます。その場合には同一のユーザーID、グループIDとなるように作ります。もっと良い方法があります。 `$LFS/tools` ディレクトリの所有者を `root` ユーザーにすることです。以下のコマンドによりこれを実現します。

```
chown -R root:root $LFS/tools
```

`$LFS/tools` ディレクトリは LFS システムの構築作業を終えれば削除することができます。一方これを残しておいて本書と同一バージョンの LFS システムを新たに構築する際に利用することもできます。 `$LFS/tools` ディレクトリをどのように残すかは読者の皆さんの好みに応じて取り決めてください。



注意

この先の LFS システム構築に向けて一時的なツール類を残しておきたい場合はこの時点でバックアップを取っておくのが良いでしょう。第6章で実施する作業を通じて、今存在している一時的ツールは変更が加えられますので、将来、別のビルド作業を行う際には使えないものとなります。

第III部 LFSシステムの構築

第6章 基本的なソフトウェアのインストール

6.1. はじめに

この章ではビルド環境に入って正式な LFS システムの構築作業を始めます。chroot によって一時的なミニ Linux システムへ移行し、準備作業を行った上でパッケージ類のインストールを行っていきます。

パッケージ類のインストール作業は簡単なものです。インストール手順の説明は、たいいては手短かに一般的なもので済ませることもできます。ただ誤りの可能性を極力減らすために、個々のインストール手順の説明は十分に行うことにします。Linux システムがどのようにして動作しているかを学ぶには、個々のパッケージが何のために用いられていて、なぜユーザー（あるいはシステム）がそれを必要としているのかを知ることが重要になります。

コンパイラーには最適化オプションがありますが、これを利用することはお勧めしません。コンパイラーの最適化を用いればプログラムが若干速くなる場合もありますが、そもそもコンパイルが出来なかつたり、プログラムの実行時に問題が発生したりする場合があります。もしコンパイラーの最適化によってパッケージビルドが出来なかつたら、最適化をなしにしてもう一度コンパイルすることで解決するかどうかを確認してください。最適化を行ってパッケージがコンパイル出来たととしても、コードとビルドツールの複雑な関連に起因してコンパイルが適切に行われないうリスクをはらんでいます。また `-march` オプションや `-mtune` オプションにて指定する値は、本書には明示しておらずテストも行っていませんので注意してください。これらはツールチェーンパッケージ (Binutils, GCC, Glibc) に影響を及ぼすことがあります。最適化オプションを用いることによって得られるものがあつたとしても、それ以上にリスクを伴うことがしばしばです。初めて LFS 構築を手がける方は、最適化オプションをなしにすることをお勧めします。これ以降にビルドしていくツール類は、それでも十分に速く安定して動作するはずですが。

本章にてインストールしていくパッケージ類のビルド順は、必ず本書どおりに行ってください。プログラムはすべて `/tools` ディレクトリを直接参照するような形でビルドしてはなりません。また同じ理由でパッケージ類を同時並行でビルドしないでください。特にデュアル CPU マシンにおいて同時にビルドしていくと時間の節約を図ることができそうですが `/tools` ディレクトリを直接参照するプログラムが出来上がつてしまい、このディレクトリが存在しなくなった時にはプログラムが動作しないこととなります。

各ページではインストール手順の説明よりも前に、パッケージの内容やそこに何が含まれているかを簡単に説明し、ビルドにどれくらいの時間を要するか、ビルド時に必要となるディスク容量はどれくらいかを示しています。またインストール手順の最後には、パッケージがインストールするプログラムやライブラリの一覧を示し、それらがどのようなものかを簡単に説明しています。



注記

本章にて導入するパッケージにおいて SBU 値と必要ディスク容量には、テストスイート実施による時間や容量をすべて含んでいます。

6.2. 仮想カーネルファイルシステムの準備

カーネルが取り扱うさまざまなファイルシステムは、カーネルとの間でやり取りが行われます。これらのファイルシステムは仮想的なものであり、ディスクを消費するものではありません。ファイルシステムの内容はメモリ上に保持されます。

ファイルシステムをマウントするディレクトリを以下のようにして生成します。

```
mkdir -v $LFS/{dev,proc,sys}
```

6.2.1. 初期デバイスノードの生成

カーネルがシステムを起動する際には、いくつかのデバイスノードの存在が必要です。特に `console` と `null` です。これらのデバイスノードはハードディスク上に生成されていなければなりません。udev が起動し、また Linux が起動パラメーター `init=/bin/bash` によって起動されれば利用可能となります。そこで以下のコマンドによりデバイスノードを生成します。

```
mknod -m 600 $LFS/dev/console c 5 1
mknod -m 666 $LFS/dev/null c 1 3
```

6.2.2. /dev のマウントと有効化

各デバイスを `/dev` に設定する方法としては、`/dev` ディレクトリに対して `tmpfs` のような仮想ファイルシステムをマウントすることが推奨されます。こうすることで各デバイスが検出されアクセスされる際に、その仮想ファイルシステム上にて動的にデバイスを生成する形を取ることができます。このデバイス生成処理は一般的にはシステム起動

時に Udev によって行われます。今構築中のシステムにはまだ Udev を導入していませんし、再起動も行っていないので /dev のマウントと有効化は手動で行ないます。これはホストシステムの /dev ディレクトリに対して、バインドマウントを行うことで実現します。バインドマウント (bind mount) は特殊なマウント方法の一つで、ディレクトリのミラーを生成したり、他のディレクトリへのマウントポイントを生成したりします。以下のコマンドにより実現します。

```
mount -v --bind /dev $LFS/dev
```

6.2.3. 仮想カーネルファイルシステムのマウント

残りの仮想カーネルファイルシステムを以下のようにしてマウントします。

```
mount -vt devpts devpts $LFS/dev/pts -o gid=5,mode=620
mount -vt proc proc $LFS/proc
mount -vt sysfs sysfs $LFS/sys
```

devpts に対するマウントオプションの意味

gid=5

このオプションは、devpts により生成されるデバイスノードを、グループID が 5 となるようにするものです。この ID は、この後に tty グループにおいて利用します。ここではグループ名ではなくグループ ID を用いるものとしています。この理由は、ホストシステムが tty グループに対して異なる ID を利用していることがあるためです。

mode=0620

このオプションは、devpts により生成されるデバイスノードのモードを 0620 にします。(所有ユーザーが読み書き可、グループが書き込み可) 前のオプションとともにこのオプションを指定することによって、devpts が生成するデバイスノードが grantpt() の要求を満たすようにします。これはつまり、Glibc の ヘルパーコマンド pt_chown (デフォルトではインストールされない) が必要ないことを意味します。

ホストシステムによっては /dev/shm が /run/shm へのシンボリックリンクになっているものがあります。chroot 環境内では、ホストファイルシステムとは別のファイルシステムとして、テンポラリファイルシステムをマウントしておく必要があります。

```
if [ -h $LFS/dev/shm ]; then
    link=$(readlink $LFS/dev/shm)
    mkdir -p $LFS/$link
    mount -vt tmpfs shm $LFS/$link
    unset link
else
    mount -vt tmpfs shm $LFS/dev/shm
fi
```

6.3. パッケージ管理

パッケージ管理についての説明を LFS ブックに加えて欲しいとの要望をよく頂きます。パッケージ管理ツールがあれば、インストールされるファイル類を管理し、パッケージの削除やアップグレードを容易に実現できます。パッケージ管理ツールでは、バイナリファイルやライブラリファイルだけでなく、設定ファイル類のインストールも取り扱います。パッケージ管理ツールをどうしたら・・・いえいえ本節は特定のパッケージ管理ツールを説明するわけではなく、その利用を勧めるものでもありません。もっと広い意味で、管理手法にはどういったものがあり、どのように動作するかを説明します。あなたにとって最適なパッケージ管理がこの中にあるかもしれません。あるいはそれらをいくつか組み合わせて実施することになるかもしれません。本節ではパッケージのアップグレードを行う際に発生する問題についても触れます。

LFS や BLFS において、パッケージ管理ツールについて触れていない理由には以下のものがあります。

- 本書の目的は Linux システムがいかに構築されているかを学ぶことです。パッケージ管理はその目的からはずれてしまいます。
- パッケージ管理についてはいくつもの方法があり、それらには一長一短があります。ユーザーに対して満足のいくものを選び出すのは困難です。

ヒントプロジェクト (Hints Project) ページに、パッケージ管理についての情報が示されています。それらが望むものかどうか確認してみてください。

6.3.1. アップグレードに関する問題

パッケージ管理ツールがあれば、各種ソフトウェアの最新版がリリースされた際に容易にアップグレードができます。全般に LFS ブックや BLFS ブックに示されている作業手順に従えば、新しいバージョンへのアップグレードを行っていくことはできます。以下ではパッケージをアップグレードする際に注意すべき点、特に稼動中のシステムに対して実施するポイントについて説明します。

- ツールチェーン (Glibc、GCC、Binutils) のいずれかについて、マイナーバージョンをアップグレードする必要がある場合は、LFS を再構築するのが無難です。この場合、すべてのパッケージの依存関係を考慮して順番に作り直せば実現できるはずですが、これはあまりお勧めしません。例えば glibc-2.2.x を glibc-2.3.x にアップグレードする必要がある場合は、再構築するのが無難です。マイクロバージョンをアップグレードする場合は、もっと単純にそのパッケージをインストールし直すだけで動作すると思いますが、保証はありません。例えば glibc-2.3.4 を glibc-2.3.5 にアップグレードする場合、普通は何も問題ないでしょう。
- 共有ライブラリを提供しているパッケージをアップデートする場合で、そのライブラリの名前が変更になった場合は、そのライブラリを動的にリンクしているすべてのパッケージは、新しいライブラリにリンクされるように再コンパイルを行う必要があります。(パッケージのバージョンとライブラリ名との間には相関関係はありません。) 例えば foo-1.2.3 というパッケージが共有ライブラリ libfoo.so.1 をインストールするものであるとします。そして今、新しいバージョン foo-1.2.4 にアップグレードし、共有ライブラリ libfoo.so.2 をインストールするとします。この例では libfoo.so.1 を動的にリンクしているパッケージがあったとすると、それらはすべて libfoo.so.2 に対してリンクするよう再コンパイルしなければなりません。古いライブラリに依存しているパッケージすべてを再コンパイルするまでは、そのライブラリを削除するべきではありません。

6.3.2. パッケージ管理手法

以下に一般的なパッケージ管理手法について示します。パッケージ管理マネージャーを用いる前に、さまざまな方法を検討し、特にそれぞれの欠点も確認してください。

6.3.2.1. すべては頭の中で

そうです。これもパッケージ管理のやり方の一つです。いろいろなパッケージに精通していて、どんなファイルがインストールされるか分かっている人もいます。そんな人はパッケージ管理ツールを必要としません。あるいはパッケージが更新された際に、システム全体を再構築しようと考えている人なら、やはりパッケージ管理ツールを必要としません。

6.3.2.2. 異なるディレクトリへのインストール

これは最も単純なパッケージ管理のやり方であり、パッケージ管理のためのツールを用いる必要はありません。個々のパッケージを個別のディレクトリにインストールする方法です。例えば foo-1.1 というパッケージを /usr/pkg/foo-1.1 ディレクトリにインストールし、この /usr/pkg/foo-1.1 に対するシンボリックリンク /usr/pkg/foo を作成します。このパッケージの新しいバージョン foo-1.2 をインストールする際には /usr/pkg/foo-1.2 ディレクトリにインストールした上で、先ほどのシンボリックリンクをこのディレクトリを指し示すように置き換えます。

PATH、LD_LIBRARY_PATH、MANPATH、INFOPATH、CPPFLAGS といった環境変数に対しては /usr/pkg/foo ディレクトリを加える必要があるかもしれません。もっともパッケージによっては、このやり方では管理できないものもあります。

6.3.2.3. シンボリックリンク方式による管理

これは一つ前に示したパッケージ管理テクニックの応用です。各パッケージは同様にインストールします。ただし先ほどのようなシンボリックリンクを生成するのではなく /usr ディレクトリ階層の中に各ファイルのシンボリックリンクを生成します。この方法であれば環境変数を追加設定する必要がなくなります。シンボリックリンクを自動生成することもできますが、パッケージ管理ツールの中にはこの手法を使って構築されているものもあります。よく知られているものとして Stow、Epkg、Graft、Depot があります。

インストール時には意図的な指示が必要です。パッケージにとっては /usr にインストールすることが指定されたものとなりますが、実際には /usr/pkg 配下にインストールされるわけです。このインストール方法は単純なものではありません。例えば今 libfoo-1.1 というパッケージをインストールするものとします。以下のようなコマンドでは、このパッケージを正しくインストールできません。

```
./configure --prefix=/usr/pkg/libfoo/1.1
make
make install
```

インストール自体は動作しますが、このパッケージに依存している他のパッケージは、期待どおりには libfoo を正しくリンクしません。例えば libfoo をリンクするパッケージをコンパイルする際には /usr/lib/libfoo.so.1 がリンクされると思うかもしれませんが、実際には /usr/pkg/libfoo/1.1/lib/libfoo.so.1 がリンクされることになります。正しくリンクするためには DESTDIR 変数を使って、パッケージのインストールをうまく仕組む必要があります。この方法は以下のようにして行います。

```
./configure --prefix=/usr
make
make DESTDIR=/usr/pkg/libfoo/1.1 install
```

多くのパッケージは、たいいてはこの手法をサポートしていますが、そうでないものもあります。この手法を取り入れていないパッケージに対しては、手作業にてインストールすることが必要になります。またはそういった問題を抱えるパッケージであれば /opt ディレクトリにインストールの方が容易なことかもしれません。

6.3.2.4. タイムスタンプによる管理方法

この方法ではパッケージをインストールするにあたって、あるファイルにタイムスタンプが記されます。インストールの直後に find コマンドを適当なオプション指定により用いることで、インストールされるすべてのファイルのログが生成されます。これはタイムスタンプファイルの生成の後に行われます。この方法を用いたパッケージ管理ツールとして install-log があります。

この方法はシンプルである利点がありますが、以下の二つの欠点があります。インストールの際に、いずれかのファイルのタイムスタンプが現在時刻でなかった場合、そういったファイルはパッケージ管理ツールが正しく制御できません。またこの方法は一つのパッケージだけが、その時にインストールされることを前提とします。例えば二つのパッケージが二つの異なる端末から同時にインストールされるような場合は、ログファイルが適切に生成されません。

6.3.2.5. インストールスクリプトの追跡管理

この方法はインストールスクリプトが実行するコマンドを記録するものです。これには以下の二種類の手法があります。

環境変数 LD_PRELOAD を使えば、インストール前にあらかじめロードされるライブラリを定めることができます。パッケージのインストール中には cp、install、mv など、さまざまな実行モジュールにそのライブラリをリンクさせ、ファイルシステムを変更するようなシステムコールを監視することで、そのライブラリがパッケージを追跡管理できるようになります。この方法を実現するためには、動的リンクする実行モジュールはすべて suid ビット、sgid ビットがオフでなければなりません。事前にライブラリをロードしておくこと、インストール中に予期しない副作用が発生するかもしれません。したがって、ある程度のテスト確認を行って、パッケージ管理ツールが不具合を引き起こさないこと、しかるべきファイルの記録を取っておくことが必要とされます。

二つめの方法は strace を用いるものです。これはインストールスクリプトの実行中に発生するシステムコールを記録するものです。

6.3.2.6. パッケージのアーカイブを生成する方法

この方法では、シンボリックリンク方式によるパッケージ管理にて説明したのと同じように、パッケージが個別のディレクトリにインストールされます。インストールされた後には、インストールファイルを使ってアーカイブが生成されます。このアーカイブはこの後に、ローカルPCへのインストールに用いられ、他のPCのインストールに利用することもできます。

商用ディストリビューションが採用しているパッケージ管理ツールは、ほとんどがこの方法によるものです。この方法に従ったパッケージ管理ツールの例に RPM があります。(これは Linux Standard Base Specification が規定しています。) また pkg-utils、Debian の apt、Gentoo の Portage システムがあります。このパッケージ管理手法を LFS システムに適用するヒント情報が <http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/fakeroot.txt> にあります。

パッケージファイルにその依存パッケージ情報まで含めてアーカイブ生成することは、非常に複雑となり LFS の範疇を超えるものです。

Slackware は、パッケージアーカイブに対して tar ベースのシステムを利用しています。他のパッケージ管理ツールはパッケージの依存性を取り扱いますが、このシステムは意図的にこれを行っていません。Slackware のパッケージ管理に関する詳細は <http://www.slackbook.org/html/package-management.html> を参照してください。

6.3.2.7. ユーザー情報をベースとする管理方法

この手法は LFS に固有のものであり Matthias Benkmann により考案されました。ヒントプロジェクト (Hints Project) から入手することが出来ます。考え方としては、各パッケージを個々のユーザーが共有ディレクトリにインストールします。パッケージに属するファイル類は、ユーザーIDを確認することで容易に特定出来るような

ります。この手法の特徴や短所については、複雑な話となるため本節では説明しません。詳しくは http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/more_control_and_pkg_man.txt に示されているヒントを参照してください。

6.3.3. 他システムへの LFS の配置

LFS システムの利点の一つとして、どのファイルもディスク上のどこに位置していても構わないことです。他のコンピュータに対してビルドした LFS の複製を作ろうとするなら、それが同等のアーキテクチャーであれば容易に実現できます。つまり tar コマンドを使って LFS のルートディレクトリを含むパーティション (LFS の基本的なビルドの場合、非圧縮で 250MB 程度) をまとめ、これをネットワーク転送か、あるいは CD-ROM を通じて新しいシステムにコピーし、伸張 (解凍) するだけです。この場合でも、設定ファイルはいくらか変更することが必要です。変更が必要となる設定ファイルは以下のとおりです。/etc/hosts, /etc/fstab, /etc/passwd, /etc/group, /etc/shadow, /etc/ld.so.conf, /etc/sysconfig/rc.site, /etc/sysconfig/network, /etc/sysconfig/ifconfig.eth0

新しいシステムのハードウェアと元のカーネルに差異があるかもしれないため、カーネルを再ビルドする必要があるでしょう。

最後に新システムを起動可能とするために 8.4. 「GRUB を用いたブートプロセスの設定」を設定する必要があります。

6.4. Chroot 環境への移行

chroot 環境に入って最終的な LFS システムの構築、インストールを行っていきます。root ユーザーになって以下のコマンドを実行します。chroot 環境内は、この時点では一時的なツール類のみが利用可能な状態です。

```
chroot "$LFS" /tools/bin/env -i \
HOME=/root \
TERM="$TERM" \
PS1='\u:\w\$ ' \
PATH=/bin:/usr/bin:/sbin:/usr/sbin:/tools/bin \
/tools/bin/bash --login +h
```

env コマンドの -i パラメーターは、chroot 環境での変数定義をすべてクリアするものです。そして HOME, TERM, PS1, PATH という変数だけここで定義し直します。TERM=\$TERM は chroot 環境に入る前と同じ値を TERM 変数に与えます。この設定は vim や less のようなプログラムの処理が適切に行われるために必要となります。これ以外の変数として CFLAGS や CXXFLAGS が必要であれば、ここで定義しておくといいでしょう。

ここから先は LFS 変数は不要となります。すべての作業は LFS ファイルシステム内で行っていくことになるからです。起動される Bash シェルは \$LFS ディレクトリがルート (/ ディレクトリ) となって動作します。

/tools/bin が PATH 変数内の最後に加わっています。一時的なツール類は、それぞれの正式版がインストールされていくに従って使われなくなります。これがうまく動作するのは bash の +h オプションを用いることによってハッシュ機能をオフにしているからであり、実行モジュールの場所を覚えておく機能を無効にしているからです。

bash のプロンプトに I have no name! と表示されますがこれは正常です。この時点ではまだ /etc/passwd を生成していないからです。



注記

本章のこれ以降と次章では、すべてのコマンドを chroot 環境内にて実行することが必要です。例えばシステムを再起動する場合のように chroot 環境からいったん抜け出した場合には、6.2.2. 「/dev のマウントと有効化」と 6.2.3. 「仮想カーネルファイルシステムのマウント」にて説明した仮想カーネルファイルシステムがマウントされていることを確認してください。そして chroot 環境に入り直してからインストール作業を再開してください。

6.5. ディレクトリの生成

LFS ファイルシステムにおけるディレクトリ構成を作り出していきます。以下のコマンドを実行して標準的なディレクトリを生成します。

```
mkdir -pv /{bin,boot,etc/{opt,sysconfig},home,lib,mnt,opt,run}
mkdir -pv /{media/{floppy,cdrom},sbin,srv,var}
install -dv -m 0750 /root
install -dv -m 1777 /tmp /var/tmp
mkdir -pv /usr/{,local/}{bin,include,lib,sbin,src}
mkdir -pv /usr/{,local/}share/{doc,info,locale,man}
mkdir -v /usr/{,local/}share/{misc,terminfo,zoneinfo}
mkdir -pv /usr/{,local/}share/man/man{1..8}
for dir in /usr /usr/local; do
  ln -sv share/{man,doc,info} $dir
done
case $(uname -m) in
  x86_64) ln -sv lib /lib64 && ln -sv lib /usr/lib64 && ln -sv lib /usr/local/lib64 ;;
esac
mkdir -v /var/{log,mail,spool}
ln -sv /run /var/run
ln -sv /run/lock /var/lock
mkdir -pv /var/{opt,cache,lib/{misc,locate},local}
```

ディレクトリは標準ではパーミッションモード 755 で生成されますが、すべてのディレクトリをこのままとするのは適当ではありません。上のコマンド実行ではパーミッションを変更している箇所が二つあります。一つは root ユーザーのホームディレクトリに対してであり、もう一つはテンポラリディレクトリに対してです。

パーミッションモードを変更している一つめは /root ディレクトリに対して、他のユーザーによるアクセスを制限するためです。通常のユーザーが持つ、自分自身のホームディレクトリへのアクセス権設定と同じことを行ないます。二つめのモード変更は /tmp ディレクトリや /var/tmp ディレクトリに対して、どのユーザーも書き込み可能とし、ただし他のユーザーが作成したファイルは削除できないようにします。ビットマスク 1777 の最上位ビット、いわゆる「スティッキービット (sticky bit)」を用いて実現します。

6.5.1. FHS コンプライアンス情報

本書のディレクトリ構成は標準ファイルシステム構成 (Filesystem Hierarchy Standard; FHS) に基づいています。(その情報は <http://www.pathname.com/fhs/> に示されています。) FHS に加えて man、doc、info の各ディレクトリに対するシンボリックリンクも作成します。これは多くのパッケージがドキュメントファイルをインストールする先として /usr/share/<ディレクトリ> や /usr/local/share/<ディレクトリ>ではなく、いまだに /usr/<ディレクトリ> や /usr/local/<ディレクトリ>としているためです。また FHS では /usr/local/games や /usr/share/games を規定していますが、一方で /usr/local/share については明確なものがありません。したがって本書では必要なディレクトリのみを作成していくことにします。もっとも FHS に準拠した構成を望むなら、どうぞ自由に作成してください。

6.6. 基本的なファイルとリンクの生成

プログラムの中には固定的に他のプログラムへのパスを保持しているものがあります。そのパスは今の時点ではまだ存在していません。このようなプログラムを正しく動作させるため、シンボリックリンクをいくつか作成します。このリンクは本章の作業を通じて各種ソフトウェアをインストールしていくことで、その実体であるファイルに置き換えられていきます。

```
ln -sv /tools/bin/{bash,cat,echo,pwd,stty} /bin
ln -sv /tools/bin/perl /usr/bin
ln -sv /tools/lib/libgcc_s.so{,.1} /usr/lib
ln -sv /tools/lib/libstdc++.so{,.6} /usr/lib
sed 's/tools/usr/' /tools/lib/libstdc++.la > /usr/lib/libstdc++.la
ln -sv bash /bin/sh
```

Linux のこれまでの経緯として、マウントされているファイルシステムの情報は `/etc/mtab` ファイルに保持されています。最新の Linux であれば、内部的にこのファイルを管理し、ユーザーに対しては `/proc` ファイルシステムを通じて情報提示しています。`/etc/mtab` ファイルの存在を前提としているプログラムが正常動作するように、以下のシンボリックリンクを作成します。

```
ln -sv /proc/self/mounts /etc/mtab
```

root ユーザーがログインできるように、またその「root」という名称を認識できるように `/etc/passwd` ファイルと `/etc/group` ファイルには該当する情報が登録されている必要があります。

以下のコマンドを実行して `/etc/passwd` ファイルを生成します。

```
cat > /etc/passwd << "EOF"
root:x:0:0:root:/root:/bin/bash
bin:x:1:1:bin:/dev/null:/bin/false
nobody:x:99:99:Unprivileged User:/dev/null:/bin/false
EOF
```

root ユーザーに対する本当のパスワードは後に定めます。（「x」は単に場所を設けるために設定しているものです。）

以下のコマンドを実行して `/etc/group` ファイルを生成します。

```
cat > /etc/group << "EOF"
root:x:0:
bin:x:1:
sys:x:2:
kmem:x:3:
tape:x:4:
tty:x:5:
daemon:x:6:
floppy:x:7:
disk:x:8:
lp:x:9:
dialout:x:10:
audio:x:11:
video:x:12:
utmp:x:13:
usb:x:14:
cdrom:x:15:
mail:x:34:
nogroup:x:99:
EOF
```

作成するグループは何かの標準に基づいたものではありません。一部は本章の Udev の設定に必要となるものですし、一部は既存の Linux ディストリビューションが採用している慣用的なものです。Linux Standard Base (<http://www.linuxbase.org> 参照) では root グループのグループID (GID) は 0、bin グループの GID は 1 を定めているにすぎません。他のグループとその GID はシステム管理者が自由に取り決めることができます。というのも通常のプログラムであれば GID の値に依存することはなく、あくまでグループ名を用いてプログラミングされているからです。

プロンプトに表示される「I have no name!」を正しくするため、新たなシェルを起動します。第5章にて完全に Glibc をインストールし、`/etc/passwd` ファイルと `/etc/group` ファイルを作ったので、ユーザー名とグループ名の名前解決が適切に動作します。

```
exec /tools/bin/bash --login +h
```

ディレクティブ `+h` について触れておきます。これは `bash` に対して実行パスの内部ハッシュ機能を利用しないよう指示するものです。もしこのディレクティブを指定しなかった場合 `bash` は一度実行したファイルのパスを記憶します。コンパイルしてインストールした実行ファイルはすぐに利用していくために、本章での作業では `+h` ディレクティブを常に使っていくことにします。

login、agetty、init といったプログラム（あるいは他のプログラム）は、システムに誰がいつログインしたかといった情報を多くのログファイルに記録します。しかしログファイルがあらかじめ存在していない場合は、ログファイルの出力が行われません。そこでそのようなログファイルを作成し、適切なパーミッションを与えます。

```
touch /var/log/{btmp,lastlog,wtmp}
chgrp -v utmp /var/log/lastlog
chmod -v 664 /var/log/lastlog
chmod -v 600 /var/log/btmp
```

/var/log/wtmp ファイルはすべてのログイン、ログアウトの情報を保持します。 /var/log/lastlog ファイルは各ユーザーが最後にログインした情報を保持します。 /var/log/btmp ファイルは不正なログイン情報を保持します。



注記

/run/utmp ファイルは現在ログインしているユーザーの情報を保持します。このファイルはブートスクリプトが動的に生成します。

6.7. Linux-3.10.10 API ヘッダー

Linux API ヘッダー (linux-3.10.10.tar.gz 内) は Glibc が利用するカーネル API を提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 588 MB

6.7.1. Linux API ヘッダー のインストール

Linux カーネルはアプリケーションプログラミングインターフェース (Application Programming Interface) を、システムの C ライブラリ (LFS の場合 Glibc) に対して提供する必要があります。これを行うには Linux カーネルのソースに含まれる、さまざまな C ヘッダーファイルを「健全化 (sanitizing)」して利用します。

これより前に一度処理を行っていたとしても、不適切なファイルや誤った依存関係を残さないように、以下を処理します。

```
make mrproper
```

そしてユーザーが利用するカーネルヘッダーファイルをテストし、ソースから抽出します。それらはいったん中間的なローカルディレクトリに置かれ、必要な場所にコピーされます。ターゲットディレクトリに既にあるファイルは削除してからソースからの抽出処理が行われます。なおファイルの中にはカーネル開発者が隠しファイルとしているものがあります。それらは LFS では必要ないため、中間ディレクトリから削除します。

```
make headers_check
make INSTALL_HDR_PATH=dest headers_install
find dest/include \( -name .install -o -name ..install.cmd \) -delete
cp -rv dest/include/* /usr/include
```

6.7.2. Linux API ヘッダー の構成

インストールヘッダー: /usr/include/asm/*.h, /usr/include/asm-generic/*.h, /usr/include/drm/*.h, /usr/include/linux/*.h, /usr/include/mtd/*.h, /usr/include/rdma/*.h, /usr/include/scsi/*.h, /usr/include/sound/*.h, /usr/include/video/*.h, /usr/include/xen/*.h

インストールディレクトリ: /usr/include/asm, /usr/include/asm-generic, /usr/include/drm, /usr/include/linux, /usr/include/mtd, /usr/include/rdma, /usr/include/scsi, /usr/include/sound, /usr/include/video, /usr/include/xen

概略説明

/usr/include/asm/*.h	The Linux API ASM ヘッダーファイル
/usr/include/asm-generic/*.h	The Linux API ASM の汎用的なヘッダーファイル
/usr/include/drm/*.h	The Linux API DRM ヘッダーファイル
/usr/include/linux/*.h	The Linux API Linux ヘッダーファイル
/usr/include/mtd/*.h	The Linux API MTD ヘッダーファイル
/usr/include/rdma/*.h	The Linux API RDMA ヘッダーファイル
/usr/include/scsi/*.h	The Linux API SCSI ヘッダーファイル
/usr/include/sound/*.h	The Linux API Sound ヘッダーファイル
/usr/include/video/*.h	The Linux API Video ヘッダーファイル
/usr/include/xen/*.h	The Linux API Xen ヘッダーファイル

6.8. Man-pages-3.53

Man-pages パッケージは 1,900 以上のマニュアルページを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 23 MB

6.8.1. Man-pages のインストール

Man-pages をインストールするために以下を実行します。

```
make install
```

6.8.2. Man-pages の構成

インストールファイル: さまざまな man ページ

概略説明

man C 言語の関数、重要なデバイスファイル、重要な設定ファイルなどを説明します。
ページ

6.9. Glibc-2.18

Glibc パッケージは主要な C ライブラリを提供します。このライブラリは基本的な処理ルーチンを含むもので、メモリ割り当て、ディレクトリ走査、ファイルのオープン、クローズや入出力、文字列操作、パターンマッチング、算術処理、等々があります。

概算ビルド時間: 17.1 SBU
必要ディスク容量: 922 MB

6.9.1. Glibc のインストール



注記

LFS が取り扱っていないパッケージの中には GNU libiconv の導入を推奨しているものがあります。これは文字データのエンコーディングを変換する機能を持ちます。プロジェクトのホームページ (<http://www.gnu.org/software/libiconv/>) には以下のような説明があります。「このライブラリは iconv() 関数を提供します。この関数を持たないシステムや、Unicode を取り扱うことができないシステムにて、この関数を利用することができます。」Glibc が iconv() 関数を用意しており Unicode の変換を実現しているため LFS では libiconv は用いないことにします。

Glibc は自らによってビルドされるものであり、そうして完全な形でインストールされます。ただしコンパイラのスペックファイルやリンカーは、まだ /tools ディレクトリを示したままです。スペックファイルやリンカーを再調整するのは Glibc をインストールした後になります。これは Glibc の autoconf テストが失敗するためであり、最終的にきれいなビルド結果を得るといった目的が達成できないためです。

アップストリームの変更の中に、元に戻すことが必要なものがあります。

```
sed -i -e 's/static __m128i/inline &/' sysdeps/x86_64/multiarch/strstr.c
```

Glibc のドキュメントではソースディレクトリ以外の専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v ../glibc-build
cd ../glibc-build
```

Glibc をコンパイルするための準備をします。

```
../glibc-2.18/configure \
--prefix=/usr \
--disable-profile \
--enable-kernel=2.6.32 \
--libexecdir=/usr/lib/glibc
```

configure オプションの意味:

```
--libexecdir=/usr/lib/glibc
```

このオプションはいくつかの補助ファイル群のインストール先を、デフォルトの /usr/libexec から /usr/lib/glibc に変更します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```



重要項目

本節における Glibc のテストスイートは極めて重要なものです。したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

全般にテストの中には失敗するものがありますが、以下に示すものであれば無視しても構いません。ビルド結果のテストは以下のようにします。

```
make -k check 2>&1 | tee glibc-check-log
grep Error glibc-check-log
```

posix/annexc と conform/run-conformtest のテストはおそらく失敗します。これは想定されていることであり無視することができます。そもそも Glibc のテストスイートはホストシステムにある程度依存します。発生しがちな問題を以下に示します。

- nptl/tst-clock2, nptl/tst-attr3, tst/tst-cputimer1, rt/tst-cpuclock2 の各テストは失敗することがあります。失敗の理由は明確ではありません。ただ処理速度が原因してそれらが発生すると思われます。
- math テストは、純正 Intel プロセッサや AMD プロセッサが最新のものではない場合に失敗することがあります。
- 旧式のハードウェアや性能の低いハードウェア、あるいは負荷の高いシステムにおいてテストを行うと、処理時間をオーバーしてタイムアウトが発生しテストが失敗します。make check コマンドにて TIMEOUTFACTOR をセットするものに修正すれば、それらのエラーは回避できると報告されています。(例: TIMEOUTFACTOR=16 make -k check)
- posix/tst-getaddrinfo4 は、テスト実行時にネットワークに接続されていないため失敗します。
- 上記以外に特定のアーキテクチャーにてテストが失敗することが分かっています。失敗するのは posix/bug-regex32, misc/tst-writev, elf/check-textrel, nptl/tst-getpid2, stdio-common/bug22 です。

支障が出る話ではありませんが Glibc のインストール時には /etc/ld.so.conf ファイルが存在していないとして警告メッセージが出力されます。これをなくすために以下を実行します。

```
touch /etc/ld.so.conf
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

デフォルトではインストールされない、NIS と RPC に関するヘッダーファイルをインストールします。これは glibc の再ビルド時や BLFS の各種パッケージにて必要となります。

```
cp -v ../glibc-2.18/sunrpc/rpc/*.h /usr/include/rpc
cp -v ../glibc-2.18/sunrpc/rpcsvc/*.h /usr/include/rpcsvc
cp -v ../glibc-2.18/nis/rpcsvc/*.h /usr/include/rpcsvc
```

システムを各種の言語に対応させるためのロケールは、今までのコマンドではインストールされませんが、テストスイートにおいてロケールは必要ではありません。ただ将来的にはロケールがないことによって、重要なテストを逃してしまうかもしれません。

各ロケールは localedef プログラムを使ってインストールします。例えば以下に示す一つめの localedef では、キャラクターセットには依存しないロケール定義 /usr/share/i18n/locales/cs_CZ とキャラクターマップ定義 /usr/share/i18n/charmaps/UTF-8.gz とを結合させて /usr/lib/locale/locale-archive ファイルにその情報を付け加えます。以下のコマンドは、テストを成功させるために必要となる最低限のロケールをインストールするものです。

```
mkdir -pv /usr/lib/locale
localedef -i cs_CZ -f UTF-8 cs_CZ.UTF-8
localedef -i de_DE -f ISO-8859-1 de_DE
localedef -i de_DE@euro -f ISO-8859-15 de_DE@euro
localedef -i de_DE -f UTF-8 de_DE.UTF-8
localedef -i en_GB -f UTF-8 en_GB.UTF-8
localedef -i en_HK -f ISO-8859-1 en_HK
localedef -i en_PH -f ISO-8859-1 en_PH
localedef -i en_US -f ISO-8859-1 en_US
localedef -i en_US -f UTF-8 en_US.UTF-8
localedef -i es_MX -f ISO-8859-1 es_MX
localedef -i fa_IR -f UTF-8 fa_IR
localedef -i fr_FR -f ISO-8859-1 fr_FR
localedef -i fr_FR@euro -f ISO-8859-15 fr_FR@euro
localedef -i fr_FR -f UTF-8 fr_FR.UTF-8
localedef -i it_IT -f ISO-8859-1 it_IT
localedef -i it_IT -f UTF-8 it_IT.UTF-8
localedef -i ja_JP -f EUC-JP ja_JP
localedef -i ru_RU -f KOI8-R ru_RU.KOI8-R
localedef -i ru_RU -f UTF-8 ru_RU.UTF-8
localedef -i tr_TR -f UTF-8 tr_TR.UTF-8
localedef -i zh_CN -f GB18030 zh_CN.GB18030
```

上に加えて、あなたの国、言語、キャラクターセットを定めるためのロケールをインストールしてください。

必要に応じて `glibc-2.18/localedata/SUPPORTED` に示されるすべてのロケールを同時にインストールしてください。(そこには上のロケールも含め、すべてのロケールが列記されています。) 以下のコマンドによりそれを実現します。ただしこれには相当な処理時間を要します。

```
make localedata/install-locales
```

さらに必要なら `glibc-2.18/localedata/SUPPORTED` ファイルに示されていない特殊なロケールは `localedef` コマンドを使って生成、インストールを行ってください。

6.9.2. Glibc の設定

`/etc/nsswitch.conf` ファイルを作成しておく必要があります。Glibc はこのファイルが無い場合や誤っている場合でもデフォルト設定を用いて動作しますが、ネットワーク環境下ではデフォルト設定であっても正しく動作しません。またタイムゾーンの設定も必要になります。

以下のコマンドを実行して `/etc/nsswitch.conf` ファイルを生成します。

```
cat > /etc/nsswitch.conf << "EOF"
# Begin /etc/nsswitch.conf

passwd: files
group: files
shadow: files

hosts: files dns
networks: files

protocols: files
services: files
ethers: files
rpc: files

# End /etc/nsswitch.conf
EOF
```

タイムゾーンデータをインストールします。

```
tar -xf ../tzdata2013d.tar.gz

ZONEINFO=/usr/share/zoneinfo
mkdir -pv $ZONEINFO/{posix,right}

for tz in etcetera southamerica northamerica europe africa antarctica \
        asia australasia backward pacificnew solar87 solar88 solar89 \
        systemv; do
    zic -L /dev/null      -d $ZONEINFO          -y "sh yearistype.sh" ${tz}
    zic -L /dev/null      -d $ZONEINFO/posix    -y "sh yearistype.sh" ${tz}
    zic -L leapseconds    -d $ZONEINFO/right    -y "sh yearistype.sh" ${tz}
done

cp -v zone.tab iso3166.tab $ZONEINFO
zic -d $ZONEINFO -p America/New_York
unset ZONEINFO
```

`zic` コマンドの意味

```
zic -L /dev/null ...
```

これは、うるう秒を含まない `posix` タイムゾーンデータを生成します。これらは `zoneinfo` や `zoneinfo/posix` に収容するものとして適切なものです。 `zoneinfo` へは POSIX 準拠のタイムゾーンデータを含めることが必要であり、こうしておかないと数々のテストスイートにてエラーが発生してしまいます。組み込みシステムなどでは容量の制約が厳しいため、タイムゾーンデータはあまり更新したくない場合があり、`posix` ディレクトリを設

なければ 1.9 MB もの容量を節約できます。ただしアプリケーションやテストスイートによっては、適正な結果が得られないかもしれません。

```
zic -L leapseconds ...
```

これは、うるう秒を含んだ正しいタイムゾーンデータを生成します。組み込みシステムなどでは容量の制約が厳しいため、タイムゾーンデータはあまり更新したくない場合や、さほど気にかけない場合もあります。right ディレクトリを省略することにすれば 1.9MB の容量を節約することができます。

```
zic ... -p ...
```

これは `posixrules` ファイルを生成します。ここでは New York を用います。POSIX では、日中の保存時刻として US ルールに従うことを規程しているためです。

ローカルなタイムゾーンの設定を行う 1 つの方法として、ここでは以下のスクリプトを実行します。

tzselect

地域情報を設定するためにいくつか尋ねられるのでそれに答えます。このスクリプトはタイムゾーン名を表示します。(例えば America/Edmonton などです。) `/usr/share/zoneinfo` ディレクトリにはさらに Canada/Eastern や EST5EDT のようなタイムゾーンもあります。これらはこのスクリプトでは認識されませんが、利用することは可能です。

以下のコマンドにより `/etc/localtime` ファイルを生成します。

```
cp -v --remove-destination /usr/share/zoneinfo/<xxx> \
  /etc/localtime
```

<xxx> の部分は設定するタイムゾーンの名前 (例えば Canada/Eastern など) に置き換えてください。

cp オプションの意味:

`--remove-destination`

このオプションは既に存在するシンボリックリンクを削除します。ここではシンボリックリンクを再生成するのではなく、ファイルのコピーを行います。これは別パーティション内に `/usr` ディレクトリが存在するケースに対応するためです。シングルユーザーモードでシステムを起動する際にはこのことが必要となります。

6.9.3. ダイナミックローダー の設定

デフォルトにおいてダイナミックリンカー (`/lib/ld-linux.so.2`) は `/lib` ディレクトリと `/usr/lib` ディレクトリを検索していきます。これに従って、他のプログラムが実行される際に必要となるダイナミックライブラリがリンクされます。もし `/lib` や `/usr/lib` 以外のディレクトリにライブラリファイルがあるなら `/etc/ld.so.conf` ファイルに記述を追加して、ダイナミックローダーがそれらを探し出せるようにしておくことが必要です。追加のライブラリが配置されるディレクトリとしては `/usr/local/lib` ディレクトリと `/opt/lib` ディレクトリという二つがよく利用されます。ダイナミックローダーの検索パスとして、それらのディレクトリを追加します。

以下のコマンドを実行して `/etc/ld.so.conf` ファイルを新たに生成します。

```
cat > /etc/ld.so.conf << "EOF"
# Begin /etc/ld.so.conf
/usr/local/lib
/opt/lib

EOF
```

必要がある場合には、ダイナミックローダーに対する設定として、他ディレクトリにて指定されるファイルをインクルードするにもできます。通常は、そのファイル内の 1 行に、必要となるライブラリパスを記述します。このような設定を利用する場合には以下のようなコマンドを実行します。

```
cat >> /etc/ld.so.conf << "EOF"
# Add an include directory
include /etc/ld.so.conf.d/*.conf

EOF
mkdir -pv /etc/ld.so.conf.d
```

6.9.4. Glibc の構成

インストールプログラム:	catchsegv, gencat, getconf, getent, iconv, iconvconfig, ldconfig, ldd, lddlibc4, locale, localedef, makedb, mtrace, nscd, pcprofiledump, pldd, rpcgen, sln, sotruss, sprof, tzselect, xtrace, zdump, zic
インストールライブラリ:	ld.so, libBrokenLocale.{a,so}, libSegFault.so, libanl.{a,so}, libbsd-compat.a, libc.{a,so}, libc_nonshared.a, libcidn.so, libcrypt.{a,so}, libdl.{a,so}, libg.a, libieee.a, libm.{a,so}, libmcheck.a, libmemusage.so, libnsl.{a,so}, libnss_compat.so, libnss_dns.so, libnss_files.so, libnss_hesiod.so, libnss_nis.so, libnss_nisplus.so, libpcprofile.so, libpthread.{a,so}, libpthread_nonshared.a, libresolv.{a,so}, librpcsvc.a, librt.{a,so}, libthread_db.so, libutil.{a,so}
インストールディレクトリ:	/usr/include/arpa, /usr/include/bits, /usr/include/gnu, /usr/include/net, /usr/include/netash, /usr/include/netatalk, /usr/include/netax25, /usr/include/neteconet, /usr/include/netinet, /usr/include/netipx, /usr/include/netiucv, /usr/include/netpacket, /usr/include/netrom, /usr/include/netrose, /usr/include/nfs, /usr/include/protocols, /usr/include/rpc, /usr/include/rpcsvc, /usr/include/sys, /usr/lib/audit, /usr/lib/gconv, /usr/lib/glibc, /usr/lib/locale, /usr/share/il8n, /usr/share/zoneinfo, /var/db

概略説明

catchsegv	プログラムがセグメンテーションフォールトにより停止した時に、スタックトレースを生成するために利用します。
gencat	メッセージカタログを生成します。
getconf	ファイルシステムに固有の変数に設定された値を表示します。
getent	管理データベースから設定項目を取得します。
iconv	キャラクターセットを変換します。
iconvconfig	高速ロードができる iconv モジュール設定ファイルを生成します。
ldconfig	プログラム実行時におけるダイナミックリンカーのリンクを設定します。
ldd	指定したプログラムまたは共有ライブラリが必要としている共有ライブラリを表示します。
lddlibc4	オブジェクトファイルを使って ldd コマンドを補助します。[訳註：意味不明]
locale	現在のロケールに対するさまざまな情報を表示します。
localedef	ロケールの設定をコンパイルします。
makedb	テキストを入力として単純なデータベースを生成します。
mtrace	メモリトレースファイル (memory trace file) を読み込んで解釈します。そして可読可能な書式で出力します。
nscd	一般的なネームサービスへの変更要求のキャッシュを提供するデーモン。
pcprofiledump	PC プロファイリングによって生成される情報をダンプします。
pldd	稼動中のプロセスにて利用されている、動的共有オブジェクト (dynamic shared objects) を一覧出力します。
rpcgen	リモートプロシジャーコール (Remote Procedure Call; RPC) を実装するための C 言語コードを生成します。
sln	スタティックなリンクを行う ln プログラム。
sotruss	指定されたコマンドの共有ライブラリ内のプロシジャーコールをトレースします。
sprof	共有オブジェクトのプロファイリングデータを読み込んで表示します。
tzselect	ユーザーに対してシステムの設置地域を問合せ、対応するタイムゾーンの記述を表示します。
xtrace	プログラム内にて現在実行されている関数を表示することで、そのプログラムの実行状況を追跡します。
zdump	タイムゾーンをダンプします。
zic	タイムゾーンコンパイラー。
ld.so	共有ライブラリのためのヘルパープログラム。

libBrokenLocale	Glibc が内部で利用するもので、異常が発生しているプログラムを見つけ出します。(例えば Motif アプリケーションなど) 詳しくは <code>glibc-2.18/locale/broken_cur_max.c</code> に書かれたコメントを参照してください。
libSegFault	セグメンテーションフォールトのシグナルハンドラー。 <code>catchsegv</code> が利用します。
libanl	非同期の名前解決 (asynchronous name lookup) ライブラリ。
libbsd-compat	特定の BSD (Berkeley Software Distribution) プログラムを Linux 上で動作させるために必要な可搬ライブラリを提供します。
libc	主要な C ライブラリ。
libcidn	Glibc が内部的に利用するもので <code>getaddrinfo()</code> 関数によって国際化ドメイン名 (internationalized domain names) を取り扱います。
libcrypt	暗号化ライブラリ。
libdl	ダイナミックリンクのインターフェースライブラリ。
libg	関数を全く含まないダミーのライブラリ。かつては <code>g++</code> のランタイムライブラリであったものです。
libieee	このモジュールをリンクすると、数学関数におけるエラー制御方法を IEEE (the Institute of Electrical and Electronic Engineers) が定義するものに従うようになります。デフォルトは POSIX.1 エラー制御方法です。
libm	数学ライブラリ。
libmcheck	このライブラリにリンクした場合、メモリ割り当てのチェック機能を有効にします。
libmemusage	<code>memusage</code> コマンドが利用するもので、プログラムのメモリ使用に関する情報を収集します。
libnsl	ネットワークサービスライブラリ。
libnss	NSS (Name Service Switch) ライブラリ。ホスト、ユーザー名、エイリアス、サービス、プロトコルなどの名前解決を行う関数を提供します。
libpcprofile	プロファイリングを行う関数を提供するもので、特定のソース行に費やされる CPU 時間を追跡するために利用します。
libpthread	POSIX スレッドライブラリ。
libresolv	インターネットドメインネームサーバーに対しての、パケットの生成、送信、解析を行う関数を提供します。
librpcsvc	さまざまな RPC サービスを実現する関数を提供します。
librt	POSIX.1b リアルタイム拡張 (Realtime Extension) にて既定されている、インターフェースをほぼ網羅した関数を提供します。
libthread_db	マルチスレッドプログラム用のデバッガーを構築するための有用な関数を提供します。
libutil	数多くの Unix ユーティリティにて利用される「標準」関数を提供します。

6.10. ツールチェーンの調整

最終的な C ライブラリがこれまでに構築できました。ここでツールチェーンの調整を行います。これを行うことで、新たに生成したプログラムが新たに生成したライブラリにリンクされます。

まず /tools ディレクトリにあるリンカーのバックアップをとっておき、第5章にて作成した調整済みリンカーに置き換えます。/tools/\${gcc-dumpmachine}/bin ディレクトリにあるリンカーに対してのシンボリックリンクも正しく生成しておきます。

```
mv -v /tools/bin/{ld,ld-old}
mv -v /tools/${gcc-dumpmachine}/bin/{ld,ld-old}
mv -v /tools/bin/{ld-new,ld}
ln -sv /tools/bin/ld /tools/${gcc-dumpmachine}/bin/ld
```

次に GCC スペックファイルを修正し、新しいダイナミックリンカーを指し示すようにします。単純に「/tools」という記述を取り除けば、ダイナミックリンカーへの正しい参照となります。またスペックファイルを修正することで GCC がヘッダーファイル、および Glibc の起動ファイルを適切に探し出せるようになります。以下の sed によりこれを実現します。

```
gcc -dumpspecs | sed -e 's@/tools@g' \
-e '/\*startfile_prefix_spec:/{n;s@.*/usr/lib/ @}' \
-e '/\*cpp:/{n;s@$@ -isystem /usr/include@}' > \
`dirname $(gcc --print-libgcc-file-name)`/specs
```

スペックファイルの内容を実際に確認して、今変更した内容が正しく反映されていることを確認しておいてください。

この時点において、調整したツールチェーンの基本的な（コンパイルやリンクなどの）機能が正しく動作していることを確認する必要があります。これを行うために以下の健全性検査を実行します。

```
echo 'main(){}' > dummy.c
cc dummy.c -v -Wl,--verbose &> dummy.log
readelf -l a.out | grep ': /lib'
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、最後のコマンドから出力される結果は以下になるはずです。（ダイナミックリンカーの名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。）

```
[Requesting program interpreter: /lib/ld-linux.so.2]
```

ダイナミックリンカーのディレクトリは、今度は /lib となっているはずです。

ここで起動ファイルが正しく用いられていることを確認します。

```
grep -o '/usr/lib.*crt[1in].*succeeded' dummy.log
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、上のコマンドの出力は以下になるはずです。

```
/usr/lib/crt1.o succeeded
/usr/lib/crti.o succeeded
/usr/lib/crtn.o succeeded
```

コンパイラーが正しいヘッダーファイルを読み取っているかどうかを検査します。

```
grep -B1 '^ /usr/include' dummy.log
```

上のコマンドは正常に終了すると、以下の出力を返します。

```
#include <...> search starts here:
/usr/include
```

次に、新たなリンカーが正しいパスを検索して用いられているかどうかを検査します。

```
grep 'SEARCH.*usr/lib' dummy.log | sed 's|; |\n|g'
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、最後のコマンドの出力は以下になるはずです。

```
SEARCH_DIR("/usr/lib")
SEARCH_DIR("/lib");
```

次に libc が正しく用いられていることを確認します。

```
grep "/lib.*libc.so.6 " dummy.log
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、最後のコマンドの出力は以下になるはずです。(64ビットマシンであれば lib64 ディレクトリとなるはずです。)

```
attempt to open /lib/libc.so.6 succeeded
```

最後に GCC が正しくダイナミックリンカーを用いているかを確認します。

```
grep found dummy.log
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、上のコマンドの出力は以下になるはずです。(ダイナミックリンカーの名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。また 64 ビットマシンであれば lib64 ディレクトリとなるはずです。)

```
found ld-linux.so.2 at /lib/ld-linux.so.2
```

出力結果が上と異なっていたり、出力が全く得られなかったりした場合は、何かが根本的に間違っているということです。どこに問題があるのか調査、再試行を行って解消してください。最もありがちな理由は、スเปックファイルの修正を誤っていることです。問題を残したままこの先には進まないでください。

すべてが正しく動作したら、テストに用いたファイルを削除します。

```
rm -v dummy.c a.out dummy.log
```

6.11. Zlib-1.2.8

Zlib パッケージは、各種プログラムから呼び出される、圧縮、伸張（解凍）を行う関数を提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 4.6 MB

6.11.1. Zlib のインストール

Zlib をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

共有ライブラリは `/lib` に移す必要があります。またそれに合わせて `/usr/lib` にある `.so` ファイルを再生成する必要があります。

```
mv -v /usr/lib/libz.so.* /lib
ln -sfv ../../lib/libz.so.1.2.8 /usr/lib/libz.so
```

6.11.2. Zlib の構成

インストールライブラリ: `libz.{a,so}`

概略説明

`libz` 各種プログラムから呼び出される、圧縮、伸張（解凍）を行う関数を提供します。

6.12. File-5.14

File パッケージは、指定されたファイルの種類を決定するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 12.5 MB

6.12.1. File のインストール

File をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.12.2. File の構成

インストールプログラム: file
インストールライブラリ: libmagic.so

概略説明

file 指定されたファイルの種類判別を行います。処理にあたってはいくつかのテスト、すなわちファイルシステムテスト、マジックナンバーテスト、言語テストを行います。

libmagic.so マジックナンバーによりファイル判別を行うルーチンを含みます。file プログラムがこれを利用して

6.13. Binutils-2.23.2

Binutils パッケージは、リンカーやアセンブラーなどのようにオブジェクトファイルを取り扱うツール類を提供します。

概算ビルド時間: 2.0 SBU
必要ディスク容量: 365 MB

6.13.1. Binutils のインストール

PTY が chroot 環境内にて正しく作動しているかどうかを確認するために、以下の簡単なテストを実行します。

```
expect -c "spawn ls"
```

上のコマンドは以下を出力するはずです。

```
spawn ls
```

上のような出力ではなく、以下のような出力メッセージが含まれていたら、PTY の動作が適切に構築できていないことを示しています。 Binutils や GCC のテストスイートを実行する前に、この症状は解消しておく必要があります。

```
The system has no more ptys.  
Ask your system administrator to create more.
```

standards.info ファイルの日付が古いため、インストールしないことにします。 より新しいものが Autoconf の作業を通じてインストールされます。

```
rm -fv etc/standards.info  
sed -i.bak '/^INFO/s/standards.info //' etc/Makefile.in
```

Texinfo-5.1 にてドキュメントビルドが文法エラーにより失敗する点を修正します。

```
sed -i -e 's/@colophon/@colophon/' \  
      -e 's/doc@cygnus.com/doc@cygnus.com/' bfd/doc/bfd.texinfo
```

Binutils のドキュメントによると Binutils のビルドにあたっては、ソースディレクトリ以外の専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v ../binutils-build  
cd ../binutils-build
```

Binutils をコンパイルするための準備をします。

```
../binutils-2.23.2/configure --prefix=/usr --enable-shared
```

パッケージをコンパイルします。

```
make tooldir=/usr
```

make パラメーターの意味:

```
tooldir=/usr
```

通常 tooldir (実行ファイルが最終的に配置されるディレクトリ) は \$(exec_prefix)/\$(target_alias) に設定されています。 x86_64 マシンでは /usr/x86_64-unknown-linux-gnu となります。 LFS は自分で設定を定めていくシステムですから /usr ディレクトリ配下に CPU ターゲットを特定するディレクトリを設ける必要がありません。 \$(exec_prefix)/\$(target_alias) というディレクトリ構成は、クロスコンパイル環境において必要となるものです。(例えばパッケージをコンパイルするマシンが Intel であり、そこから PowerPC マシン用の実行コードを生成するような場合です。)



重要項目

本節における Binutils のテストスイートは極めて重要なものです。したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

コンパイル結果をテストします。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make tooldir=/usr install
```

libiberty ヘッダーファイルをインストールします。他のパッケージがこれを必要としている場合があるためです。

```
cp -v ../binutils-2.23.2/include/libiberty.h /usr/include
```

6.13.2. Binutils の構成

インストールプログラム: addr2line, ar, as, c++filt, elfedit, gprof, ld, ld.bfd, nm, objcopy, objdump, ranlib, readelf, size, strings, strip
 インストールライブラリ: libiberty.a, libbfd.{a,so}, libopcodes.{a,so}
 インストールディレクトリ: /usr/lib/ldscripts

概略説明

addr2line	指定された実行モジュール名とアドレスに基づいて、プログラム内のアドレスをファイル名と行番号に変換します。これは実行モジュール内のデバッグ情報を利用します。特定のアドレスがどのソースファイルと行番号に該当するかを確認するものです。
ar	アーカイブの生成、修正、抽出を行います。
as	gcc の出力結果をアセンブルして、オブジェクトファイルとして生成するアセンブラー。
c++filt	リンカーから呼び出されるもので C++ と Java のシンボルを複合 (demangle) し、オーバーロード関数が破壊されることを回避します。
elfedit	ELF ファイルの ELF ヘッダーを更新します。
gprof	コールグラフ (call graph) のプロファイルデータを表示します。
ld	複数のオブジェクトファイルやアーカイブファイルから、一つのファイルを生成するリンカー。データの再配置やシンボル参照情報の結合を行います。
ld.bfd	ld へのハードリンク。
nm	指定されたオブジェクトファイル内のシンボル情報を一覧表示します。
objcopy	オブジェクトファイルの変換を行います。
objdump	指定されたオブジェクトファイルの各種情報を表示します。さまざまなオプションを用いることで特定の情報表示が可能です。表示される情報は、コンパイル関連ツールを開発する際に有用なものです。
ranlib	アーカイブの内容を索引として生成し、それをアーカイブに保存します。索引は、アーカイブのメンバーによって定義されるすべてのシンボルの一覧により構成されます。アーカイブのメンバーとは再配置可能なオブジェクトファイルのことです。
readelf	ELF フォーマットのバイナリファイルの情報を表示します。
size	指定されたオブジェクトファイルのセクションサイズと合計サイズを一覧表示します。
strings	指定されたファイルに対して、印字可能な文字の並びを出力します。文字は所定の長さ (デフォルトでは 4文字) 以上のものが対象となります。オブジェクトファイルの場合デフォルトでは、初期化セクションとロードされるセクションからのみ文字列を抽出し出力します。これ以外の種類のファイルの場合は、ファイル全体が走査されます。
strip	オブジェクトファイルからデバッグシンボルを取り除きます。
libiberty	以下に示すような数多くの GNU プログラムが利用する処理ルーチンを提供します。getopt、obstack、strerror、strtol、strtoul
libbfd	バイナリファイルディスクリプター (Binary File Descriptor) ライブラリ。
libopcodes	opcodes (オペレーションコード; プロセッサ命令を「認識可能なテキスト」として表現したもの) を取り扱うライブラリ。このライブラリは objdump などのように、ビルド作業にて利用するユーティリティプログラムが利用しています。

6.14. GMP-5.1.2

GMP パッケージは数値演算ライブラリを提供します。このライブラリには任意精度演算 (arbitrary precision arithmetic) を行う有用な関数が含まれます。

概算ビルド時間: 1.2 SBU
必要ディスク容量: 50 MB

6.14.1. GMP のインストール



注記

32 ビット x86 CPU にて環境構築する際に、64 ビットコードを扱う CPU 環境であってかつ CFLAGS を指定していると、本パッケージの configure スクリプトは 64 ビット用の処理を行い失敗します。これを回避するには、以下のように処理してください。

```
ABI=32 ./configure ...
```

GMP をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --enable-cxx
```

configure オプションの意味:

`--enable-cxx`
C++ サポートを有効にします。
パッケージをコンパイルします。

```
make
```



重要項目

本節における GMP のテストスイートは極めて重要なものです。したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

テストを実行します。

```
make check 2>&1 | tee gmp-check-log
```

185個のテストが完了することを確認してください。テスト結果は以下のコマンドにより確認することができます。

```
awk '/tests passed/{total+=$2} ; END{print total}' gmp-check-log
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

必要ならドキュメントをインストールします。

```
mkdir -v /usr/share/doc/gmp-5.1.2
cp -v doc/{isa_abi_headache,configuration} doc/*.html \
  /usr/share/doc/gmp-5.1.2
```

6.14.2. GMP の構成

インストールライブラリ: libgmp.{a,so}, libgmpxx.{a,so}
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/gmp-5.1.2

概略説明

libgmp 精度演算関数 (precision math functions) を提供します。
libgmpxx C++ 用の精度演算関数を提供します。

6.15. MPFR-3.1.2

MPFR パッケージは倍精度演算 (multiple precision) の関数を提供します。

概算ビルド時間: 0.8 SBU
必要ディスク容量: 27 MB

6.15.1. MPFR のインストール

MPFR をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --enable-thread-safe \
            --docdir=/usr/share/doc/mpfr-3.1.2
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```



重要項目

本節における MPFR のテストスイートは極めて重要なものです。したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

すべてのテストが正常に完了していることを確認してください。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

ドキュメントをインストールします。

```
make html
make install-html
```

6.15.2. MPFR の構成

インストールライブラリ: libmpfr.{a,so}
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/mpfr-3.1.2

概略説明

libmpfr 倍精度演算の関数を提供します。

6.16. MPC-1.0.1

MPC パッケージは複素数演算を可能とするライブラリを提供するものです。高い精度と適切な丸め (rounding) を実現します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 10.2 MB

6.16.1. MPC のインストール

MPC をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.16.2. MPC の構成

インストールライブラリ: libmpc.{a,so}

概略説明

libmpc 複素数による演算関数を提供します。

6.17. GCC-4.8.1

GCC パッケージは C コンパイラーや C++ コンパイラーなどの GNU コンパイラーコレクションを提供します。

概算ビルド時間: 55.6 SBU
必要ディスク容量: 2.2 GB

6.17.1. GCC のインストール

5.10. 「GCC-4.8.1 - 2回め」にて行ったように sed を使って以下のようにコンパイラーフラグ `-fomit-frame-pointer` を強制的に指定し、一貫したコンパイルを実現します。

```
case `uname -m` in
  i?86) sed -i 's/^T_CFLAGS =$/& -fomit-frame-pointer/' gcc/Makefile.in ;;
esac
```

GCC パッケージでは `libiberty.a` をインストールしないようにします。これは `Binutils` にて既に提供されています。

```
sed -i 's/install_to_${INSTALL_DEST} //' libiberty/Makefile.in
```

Makefile のチェックにおける誤りを一つ修正し、また `g++ libmudflap` のテストスイートは実行しないようにします。

```
sed -i -e /autogen/d -e /check.sh/d fixincludes/Makefile.in
mv -v libmudflap/testsuite/libmudflap.c++/pass41-frag.cxx{,.disable}
```

GCC のドキュメントによると GCC のビルドにあたっては、ソースディレクトリ以外の専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v ../gcc-build
cd ../gcc-build
```

GCC をコンパイルするための準備をします。

```
../gcc-4.8.1/configure --prefix=/usr \
                      --libexecdir=/usr/lib \
                      --enable-shared \
                      --enable-threads=posix \
                      --enable-__cxa_atexit \
                      --enable-clocale=gnu \
                      --enable-languages=c,c++ \
                      --disable-multilib \
                      --disable-bootstrap \
                      --disable-install-libiberty \
                      --with-system-zlib
```

他のプログラミング言語は、また別の依存パッケージなどを要しますが、現時点では準備できていません。GCC がサポートする他のプログラム言語の構築方法については BLFS ブックの説明を参照してください。

Configure オプションの意味:

`--disable-install-libiberty`

`libiberty` をインストールしないようにします。これは `Binutils-2.23.2` により既に提供されています。

`--with-system-zlib`

このオプションはシステムに既にインストールされている `Zlib` ライブラリをリンクすることを指示するものであり、内部にて作成されるライブラリを用いないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```



重要項目

本節における GCC のテストスイートは極めて重要なものです。したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

GCC テストスイートの中で、スタックを使い果たすものがあります。そこでテスト実施にあたり、スタックサイズを増やします。

```
ulimit -s 32768
```

コンパイル結果をテストします。エラーが発生しても停止しないようにします。

```
make -k check
```

テスト結果を確認するために以下を実行します。

```
../gcc-4.8.1/contrib/test_summary
```

テスト結果の概略のみ確認したい場合は、出力結果をパイプ出力して `grep -A7 Summ` を実行してください。

テスト結果については <http://www.linuxfromscratch.org/lfs/build-logs/7.4/> と <http://gcc.gnu.org/ml/gcc-testresults/> にある情報と比較することができます。

テストに失敗することがありますが、これを回避することはできません。GCC の開発者はこの問題を認識していますが、まだ解決していない状況です。特に `libmudflap` のテストは大いに問題があり GCC のバグとして知られています。(http://gcc.gnu.org/bugzilla/show_bug.cgi?id=20003) この URL に示されている結果と大きく異なっていなかったら、問題はありませので先に進んでください。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

パッケージの中には C プリプロセッサが `/lib` ディレクトリにあることを前提にしているものがあります。そのようなものに対応するため、以下のシンボリックリンクを作成します。

```
ln -sv ../usr/bin/cpp /lib
```

パッケージの多くは C コンパイラーとして `cc` を呼び出しています。これに対応するため、以下のシンボリックリンクを作成します。

```
ln -sv gcc /usr/bin/cc
```

最終的なツールチェーンが出来上がりました。ここで再びコンパイルとリンクが正しく動作することを確認することが必要です。そこで本節の初めの方で実施した健全性テストをここでも実施します。

```
echo 'main(){}' > dummy.c
cc dummy.c -v -Wl,--verbose &> dummy.log
readelf -l a.out | grep ': /lib'
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、最後のコマンドから出力される結果は以下になるはずです。(ダイナミックリンカーの名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。)

```
[Requesting program interpreter: /lib/ld-linux.so.2]
```

ここで起動ファイルが正しく用いられていることを確認します。

```
grep -o '/usr/lib.*crt[lin].*succeeded' dummy.log
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、上のコマンドの出力は以下になるはずです。

```
/usr/lib/gcc/i686-pc-linux-gnu/4.8.1/../../../../crt1.o succeeded
/usr/lib/gcc/i686-pc-linux-gnu/4.8.1/../../../../crti.o succeeded
/usr/lib/gcc/i686-pc-linux-gnu/4.8.1/../../../../crtn.o succeeded
```

作業しているマシンアーキテクチャーによっては、上の結果が微妙に異なるかもしれません。その違いは、たいていは `/usr/lib/gcc` の次のディレクトリ名にあります。作業マシンが 64 ビット機である場合、ディレクトリ名の後ろの方に `lib64` という名が出てくることになります。ここで確認すべき重要なポイントは `gcc` が `/usr/lib` ディレクトリ配下に三つのファイル `crt*.o` を見つけ出しているかどうかです。

コンパイラーが正しいヘッダーファイルを読み取っているかどうかを検査します。

```
grep -B4 '^ /usr/include' dummy.log
```

上のコマンドは正常に終了すると、以下の出力を返します。

```
#include <...> search starts here:
/usr/lib/gcc/i686-pc-linux-gnu/4.8.1/include
/usr/local/include
/usr/lib/gcc/i686-pc-linux-gnu/4.8.1/include-fixed
/usr/include
```

もう一度触れておきますが、プラットフォームの「三つの組 (target triplet)」の次にくるディレクトリ名は CPU アーキテクチャーにより異なる点に注意してください。



注記

GCC のバージョン 4.3.0 では `limits.h` ファイルを無条件に `include-fixed` ディレクトリにインストールします。したがってそのディレクトリは存在していなければなりません。

次に、新たなリンカーが正しいパスを検索して用いられているかどうかを検査します。

```
grep 'SEARCH.*usr/lib' dummy.log |sed 's|; |\n|g'
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、最後のコマンドの出力は以下になるはずです。

```
SEARCH_DIR("/usr/i686-pc-linux-gnu/lib")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib")
SEARCH_DIR("/lib")
SEARCH_DIR("/usr/lib");
```

64 ビットシステムではさらにいくつかのディレクトリが出力されます。例えば x86_64 マシンであれば、その出力は以下ようになります。

```
SEARCH_DIR("/usr/x86_64-unknown-linux-gnu/lib64")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib64")
SEARCH_DIR("/lib64")
SEARCH_DIR("/usr/lib64")
SEARCH_DIR("/usr/x86_64-unknown-linux-gnu/lib")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib")
SEARCH_DIR("/lib")
SEARCH_DIR("/usr/lib");
```

次に `libc` が正しく用いられていることを確認します。

```
grep "/lib.*libc.so.6 " dummy.log
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、最後のコマンドの出力は以下になるはずです。(64 ビットマシンであれば `lib64` ディレクトリとなるはずです。)

```
attempt to open /lib/libc.so.6 succeeded
```

最後に GCC が正しくダイナミックリンカーを用いているかを確認します。

```
grep found dummy.log
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、上のコマンドの出力は以下になるはずです。(ダイナミックリンカーの名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。また 64 ビットマシンであれば `lib64` ディレクトリとなるはずです。)

```
found ld-linux.so.2 at /lib/ld-linux.so.2
```

出力結果が上と異なっていたり、出力が全く得られなかったりした場合は、何かが根本的に間違っているということです。どこに問題があるのか調査、再試行を行って解消してください。最もありがちな理由は、スペックファイルの修正を誤っていることです。問題を残したままこの先には進まないでください。

すべてが正しく動作したら、テストに用いたファイルを削除します。

```
rm -v dummy.c a.out dummy.log
```

最後に誤ったディレクトリにあるファイルを移動します。

```
mkdir -pv /usr/share/gdb/auto-load/usr/lib
mv -v /usr/lib/*gdb.py /usr/share/gdb/auto-load/usr/lib
```

6.17.2. GCC の構成

インストールプログラム: c++, cc (gcc へのリンク), cpp, g++, gcc, gcc-ar, gcc-nm, gcc-ranlib, and gcov
 インストールライブラリ: libasan.{a,so}, libatomic.{a,so}, libgcc.a, libgcc_eh.a, libgcc_s.so, libgcov.a, libgomp.{a,so}, libitm.{a,so}, liblto_plugin.so, libmudflap.{a,so}, libmudflapth.{a,so}, libquadmath.{a,so}, libssp.{a,so}, libssp_nonshared.a, libstdc++.a, libsupc++.a
 インストールディレクトリ: /usr/include/c++, /usr/lib/gcc, /usr/share/gcc-4.8.1

概略説明

c++	C++ コンパイラー
cc	C コンパイラー
cpp	C プリプロセッサ。コンパイラーがこれを利用して、ソース内に記述された #include、#define や同じようなステートメントを展開します。
g++	C++ コンパイラー
gcc	C コンパイラー
gcc-ar	ar に関連するラッパーであり、コマンドラインへのプラグインを追加します。このプログラムは「リンク時の最適化 (link time optimization)」機能を付与する場合にのみ利用されます。デフォルトのビルドオプションでは有効にはなりません。
gcc-nm	nm に関連するラッパーであり、コマンドラインへのプラグインを追加します。このプログラムは「リンク時の最適化 (link time optimization)」機能を付与する場合にのみ利用されます。デフォルトのビルドオプションでは有効にはなりません。
gcc-ranlib	ranlib に関連するラッパーであり、コマンドラインへのプラグインを追加します。このプログラムは「リンク時の最適化 (link time optimization)」機能を付与する場合にのみ利用されます。デフォルトのビルドオプションでは有効にはなりません。
gcov	カバレッジテストツール。プログラムを解析して、最適化が最も効果的となるのはどこかを特定します。
libgcc	gcc のランタイムサポートを提供します。
libgcov	GCC のプロファイリングを有効にした場合にこのライブラリがリンクされます。
libgomp	C/C++ や Fortran において、マルチプラットフォームでの共有メモリ並行プログラミング (multi-platform shared-memory parallel programming) を行うための、GNU による OpenMP API インプリメンテーションです。
liblto_plugin	GCC のリンク時における最適化 (Link Time Optimization; LTO) プラグイン。コンパイルユニット間での最適化を実現します。
libmudflap	GCC の配列境界チェック (bounds checking) 機能をサポートするルーチンを提供します。
libquadmath	GCC の4倍精度数値演算 (Quad Precision Math) ライブラリ API
libssp	GCC のスタック破壊を防止する (stack-smashing protection) 機能をサポートするルーチンを提供します。
libstdc++	標準 C++ ライブラリ
libsupc++	C++ プログラミング言語のためのサポートルーチンを提供します。

6.18. Sed-4.2.2

Sed パッケージはストリームエディターを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 6.7 MB

6.18.1. Sed のインストール

Sed をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --bindir=/bin --htmldir=/usr/share/doc/sed-4.2.2
```

configure オプションの意味

`--htmldir`

HTML ドキュメントをインストールするディレクトリを指定します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

HTML ドキュメントを生成します。

```
make html
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

HTML ドキュメントをインストールします。

```
make -C doc install-html
```

6.18.2. Sed の構成

インストールプログラム: sed
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/sed-4.2.2

概略説明

sed テキストファイルを一度の処理でフィルタリングし変換します。

6.19. Bzip2-1.0.6

Bzip2 パッケージはファイル圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。テキストファイルであれば、これまでよく用いられてきた gzip に比べて bzip2 の方が圧縮率の高いファイルを生成できます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 6.9 MB

6.19.1. Bzip2 のインストール

本パッケージのドキュメントをインストールするためにパッチを適用します。

```
patch -Np1 -i ../bzip2-1.0.6-install_docs-1.patch
```

以下のコマンドによりシンボリックリンクを相対的なものとしてインストールします。

```
sed -i 's@\(ln -s -f \)\$(PREFIX)/bin/@\1@' Makefile
```

man ページのインストール先を正しいディレクトリに修正します。

```
sed -i "s@(PREFIX)/man@(PREFIX)/share/man@g" Makefile
```

Bzip2 をコンパイルするための準備をします。

```
make -f Makefile-libbz2_so
make clean
```

make パラメーターの意味:

`-f Makefile-libbz2_so`

このパラメーターは Bzip2 のビルドにあたって通常の Makefile ファイルではなく Makefile-libbz2_so ファイルを利用することを指示します。これはダイナミックライブラリ libbz2.so ライブラリをビルドし、Bzip2 の各種プログラムをこれにリンクします。

パッケージのコンパイルとテストを行います。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make PREFIX=/usr install
```

共有化された bzip2 実行モジュールを /bin ディレクトリにインストールします。また必要となるシンボリックリンクを生成し不要なものを削除します。

```
cp -v bzip2-shared /bin/bzip2
cp -av libbz2.so* /lib
ln -sv ../../lib/libbz2.so.1.0 /usr/lib/libbz2.so
rm -v /usr/bin/{bunzip2,bzcat,bzip2}
ln -sv bzip2 /bin/bunzip2
ln -sv bzip2 /bin/bzcat
```

6.19.2. Bzip2 の構成

インストールプログラム: bunzip2 (bzip2 へのリンク), bzcat (bzip2 へのリンク), bzcmp (bzdifff へのリンク), bzdifff, bzgrep (bzgrep へのリンク), bzfgrep (bzgrep へのリンク), bzgrep, bzip2, bzip2recover, bzless (bzmooore へのリンク), bzmooore
インストールライブラリ: libbz2.{a,so}
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/bzip2-1.0.6

概略説明

bunzip2 bzip2 で圧縮されたファイルを解凍します。
bzcat 解凍結果を標準出力に出力します。
bzcmp bzip2 で圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
bzdifff bzip2 で圧縮されたファイルに対して diff を実行します。

bzegrep	bzip2 で圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
bzfgrep	bzip2 で圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
bzgrep	bzip2 で圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
bzip2	ブロックソート法（バロウズ-ホイラー変換）とハフマン符号化法を用いてファイル圧縮を行います。圧縮率は、従来用いられてきた「Lempel-Ziv」アルゴリズムによるもの、例えば gzip コマンドによるものに比べて高いものです。
bzip2recover	壊れた bzip2 ファイルの復旧を試みます。
bzless	bzip2 で圧縮されたファイルに対して less を実行します。
bzmore	bzip2 で圧縮されたファイルに対して more を実行します。
libbz2*	ブロックソート法（バロウズ-ホイラー変換）による可逆的なデータ圧縮を提供するライブラリ。

6.20. Pkg-config-0.28

pkg-config パッケージは configure や make による処理を通じて、インクルードパスやライブラリパスを提供するツールです。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 31 MB

6.20.1. Pkg-config のインストール

Pkg-config をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --with-internal-glib \
            --disable-host-tool \
            --docdir=/usr/share/doc/pkg-config-0.28
```

configure オプションの意味:

`--with-internal-glib`

これは pkg-config が内包しているバージョンの glib を利用するようにします。LFS においては Glib をインストールせず利用できないからです。

`--disable-host-tool`

本オプションは、pkg-config プログラムに対しての不要なハードリンクを生成しないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.20.2. Pkg-config の構成

インストールプログラム: pkg-config
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/pkg-config-0.28

概略説明

pkg-config 指定されたライブラリやパッケージに対するメタ情報を返します。

6.21. Ncurses-5.9

Ncurses パッケージは、端末に依存しない、文字ベースのスクリーン制御を行うライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.6 SBU
必要ディスク容量: 40 MB

6.21.1. Ncurses のインストール

Ncurses をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr          \  
            --mandir=/usr/share/man \  
            --with-shared          \  
            --without-debug        \  
            --enable-pc-files      \  
            --enable-widec
```

configure オプションの意味:

`--enable-widec`

本スイッチは通常のライブラリ (`libncurses.so.5.9`) ではなくワイド文字対応のライブラリ (`libncursesw.so.5.9`) をビルドすることを指示します。ワイド文字対応のライブラリは、マルチバイトロケールと従来の 8 ビットロケールの双方に対して利用可能です。通常のライブラリでは 8 ビットロケールに対してしか動作しません。ワイド文字対応と通常のものとは、ソース互換があるもののバイナリ互換がありません。

`--enable-pc-files`

本スイッチは `pkg-config` 用の `.pc` ファイルを生成しインストールすることを指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありますが、パッケージをインストールした後でないと実行できません。テストスイートのためのファイル群はサブディレクトリ `test/` 以下に残っています。詳しいことはそのディレクトリ内にある `README` ファイルを参照してください。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

共有ライブラリを `/lib` ディレクトリに移動します。これらはここにあるべきものです。

```
mv -v /usr/lib/libncursesw.so.5* /lib
```

ライブラリを移動させたので、シンボリックリンク先が存在しないことになります。そこでリンクを再生成します。

```
ln -sfv ../../lib/libncursesw.so.5 /usr/lib/libncursesw.so
```

アプリケーションによっては、ワイド文字対応ではないライブラリをリンカーが探し出すよう求めるものが多くあります。そのようなアプリケーションに対しては、以下のようなシンボリックリンクやリンカースクリプトを作り出して、ワイド文字対応のライブラリにリンクさせるよう仕向けます。

```
for lib in ncurses form panel menu ; do  
    rm -vf /usr/lib/lib${lib}.so  
    echo "INPUT(-l${lib}w)" > /usr/lib/lib${lib}.so  
    ln -sfv lib${lib}w.a /usr/lib/lib${lib}.a  
    ln -sfv ${lib}w.pc /usr/lib/pkgconfig/${lib}.pc  
done
```

```
ln -sfv libncurses++w.a /usr/lib/libncurses++a
```

最後に古いアプリケーションにおいて、ビルド時に `-lncurses` を指定するものがあるため、これもビルド可能なものにします。

```
rm -vf /usr/lib/libcursesw.so  
echo "INPUT(-lncursesw)" > /usr/lib/libcursesw.so  
ln -sfv libcurses.so /usr/lib/libcurses.so  
ln -sfv libcursesw.a /usr/lib/libcursesw.a  
ln -sfv libcurses.a /usr/lib/libcurses.a
```

必要なら Ncurses のドキュメントをインストールします。

```
mkdir -v      /usr/share/doc/ncurses-5.9
cp -v -R doc/* /usr/share/doc/ncurses-5.9
```



注記

ここまでの作業手順では、ワイド文字対応ではない Ncurses ライブラリは生成しませんでした。ソースからコンパイルして構築するパッケージなら、実行時にそのようなライブラリにリンクするものはないからです。バイナリコードしかないアプリケーションを取り扱う場合、あるいは LSB 対応を要する場合で、それがワイド文字対応ではないライブラリを必要とするなら、以下のコマンドによりそのようなライブラリを生成してください。

```
make distclean
./configure --prefix=/usr \
            --with-shared \
            --without-normal \
            --without-debug \
            --without-cxx-binding
make sources libs
cp -av lib/lib*.so.5* /usr/lib
```

6.21.2. Ncurses の構成

インストールプログラム: captainfo (tic へのリンク), clear, infocmp, infotocap (tic へのリンク), ncursesw5-config, reset (tset へのリンク), tabs, tic, toe, tput, tset
 インストールライブラリ: libcursesw.{a,so} (libcursesw.{a,so} へのシンボリックリンクおよびリ
 ンカースクリプト), libformw.{a,so}, libmenuw.{a,so}, libncurses++w.a,
 libncursesw.{a,so}, libpanelw.{a,so} これらに加えてワイド文字対応ではない通
 常のライブラリで、その名称から "w" を取り除いたもの。
 インストールディレクトリ: /usr/share/tabset, /usr/share/terminfo, /usr/share/doc/ncurses-5.9

概略説明

captainfo	termcap の記述を terminfo の記述に変換します。
clear	画面消去が可能ならこれを行います。
infocmp	terminfo の記述どうしを比較したり出力したりします。
infotocap	terminfo の記述を termcap の記述に変換します。
ncursesw5-config	ncurses の設定情報を提供します。
reset	端末をデフォルト設定に初期化します。
tabs	端末上のタブストップの設定をクリアしたり設定したりします。
tic	terminfo の定義項目に対するコンパイラです。これはソース形式の terminfo ファイルをバイナリ形式に変換し、ncurses ライブラリ内の処理ルーチンが利用できるようにします。terminfo ファイルは特定端末の特性に関する情報が記述されるものです。
toe	利用可能なすべての端末タイプを一覧表示します。そこでは端末名と簡単な説明を示します。
tput	端末に依存する機能設定をシェルが利用できるようにします。また端末のリセットや初期化、あるいは長い端末名称の表示も行います。
tset	端末の初期化に利用します。
libcurses	libncurses へのリンク。
libncurses	さまざまな方法により端末画面上に文字列を表示するための関数を提供します。これらの関数を用いた具体例として、カーネルの make menuconfig の実行によって表示されるメニューがあります。
libform	フォームを実装するための関数を提供します。
libmenu	メニューを実装するための関数を提供します。
libpanel	パネルを実装するための関数を提供します。

6.22. Shadow-4.1.5.1

Shadow パッケージはセキュアなパスワード管理を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 42 MB

6.22.1. Shadow のインストール



注記

もっと強力なパスワードを利用したい場合は <http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/postlfs/cracklib.html> にて示している Cracklib パッケージを参照してください。Cracklib パッケージは Shadow パッケージよりも前にインストールします。その場合 Shadow パッケージの configure スクリプトでは `--with-libcrack` パラメーターをつけて実行する必要があります。

`groups` コマンドとその man ページをインストールしないようにします。これは Coreutils パッケージにて、より良いバージョンが提供されているからです。

```
sed -i 's/groups$(EXEEXT) //' src/Makefile.in
find man -name Makefile.in -exec sed -i 's/groups\.1 / /' {} \;
```

パスワード暗号化に関して、デフォルトの crypt 手法ではなく、より強力な SHA-512 手法を用いることにします。こうしておくと 8文字以上のパスワード入力が可能となります。またメールボックスを取めるディレクトリとして Shadow ではデフォルトで `/var/spool/mail` ディレクトリを利用していますが、これは古いものであるため `/var/mail` ディレクトリに変更します。

```
sed -i -e 's#@ENCRYPT_METHOD DES@ENCRYPT_METHOD SHA512@' \
-e 's@/var/spool/mail@/var/mail@' etc/login.defs
```



注記

Cracklib のサポートを含めて Shadow をビルドする場合は以下を実行します。

```
sed -i 's@DICTPATH.*@DICTPATH\t/lib/cracklib/pw_dict@' \
etc/login.defs
```

Shadow をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --sysconfdir=/etc
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

不適切なディレクトリにインストールされるプログラムを移動させます。

```
mv -v /usr/bin/passwd /bin
```

6.22.2. Shadow の設定

このパッケージには、ユーザーやグループの追加、修正、削除、そのパスワードの設定、変更、その他の管理操作を行うユーティリティが含まれます。パスワードのシャドウイング (password shadowing) というものが何を意味するのか、その詳細についてはこのパッケージのソース内にある `doc/HOWTO` を参照してください。Shadow によるサポートを利用する場合、パスワード認証を必要とするプログラム (ディスプレイマネージャー、FTP プログラム、POP3、デーモン、など) は Shadow に準拠したものでなければなりません。つまりそれらのプログラムが、シャドウ化された (shadowed) パスワードを受け入れて動作しなければならないということです。

Shadow によるパスワードの利用を有効にするために、以下のコマンドを実行します。

```
pwconv
```

また Shadow によるグループパスワードを有効にするために、以下を実行します。

```
grpconv
```

Shadow の `useradd` コマンドに対する通常の設定には、注意すべき点があります。まず `useradd` コマンドによりユーザーを生成する場合のデフォルトの動作では、ユーザー名と同じグループを自動生成します。ユーザーID (UID) とグループID (GID) は 1000 以上が割り当てられます。 `useradd` コマンドの利用時に特にパラメータを与えなければ、追加するユーザーのグループは新たな固有グループが生成されることになります。この動作が不適当であれば `useradd` コマンドの実行時に `-g` パラメーターを利用することが必要です。デフォルトで適用されるパラメーターは `/etc/default/useradd` ファイルに定義されています。このファイルのパラメーター定義を必要に応じて書き換えてください。

`/etc/default/useradd` のパラメーター説明

`GROUP=1000`

このパラメーターは `/etc/group` ファイルにて設定されるグループIDの先頭番号を指定します。必要なら任意の数値に設定することもできます。 `useradd` コマンドは既存の UID 値、GID 値を再利用することはありません。このパラメーターによって定義された数値が実際に指定された場合、この値以降で利用可能な値が利用されます。また `useradd` コマンドの実行時に、パラメーター `-g` を利用せず、かつグループID 1000 のグループが存在していなかった場合は、以下のようなメッセージが出力されます。 `useradd: unknown GID 1000 ("GID 1000 が不明です")` このメッセージは無視することができます。この場合グループIDには 1000 が利用されます。

`CREATE_MAIL_SPOOL=yes`

このパラメーターは `useradd` コマンドの実行によって、追加されるユーザー用のメールボックスに関するファイルが生成されます。 `useradd` コマンドは、このファイルのグループ所有者を `mail` (グループID 0660) に設定します。メールボックスに関するファイルを生成したくない場合は、以下のコマンドを実行します。

```
sed -i 's/yes/no/' /etc/default/useradd
```

6.22.3. root パスワードの設定

root ユーザーのパスワードを設定します。

```
passwd root
```

6.22.4. Shadow の構成

インストールプログラム: `chage`, `chfn`, `chgpaswd`, `chpaswd`, `chsh`, `expiry`, `faillog`, `gpaswd`, `groupadd`, `groupdel`, `groupmems`, `groupmod`, `grpck`, `grpconv`, `grpunconv`, `lastlog`, `login`, `logoutd`, `newgrp`, `newusers`, `nologin`, `passwd`, `pwck`, `pwconv`, `pwunconv`, `sg` (`newgrp` へのリンク), `su`, `useradd`, `userdel`, `usermod`, `vigr` (`vipw` へのリンク), `vipw`

インストールディレクトリ: `/etc/default`

概略説明

<code>chage</code>	ユーザーのパスワード変更を行うべき期間を変更します。
<code>chfn</code>	ユーザーのフルネームや他の情報を変更します。
<code>chgpaswd</code>	グループのパスワードをバッチモードにて更新します。
<code>chpaswd</code>	ユーザーのパスワードをバッチモードにて更新します。
<code>chsh</code>	ユーザーのデフォルトのログインシェルを変更します。
<code>expiry</code>	現時点でのパスワード失効に関する設定をチェックし更新します。
<code>faillog</code>	ログイン失敗のログを調査します。ログインの失敗を繰り返すことでアカウントがロックされる際の、最大の失敗回数を設定します。またその失敗回数をリセットします。
<code>gpaswd</code>	グループに対してメンバーや管理者を追加、削除します。
<code>groupadd</code>	指定した名前でグループを生成します。
<code>groupdel</code>	指定された名前のグループを削除します。

groupmems	スーパーユーザー権限を持たなくても、自分自身のグループのメンバーリストを管理可能とします。
groupmod	指定されたグループの名前や GID を修正します。
grpck	グループファイル <code>/etc/group</code> と <code>/etc/gshadow</code> の整合性を確認します。
grpconv	通常のグループファイルから Shadow グループファイルを生成、更新します。
grpunconv	<code>/etc/gshadow</code> ファイルを元に <code>/etc/group</code> ファイルを更新し <code>/etc/gshadow</code> ファイルを削除します。
lastlog	全ユーザーの中での最新ログインの情報、または指定ユーザーの最新ログインの情報を表示します。
login	ユーザーのログインを行います。
logoutd	ログオン時間とポートに対する制限を実施するためのデーモン。
newgrp	ログインセッション中に現在の GID を変更します。
newusers	ユーザーアカウントの情報を生成または更新します。
nologin	ユーザーアカウントが利用不能であることをメッセージ表示します。 利用不能なユーザーアカウントに対するデフォルトシェルとして利用することを意図しています。
passwd	ユーザーアカウントまたはグループアカウントに対するパスワードを変更します。
pwck	パスワードファイル <code>/etc/passwd</code> と <code>/etc/shadow</code> の整合性を確認します。
pwconv	通常のパスワードファイルを元に <code>shadow</code> パスワードファイルを生成、更新します。
pwunconv	<code>/etc/shadow</code> ファイルを元に <code>/etc/passwd</code> ファイルを更新し <code>/etc/shadow</code> を削除します。
sg	ユーザーの GID を指定されたグループにセットした上で、指定されたコマンドを実行します。
su	ユーザー ID とグループ ID を変更してシェルを実行します。
useradd	指定した名前で新たなユーザーを生成します。あるいは新規ユーザーのデフォルトの情報を更新します。
userdel	指定されたユーザーアカウントを削除します。
usermod	指定されたユーザーのログイン名、UID (User Identification)、利用シェル、初期グループ、ホームディレクトリなどを変更します。
vigr	<code>/etc/group</code> ファイル、あるいは <code>/etc/gshadow</code> ファイルを編集します。
vipw	<code>/etc/passwd</code> ファイル、あるいは <code>/etc/shadow</code> ファイルを編集します。

6.23. Util-linux-2.23.2

Util-linux パッケージは、さまざまなユーティリティプログラムを提供します。ファイルシステム、コンソール、パーティション、カーネルメッセージなどを取り扱うユーティリティです。

概算ビルド時間: 0.6 SBU
必要ディスク容量: 89 MB

6.23.1. FHS コンプライアンス情報

FHS では `adjtime` ファイルの配置場所として `/etc` ディレクトリではなく `/var/lib/hwclock` ディレクトリを推奨しています。hwclock プログラムを FHS 準拠とするために以下を実行します。

```
sed -i -e 's@etc/adjtime@var/lib/hwclock/adjtime@g' \
    $(grep -rl '/etc/adjtime' .)

mkdir -pv /var/lib/hwclock
```

6.23.2. Util-linux のインストール

```
./configure --disable-su --disable-sulogin --disable-login
```

configure オプションの意味

`--disable-*`

これらのスイッチは `su`, `sulogin`, `login` をビルドしないようにするものです。同名のプログラムが 6.22. 「Shadow-4.1.5.1」 と 6.59. 「Sysvinit-2.88dsf」 により提供されます。このプログラムは Linux-PAM を必要とします。Linux-PAM は LFS ではビルドしません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

必要なら `root` ユーザー以外にて、以下のようにテストスイートを実行します。



警告

`root` ユーザーによりテストスイートを実行すると、システムに悪影響を及ぼすことがあります。テストスイートを実行するためには、カーネルオプション `CONFIG_SCSI_DEBUG` が現環境にて有効でなければなりません。`CONFIG_SCSI_DEBUG` オプションはモジュールとしてビルドしておかなければならず、カーネルに組み込んでいるとブートできません。またテストを完全に実施するには BLFS での各種パッケージのインストールも必要になります。テストが必要であるなら、LFS システムを完成した後に、再起動したシステムにて以下を実行します。

```
bash tests/run.sh --srcdir=$PWD --builddir=$PWD
```

```
chown -Rv nobody .
su nobody -s /bin/bash -c "PATH=$PATH make check"
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```


6.23.3. Util-linux の構成

インストールプログラム:	addpart, agetty, blkid, blockdev, cal, cfdisk, chcpu, chrt, col, colcrt, colrm, column, ctrlaltdel, cytune, delpart, dmesg, eject, fallocate, fdformat, fdisk, findfs, findmnt, flock, fsck, fsck.cramfs, fsck.minix, fsfreeze, fstrim, getopt, hexdump, hwclock, i386, ionice, ipcmk, ipcrm, ipcs, isosize, ldattach, linux32, linux64, logger, look, losetup, lsblk, lscpu, lslocks, mcookie, mkfs, mkfs.bfs, mkfs.cramfs, mkfs.minix, mkswap, more, mount, mountpoint, namei, partx, pg, pivot_root, prlimit, raw, readprofile, rename, renice, resizepart, rev, rtcwake, script, scriptreplay, setarch, setsid, setter, sfdisk, swapon, swaplabel, swapon (swapon へのリンク), swapon, switch_root, tailf, taskset, ul, umount, unshare, utmpdump, uuid, uuidgen, wall, wdctl, whereis, wipefs, x86_64
インストールライブラリ:	libblkid.{a,so}, libmount.{a,so}, libuuid.{a,so}
インストールディレクトリ:	/usr/include/blkid, /usr/include/libmount, /usr/include/uuid, /usr/share/getopt, /var/lib/hwclock

概略説明

addpart	Linux カーネルに対して新しいパーティションの情報を通知します。
agetty	tty ポートを開いてログイン名の入力を受け付けます。そして login プログラムを起動します。
blkid	ブロックデバイスの属性を見つけて表示するためのコマンドラインユーティリティ。
blockdev	コマンドラインからブロックデバイスの ioctl の呼び出しを行います。
cal	簡単なカレンダーを表示します。
cfdisk	指定されたデバイスのパーティションテーブルを操作します。
chcpu	CPU の状態を変更します。
chrt	リアルタイムプロセスの属性を操作します。
col	逆改行 (reverse line feeds) を取り除きます。
colcrt	性能が不十分な端末のために nroff の出力結果から重ね書き (overstriking) や半改行 (half-lines) を取り除きます。
colrm	指定されたカラムを取り除きます。
column	指定されたファイルの内容を複数カラムに整形します。
ctrlaltdel	ハードリセットまたはソフトリセットを行うために Ctrl+Alt+Del キー押下時の機能を設定します。
cytune	Cyclades カード用のシリアルラインドライバのパラメーターを設定します。
delpart	Linux カーネルに対してパーティションが削除されているかどうかを確認します。
dmesg	カーネルのブートメッセージをダンプします。
eject	リムーバブルメディアをイジェクトします。
fallocate	ファイルのための領域を事前割り当てします。
fdformat	フロッピーディスクの低レベル (low-level) フォーマットを行います。
fdisk	指定されたデバイスのパーティションテーブルを操作します。
findfs	ファイルシステムに対するラベルまたは UUID (Universally Unique Identifier) を使ってファイルシステムを検索します。
findmnt	libmount ライブラリに対するコマンドラインインターフェース。mountinfo, fstab, mtab の各ファイルに対するの処理を行います。
flock	ファイルロックを取得して、ロックしたままコマンドを実行します。
fsck	ファイルシステムのチェックを行い、必要に応じて修復を行います。
fsck.cramfs	指定されたデバイス上の Cramfs ファイルシステムに対して一貫性検査 (consistency check) を行います。
fsck.minix	指定されたデバイス上の Minix ファイルシステムに対して一貫性検査 (consistency check) を行います。
fsfreeze	カーネルドライバ制御における FIFREEZE/FITHAW ioctl に対する単純なラッパープログラム。
fstrim	マウントされたファイルシステム上にて、利用されていないブロックを破棄します。

getopt	指定されたコマンドラインのオプション引数を解析します。
hexdump	指定されたファイルを 16進数書式または他の指定された書式でダンプします。
hwclock	システムのハードウェアクロックを読み取ったり設定したりします。このハードウェアクロックはリアルタイムクロック (Real-Time Clock; RTC) または BIOS (Basic Input-Output System) クロックとも呼ばれます。
i386	setarch へのシンボリックリンク。
ionice	プログラムに対する I/O スケジュールクラスとスケジュール優先度を取得または設定します。
ipcmk	さまざまな IPC リソースを生成します。
ipcrm	指定された IPC (Inter-Process Communication) リソースを削除します。
ipcs	IPC のステータス情報を提供します。
isozsize	iso9660 ファイルシステムのサイズを表示します。
kill	プロセスに対してシグナルを送信します。
ldattach	シリアル回線 (serial line) に対して回線規則 (line discipline) を割り当てます。
linux32	setarch へのシンボリックリンク。
linux64	setarch へのシンボリックリンク。
logger	指定したメッセージをシステムログに出力します。
look	指定された文字列で始まる行を表示します。
losetup	ループデバイス (loop device) の設定と制御を行います。
lsblk	ブロックデバイスのすべて、あるいは指定されたものの情報を、木構造のような形式で一覧表示します。
lscpu	CPU アーキテクチャーの情報を表示します。
lslocks	ローカルのシステムロックを一覧表示します。
mcookie	xauth のためのマジッククッキー (128ビットのランダムな16進数値) を生成します。
mkfs	デバイス上にファイルシステムを構築します。(通常はハードディスクパーティションに対して行います。)
mkfs.bfs	SCO (Santa Cruz Operations) の bfs ファイルシステムを生成します。
mkfs.cramfs	cramfs ファイルシステムを生成します。
mkfs.minix	Minix ファイルシステムを生成します。
mkswap	指定されたデバイスまたはファイルをスワップ領域として初期化します。
more	テキストを一度に一画面分だけ表示するフィルタープログラム。
mount	ファイルシステムツリー内の特定のディレクトリを、指定されたデバイス上のファイルシステムに割り当てます。
mountpoint	ディレクトリがマウントポイントであるかどうかをチェックします。
namei	指定されたパスに存在するシンボリックリンクを表示します。
partx	カーネルに対して、ディスク上にパーティションが存在するか、何番が存在するかを伝えます。
pg	テキストファイルを一度に一画面分表示します。
pivot_root	指定されたファイルシステムを、現在のプロセスに対する新しいルートファイルシステムにします。
prlimit	プロセスが利用するリソースの限界値を取得または設定します。
raw	Linux の raw キャラクターデバイスをブロックデバイスにバインドします。
readprofile	カーネルのプロファイリング情報を読み込みます。
rename	指定されたファイルの名称を変更します。
renice	実行中のプロセスの優先度を変更します。
resizepart	Linux カーネルに対してパーティションのリサイズを指示します。
rev	指定されたファイル内の行の並びを入れ替えます。
rtcwake	指定された起動時刻までの間、システムをスリープ状態とするモードを指定します。
script	端末セッション上での出力結果の写し (typescript) を生成します。
scriptreplay	タイミング情報 (timing information) を利用して、出力結果の写し (typescript) を再生します。

setarch	新しいプログラム環境にて、表示されるアーキテクチャーを変更します。 また設定フラグ (personality flag) の設定も行います。
setsid	新しいセッションで指定されたプログラムを実行します。
setterm	端末の属性を設定します。
sfdisk	ディスクパーティションテーブルを操作します。
swapon	ページングまたはスワッピングに利用しているデバイスまたはファイルを有効にします。 また現在利用されているデバイスまたはファイルを一覧表示します。
switch_root	別のファイルシステムを、マウントツリーのルートとして変更します。
tailf	ログファイルの更新を監視します。 ログファイルの最終の10行が表示され、ログファイルに新たに書き込みが行われると表示更新します。
taskset	プロセスの CPU 親和性 (affinity) を表示または設定します。
ul	使用中の端末にて、アンダースコア文字を、エスケープシーケンスを用いた下線文字に変換するためのフィルター。
umount	システムのファイルツリーからファイルシステムを切断します。
unshare	上位の名前空間とは異なる名前空間にてプログラムを実行します。
utmpdump	指定されたログインファイルの内容を分かりやすい書式で表示します。
uuid	UUID ライブラリから利用されるデーモン。 時刻情報に基づく UUID を、安全にそして一意性を確保して生成します。
uuidgen	新しい UUID を生成します。 生成される UUID は当然、他に生成されている UUID とは異なり、自他システムでも過去現在にわたってもユニークなものです。
wall	ファイルの内容、あるいはデフォルトでは標準入力から入力された内容を、現在ログインしている全ユーザーの端末上に表示します。
wdctl	ハードウェアの watchdog ステータスを表示します。
whereis	指定されたコマンドの実行モジュール、ソース、man ページの場所を表示します。
wipefs	ファイルシステムのシグニチャーをデバイスから消去します。
x86_64	setarch へのシンボリックリンク。
libblkid	デバイスの識別やトークンの抽出を行う処理ルーチンを提供します。
libmount	ブロックデバイスのマウントとアンマウントに関する処理ルーチンを提供します。
libuuid	ローカルシステム内だけに限らずアクセスされるオブジェクトに対して、一意性が保証された識別子を生成する処理ルーチンを提供します。

6.24. Psmisc-22.20

Psmisc パッケージは稼動中プロセスの情報表示を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 4.2 MB

6.24.1. Psmisc のインストール

Psmisc をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

killall プログラムと fuser プログラムを、FHS が規定しているディレクトリに移動します。

```
mv -v /usr/bin/fuser /bin
mv -v /usr/bin/killall /bin
```

6.24.2. Psmisc の構成

インストールプログラム: fuser, killall, peekfd, prtstat, pstree, pstree.x11 (pstree へのリンク)

概略説明

fuser	指定されたファイルまたはファイルシステムを利用しているプロセスのプロセス ID (PID) を表示します。
killall	プロセス名を用いてそのプロセスを終了 (kill) させます。指定されたコマンドを起動しているすべてのプロセスに対してシグナルが送信されます。
peekfd	PID を指定することによって、稼動中のそのプロセスのファイルディスクリプターを調べます。
prtstat	プロセスに関する情報を表示します。
pstree	稼働中のプロセスをツリー形式で表示します。
pstree.x11	pstree と同じです。ただし終了時には確認画面が表示されます。

6.25. Procps-ng-3.3.8

Procps-ng パッケージはプロセス監視を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 13 MB

6.25.1. Procps-ng のインストール

procps-ng をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --exec-prefix= \
            --libdir=/usr/lib \
            --docdir=/usr/share/doc/procps-ng-3.3.8 \
            --disable-static \
            --disable-skill \
            --disable-kill
```

configure オプションの意味

`--disable-skill`

本スイッチは、可搬性のない古いコマンド skill と snice をビルドしないようにします。

`--disable-kill`

本スイッチは kill コマンドをビルドしないようにします。このコマンドは util-linux パッケージにてインストールされます。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

LFS においてテストスイートを実行するには多少の修正が必要です。tty デバイスを利用しないスクリプトが1つ失敗するため、これを除外することにします。テストスイートを実行するために、以下のコマンドを実行します。

```
sed -i -r 's|(pmap_initname)\\$|\1|' testsuite/pmap.test/pmap.exp
```

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

/usr がマウントされていない場合でもライブラリが識別されるように、ライブラリの収容ディレクトリを移動させます。

```
mv -v /usr/lib/libprocps.so.* /lib
ln -sfv ../../lib/libprocps.so.1.1.2 /usr/lib/libprocps.so
```

6.25.2. Procps-ng の構成

インストールプログラム: free, pgrep, pkill, pmap, ps, pwdx, slabtop, sysctl, tload, top, uptime, vmstat, w, watch
インストールライブラリ: libprocps.so

概略説明

free 物理メモリ、スワップメモリの双方において、メモリの使用量、未使用量を表示します。
pgrep プロセスの名前などの属性によりプロセスを調べます。
pkill プロセスの名前などの属性によりプロセスに対してシグナルを送信します。
pmap 指定されたプロセスのメモリマップを表示します。
ps 現在実行中のプロセスを一覧表示します。
pwdx プロセスが実行されているカレントディレクトリを表示します。
slabtop リアルタイムにカーネルのスラブキャッシュ (slab cache) 情報を詳細に示します。

<code>sysctl</code>	システム稼動中にカーネル設定を修正します。
<code>tload</code>	システムの負荷平均 (load average) をグラフ化して表示します。
<code>top</code>	CPU をより多く利用しているプロセスの一覧を表示します。これはリアルタイムにプロセッサの動作状況を逐次表示します。
<code>uptime</code>	システムの稼動時間、ログインユーザー数、システム負荷平均 (load average) を表示します。
<code>vmstat</code>	仮想メモリの統計情報を表示します。そこではプロセス、メモリ、ページング、ブロック入出力 (Input/Output; IO)、トラップ、CPU 使用状況を表示します。
<code>w</code>	どのユーザーがログインしていて、どこから、そしていつからログインしているかを表示します。
<code>watch</code>	指定されたコマンドを繰り返し実行します。そしてその出力結果の先頭の一画面分を表示します。出力結果が時間の経過とともにどのように変わるかを確認することができます。
<code>libproc</code>	本パッケージのほとんどのプログラムが利用している関数を提供します。

6.26. E2fsprogs-1.42.8

E2fsprogs パッケージは ext2 ファイルシステムを扱うユーティリティを提供します。これは同時に ext3、ext4 ジャーナリングファイルシステムもサポートします。

概算ビルド時間: 1.7 SBU
必要ディスク容量: 64 MB

6.26.1. E2fsprogs のインストール

はじめに縮退テストに対する修正を行います。

```
sed -i -e 's/mke2fs/$MKE2FS/' -e 's/debugfs/$DEBUGFS/' tests/f_extent_oobounds/script
```

E2fsprogs パッケージは、ソースディレクトリ内にサブディレクトリを作ってビルドすることが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd build
```

E2fsprogs をコンパイルするための準備をします。

```
../configure --prefix=/usr \
              --with-root-prefix="" \
              --enable-elf-shlibs \
              --disable-libblkid \
              --disable-libuuid \
              --disable-uuid \
              --disable-fsck
```

configure オプションの意味:

`--with-root-prefix=""`

e2fsck などのプログラムは、極めて重要なものです。例えば /usr ディレクトリがマウントされていない時であっても、そういったプログラムは動作しなければなりません。それらは /lib ディレクトリや /sbin ディレクトリに置かれるべきものです。もしこのオプションの指定がなかったら、プログラムが /usr ディレクトリにインストールされてしまいます。

`--enable-elf-shlibs`

このオプションは、本パッケージ内のプログラムが利用する共有ライブラリを生成します。

`--disable-*`

このオプションは libuuid ライブラリ、libblkid ライブラリ、uuidd デーモン、fsck ラッパーをいずれもビルドせずインストールしないようにします。これらは Util-Linux パッケージによって既にインストールされています。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

E2fsprogs にて行われるテストの中には 256 MB のメモリ割り当てを行うものがあります。この容量を確保できるだけの RAM がない場合は、十分なスワップ領域が利用可能であることを確認してください。スワップ領域の生成と有効化については 2.3. 「ファイルシステムの生成」と 2.4. 「新しいパーティションのマウント」を参照してください。またテストの中に、以下のようなものが三つあります。そのテストとは、テラバイトの容量を有する二つのパーティションを割り当てようとし、未使用のそのようなディスクがなければテストに失敗するというものです。

実行モジュール、ドキュメント、共有ライブラリをインストールします。

```
make install
```

スタティックライブラリとヘッダーファイルをインストールします。

```
make install-libs
```

スタティックライブラリへの書き込みを可能とします。これは後にデバッグシンボルを取り除くために必要となります。

```
chmod -v u+w /usr/lib/{libcom_err,libe2p,libext2fs,libss}.a
```

本パッケージは gzip 圧縮された .info ファイルをインストールしますが、共通的な dir を更新しません。そこで以下のコマンドにより gzip ファイルを解凍した上で dir ファイルを更新します。

```
gunzip -v /usr/share/info/libext2fs.info.gz
install-info --dir-file=/usr/share/info/dir /usr/share/info/libext2fs.info
```

必要なら、以下のコマンドを実行して追加のドキュメントをインストールします。

```
makeinfo -o doc/com_err.info ../lib/et/com_err.texinfo
install -v -m644 doc/com_err.info /usr/share/info
install-info --dir-file=/usr/share/info/dir /usr/share/info/com_err.info
```

6.26.2. E2fsprogs の構成

インストールプログラム:	badblocks, chattr, compile_et, debugfs, dumpe2fs, e2fsck, e2image, e2label, e2undo, fsck.ext2, fsck.ext3, fsck.ext4, fsck.ext4dev, logsave, lsattr, mk_cmds, mke2fs, mkfs.ext2, mkfs.ext3, mkfs.ext4, mkfs.ext4dev, resize2fs, tune2fs
インストールライブラリ:	libcom_err.{a,so}, libe2p.{a,so}, libext2fs.{a,so}, libquota.a, libss.{a,so}
インストールディレクトリ:	/usr/include/e2p, /usr/include/et, /usr/include/ext2fs, /usr/include/quota, /usr/include/ss, /usr/share/et, /usr/share/ss

概略説明

badblocks	デバイス（通常はディスクパーティション）の不良ブロックを検索します。
chattr	ext2 ファイルシステム上のファイル属性を変更します。 ext2 ファイルシステムのジャーナリング版である ext3 ファイルシステムにおいても変更を行います。
compile_et	エラーテーブルコンパイラ。これはエラーコード名とメッセージの一覧を、com_err ライブラリを利用する C ソースコードとして変換するものです。
debugfs	ファイルシステムデバッガ。これは ext2 ファイルシステムの状態を調査し変更することができます。
dumpe2fs	指定されたデバイス上にあるファイルシステムについて、スーパーブロックの情報とブロックグループの情報を表示します。
e2fsck	ext2 ファイルシステムと ext3 ファイルシステムをチェックし、必要なら修復を行うことができます。
e2image	ext2 ファイルシステムの重要なデータをファイルに保存します。
e2label	指定されたデバイス上にある ext2 ファイルシステムのラベルを表示または変更します。
e2undo	デバイス上にある ext2/ext3/ext4 ファイルシステムの undo ログを再実行します。これは e2fsprogs プログラムが処理に失敗した際に undo を行うこともできます。
fsck.ext2	デフォルトでは ext2 ファイルシステムをチェックします。これは e2fsck へのハードリンクです。
fsck.ext3	デフォルトでは ext3 ファイルシステムをチェックします。これは e2fsck へのハードリンクです。
fsck.ext4	デフォルトでは ext4 ファイルシステムをチェックします。これは e2fsck へのハードリンクです。
fsck.ext4dev	デフォルトでは ext4 ファイルシステムの開発版をチェックします。これは e2fsck へのハードリンクです。
logsave	コマンドの出力結果をログファイルに保存します。
lsattr	ext2 ファイルシステム上のファイル属性を一覧表示します。
mk_cmds	コマンド名とヘルプメッセージの一覧を、サブシステムライブラリ libss を利用する C ソースコードとして変換するものです。

<code>mke2fs</code>	指定されたデバイス上に <code>ext2</code> ファイルシステム、または <code>ext3</code> ファイルシステムを生成します。
<code>mkfs.ext2</code>	デフォルトでは <code>ext2</code> ファイルシステムを生成します。これは <code>mke2fs</code> へのハードリンクです。
<code>mkfs.ext3</code>	デフォルトでは <code>ext3</code> ファイルシステムを生成します。これは <code>mke2fs</code> へのハードリンクです。
<code>mkfs.ext4</code>	デフォルトでは <code>ext4</code> ファイルシステムを生成します。これは <code>mke2fs</code> へのハードリンクです。
<code>mkfs.ext4dev</code>	デフォルトでは <code>ext4</code> ファイルシステム開発版を生成します。これは <code>mke2fs</code> へのハードリンクです。
<code>resize2fs</code>	<code>ext2</code> ファイルシステムを拡張または縮小するために利用します。
<code>tune2fs</code>	<code>ext2</code> ファイルシステム上にて調整可能なシステムパラメータを調整します。
<code>libcom_err</code>	共通的なエラー表示ルーチン。
<code>libe2p</code>	以下のコマンド <code>dumpe2fs</code> 、 <code>chattr</code> 、 <code>lsattr</code> が利用します。
<code>libext2fs</code>	ユーザーレベルのプログラムが <code>ext2</code> ファイルシステムを操作可能とするためのルーチンを提供します。
<code>libquota</code>	クォータ (quota) ファイルや <code>ext4</code> スーパーブロックフィールドの生成更新を行うインターフェースを提供します。
<code>libss</code>	<code>debugfs</code> コマンドが利用します。

6.27. Coreutils-8.21

Coreutils パッケージはシステムの基本的な特性を表示したり設定したりするためのユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 3.4 SBU
必要ディスク容量: 116 MB

6.27.1. Coreutils のインストール

POSIX では Coreutils により生成されるプログラムは、マルチバイトロケールであっても、文字データを正しく取り扱うことを求めています。以下のパッチは標準に準拠することと、国際化処理に関連するバグを解消することを行います。

```
patch -Np1 -i ../coreutils-8.21-i18n-1.patch
```



注記

このパッチには以前は多くのバグがありました。新たなバグを発見したら、Coreutils の開発者に報告する前に、このパッチを適用せずにバグが再現するかどうかを確認してください。

Coreutils をコンパイルするための準備をします。

```
FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1 ./configure \
  --prefix=/usr \
  --libexecdir=/usr/lib \
  --enable-no-install-program=kill,uptime
```

configure オプションの意味:

`--enable-no-install-program=kill,uptime`

指定のプログラムは、後に他のパッケージからインストールするため Coreutils からはインストールしないことを指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

テストスイートを実行しない場合は「パッケージをインストールします。」と書かれたところまで読み飛ばしてください。

テストスイートを実行します。まずは root ユーザーに対するテストを実行します。

```
make NON_ROOT_USERNAME=nobody check-root
```

ここからのテストは nobody ユーザーにより実行します。ただしいくつかのテストでは、複数のグループに属するユーザーを必要とします。そのようなテストを確実に実施するために、一時的なグループを作って nobody ユーザーがそれに属するようにします。

```
echo "dummy:x:1000:nobody" >> /etc/group
```

特定のファイルのパーミッションを変更して root ユーザー以外でもコンパイルとテストができるようにします。

```
chown -Rv nobody .
```

テストを実行します。su 環境において PATH に /tools/bin が含まれていることを確認してください。

```
su nobody -s /bin/bash \
  -c "PATH=$PATH make RUN_EXPENSIVE_TESTS=yes check"
```

一時的に作成したグループを削除します。

```
sed -i '/dummy/d' /etc/group
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

FHS が規定しているディレクトリにプログラムを移します。

```
mv -v /usr/bin/{cat,chgrp,chmod,chown,cp,date,dd,df,echo} /bin
mv -v /usr/bin/{false,ln,ls,mkdir,mknod,mv,pwd,rm} /bin
mv -v /usr/bin/{rmdir,stty,sync,true,uname,test,[]} /bin
mv -v /usr/bin/chroot /usr/sbin
mv -v /usr/share/man/man1/chroot.1 /usr/share/man/man8/chroot.8
sed -i s/\`1\`/\`8\`/1 /usr/share/man/man8/chroot.8
```

LFS-ブートスクリプトパッケージにあるスクリプトでは、head、sleep、nice に依存しているものがあります。ブート処理の初期段階においては /usr ディレクトリは認識されないため、上のプログラムはルートパーティションに移す必要があります。

```
mv -v /usr/bin/{head,sleep,nice} /bin
```

6.27.2. Coreutils の構成

インストールプログラム:	[, base64, basename, cat, chcon, chgrp, chmod, chown, chroot, cksum, comm, cp, csplit, cut, date, dd, df, dir, dircolors, dirname, du, echo, env, expand, expr, factor, false, fmt, fold, groups, head, hostid, id, install, join, link, ln, logname, ls, md5sum, mkdir, mkfifo, mknod, mktemp, mv, nice, nl, nohup, nproc, od, paste, pathchk, pinky, pr, printenv, printf, ptx, pwd, readlink, realpath, rm, rmdir, runcon, seq, shasum, sha224sum, sha256sum, sha384sum, sha512sum, shred, shuf, sleep, sort, split, stat, stdbuf, stty, sum, sync, tac, tail, tee, test, timeout, touch, tr, true, truncate, tsort, tty, uname, unexpand, uniq, unlink, users, vdir, wc, who, whoami, yes
インストールライブラリ:	libstdbuf.so
インストールディレクトリ:	/usr/libexec/coreutils

概略説明

base64	base64 (RFC 3548) 規格に従ってデータのエンコード、デコードを行います。
basename	ファイル名からパス部分と指定されたサフィックスを取り除きます。
cat	複数ファイルを連結して標準出力へ出力します。
chcon	ファイルやディレクトリに対してセキュリティコンテキスト (security context) を変更します。
chgrp	ファイルやディレクトリのグループ所有権を変更します。
chmod	指定されたファイルのパーミッションを、指定されたモードに変更します。モードは、変更内容を表す文字表現か、8進数表現を用いることができます。
chown	ファイルやディレクトリの所有者またはグループを変更します。
chroot	指定したディレクトリを / ディレクトリとみなしてコマンドを実行します。
cksum	指定された複数のファイルについて、CRC (Cyclic Redundancy Check; 巡回冗長検査) チェックサム値とバイト数を表示します。
comm	ソート済みの二つのファイルを比較して、一致しない固有の行と一致する行を三つのカラムに分けて出力します。
cp	ファイルをコピーします。
csplit	指定されたファイルを複数の新しいファイルに分割します。分割は指定されたパターンか行数により行います。そして分割後のファイルにはバイト数を出力します。
cut	指定されたフィールド位置や文字位置によってテキスト行を部分的に取り出します。
date	指定された書式により現在時刻を表示します。またはシステム日付を設定します。
dd	指定されたブロックサイズとブロック数によりファイルをコピーします。変換処理を行うことができます。
df	マウントされているすべてのファイルシステムに対して、ディスクの空き容量 (使用量) を表示します。あるいは指定されたファイルを含んだファイルシステムについてのみの情報を表示します。
dir	指定されたディレクトリの内容を一覧表示します。(ls コマンドに同じ。)
dircolors	環境変数 LS_COLOR にセットするべきコマンドを出力します。これは ls がカラー設定を行う際に利用します。

dirname	ファイル名から、ディレクトリ名以外のサフィックスを取り除きます。
du	カレントディレクトリ、指定ディレクトリ（サブディレクトリを含む）、指定された個々のファイルについて、それらが利用しているディスク使用量を表示します。
echo	指定された文字列を表示します。
env	環境設定を変更してコマンドを実行します。
expand	タブ文字を空白文字に変換します。
expr	表現式を評価します。
factor	指定された整数値すべてに対する素因数 (prime factor) を表示します。
false	何も行わず処理に失敗します。これは常に失敗を意味するステータスコードを返して終了します。
fmt	指定されたファイル内にて段落を整形します。
fold	指定されたファイル内の行を折り返します。
groups	ユーザーの所属グループを表示します。
head	指定されたファイルの先頭10行（あるいは指定された行数）を表示します。
hostid	ホスト識別番号（16進数）を表示します。
id	現在のユーザーあるいは指定されたユーザーについて、有効なユーザーID、グループID、所属グループを表示します。
install	ファイルコピーを行います。その際にパーミッションモードを設定し、可能なら所有者やグループも設定します。
join	2つのファイル内にて共通項を持つ行を結合します。
link	指定された名称により、ファイルへのハードリンクを生成します。
ln	ファイルに対するハードリンク、あるいはソフトリンク（シンボリックリンク）を生成します。
logname	現在のユーザーのログイン名を表示します。
ls	指定されたディレクトリ内容を一覧表示します。
md5sum	MD5 (Message Digest 5) チェックサム値を表示、あるいはチェックします。
mkdir	指定された名前のディレクトリを生成します。
mkfifo	指定された名前の FIFO (First-In, First-Out) を生成します。これは UNIX の用語で「名前付きパイプ (named pipe)」とも呼ばれます。
mknod	指定された名前のデバイスノードを生成します。デバイスノードはキャラクター型特殊ファイル (character special file)、ブロック特殊ファイル (block special file)、FIFO です。
mktemp	安全に一時ファイルを生成します。これはスクリプト内にて利用されます。
mv	ファイルあるいはディレクトリを移動、名称変更します。
nice	スケジューリング優先度を変更してプログラムを実行します。
nl	指定されたファイル内の行を数えます。
nohup	ハングアップに関係なくコマンドを実行します。その出力はログファイルにリダイレクトされます。
nproc	プロセスが利用可能なプロセスユニット (processing unit) の数を表示します。
od	ファイル内容を 8進数または他の書式でダンプします。
paste	指定された複数ファイルを結合します。その際には各行を順に並べて結合し、その間をタブ文字で区切ります。
pathchk	ファイル名が有効で移植可能であるかをチェックします。
pinky	軽量の finger クライアント。指定されたユーザーに関する情報を表示します。
pr	ファイルを印刷するために、ページ番号を振りカラム整形を行います。
printenv	環境変数の内容を表示します。
printf	指定された引数を指定された書式で表示します。C 言語の printf 関数に似ています。
ptx	指定されたファイル内のキーワードに対して整列済インデックス (permuted index) を生成します。
pwd	現在の作業ディレクトリ名を表示します。
readlink	指定されたシンボリックリンクの対象を表示します。
realpath	解析されたパスを表示します。
rm	ファイルまたはディレクトリを削除します。

<code>rmdir</code>	ディレクトリが空である時にそのディレクトリを削除します。
<code>runcon</code>	指定されたセキュリティコンテキストでコマンドを実行します。
<code>seq</code>	指定された範囲と増分に従って数値の並びを表示します。
<code>shasum</code>	160 ビットの SHA1 (Secure Hash Algorithm 1) チェックサム値を表示またはチェックします。
<code>sha224sum</code>	224 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
<code>sha256sum</code>	256 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
<code>sha384sum</code>	384 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
<code>sha512sum</code>	512 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
<code>shred</code>	指定されたファイルに対して、複雑なパターンデータを繰り返し上書きすることで、データ復旧を困難なものにします。
<code>shuf</code>	テキスト行を入れ替えます。
<code>sleep</code>	指定時間だけ停止します。
<code>sort</code>	指定されたファイル内の行をソートします。
<code>split</code>	指定されたファイルを、バイト数または行数を指定して分割します。
<code>stat</code>	ファイルやファイルシステムのステータスを表示します。
<code>stdbuf</code>	本コマンド実行により、標準ストリームに対するバッファリング操作を変更します。
<code>stty</code>	端末回線の設定や表示を行います。
<code>sum</code>	指定されたファイルのチェックサムやブロック数を表示します。
<code>sync</code>	ファイルシステムのバッファを消去します。変更のあったブロックは強制的にディスクに書き出し、スーパーブロック (super block) を更新します。
<code>tac</code>	指定されたファイルを逆順にして連結します。
<code>tail</code>	指定されたファイルの最終の10行 (あるいは指定された行数) を表示します。
<code>tee</code>	標準入力を読み込んで、標準出力と指定ファイルの双方に出力します。
<code>test</code>	ファイルタイプの比較やチェックを行います。
<code>timeout</code>	指定時間内だけコマンドを実行します。
<code>touch</code>	ファイルのタイムスタンプを更新します。そのファイルに対するアクセス時刻、更新時刻を現在時刻にするものです。そのファイルが存在しなかった場合はゼロバイトのファイルを新規生成します。
<code>tr</code>	標準入力から読み込んだ文字列に対して、変換、圧縮、削除を行います。
<code>true</code>	何も行わず処理に成功します。これは常に成功を意味するステータスコードを返して終了します。
<code>truncate</code>	ファイルを指定されたサイズに縮小または拡張します。
<code>tsort</code>	トポロジカルソート (topological sort) を行います。指定されたファイルの部分的な順序に従って並び替えリストを出力します。
<code>tty</code>	標準入力に接続された端末のファイル名を表示します。
<code>uname</code>	システム情報を表示します。
<code>unexpand</code>	空白文字をタブ文字に変換します。
<code>uniq</code>	連続する同一行を一行のみ残して削除します。
<code>unlink</code>	指定されたファイルを削除します。
<code>users</code>	現在ログインしているユーザー名を表示します。
<code>vdir</code>	<code>ls -l</code> と同じ。
<code>wc</code>	指定されたファイルの行数、単語数、バイト数を表示します。複数ファイルが指定された場合はこれに加えて合計も出力します。
<code>who</code>	誰がログインしているかを表示します。
<code>whoami</code>	現在有効なユーザーIDに関連づいているユーザー名を表示します。
<code>yes</code>	処理が停止されるまで繰り返して「y」または指定文字を出力します。
<code>libstdbuf.so</code>	<code>stdbuf</code> が利用するライブラリ。

6.28. Iana-Etc-2.30

Iana-Etc パッケージはネットワークサービスやプロトコルのためのデータを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 2.2 MB

6.28.1. Iana-Etc のインストール

以下のコマンドを実行します。これは IANA が提供している生のデータを正しい書式のデータとして変換し `/etc/protocols` ファイルと `/etc/services` ファイルとして生成します。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.28.2. Iana-Etc の構成

インストールファイル: `/etc/protocols`, `/etc/services`

概略説明

`/etc/protocols` TCP/IP により利用可能なさまざまな DARPA インターネットプロトコル (DARPA Internet protocols) を記述しています。

`/etc/services` インターネットサービスを分かりやすく表現した名称と、その割り当てポートおよびプロトコルの種類の対応情報を提供します。

6.29. M4-1.4.16

M4 パッケージはマクロプロセッサを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 26.6 MB

6.29.1. M4 のインストール

本パッケージと Glibc-2.18 との互換性がないため、これを修正します。

```
sed -i -e '/gets is a/d' lib/stdio.in.h
```

M4 をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするためには、まず修正を行ってからテストプログラムを実行します。

```
sed -i -e '41s/ENOENT/& || errno == EINVAL/' tests/test-readlink.h  
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.29.2. M4 の構成

インストールプログラム: m4

概略説明

m4 指定されたファイル内のマクロ定義を展開して、そのコピーを生成します。マクロ定義には埋め込み (built-in) マクロとユーザー定義マクロがあり、いくらでも引数を定義することができます。マクロ定義の展開だけでなく m4 には以下のような埋め込み関数があります。指定ファイルの読み込み、Unix コマンド実行、整数演算処理、テキスト操作、再帰処理などです。m4 プログラムはコンパイラのフロントエンドとして利用することができ、それ自体でマクロプロセッサとして用いることもできます。

6.30. Flex-2.5.37

Flex パッケージは、字句パターンを認識するプログラムを生成するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 39 MB

6.30.1. Flex のインストール

bison を必要としている三つの縮退テストを実行しないようにします。

```
sed -i -e '/test-bison/d' tests/Makefile.in
```

Flex をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \  
            --docdir=/usr/share/doc/flex-2.5.37
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするために以下を実行します。(約 0.5 SBU)

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

パッケージの中には lex ライブラリが /usr/lib ディレクトリにあるものとして動作しているものがあります。これに対応するためシンボリックリンクを作成します。

```
ln -sv libfl.a /usr/lib/libl.a
```

プログラムの中には flex コマンドが用いられず、その前身である lex コマンドを実行しようとするものがあります。そういったプログラムへ対応するために lex という名のラッパースクリプトを生成します。このスクリプトは lex のエミュレーションモードとして flex を実行します。

```
cat > /usr/bin/lex << "EOF"  
#!/bin/sh  
# Begin /usr/bin/lex  
  
exec /usr/bin/flex -l "$@"  
  
# End /usr/bin/lex  
EOF  
chmod -v 755 /usr/bin/lex
```

6.30.2. Flex の構成

インストールプログラム: flex, flex++ (flex へのリンク), lex
インストールライブラリ: libfl.a, libfl_pic.a
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/flex-2.5.37

概略説明

flex テキスト内のパターンを認識するためのプログラムを生成するツール。これは多彩なパターン検索の規則構築を可能とします。これを利用することで特別なプログラムの生成が不要となります。

flex++ flex の拡張。C++ コードやクラスの生成に利用されます。これは flex へのシンボリックリンクです。

lex lex のエミュレーションモードとして flex を実行するスクリプト。

libfl.a flex ライブラリ。

6.31. Bison-3.0

Bison パッケージは構文解析ツールを提供します。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 31 MB

6.31.1. Bison のインストール

Bison をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするなら以下を実行します。(約 0.5 SBU)

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.31.2. Bison の構成

インストールプログラム: bison, yacc
インストールライブラリ: liby.a
インストールディレクトリ: /usr/share/bison

概略説明

- bison 構文規則の記述に基づいて、テキストファイルの構造を解析するプログラムを生成します。Bison は Yacc (Yet Another Compiler Compiler) の互換プログラムです。
- yacc bison のラッパースクリプト。 yacc プログラムがあるなら bison を呼び出さずに yacc を実行します。 `-y` オプションが指定された時は bison を実行します。
- liby.a Yacc 互換の関数として `yyerror` 関数と `main` 関数を含むライブラリです。このライブラリはあまり使い勝手の良いものではありません。ただし POSIX ではこれが必要になります。

6.32. Grep-2.14

Grep パッケージはファイル内の検索を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 30 MB

6.32.1. Grep のインストール

Grep をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --bindir=/bin
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.32.2. Grep の構成

インストールプログラム: egrep, fgrep, grep

概略説明

egrep 拡張正規表現 (extended regular expression) にマッチした行を表示します。
fgrep 固定文字列の一覧にマッチした行を表示します。
grep 基本的な正規表現に合致した行を出力します。

6.33. Readline-6.2

Readline パッケージは、コマンドラインの編集や履歴管理を行うライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 17.2 MB

6.33.1. Readline のインストール

Readline を再インストールすると、それまでの古いライブラリは <ライブラリ名>.old というファイル名でコピーされます。これは普通は問題ないことですが ldconfig によるリンクに際してエラーを引き起こすことがあります。これを避けるため以下の二つの sed コマンドを実行します。

```
sed -i '/MV.*old/d' Makefile.in
sed -i '/{OLDSUFF}/c:' support/shlib-install
```

アップストリームにより提供されているバグフィックスのパッチを適用します。

```
patch -Np1 -i ../readline-6.2-fixes-1.patch
```

Readline をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --libdir=/lib
```

パッケージをコンパイルします。

```
make SHLIB_LIBS=-lncurses
```

make オプションの意味:

```
SHLIB_LIBS=-lncurses
```

このオプションにより Readline を libncurses ライブラリ（その実体は libncursesw ライブラリ）にリンクします。

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

スタティックライブラリを適切なディレクトリに移動します。

```
mv -v /lib/lib{readline,history}.a /usr/lib
```

次に /lib ディレクトリにある .so ファイルを削除して、それらを /usr/lib にリンクし直します。

```
rm -v /lib/lib{readline,history}.so
ln -sfv ../../lib/libreadline.so.6 /usr/lib/libreadline.so
ln -sfv ../../lib/libhistory.so.6 /usr/lib/libhistory.so
```

必要ならドキュメントをインストールします。

```
mkdir -v /usr/share/doc/readline-6.2
install -v -m644 doc/*.{ps,pdf,html,dvi} \
    /usr/share/doc/readline-6.2
```

6.33.2. Readline の構成

インストールライブラリ: libhistory.{a,so}, libreadline.{a,so}

インストールディレクトリ: /usr/include/readline, /usr/share/readline, /usr/share/doc/readline-6.2

概略説明

libhistory 入力履歴を適切に再現するためのユーザーインターフェースを提供します。

libreadline コマンドラインインターフェースを提供しているさまざまなコマンドにおいて、適切なインターフェースを提供します。

6.34. Bash-4.2

Bash は Bourne-Again SHell を提供します。

概算ビルド時間: 1.7 SBU
必要ディスク容量: 45 MB

6.34.1. Bash のインストール

まずはアップストリームにより提供されている以下のパッチを適用し、種々のバグを修正します。

```
patch -Np1 -i ../bash-4.2-fixes-12.patch
```

Bash をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --bindir=/bin \
            --htmldir=/usr/share/doc/bash-4.2 \
            --without-bash-malloc \
            --with-installed-readline
```

configure オプションの意味:

`--htmldir`

このオプションは HTML ドキュメントをインストールするディレクトリを指定します。

`--with-installed-readline`

このオプションは Bash が持つ独自の readline ライブラリではなく、既にインストールした readline ライブラリを用いることを指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

テストスイートを実行しない場合は「パッケージをインストールします。」と書かれた箇所まで読み飛ばしてください。

テストを実施するにあたっては nobody ユーザーによるソースツリーへの書き込みを可能とします。

```
chown -Rv nobody .
```

nobody ユーザーでテストを実行します。

```
su nobody -s /bin/bash -c "PATH=$PATH make tests"
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

新たにコンパイルした bash プログラムを実行します。(この時点までに実行されていたものが置き換えられます。)

```
exec /bin/bash --login +h
```



注記

ここで指定しているパラメーターは、対話形式のログインシェルとして、またハッシュ機能を無効にして bash プロセスを起動します。これにより新たに構築するプログラム類は構築後すぐに利用できることとなります。

6.34.2. Bash の構成

インストールプログラム: bash, bashbug, sh (bash へのリンク)
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/bash-4.2

概略説明

bash 広く活用されているコマンドインタプリター。処理実行前には、指示されたコマンドラインをさまざまに展開したり置換したりします。この機能があるからこそ、インタプリター機能を強力なものにしています。

bashbug bash に関連したバグ報告を、標準書式で生成しメール送信することを補助するシェルスクリプトです。

sh bash プログラムへのシンボリックリンク。 sh として起動された際には、かつてのバージョンである sh の起動時の動作と、出来るだけ同じになるように振舞います。 同時に POSIX 標準に適合するよう動作します。

6.35. Bc-1.06.95

Bc パッケージは、任意精度 (arbitrary precision) の演算処理言語を提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 3 MB

6.35.1. Bc のインストール

Bc をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --with-readline
```

configure オプションの意味

`--with-readline`

このオプションは、本パッケージにて提供される `readline` ライブラリではなく、既にシステムにインストールされている `readline` ライブラリを用いることを指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

`bc` をテストする場合は以下のコマンドを実行します。 その際には相当量の出力が行われますから、ファイルにリダイレクトしておくといいでしょう。 テストのうちいくつかのテスト (12,144 個のうち10個) では、最終デジットに対する丸め (roundoff) に関するエラーが発生します。

```
echo "quit" | ./bc/bc -l Test/checklib.b
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.35.2. Bc の構成

インストールプログラム: `bc`, `dc`

概略説明

`bc` コマンドラインから実行する計算機 (calculator) です。

`dc` 逆ポーランド (reverse-polish) 記法による計算機です。

6.36. Libtool-2.4.2

Libtool パッケージは GNU 汎用ライブラリをサポートするスクリプトを提供します。これは複雑な共有ライブラリをラップして一貫した可搬性を実現します。

概算ビルド時間: 3.0 SBU
必要ディスク容量: 37 MB

6.36.1. Libtool のインストール

Libtool をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。(約 3.0 SBU)

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.36.2. Libtool の構成

インストールプログラム: libtool, libtoolize
インストールライブラリ: libltdl.{a,so}
インストールディレクトリ: /usr/include/libltdl, /usr/share/libtool

概略説明

libtool 汎用的なライブラリ構築支援サービスを提供します。
libtoolize パッケージに対して libtool によるサポートを加える標準的手法を提供します。
libltdl dlopen を行うライブラリの複雑さを隠蔽します。

6.37. GDBM-1.10

GDBM パッケージは GNU データベースマネージャーを提供します。このデータベースはディスクファイル形式 (disk file format) のデータベースで、キーとデータのペア情報を一つのファイルに保持します。各レコードのデータはユニークキーによりインデックスづけされます。テキストファイルに保存された状態に比べて、より早く情報を抽出することができます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 8.5 MB

6.37.1. GDBM のインストール

GDBM をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --enable-libgdbm-compat
```

configure オプションの意味:

`--enable-libgdbm-compat`

このオプションは libgdbm 互換ライブラリをビルドすることを指示します。LFS パッケージではない他のパッケージでは、かつての古い DBM ルーチンを必要とするものがあるかもしれません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.37.2. GDBM の構成

インストールプログラム: testgdbm
インストールライブラリ: libgdbm.{so,a}, libgdbm_compat.{so,a}

概略説明

testgdbm GDBM データベースをテストし修復します。
libgdbm ハッシュデータベースを取り扱う関数を提供します。

6.38. Inetutils-1.9.1

Inetutils パッケージはネットワーク制御を行う基本的なプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 27 MB

6.38.1. Inetutils のインストール

本パッケージと Glibc-2.18 との互換性がないため、これを修正します。

```
sed -i -e '/gets is a/d' lib/stdio.in.h
```

Inetutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
  --libexecdir=/usr/sbin \
  --localstatedir=/var \
  --disable-ifconfig \
  --disable-logger \
  --disable-syslogd \
  --disable-whois \
  --disable-servers
```

configure オプションの意味:

`--disable-ifconfig`

このオプションは ifconfig プログラムをインストールしないようにします。このプログラムはネットワークインターフェースを設定するために利用するものです。LFS では IPRoute2 パッケージが提供する ip コマンドを使うことにしています。

`--disable-logger`

このオプションは logger プログラムをインストールしないようにします。このプログラムはシステムログデーモンに対してメッセージ出力を行うスクリプトにて利用されます。ここでこれをインストールしないのは、後に Util-linux パッケージにおいて、以前のバージョンをインストールするためです。

`--disable-syslogd`

このオプションは Inetutils がシステムログデーモンをインストールしないようにします。これらは Sysklogd パッケージにおいてインストールします。

`--disable-whois`

このオプションは whois のクライアントプログラムをインストールしないようにします。このプログラムはもはや古いものです。より良い whois プログラムのインストール手順については BLFS ブックにて説明しています。

`--disable-servers`

このオプションは Inetutils パッケージに含まれるさまざまなネットワークサーバーをインストールしないようにします。これらのサーバーは基本的な LFS システムには不要なものと考えられます。サーバーの中には本質的にセキュアでないものがあり、信頼のあるネットワーク内でのみしか安全に扱うことができないものもあります。より詳細な情報は <http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/basicnet/inetutils.html> を参照してください。サーバーの多くは、これに代わる他の適切なものが存在します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

/usr がアクセス不能であっても各種プログラムが実行できるように、それらを移動させます。

```
mv -v /usr/bin/{hostname,ping,ping6,traceroute} /bin
```

6.38.2. Inetutils の構成

インストールプログラム: ftp, hostname, ping, ping6, rcp, rexec, rlogin, rsh, talk, telnet, tftp, traceroute

概略説明

ftp	ファイル転送プロトコル (file transfer protocol) に基づくプログラム。
hostname	ホスト名の表示または設定を行います。
ping	エコーリクエスト (echo-request) パケットを送信し、返信にどれだけ要したかを表示します。
ping6	IPv6 ネットワーク向けの ping
rcp	リモートファイルコピーを行います。
rexec	リモートホスト上にてコマンドを実行します。
rlogin	リモートログインを行います。
rsh	リモートシェルを起動します。
talk	他ユーザーとのチャットに利用します。
telnet	TELNET プロトコルインターフェース。
tftp	軽量のファイル転送プログラム。(trivial file transfer program)
traceroute	処理起動したホストからネットワーク上の他のホストまで、送出したパケットの経由ルートを追跡します。その合間に検出されたすべての hops (= ゲートウェイ) も表示します。

6.39. Perl-5.18.1

Perl パッケージは Perl 言語 (Practical Extraction and Report Language) を提供します。

概算ビルド時間: 6.7 SBU
必要ディスク容量: 246 MB

6.39.1. Perl のインストール

Perl の設定ファイルが `/etc/hosts` ファイルを参照するので、まずはこのファイルを生成します。このファイルはテストスイートを実行する際にも利用されます。

```
echo "127.0.0.1 localhost $(hostname)" > /etc/hosts
```

ここでビルドするバージョンの Perl は `Compress::Raw::Zlib` モジュールをビルドします。デフォルトではビルドの際に `Zlib` のソースを内部的にコピーします。以下のコマンドは、既にインストールされている `Zlib` ライブラリを用いるようにします。

```
sed -i -e "s|BUILD_ZLIB\s*= True|BUILD_ZLIB = False|" \
      -e "s|INCLUDE\s*= ./zlib-src|INCLUDE = /usr/include|" \
      -e "s|LIB\s*= ./zlib-src|LIB = /usr/lib|" \
      cpan/Compress-Raw-Zlib/config.in
```

Perl のビルド設定を完全に制御したい場合は、以下のコマンドから「`-des`」オプションを取り除くことで手作業により操作を進めます。Perl が自動的に判別するデフォルト設定に従うのであれば、以下のコマンドにより Perl をコンパイルするための準備をします。

```
sh Configure -des -Dprefix=/usr \
              -Dvendorprefix=/usr \
              -Dman1dir=/usr/share/man/man1 \
              -Dman3dir=/usr/share/man/man3 \
              -Dpager="/usr/bin/less -isR" \
              -Duseshrplib
```

`configure` オプションの意味:

`-Dvendorprefix=/usr`

このオプションは各種の perl モジュールをどこにインストールするかを指定します。

`-Dpager="/usr/bin/less -isR"`

このオプションは `perldoc` プログラムが `less` プログラムを呼び出す際のエラーを正します。

`-Dman1dir=/usr/share/man/man1 -Dman3dir=/usr/share/man/man3`

まだ `Groff` をインストールしていないので `Configure` スクリプトが Perl の man ページを必要としないと判断してしまいます。このオプションを指定することによりその判断を正します。

`-Duseshrplib`

Perl モジュールの中で必要とされる共有ライブラリ `libperl` をビルドします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。(約 2.5 SBU)

```
make -k test
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.39.2. Perl の構成

```

インストールプログラム:    a2p, c2ph, config_data, corelist, cpan, cpan2dist, cpanp, cpanp-run-
                           perl, enc2xs, find2perl, h2ph, h2xs, instmodsh, json_pp, libnetcfg,
                           perl, perl5.18.1 (perl へのリンク), perlbug, perldoc, perlivp, perlthanks
                           (perlbug へのリンク), piconv, pl2pm, pod2html, pod2latex, pod2man,
                           pod2text, pod2usage, podchecker, podselect, prove, psed (s2p へのリンク),
                           pstruct (c2ph へのリンク), ptar, ptardiff, ptargrep, s2p, shasum, splain,
                           xsubpp, zipdetails
インストールライブラリ:    ここでは列記できないほどの数多くのライブラリ
インストールディレクトリ:  /usr/lib/perl5

```

概略説明

```

a2p          awk スクリプトを Perl スクリプトに変換します。
c2ph         cc -g -S によって生成されるような C 言語構造体をダンプします。
config_data  Perl モジュールの設定を検索または変更します。
corelist     Module::CoreList に対するコマンドラインフロントエンド。
cpan         コマンドラインから CPAN (Comprehensive Perl Archive Network) との通信を行います。
cpan2dist    CPANPLUS の配布物生成ツール。
cpanp        CPANPLUS ランチャー。
cpanp-run-perl  Spawn プロセスにおいて出力処理が行われた後に、出力バッファをクリアするために利用するPerl
               スクリプト。
enc2xs       Unicode キャラクターマッピングまたは Tcl エンコーディングファイルから、Perl の Encode 拡張
               モジュールを構築します。
find2perl    find コマンドを Perl に変換します。
h2ph         C 言語のヘッダーファイル .h を Perl のヘッダーファイル .ph に変換します。
h2xs         C 言語のヘッダーファイル .h を Perl 拡張 (Perl extension) に変換します。
instmodsh    インストールされている Perl モジュールを調査するシェルスクリプト。 インストールされたモ
               ジュールから tarball を作ることもできます。
json_pp      特定の入出力フォーマット間でデータを変換します。
libnetcfg    Perl モジュール libnet の設定に利用します。
perl         C 言語、sed、awk、sh の持つ機能を寄せ集めて出来上がった言語。
perl5.18.1   perl へのハードリンク。
perlbug      Perl およびそのモジュールに関するバグ報告を生成して、電子メールを送信します。
perldoc      pod フォーマットのドキュメントを表示します。 pod フォーマットは Perl のインストールツリー
               あるいは Perl スクリプト内に埋め込まれています。
perlivp      Perl Installation Verification Procedure のこと。 Perl とライブラリが正しくインストールで
               きているかを調べるものです。
perlthanks   感謝のメッセージ (Thank you messages) を電子メールで Perl 開発者に送信します。
piconv       キャラクターエンコーディングを変換する iconv の Perl バージョン。
pl2pm        Perl4 の .pl ファイルを Perl5 の .pm モジュールファイルへの変換を行うツール。
pod2html     pod フォーマットから HTML フォーマットに変換します。
pod2latex    pod フォーマットから LaTeX フォーマットへ変換します。
pod2man      pod データを *roff の入力ファイル形式に変換します。
pod2text     pod データをアスキーテキスト形式に変換します。
pod2usage    ファイル内に埋め込まれた pod ドキュメントから使用方法の記述部分を表示します。
podchecker   pod 形式の文書ファイルに対して文法をチェックします。
podselect    pod ドキュメントに対して指定したセクションを表示します。
prove        Test::Harness モジュールのテストを行うコマンドラインツール。
psed         ストリームエディター sed の Perl バージョン。

```

pstruct	cc -g -S によって生成されるような C 言語構造体をダンプします。
ptar	Perl で書かれた tar 相当のプログラム。
ptardiff	アーカイブの抽出前後を比較する Perl プログラム。
ptargrep	tar アーカイブ内のファイルに対してパターンマッチングを適用するための Perl プログラム。
s2p	sed スクリプトを Perl スクリプトに変換します。
shasum	SHA チェックサム値を表示またはチェックします。
splain	Perl スクリプトの警告エラーの診断結果を詳細 (verbose) に出力するために利用します。
xsubpp	Perl の XS コードを C 言語コードに変換します。
zipdetails	Zip ファイルの内部構造に関する情報を出力します。

6.40. Autoconf-2.69

Autoconf パッケージは、ソースコードを自動的に設定するシェルスクリプトの生成を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 4.5 SBU
必要ディスク容量: 17.1 MB

6.40.1. Autoconf のインストール

Autoconf をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

このテストはおよそ 4.7 SBU ほど要します。そのうちの 6つのテストは Automake を利用するものであるためスキップされます。すべてのテストを網羅したいなら、Automake をインストールした後に、再度テストを実行することが必要です。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.40.2. Autoconf の構成

インストールプログラム: autoconf, autoheader, autom4te, autoreconf, autoscan, autoupdate, ifnames
インストールディレクトリ: /usr/share/autoconf

概略説明

autoconf	ソースコードを提供するソフトウェアパッケージを自動的に設定する (configure する) シェルスクリプトを生成します。これにより数多くの Unix 互換システムへの適用を可能とします。生成される設定 (configure) スクリプトは独立して動作します。つまりこれを実行するにあたっては autoconf プログラムを必要としません。
autoheader	C言語の #define 文を configure が利用するためのテンプレートファイルを生成するツール。
autom4te	M4 マクロプロセッサに対するラッパー。
autoreconf	autoconf と automake のテンプレートファイルが変更された時に、自動的に autoconf、autoheader、aclocal、automake、gettextize、libtoolize を無駄なく適正な順で実行します。
autoscan	ソフトウェアパッケージに対する configure.in ファイルの生成をサポートします。ディレクトリツリー内のソースファイルを調査して、共通的な可搬性に関わる問題を見出します。そして configure.scan ファイルを生成して、そのパッケージの configure.in ファイルの雛形として提供します。
autoupdate	configure.in ファイルにおいて、かつての古い autoconf マクロが利用されている場合に、それを新しいマクロに変更します。
ifnames	ソフトウェアパッケージにおける configure.in ファイルの記述作成をサポートします。これはそのパッケージが利用する C プリプロセッサの条件ディレクティブの識別子を出力します。可搬性を考慮した構築ができている場合は、本プログラムが configure スクリプトにおいて何をチェックすべきかを決定してくれます。また autoscan によって生成された configure.in ファイルでの過不足を調整する働きもします。

6.41. Automake-1.14

Automake パッケージは Autoconf が利用する Makefileなどを生成するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下 (テストスイートを含めると 34.1 SBU)
必要ディスク容量: 100 MB

6.41.1. Automake のインストール

断続的にテストが失敗する点を修正します。

```
patch -Np1 -i ../automake-1.14-test-1.patch
```

Automake をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --docdir=/usr/share/doc/automake-1.14
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```



注記

テスト処理には 30 SBU 以上の時間を要します。

ビルド結果をテストするには、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.41.2. Automake の構成

インストールプログラム: acinstall, aclocal, aclocal-1.14, automake, automake-1.14, compile, config.guess, config.sub, depcomp, install-sh, mdate-sh, missing, mkinstalldirs, py-compile, ylwrap

インストールディレクトリ: /usr/share/aclocal-1.14, /usr/share/automake-1.14, /usr/share/doc/automake-1.14

概略説明

acinstall	aclocal 風の M4 ファイルをインストールするスクリプト。
aclocal	configure.in ファイルの内容に基づいて aclocal.m4 ファイルを生成します。
aclocal-1.14	aclocal へのハードリンク。
automake	Makefile.am ファイルから Makefile.in ファイルを自動生成するツール。パッケージ内のすべての Makefile.in ファイルを作るには、このプログラムをトップディレクトリから実行します。configure.in ファイルを調べて、適切な Makefile.am ファイルを検索します。そして対応する Makefile.in ファイルを生成します。
automake-1.14	automake へのハードリンク。
compile	コンパイラーのラッパースクリプト。
config.guess	指定されたビルドタイプ、ホストタイプ、ターゲットタイプに対しての正規化した「三つ組」を推定するスクリプト。
config.sub	設定を検証するサブルーチンスクリプト。
depcomp	プログラムをコンパイルするためのスクリプトで、コンパイル結果を得ると同時に依存情報も生成します。
install-sh	プログラムやスクリプトやデータファイルをインストールするスクリプト。
mdate-sh	ファイルやディレクトリの更新時刻を表示するスクリプト。
missing	インストール中に GNU プログラムが存在しなかった場合に、共通のスタブ (stub) プログラムとして動作するスクリプト。

<code>mkinstalldirs</code>	ディレクトリツリーを生成するスクリプト。
<code>py-compile</code>	Python プログラムをコンパイルします。
<code>ylwrap</code>	<code>lex</code> と <code>yacc</code> に対するラッパースクリプト。

6.42. Diffutils-3.3

Diffutils パッケージはファイルやディレクトリの差分を表示するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.5 SBU
必要ディスク容量: 25 MB

6.42.1. Diffutils のインストール

Diffutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストするなら以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.42.2. Diffutils の構成

インストールプログラム: cmp, diff, diff3, sdiff

概略説明

- cmp 二つのファイルを比較して、どこが異なるか、あるいは何バイト異なるかを示します。
- diff 二つのファイルまたは二つのディレクトリを比較して、ファイル内のどの行に違いがあるかを示します。
- diff3 三つのファイルの各行を比較します。
- sdiff 二つのファイルを結合して対話的に結果を出力します。

6.43. Gawk-4.1.0

Gawk パッケージはテキストファイルを操作するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 30 MB

6.43.1. Gawk のインストール

Gawk をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --libexecdir=/usr/lib
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

必要ならドキュメントをインストールします。

```
mkdir -v /usr/share/doc/gawk-4.1.0
cp -v doc/{awkforai.txt,*.eps,pdf,jpg} /usr/share/doc/gawk-4.1.0
```

6.43.2. Gawk の構成

インストールプログラム: awk (gawk へのリンク), gawk, gawk-4.1.0, igawk
 インストールライブラリ: filefuncs.so, fnmatch.so, fork.so, inplace.so, ordchr.so, readdir.so, readfile.so, revoutput.so, revtwoway.so, rvarray.so, testtext.so, time.so
 インストールディレクトリ: /usr/lib/{,g}awk, /usr/share/awk

概略説明

awk gawk へのリンク。
 gawk テキストファイルを操作するプログラム。これは awk の GNU インプリメンテーションです。
 gawk-4.1.0 gawk へのハードリンク。
 igawk gawk に対してファイルをインクルードする機能を付与します。

6.44. Findutils-4.4.2

Findutils パッケージはファイル検索を行うプログラムを提供します。このプログラムはディレクトリツリーを再帰的に検索したり、データベースの生成、保守、検索を行います。（データベースによる検索は再帰的検索に比べて処理速度は速いものですが、データベースが最新のものに更新されていない場合は信頼できない結果となります。）

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 29 MB

6.44.1. Findutils のインストール

Findutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --libexecdir=/usr/lib/findutils \
            --localstatedir=/var/lib/locate
```

configure オプションの意味:

`--localstatedir`

locate データベースの場所を FHS コンプライアンスが定めているディレクトリ `/var/lib/locate` に変更します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするならば以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

LFS ブートスクリプトパッケージでは、いくつかのスクリプトが `find` を利用しています。 `/usr` ディレクトリはブート処理の初めでは認識できないため、このプログラムはルートパーティションに置く必要があります。同じく `updatedb` スクリプトは明示的なパスを修正する必要があります。

```
mv -v /usr/bin/find /bin
sed -i 's/find:=${BINDIR}/find:=\bin/' /usr/bin/updatedb
```

6.44.2. Findutils の構成

インストールプログラム: bigram, code, find, frcode, locate, oldfind, updatedb, xargs
インストールディレクトリ: /usr/lib/findutils

概略説明

bigram	かつて利用されていたコマンドで <code>locate</code> データベースを生成します。
code	かつて利用されていたコマンドで <code>locate</code> データベースを生成します。これは <code>frcode</code> の前身です。
find	指定された条件に合致するファイルを、指定されたディレクトリツリー内から検索します。
frcode	<code>updatedb</code> コマンドから呼び出され、ファイル名の一覧を圧縮します。これは前置圧縮 (front-compression) を行うもので、データベースサイズを 1/4 から 1/5 に減らします。
locate	ファイル名データベースを検索して、指定された文字列を含むもの、または検索パターンに合致するものを表示します。
oldfind	<code>find</code> の古い版であり、 <code>find</code> とは異なるアルゴリズムを用いています。
updatedb	<code>locate</code> データベースを更新します。これはすべてのファイルシステムを検索します。（検索非対象とする設定がない限りは、マウントされているすべてのファイルシステムを対象とします。）そして検索されたファイル名をデータベースに追加します。
xargs	指定されたコマンドに対してファイル名の一覧を受け渡して実行します。

6.45. Gettext-0.18.3

Gettext パッケージは国際化を行うユーティリティを提供します。各種プログラムに対して NLS (Native Language Support) を含めてコンパイルすることができます。つまり各言語による出力メッセージが得られることになります。

概算ビルド時間: 2.3 SBU
必要ディスク容量: 199 MB

6.45.1. Gettext のインストール

Gettext をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \  
--docdir=/usr/share/doc/gettext-0.18.3
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするなら (3 SBU 程度の処理時間を要しますが) 以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.45.2. Gettext の構成

インストールプログラム: autopoint, config.charset, config.rpath, envsubst, gettext, gettext.sh, gettextize, hostname, msgattrib, msgcat, msgcmp, msgcomm, msgconv, msgen, msgexec, msgfilter, msgfmt, msggrep, msginit, msgmerge, msgunfmt, msguniq, ngettext, recode-sr-latin, xgettext
インストールライブラリ: libasprintf.{a,so}, libgettextlib.so, libgettextpo.{a,so}, libgettextsrc.so, preloadable_libintl.so
インストールディレクトリ: /usr/lib/gettext, /usr/share/doc/gettext-0.18.3, /usr/share/gettext

概略説明

autopoint	Gettext 標準のインフラストラクチャーファイル (infrastructure file) をソースパッケージ内にコピーします。
config.charset	システム依存の、キャラクターエンコーディングのエイリアス対応表を出力します。
config.rpath	システムに依存する変数一覧を出力します。その変数とは、実行モジュールにおける共有ライブラリの検索パスをどのように設定するかを示すものです。
envsubst	環境変数をシェル書式の文字列として変換します。
gettext	メッセージカタログ内の翻訳文を参照し、メッセージをユーザーの利用言語に変換します。
gettext.sh	主に gettext におけるシェル関数ライブラリとして機能します。
gettextize	パッケージの国際化対応を始めるにあたり、標準的な Gettext 関連ファイルを、指定されたパッケージのトップディレクトリにコピーします。
hostname	さまざまな書式のネットワークホスト名を表示します。
msgattrib	翻訳カタログ内のメッセージの属性に応じて、そのメッセージを抽出します。またメッセージの属性を操作します。
msgcat	指定された .po ファイルを連結します。
msgcmp	二つの .po ファイルを比較して、同一の msgid による文字定義が両者に含まれているかどうかをチェックします。
msgcomm	指定された .po ファイルにて共通のメッセージを検索します。
msgconv	翻訳カタログを別のキャラクターエンコーディングに変換します。
msgen	英語用の翻訳カタログを生成します。
msgexec	翻訳カタログ内の翻訳文すべてに対してコマンドを適用します。

<code>msgfilter</code>	翻訳カタログ内の翻訳文すべてに対してフィルター処理を適用します。
<code>msgfmt</code>	翻訳カタログからバイナリメッセージカタログを生成します。
<code>msggrep</code>	指定された検索パターンに合致する、あるいは指定されたソースファイルに属する翻訳カタログの全メッセージを出力します。
<code>msginit</code>	新規に <code>.po</code> ファイルを生成します。 その時にはユーザーの環境設定に基づいてメタ情報を初期化します。
<code>msgmerge</code>	二つの翻訳ファイルを一つにまとめます。
<code>msgunfmt</code>	バイナリメッセージカタログを翻訳テキストに逆コンパイルします。
<code>msguniq</code>	翻訳カタログ中に重複した翻訳がある場合にこれを統一します。
<code>ngettext</code>	出力メッセージをユーザーの利用言語に変換します。 特に複数形のメッセージを取り扱いません。
<code>recode-sr-latin</code>	セルビア語のテキストに対し、キリル文字からラテン文字にコード変換します。
<code>xgettext</code>	指定されたソースファイルから、翻訳対象となるメッセージ行を抽出して、翻訳テンプレートとして生成します。
<code>libasprintf</code>	<code>autosprintf</code> クラスを定義します。 これは C++ プログラムにて利用できる C 言語書式の出力ルーチンを生成するものです。 <code><string></code> 文字列と <code><iostream></code> ストリームを利用します。
<code>libgettextlib</code>	さまざまな <code>Gettext</code> プログラムが利用している共通的ルーチンを提供するプライベートライブラリです。 これは一般的な利用を想定したものではありません。
<code>libgettextpo</code>	<code>.po</code> ファイルの出力に特化したプログラムを構築する際に利用します。 <code>Gettext</code> が提供する標準的なアプリケーション (<code>msgcomm</code> , <code>msgcmp</code> , <code>msgattrib</code> , <code>msgen</code>) などでは処理出来ないものがある場合に、このライブラリを利用します。
<code>libgettextsrc</code>	さまざまな <code>Gettext</code> プログラムが利用している共通的ルーチンを提供するプライベートライブラリです。 これは一般的な利用を想定したものではありません。
<code>preloadable_libintl</code>	<code>LD_PRELOAD</code> が利用するライブラリ。 翻訳されていないメッセージを収集 (log) する <code>libintl</code> をサポートします。

6.46. Groff-1.22.2

Groff パッケージはテキストを処理して整形するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.5 SBU
必要ディスク容量: 83 MB

6.46.1. Groff のインストール

Groff はデフォルトの用紙サイズを設定する環境変数 `PAGE` を参照します。米国のユーザーであれば `PAGE=letter` と設定するのが適当です。その他のユーザーなら `PAGE=A4` とするのが良いかもしれません。このデフォルト用紙サイズはコンパイルにあたって設定されます。「A4」なり「letter」なりの値は `/etc/papersize` ファイルにて設定することも可能です。

Groff をコンパイルするための準備をします。

```
PAGE=<paper_size> ./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
mkdir -p /usr/share/doc/groff-1.22/pdf
make install
```

`xman` のようなドキュメント関連プログラムが正しく動作するように、以下のようなシンボリックリンクを作成します。

```
ln -sv eqn /usr/bin/geqn
ln -sv tbl /usr/bin/gtbl
```

6.46.2. Groff の構成

インストールプログラム: `addftinfo`, `afmtodit`, `chem`, `eqn`, `eqn2graph`, `gdifmk`, `geqn` (`eqn` へのリンク), `grap2graph`, `grn`, `grodvi`, `groff`, `groffer`, `grog`, `grolbp`, `grolj4`, `grops`, `grotty`, `gtbl` (`tbl` へのリンク), `hpftodit`, `indxbib`, `lkbib`, `lookbib`, `mmroff`, `neqn`, `nroff`, `pdfroff`, `pfbtops`, `pic`, `pic2graph`, `post-grohtml`, `preconv`, `pre-grohtml`, `refer`, `roff2dvi`, `roff2html`, `roff2pdf`, `roff2ps`, `roff2text`, `roff2x`, `soelim`, `tbl`, `tfmtodit`, `troff`

インストールディレクトリ: `/usr/lib/groff`, `/usr/share/doc/groff-1.22.2`, `/usr/share/groff`

概略説明

<code>addftinfo</code>	<code>troff</code> のフォントファイルを読み込んで <code>groff</code> システムが利用する付加的なフォントメトリック情報を追加します。
<code>afmtodit</code>	<code>groff</code> と <code>grops</code> が利用するフォントファイルを生成します。
<code>chem</code>	化学構造図 (chemical structure diagrams) を生成するための Groff プロセッサ。
<code>eqn</code>	<code>troff</code> の入力ファイル内に埋め込まれている記述式をコンパイルして <code>troff</code> が解釈できるコマンドとして変換します。
<code>eqn2graph</code>	<code>troff</code> の EQN (数式) を、刈り込んだ (crop した) イメージに変換します。
<code>gdifmk</code>	<code>groff</code> 、 <code>nroff</code> 、 <code>troff</code> の入力ファイルを比較して、その差異を出力します。
<code>geqn</code>	<code>eqn</code> へのリンク。
<code>grap2graph</code>	<code>grap</code> ダイアグラムを、刈り込んだ (crop した) ビットマップイメージに変換します。
<code>grn</code>	<code>gremlin</code> 図を表すファイルを処理するための <code>groff</code> プリプロセッサ。
<code>grodvi</code>	TeX の dvi フォーマットを生成するための <code>groff</code> ドライバプログラム。
<code>groff</code>	<code>groff</code> 文書整形システムのためのフロントエンド。通常は <code>troff</code> プログラムを起動し、指定されたデバイスに適合したポストプロセッサを呼び出します。

groffer	groff ファイルや man ページを X 上や TTY 端末上に表示します。
grog	入力ファイルを読み込んで、印刷時には groff コマンドオプションのどれが必要かを推定します。コマンドオプションは <code>-e</code> 、 <code>-man</code> 、 <code>-me</code> 、 <code>-mm</code> 、 <code>-ms</code> 、 <code>-p</code> 、 <code>-s</code> のいずれかです。そしてそのオプションを含んだ groff コマンドを表示します。
grolbp	Canon CAPSL プリンター (LBP-4 または LBP-8 シリーズのレーザープリンター) に対する groff ドライバープログラム。
grolj4	HP LaserJet 4 プリンターにて利用される PCL5 フォーマットの出力を生成する groff のドライバープログラム。
grops	GNU troff の出力を PostScript に変換します。
grotty	GNU troff の出力を、タイプライター風のデバイスに適した形式に変換します。
gtbl	tbl へのリンク。
hpftodit	HP のタグ付けが行われたフォントメトリックファイルから、groff <code>-Tlj4</code> コマンドにて利用されるフォントファイルを生成します。
indxbib	指定されたファイル内に示される参考文献データベース (bibliographic database) に対しての逆引きインデックス (inverted index) を生成します。これは refer、lookbib、lkbib といったコマンドが利用します。
lkbib	指定されたキーを用いて参考文献データベースを検索し、合致したすべての情報を表示します。
lookbib	(標準入力端末であれば) 標準エラー出力にプロンプトを表示して、標準入力から複数のキーワードを含んだ一行を読み込みます。そして指定されたファイルにて示される参考文献データベース内に、そのキーワードが含まれるかどうかを検索します。キーワードが含まれるものを標準出力に出力します。入力がなくなるまでこれを繰り返します。
mmroff	groff 用の単純なプリプロセッサ。
neqn	数式を ASCII (American Standard Code for Information Interchange) 形式で出力します。
nroff	groff を利用して nroff コマンドをエミュレートするスクリプト。
pdfroff	groff を利用して pdf 文書ファイルを生成します。
pfbtops	<code>.pfb</code> フォーマットの PostScript フォントを ASCII フォーマットに変換します。
pic	troff または TeX の入力ファイル内に埋め込まれた図の記述を、troff または TeX が処理できるコマンドの形式に変換します。
pic2graph	PIC ダイアグラムを、刈り込んだ (crop した) イメージに変換します。
post-grohtml	GNU troff の出力を HTML に変換します。
preconv	入力ファイルのエンコーディングを GNU troff が取り扱うものに変換します。
pre-grohtml	GNU troff の出力を HTML に変換します。
refer	ファイル内容を読み込んで、そのコピーを標準出力へ出力します。ただし引用文を表す <code>.[と .]</code> で囲まれた行、および引用文をどのように処理するかを示したコマンドを意味する <code>.R1</code> と <code>.R2</code> で囲まれた行は、コピーの対象としません。
roff2dvi	roff ファイルを DVI フォーマットに変換します。
roff2html	roff ファイルを HTML フォーマットに変換します。
roff2pdf	roff ファイルを PDF フォーマットに変換します。
roff2ps	roff ファイルを ps ファイルに変換します。
roff2text	roff ファイルをテキストファイルに変換します。
roff2x	roff ファイルを他のフォーマットに変換します。
soelim	入力ファイルを読み込んで <code>.so</code> ファイル の形式で記述されている行を、記述されているファイルだけに置き換えます。
tbl	troff 入力ファイル内に埋め込まれた表の記述を troff が処理できるコマンドの形式に変換します。
tfmtoedit	コマンド groff <code>-Tdvi</code> を使ってフォントファイルを生成します。
troff	Unix の troff コマンドと高い互換性を持ちます。通常は groff コマンドを用いて本コマンドが起動されます。groff コマンドは、プリプロセッサ、ポストプロセッサを、適切な順で適切なオプションをつけて起動します。

6.47. Xz-5.0.5

Xz パッケージは、ファイルの圧縮、伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。これは lzma フォーマットおよび新しい xz 圧縮フォーマットを取り扱います。xz コマンドによりテキストファイルを圧縮すると、従来の gzip コマンドや bzip2 コマンドに比べて、高い圧縮率を実現できます。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 18 MB

6.47.1. Xz のインストール

Xz をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --libdir=/lib --docdir=/usr/share/doc/xz-5.0.5
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make pkgconfigdir=/usr/lib/pkgconfig install
```

6.47.2. Xz の構成

インストールプログラム:	lzcat (xz へのリンク), lzcmp (xzdifff へのリンク), lzdiff (xzdifff へのリンク), lzegrep (xzgrep へのリンク), lzfgrep (xzgrep へのリンク), lzgrep (xzgrep へのリンク), lzless (xzless へのリンク), lzma (xz へのリンク), lzmadec, lzmainfo, lzmore (xzmored へのリンク), unlzma (xz へのリンク), unxz, (xz へのリンク), xz, xzcat (xz へのリンク), xzcmp (xzdifff へのリンク), xzdec, xzdifff, xzegrep (xzgrep へのリンク), xzfgrep (xzgrep へのリンク), xzgrep, xzless, xzmored
インストールライブラリ:	liblzma.{a,so}
インストールディレクトリ:	/usr/include/lzma, /usr/share/doc/xz-5.0.5

概略説明

lzcat	ファイルを伸張（解凍）し標準出力へ出力します。
lzcmp	LZMA 圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
lzdiff	LZMA 圧縮されたファイルに対して diff を実行します。
lzegrep	LZMA 圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
lzfgrep	LZMA 圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
lzgrep	LZMA 圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
lzless	LZMA 圧縮されたファイルに対して less を実行します。
lzma	LZMA フォーマットによりファイルの圧縮と伸張（解凍）を行います。
lzmadec	LZMA 圧縮されたファイルを高速に伸張（解凍）するコンパクトなプログラムです。
lzmainfo	LZMA 圧縮されたファイルのヘッダーに保持されている情報を表示します。
lzmore	LZMA 圧縮されたファイルに対して more を実行します。
unlzma	LZMA フォーマットされたファイルを伸張（解凍）します。
unxz	XZ フォーマットされたファイルを伸張（解凍）します。
xz	XZ フォーマットによりファイルの圧縮と伸張（解凍）を行います。
xzcat	ファイルの伸張（解凍）を行い標準出力へ出力します。
xzcmp	XZ 圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
xzdec	XZ 圧縮されたファイルを高速に伸張（解凍）するコンパクトなプログラムです。
xzdifff	XZ 圧縮されたファイルに対して diff を実行します。

xzegrep XZ 圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
xzfgrep XZ 圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
xzgrep XZ 圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
xzless XZ 圧縮されたファイルに対して less を実行します。
xzmore XZ 圧縮されたファイルに対して more を実行します。
liblzma* Lempel-Ziv-Markov のチェーンアルゴリズムを利用し、損失なくブロックソートによりデータ圧縮を行う機能を提供するライブラリです。

6.48. GRUB-2.00

GRUB パッケージは GRand Unified Bootloader を提供します。

概算ビルド時間: 0.7 SBU
必要ディスク容量: 112 MB

6.48.1. GRUB のインストール

本パッケージと Glibc-2.18 との互換性がないため、これを修正します。

```
sed -i -e '/gets is a/d' grub-core/gnulib/stdio.in.h
```

GRUB をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --sysconfdir=/etc \
            --disable-grub-emu-usb \
            --disable-efiemu \
            --disable-werror
```

--disable-werror オプションは、最新の flex によって警告が出力されても、ビルドを成功させるためのものです。その他の --disable スイッチは LFS においては必要のない機能やテストを最小限とするためのものです。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

GRUB を使ってシステムのブート起動設定を行う方法については 8.4. 「GRUB を用いたブートプロセスの設定」で説明しています。

6.48.2. GRUB の構成

インストールプログラム:	grub-bios-setup, grub-editenv, grub-fstest, grub-install, grub-kbdcomp, grub-menulst2cfg, grub-mkconfig, grub-mkimage, grub-mklayout, grub-mknetdir, grub-mkpasswd-pbkdf2, grub-mkrelpath, grub-mkrescue, grub-mkstandalone, grub-ofpathname, grub-probe, grub-reboot, grub-script-check, grub-set-default, grub-sparc64-setup
インストールディレクトリ:	/usr/lib/grub, /etc/grub.d, /usr/share/grub, /boot/grub

概略説明

grub-bios-setup	grub-install に対するヘルパープログラム。
grub-editenv	環境ブロック (environment block) を編集するツール。
grub-fstest	ファイルシステムドライバーをデバッグするツール。
grub-install	指定したドライブに GRUB をインストールします。
grub-kbdcomp	xkb レイアウトを GRUB が認識できる他の書式に変換するスクリプト。
grub-menulst2cfg	GRUB Legacy の menu.lst を GRUB 2 にて利用される grub.cfg に変換します。
grub-mkconfig	GRUB の設定ファイルを生成します。
grub-mkimage	GRUB のブートイメージ (bootable image) を生成します。
grub-mklayout	GRUB のキーボードレイアウトファイルを生成します。
grub-mknetdir	GRUB のネットブートディレクトリを生成します。
grub-mkpasswd-pbkdf2	ブートメニューにて利用する、PBKDF2 により暗号化されたパスワードを生成します。
grub-mkrelpath	システムのパスをルートからの相対パスとします。
grub-mkrescue	フロッピーディスクや CDROM/DVD 用の GRUB のブートイメージを生成します。

<code>grub-mkstandalone</code>	スタンドアロンイメージを生成します。
<code>grub-ofpathname</code>	GRUB デバイスのパスを出力するヘルパープログラム。
<code>grub-probe</code>	指定されたパスやデバイスに対するデバイス情報を検証 (probe) します。
<code>grub-reboot</code>	デフォルトのブートメニューを設定します。これは次にブートした時だけ有効なものです。
<code>grub-script-check</code>	GRUB の設定スクリプトにおける文法をチェックします。
<code>grub-set-default</code>	デフォルトのブートメニューを設定します。
<code>grub-sparc64-setup</code>	<code>grub-setup</code> に対するヘルパープログラム。

6.49. Less-458

Less パッケージはテキストファイルビューアーを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 3.6 MB

6.49.1. Less のインストール

Less をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --sysconfdir=/etc
```

configure オプションの意味:

`--sysconfdir=/etc`

本パッケージによって作成されるプログラムが /etc ディレクトリにある設定ファイルを参照するように指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.49.2. Less の構成

インストールプログラム: less, lessecho, lesskey

概略説明

less	ファイルビューアーまたはページャー。指示されたファイルの内容を表示します。表示中にはスクロール、文字検索、移動が可能です。
lessecho	Unix システム上のファイル名において * や ? といったメタ文字 (meta-characters) を展開するために必要となります。
lesskey	less におけるキー割り当てを設定するために利用します。

6.50. Gzip-1.6

Gzip パッケージはファイルの圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 19.7 MB

6.50.1. Gzip のインストール

Gzip をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --bindir=/bin
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

ルートファイルシステム上に置く必要のないプログラムを移動させます。

```
mv -v /bin/{gzexe,uncompress,zcmp,zdiff,zegrep} /usr/bin
mv -v /bin/{zfgrep,zforce,zgrep,zless,zmore,znew} /usr/bin
```

6.50.2. Gzip の構成

インストールプログラム: gunzip, gzexe, gzip, uncompress, zcat, zcmp, zdiff, zegrep, zfgrep, zforce, zgrep, zless, zmore, znew

概略説明

gunzip	gzip により圧縮されたファイルを解凍します。
gzexe	自動解凍形式の実行ファイルを生成します。
gzip	Lempel-Ziv (LZ77) 方式により指定されたファイルを圧縮します。
uncompress	圧縮されたファイルを解凍します。
zcat	gzip により圧縮されたファイルを解凍して標準出力へ出力します。
zcmp	gzip により圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
zdiff	gzip により圧縮されたファイルに対して diff を実行します。
zegrep	gzip により圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
zfgrep	gzip により圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
zforce	指定されたファイルが gzip により圧縮されている場合に、強制的に拡張子 .gz を付与します。こうすることで gzip は再度の圧縮を行わないようになります。これはファイル転送によってファイル名が切り詰められてしまった場合に活用することができます。
zgrep	gzip により圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
zless	gzip により圧縮されたファイルに対して less を実行します。
zmore	gzip により圧縮されたファイルに対して more を実行します。
znew	compress フォーマットの圧縮ファイルを gzip フォーマットのファイルとして再圧縮します。つまり .Z から .gz への変換を行います。

6.51. IPRoute2-3.10.0

IPRoute2 パッケージは IPv4 ベースの基本的または応用的ネットワーク制御を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 7.3 MB

6.51.1. IPRoute2 のインストール

本パッケージにて提供している arpd プログラムは Berkeley DB に依存しています。 arpd はベースとする Linux システムにとって普通は必要となりません。そこで Berkeley DB への依存を取り除くために、以下の sed コマンドを実行します。 arpd プログラムを必要とする場合は BLFS ブックの <http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/server/databases.html#db> に示される Berkeley DB の構築手順に従ってください。

```
sed -i '/^TARGETS/s@arpd@g' misc/Makefile
sed -i /ARPD/d Makefile
sed -i 's/arpd.8//' man/man8/Makefile
```

パッケージをコンパイルします。

```
make DESTDIR=
```

make オプションの意味:

DESTDIR=

このオプションにより IPRoute2 の実行モジュール類を適切なディレクトリにインストールします。デフォルトでは *DESTDIR* は */usr* ディレクトリに設定されています。

このパッケージにテストスイートはありますが、このテストの前提条件からすると chroot 環境のもとでは信頼のあるテスト結果を得ることは無理があります。もし LFS システムを構築した後にテストスイートを実施したいなら、カーネル設定において */proc/config.gz CONFIG_IKCONFIG_PROC* ("General setup" -> "Enable access to .config through /proc/config.gz") のサポートを有効にしてカーネルをビルドしてください。そしてサブディレクトリ *testsuite/* にて 'make alltests' を実行してください。

パッケージをインストールします。

```
make DESTDIR= \
MANDIR=/usr/share/man \
DOCDIR=/usr/share/doc/iproute2-3.10.0 install
```

6.51.2. IPRoute2 の構成

インストールプログラム: bridge, ctstat (lnstat へのリンク), genl, ifcfg, ifstat, ip, lnstat, nstat, routef, routel, rtacct, rtmon, rtpr, rtstat (lnstat へのリンク), ss, tc
インストールディレクトリ: /etc/iproute2, /lib/tc, /usr/share/doc/iproute2-3.10.0, /usr/lib/tc

概略説明

bridge ネットワークブリッジを設定します。
ctstat 接続ステータスの表示ユーティリティ。
genl
ifcfg ip コマンドに対するシェルスクリプトラッパー。 <http://www.skbuff.net/iputils/> にて提供されている iputils パッケージの arping プログラムと rdisk プログラムを利用します。
ifstat インターフェースの統計情報を表示します。 インターフェースによって送受信されたパケット量が示されず。
ip 主となる実行モジュールで、複数の機能性を持ちます。
ip link <デバイス名> はデバイスのステータスを参照し、またステータスの変更を行います。
ip addr はアドレスとその属性を参照し、新しいアドレスの追加、古いアドレスの削除を行います。
ip neighbor は、隣接ルーター (neighbor) の割り当てや属性を参照し、隣接ルーターの項目追加や古いものの削除を行います。
ip rule は、ルーティングポリシー (routing policy) を参照し、変更を行います。
ip route は、ルーティングテーブル (routing table) を参照し、ルーティングルール (routing table rule) を変更します。

`ip tunnel` は、IP トンネル (IP tunnel) やその属性を参照し、変更を行います。
`ip maddr` は、マルチキャストアドレス (multicast address) やその属性を参照し、変更を行います。
`ip mroute` は、マルチキャストルーティング (multicast routing) の設定、変更、削除を行います。
`ip monitor` は、デバイスの状態、アドレス、ルートを継続的に監視します。

`lnstat` Linux のネットワーク統計情報を提供します。これはかつての `rtstat` プログラムを汎用的に機能充足を図ったプログラムです。

`nstat` ネットワーク統計情報を表示します。

`routef` `ip route` のコンポーネント。これはルーティングテーブルをクリアします。

`routel` `ip route` のコンポーネント。これはルーティングテーブルの一覧を表示します。

`rtacct` `/proc/net/rt_acct` の内容を表示します。

`rtmon` ルート監視ユーティリティー。

`rtpr` `ip -o` コマンドにより出力される内容を読みやすい形に戻します。

`rtstat` ルートステータスの表示ユーティリティー。

`ss` `netstat` コマンドと同じ。アクティブな接続を表示します。

`tc` トラフィック制御プログラム (Traffic Controlling Executable)。これは QOS (Quality Of Service) と COS (Class Of Service) を実装するプログラムです。
`tc qdisc` は、キューイング規則 (queueing discipline) の設定を行います。
`tc class` は、キューイング規則スケジューリング (queueing discipline scheduling) に基づくクラスの設定を行います。
`tc estimator` は、ネットワークフローを見積もります。
`tc filter` は、QOS/COS パケットのフィルタリング設定を行います。
`tc policy` は、QOS/COS ポリシーの設定を行います。

6.52. Kbd-1.15.5

Kbd パッケージは、キーテーブル (key-table) ファイル、コンソールフォント、キーボードユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 20 MB

6.52.1. Kbd のインストール

バックスペース (backspace) キーとデリート (delete) キーは Kbd パッケージのキーマップ内では一貫した定義にはなっていません。以下のパッチは i386 用のキーマップについてその問題を解消します。

```
patch -Np1 -i ../kbd-1.15.5-backspace-1.patch
```

パッチを当てればバックスペースキーの文字コードは 127 となり、デリートキーはよく知られたエスケープコードを生成することになります。

キーマップが正しくロードされないものがあるため、これを修正します。

```
sed -i -e '326 s/if/while/' src/loadkeys.analyze.1
```

不要なプログラム `resizecons` とその man ページを削除します。(今はもう存在しない `svgalib` がビデオモードファイルを提供するために利用していたものであり、普通は `setfont` コマンドがコンソールサイズを適切に設定します。)

```
sed -i 's/\(RESIZECONS_PROGS=\)yes/\1no/g' configure
sed -i 's/resizecons.8 //' man/man8/Makefile.in
```

Kbd をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --disable-vlock
```

`configure` オプションの意味:

`--disable-vlock`

このオプションは `vlock` ユーティリティをビルドしないようにします。そのユーティリティは PAM ライブラリが必要ですが、`chroot` 環境では利用することができません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```



注記

ベラルーシ語のような言語において Kbd パッケージは正しいキーマップを提供せず、ISO-8859-5 エンコーディングで CP1251 キーマップであるものとして扱われます。そのような言語ユーザーは個別に正しいキーマップをダウンロードして設定する必要があります。

必要ならドキュメントをインストールします。

```
mkdir -v /usr/share/doc/kbd-1.15.5
cp -R -v doc/* /usr/share/doc/kbd-1.15.5
```

6.52.2. Kbd の構成

インストールプログラム: `chvt`, `deallocvt`, `dumpkeys`, `fgconsole`, `getkeycodes`, `kbdinfo`, `kbd_mode`, `kbdrate`, `loadkeys`, `loadunimap`, `mapscrn`, `openvt`, `psfaddtable` (`psfxtable` へのリンク), `psfgettable` (`psfxtable` へのリンク), `psfstrietable` (`psfxtable` へのリンク), `psfxtable`, `setfont`, `setkeycodes`, `setleds`, `setmetamode`, `showconsolefont`, `showkey`, `unicode_start`, `unicode_stop`

インストールディレクトリ: `/usr/share/consolefonts`, `/usr/share/consoletrans`, `/usr/share/keymaps`, `/usr/share/unimaps`

概略説明

<code>chvt</code>	現在表示されている仮想端末を切り替えます。
<code>deallocvt</code>	未使用の仮想端末への割り当てを開放します。
<code>dumpkeys</code>	キーボード変換テーブル (keyboard translation table) の情報をダンプします。
<code>fgconsole</code>	アクティブな仮想端末数を表示します。
<code>getkeycodes</code>	カーネルのスキャンコード-キーコード (scancode-to-keycode) マッピングテーブルを表示します。
<code>kbdinfo</code>	コンソール状態に関する情報を取得します。
<code>kbd_mode</code>	キーボードモードの表示または設定を行います。
<code>kbdrate</code>	キーボードのリピート速度 (repeat rate) と遅延時間 (delay rate) を設定します。
<code>loadkeys</code>	キーボード変換テーブル (keyboard translation tables) をロードします。
<code>loadunimap</code>	カーネルのユニコード-フォント (unicode-to-font) マッピングテーブルをロードします。
<code>mapscrn</code>	かつてのプログラムです。これはユーザー定義の文字マッピングテーブルをコンソールドライバーにロードするために利用します。現在では <code>setfont</code> を利用します。
<code>openvt</code>	新しい仮想端末 (virtual terminal; VT) 上でプログラムを起動します。
<code>psfaddtable</code>	<code>psfxtable</code> へのリンク。
<code>psfgettable</code>	<code>psfxtable</code> へのリンク。
<code>psfstriptime</code>	<code>psfxtable</code> へのリンク。
<code>psfxtable</code>	コンソールフォント用のユニコード文字テーブルを取り扱います。
<code>setfont</code>	EGA (Enhanced Graphic Adapter) フォントや VGA (Video Graphics Array) フォントを変更します。
<code>setkeycodes</code>	カーネルのスキャンコード-キーコード (scancode-to-keycode) マッピングテーブルの項目をロードします。キーボード上に特殊キーがある場合に利用します。
<code>setleds</code>	キーボードフラグや LED (Light Emitting Diode) を設定します。
<code>setmetamode</code>	キーボードのメタキー (meta-key) 設定を定義します。
<code>showconsolefont</code>	現在設定されている EGA/VGA コンソールスクリーンフォントを表示します。
<code>showkey</code>	キーボード上にて押下されたキーのスキャンコード、キーコード、ASCII コードを表示します。
<code>unicode_start</code>	キーボードとコンソールをユニコードモードにします。キーマップファイルが ISO-8859-1 エンコーディングで書かれている場合にのみこれを利用します。他のエンコーディングの場合、このプログラムの出力結果は正しいものになりません。
<code>unicode_stop</code>	キーボードとコンソールをユニコードモードから戻します。

6.53. Kmod-14

Kmod パッケージは、カーネルモジュールをロードするためのライブラリやユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 34 MB

6.53.1. Kmod のインストール

Kmod をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr      \  
            --bindir=/bin      \  
            --libdir=/lib      \  
            --sysconfdir=/etc  \  
            --disable-manpages \  
            --with-xz          \  
            --with-zlib
```

configure オプションの意味:

`--with-*`

これらのオプションは、Kmod が圧縮されたカーネルモジュールを取り扱えるようにするものです。

`--disable-manpages`

このオプションは man ページをビルドしないようにします。libxslt パッケージに依存するものであり、chroot 環境では利用できないためです。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。また Module-Init-Tools パッケージとの互換性を保つためにシンボリックリンクを生成します。Module-Init-Tools パッケージは、これまで Linux カーネルモジュールを取り扱っていたものです。

```
make pkgconfigdir=/usr/lib/pkgconfig install  
  
for target in depmod insmod modinfo modprobe rmmmod; do  
    ln -sv ../bin/kmod /sbin/$target  
done  
  
ln -sv kmod /bin/lsmmod
```

6.53.2. Kmod の構成

インストールプログラム: depmod (kmod へのリンク), insmod (kmod へのリンク), kmod, lsmod (kmod へのリンク), modinfo (kmod へのリンク), modprobe (kmod へのリンク), rmmmod (kmod へのリンク)
インストールライブラリ: /lib/kmod.so

概略説明

depmod 存在しているモジュール内に含まれるシンボル名に基づいて、モジュールの依存関係を記述したファイル (dependency file) を生成します。これは modprobe が、必要なモジュールを自動的にロードするために利用します。

insmod 稼動中のカーネルに対してロード可能なモジュールをインストールします。

kmod カーネルモジュールのロード、アンロードを行います。

libkmod このライブラリは、カーネルモジュールのロード、アンロードを行う他のプログラムが利用します。

lsmod その時点でロードされているモジュールを一覧表示します。

<code>modinfo</code>	カーネルモジュールに関連付いたオブジェクトファイルを調べて、出来る限りの情報を表示します。
<code>modprobe</code>	<code>depmod</code> によってモジュールの依存関係を記述したファイル (dependency file) が生成されます。これを使って関連するモジュールを自動的にロードします。
<code>rmmod</code>	稼働中のカーネルからモジュールをアンロードします。

6.54. Libpipeline-1.2.4

Libpipeline パッケージは、サブプロセスのパイプラインを柔軟かつ便利に取り扱うライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 7.4 MB

6.54.1. Libpipeline のインストール

Libpipeline をコンパイルするための準備をします。

```
PKG_CONFIG_PATH=/tools/lib/pkgconfig ./configure --prefix=/usr
```

configure オプションの意味:

PKG_CONFIG_PATH

この環境変数は 5.14. 「Check-0.9.10」にて構築したテストライブラリのメタデータを収容するディレクトリを指定するものです。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.54.2. Libpipeline の構成

インストールライブラリ: libpipeline.so

概略説明

libpipeline このライブラリは、サブプロセス間のパイプラインを安全に構築するために利用されます。

6.55. Make-3.82

Make パッケージは、パッケージ類をコンパイルするためのプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 11.3 MB

6.55.1. Make のインストール

まずアップストリームによる修正を適用します。

```
patch -Np1 -i ../make-3.82-upstream_fixes-3.patch
```

Make をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.55.2. Make の構成

インストールプログラム: make

概略説明

make パッケージの構成要素に対して、どれを(再)コンパイルするかを自動判別し、対応するコマンドを実行します。

6.56. Man-DB-2.6.5

Man-DB パッケージは man ページを検索したり表示したりするプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.5 SBU
必要ディスク容量: 27 MB

6.56.1. Man-DB のインストール

Man-DB をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --libexecdir=/usr/lib \
            --docdir=/usr/share/doc/man-db-2.6.5 \
            --sysconfdir=/etc \
            --disable-setuid \
            --with-browser=/usr/bin/lynx \
            --with-vgrind=/usr/bin/vgrind \
            --with-grap=/usr/bin/grap
```

configure オプションの意味:

--disable-setuid

これは man プログラムが man ユーザーに対して setuid を実行しないようにします。

--with-...

この三つのオプションはデフォルトで利用するプログラムを指定します。lynx はテキストベースの Web ブラウザーです。(BLFS でのインストール手順を参照してください。) vgrind はプログラムソースを Groff の入力形式に変換します。grap は Groff 文書においてグラフを組版するために利用します。vgrind と grap は man ページを見るだけであれば必要ありません。これらは LFS や BLFS には含まれません。もし利用したい場合は LFS の構築を終えた後に自分でインストールしてください。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.56.2. LFS における英語以外のマニュアルページ

以下に示す表は /usr/share/man/<ll> 配下にインストールされる man ページとそのエンコーディングを示します。Man-DB は man ページが UTF-8 エンコーディングかどうかを正しく認識します。

表 6.1. 8 ビット man ページのキャラクターエンコーディング

言語 (コード)	エンコーディング	言語 (コード)	エンコーディング
デンマーク語 (da)	ISO-8859-1	クロアチア語 (hr)	ISO-8859-2
ドイツ語 (de)	ISO-8859-1	ハンガリー語 (hu)	ISO-8859-2
英語 (en)	ISO-8859-1	日本語 (ja)	EUC-JP
スペイン語 (es)	ISO-8859-1	韓国語 (ko)	EUC-KR
エストニア語 (et)	ISO-8859-1	リトアニア語 (lt)	ISO-8859-13
フィンランド語 (fi)	ISO-8859-1	ラトビア語 (lv)	ISO-8859-13
フランス語 (fr)	ISO-8859-1	マケドニア語 (mk)	ISO-8859-5
アイルランド語 (ga)	ISO-8859-1	ポーランド語 (pl)	ISO-8859-2
ガリシア語 (gl)	ISO-8859-1	ルーマニア語 (ro)	ISO-8859-2
インドネシア語 (id)	ISO-8859-1	ロシア語 (ru)	KOI8-R
アイスランド語 (is)	ISO-8859-1	スロバキア語 (sk)	ISO-8859-2
イタリア語 (it)	ISO-8859-1	スロベニア語 (sl)	ISO-8859-2
ノルウェー語 ブークモール (Norwegian Bokmal; nb)	ISO-8859-1	セルビア Latin (sr@latin)	ISO-8859-2
オランダ語 (nl)	ISO-8859-1	セルビア語 (sr)	ISO-8859-5
ノルウェー語 ニーノシュク (Norwegian Nynorsk; nn)	ISO-8859-1	トルコ語 (tr)	ISO-8859-9
ノルウェー語 (no)	ISO-8859-1	ウクライナ語 (uk)	KOI8-U
ポルトガル語 (pt)	ISO-8859-1	ベトナム語 (vi)	TCVN5712-1
スウェーデン語 (sv)	ISO-8859-1	中国語 簡体字 (Simplified Chinese) (zh_CN)	GBK
ベラルーシ語 (be)	CP1251	中国語 簡体字 (Simplified Chinese), シンガポール (zh_SG)	GBK
ブルガリア語 (bg)	CP1251	中国語 繁体字 (Traditional Chinese), 香港 (zh_HK)	BIG5HKSCS
チェコ語 (cs)	ISO-8859-2	中国語 繁体字 (Traditional Chinese) (zh_TW)	BIG5
ギリシア語 (el)	ISO-8859-7		



注記

上に示されていない言語によるマニュアルページはサポートされません。

6.56.3. Man-DB の構成

インストールプログラム: accessdb, apropos (whatis へのリンク), catman, levgrog, man, mandb, manpath, whatis, zsoelim
 インストールライブラリ: libman.so, libmandb.so
 インストールディレクトリ: /usr/lib/man-db, /usr/share/doc/man-db-2.6.5

概略説明

accessdb whatis データベースの内容をダンプして読みやすい形で出力します。
 apropos whatis データベースを検索して、指定した文字列を含むシステムコマンドの概略説明を表示します。
 catman フォーマット済マニュアルページを生成、更新します。
 levgrog 指定されたマニュアルページについて、一行のサマリー情報を表示します。

man	指定されたマニュアルページを整形して表示します。
mandb	whatis データベースを生成、更新します。
manpath	\$MANPATH の内容を表示します。あるいは (\$MANPATH が設定されていない場合は) man.conf 内の設定とユーザー設定に基づいて適切な検索パスを表示します。
whatis	whatis データベースを検索して、指定されたキーワードを含むシステムコマンドの概略説明を表示します。
zsoelim	ファイルの内容を読み込んで、.so file の形で書かれている記述行を、その file の内容に置き換えます。
libman	man に対しての実行時のサポート機能を提供します。
libmandb	man に対しての実行時のサポート機能を提供します。

6.57. Patch-2.7.1

Patch パッケージは「パッチ」ファイルを適用することにより、ファイルの修正、生成を行うプログラムを提供します。「パッチ」ファイルは diff プログラムにより生成されます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 3.4 MB

6.57.1. Patch のインストール

Patch をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.57.2. Patch の構成

インストールプログラム: patch

概略説明

patch パッチファイルに従って対象ファイルを修正します。パッチファイルは通常 diff コマンドによって修正前後の違いが列記されているものです。そのような違いを対象ファイルに適用することで patch はパッチを適用したファイルを生じます。

6.58. Syslogd-1.5

Syslogd パッケージは、例えばカーネルが異常発生時に出力するログのような、システムログメッセージを取り扱うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 0.6 MB

6.58.1. Syslogd のインストール

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make BINDIR=/sbin install
```

6.58.2. Syslogd の設定

以下を実行して `/etc/syslog.conf` ファイルを生成します。

```
cat > /etc/syslog.conf << "EOF"
# Begin /etc/syslog.conf

auth,authpriv.* -/var/log/auth.log
*.*;auth,authpriv.none -/var/log/sys.log
daemon.* -/var/log/daemon.log
kern.* -/var/log/kern.log
mail.* -/var/log/mail.log
user.* -/var/log/user.log
*.emerg *

# End /etc/syslog.conf
EOF
```

6.58.3. Syslogd の構成

インストールプログラム: klogd, syslogd

概略説明

klogd カーネルメッセージを受け取り出力するシステムデーモン。
syslogd システムプログラムが出力するログ情報を出力します。出力されるログ情報には少なくとも処理日付、ホスト名が出力されます。また通常はプログラム名も出力されます。ただこれはログ出力デーモンがどれだけ信頼のおけるものであるかに依存する情報です。

6.59. Sysvinit-2.88dsf

Sysvinit パッケージは、システムの起動、実行、シャットダウンを制御するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 1.4 MB

6.59.1. Sysvinit のインストール

ランレベルが変更される時 (例えばシステムが停止する時) `init` コマンドは各種のプロセスに対して停止シグナル (termination signals) を送信します。ただしその対象は `init` プログラム自身が起動したプロセスであり、新たなランレベルでは起動しないプロセスです。一方で `init` コマンドが出力するメッセージは「Sending processes the TERM signal」(プロセスに対して TERM シグナルを送信します) というものです。このメッセージは、その時点にて稼働中の全プロセスに対してシグナルを送信しているかのように誤解してしまいます。これを正すためにソースを修正して「Sending processes configured via /etc/inittab the TERM signal」(/etc/inittab で設定されているプロセスに対して TERM シグナルを送信します) というメッセージに置き換えます。

```
sed -i 's@Sending processes@& configured via /etc/inittab@g' src/init.c
```

`wall`, `mountpoint`, `utmpdump` は `Util-linux` パッケージにおいてメンテナンスされており、既にインストールが来ています。そこで `Sysvinit` が提供するこれらのコマンドはインストールせず、その `man` ページもインストールしないようにします。

```
sed -i -e '/utmpdump/d' \  
-e '/mountpoint/d' src/Makefile
```

パッケージをコンパイルします。

```
make -C src
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make -C src install
```

6.59.2. Sysvinit の構成

インストールプログラム: `bootlogd`, `fstab-decode`, `halt`, `init`, `killall5`, `last`, `lastb` (`last` へのリンク), `mesg`, `pidof` (`killall5` へのリンク), `poweroff` (`halt` へのリンク), `reboot` (`halt` へのリンク), `runlevel`, `shutdown`, `sulogin`, `telinit` (`init` へのリンク)

概略説明

<code>bootlogd</code>	ブート時のメッセージをログファイルに出力します。
<code>fstab-decode</code>	<code>fstab</code> 形式の (<code>fstab-encoded</code> の) 引数とともにコマンドを実行します。
<code>halt</code>	ランレベルが既に 0 ではない通常の起動状態の場合に <code>shutdown</code> をオプション <code>-h</code> をつけて実行します。そしてカーネルに対してシステム停止を指示します。システムが停止される状況は <code>/var/log/wtmp</code> ファイルに記録されます。
<code>init</code>	カーネルがハードウェアを初期化した後に、最初に起動するプロセスです。ブート処理がこのプロセスに引き継がれ、指示されたプロセスをすべて起動していきます。
<code>killall5</code>	プロセスすべてに対してシグナルを送信します。ただし自分のセッション内の起動プロセスは除きます。つまり本コマンドを実行したスクリプトは停止されません。
<code>last</code>	ユーザーの最新のログイン (ログアウト) の情報を表示します。これは <code>/var/log/wtmp</code> ファイルの終わりから調べているものです。またシステムブート、シャットダウン、ランレベルの変更時の情報も示します。
<code>lastb</code>	ログインに失敗した情報を表示します。これは <code>/var/log/btmp</code> に記録されています。
<code>mesg</code>	現在のユーザーの端末に対して、他のユーザーがメッセージ送信できるかどうかを制御します。
<code>pidof</code>	指定されたプログラムの PID を表示します。
<code>poweroff</code>	カーネルに対してシステムの停止を指示し、コンピューターの電源を切ります。(halt を参照してください。)

reboot	カーネルに対してシステムの再起動を指示します。(halt を参照してください。)
runlevel	現在のランレベルと直前のランレベルを表示します。最新のランレベルは /var/run/utmp ファイルに記録されています。
shutdown	システムの終了を安全に行います。その際にはプロセスすべてへのシグナル送信を行い、ログインユーザーへの通知も行います。
sulogin	root ユーザーでのログインを行います。通常は init が起動するもので、システムがシングルユーザーモードで起動する際に利用されます。
telinit	init に対してランレベルの変更を指示します。

6.60. Tar-1.26

Tar パッケージはアーカイブプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 2.4 SBU
必要ディスク容量: 34 MB

6.60.1. Tar のインストール

tar の Man ページを生成するプログラムを追加します。

```
patch -Np1 -i ../tar-1.26-manpage-1.patch
```

本パッケージと Glibc-2.18 との互換性がないため、これを修正します。

```
sed -i -e '/gets is a/d' gnu/stdio.in.h
```

Tar をコンパイルするための準備をします。

```
FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1 \
./configure --prefix=/usr \
             --bindir=/bin \
             --libexecdir=/usr/sbin
```

configure オプションの意味:

```
FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1
```

このオプションは、mkknod に対するテストを root ユーザーにて実行するようにします。一般にこのテストを root ユーザーで実行することは危険なものとされますが、ここでは部分的にビルドしたシステムでテストするものであるため、オーバーライドすることで支障はありません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするために以下を実行します。(約 1 SBU)

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
make -C doc install-html docdir=/usr/share/doc/tar-1.26
```

最後に Man ページを生成して、それを所定ディレクトリにインストールします。

```
perl tarman > /usr/share/man/man1/tar.1
```

6.60.2. Tar の構成

インストールプログラム: rmt, tar
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/tar-1.26

概略説明

rmt プロセス間通信のコネクションを通じて磁気テープドライブを遠隔操作します。
tar アーカイブの生成、アーカイブからのファイル抽出、アーカイブの内容一覧表示を行います。アーカイブは tarball と呼ばれます。

6.61. Texinfo-5.1

Texinfo パッケージは info ページへの読み書き、変換を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.6 SBU
必要ディスク容量: 101 MB

6.61.1. Texinfo のインストール

テストスイートと Perl-5.18.1 が非互換である点を修正します。

```
patch -Npl -i ../texinfo-5.1-test-1.patch
```

Texinfo をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```



注記

テストスイートにて1つのテストは失敗します。これは古くなった perl コードが用いられているためです。

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

必要なら TeX システムに属するコンポーネント類をインストールします。

```
make TEXMF=/usr/share/texmf install-tex
```

make パラメーターの意味:

```
TEXMF=/usr/share/texmf
```

Makefile 変数である TEXMF に TeX ツリーのルートディレクトリを設定します。これは後に TeX パッケージをインストールするための準備です。

ドキュメントシステム Info は、メニュー項目の一覧を単純なテキストファイルに保持しています。そのファイルは /usr/share/info/dir にあります。残念ながら数々のパッケージの Makefile は、既にインストールされている info ページとの同期を取る処理を行わない場合があります。/usr/share/info/dir の再生成を必要とするなら、以下のコマンドを実行してこれを実現します。

```
cd /usr/share/info
rm -v dir
for f in *
do install-info $f dir 2>/dev/null
done
```

6.61.2. Texinfo の構成

インストールプログラム: info, infokey, install-info, makeinfo, pdftexi2dvi, pod2texi, texi2any, texi2dvi, texi2pdf, texindex
インストールディレクトリ: /usr/share/texinfo

概略説明

info info ページを見るために利用します。これは man ページに似ていますが、単に利用可能なコマンドラインオプションを説明するだけのものではなく、おそらくはもっと充実しています。例えば man bison と info bison を比較してみてください。

infokey	Info のカスタマイズ情報を設定したソースファイルをバイナリ形式にコンパイルします。
install-info	info ページをインストールします。 info 索引ファイルにある索引項目も更新します。
makeinfo	指定された Texinfo ソースファイルを Info ページ、プレーンテキスト、HTML ファイルに変換します。
pdftexi2dvi	指定された Texinfo ドキュメントファイルを PDF (Portable Document Format) ファイルに変換します。
pod2texi	Pod フォーマットを Texinfo フォーマットに変換します。
texi2any	Texinfo のソースファイルを他のさまざまなフォーマットに変換します。
texi2dvi	指定された Texinfo ドキュメントファイルを、デバイスに依存しない印刷可能なファイルに変換します。
texi2pdf	指定された Texinfo ドキュメントファイルを PDF (Portable Document Format) ファイルに変換します。
texindex	Texinfo 索引ファイルの並び替えを行います。

6.62. Udev-206 (systemd-206 から抽出)

Udev パッケージはデバイスノードの動的生成を行うプログラムを提供します。Udev は systemd にマージされ開発されていますが、systemd の大半は LFS との互換性がありません。ここでは必要最小限の udev ファイルをビルドしインストールするものとします。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 29 MB

6.62.1. Udev のインストール



注記

本パッケージは他に比べると多少異なっています。はじめに `systemd-206.tar.xz` からパッケージのソースを取り出しますが、インストールするのは `udev` です。systemd ディレクトリに移動してから、これ以降に示す手順に従ってください。

`udev-lfs` という Tar アーカイブファイルには Udev パッケージをビルドする際の LFS 独自のファイルが含まれています。以下のようにしてこのファイルを systemd ソースディレクトリに展開します。

```
tar -xvf ../udev-lfs-206-1.tar.bz2
```

パッケージをコンパイルします。

```
make -f udev-lfs-206-1/Makefile.lfs
```

パッケージをインストールします。

```
make -f udev-lfs-206-1/Makefile.lfs install
```



注意

systemd のソースコード内には、明示的にディレクトリ名を含めたコードがいくつかあります。例えばバイナリ版のハードウェアデータベースファイル `/etc/udev/hwdb.bin` は実行時に利用されますが、ソースコードを書き換えない限りそのパスを変更することはできません。

ハードウェアデータベースを初期化します。

```
build/udevadm hwdb --update
```

最後に恒常的なネットワーク udev ルールを設定します。この作業の詳細は 7.2.1. 「ネットワークインターフェースに対する固定名称の作成」にて説明しています。本章のはじめにて説明しているように、`/sys` と `/proc` は `chroot` 環境にてマウントされている必要があります。これは以下のスクリプトを実行する際に必要となります。

```
bash udev-lfs-206-1/init-net-rules.sh
```

6.62.2. Udev の構成

インストールプログラム: `accelerometer, ata_id, cdrom_id, collect, mtd_probe, scsi_id, v4l_id, udevadm, udevd`
 インストールライブラリ: `libudev.so`
 インストールディレクトリ: `/etc/udev, /lib/udev, /lib/firmware, /usr/share/doc/udev`

概略説明

<code>ata_id</code>	ATA ドライブに対するユニークな文字列と追加情報 (uuid、ラベル) を Udev に提供します。
<code>cdrom_id</code>	CD-ROM ドライブや DVD-ROM ドライブの情報を Udev に提供します。
<code>collect</code>	現在の <code>uevent</code> の ID と (すべての対象 <code>uevent</code> に対する) ID のリストを与えることで、現在の ID を登録し、すべての対象 ID が既に登録済みであるかどうかを示します。
<code>scsi_id</code>	特定のデバイスに対する SCSI INQUIRY コマンド送信の結果として得られるデータに基づく、ユニークな SCSI 識別子を Udev に対して提供します。
<code>udevadm</code>	汎用的な Udev 管理ツール。udev daemon の制御、Udev データベースデータの提供、uevent の監視、uevent の完了までの待機、Udev 設定のテスト、指定デバイスに対する uevent の起動、といったことを行います。

`udev` ネットワークソケット上の `uevent` を待ち受けるデーモン。デバイスを生成し、その `uevent` に対応する外部プログラムを起動します。

`libudev` Udev デバイス情報のインターフェースライブラリ。

`/etc/udev` Udev 設定ファイル、デバイスのパーミッション、デバイス命名規則を定めます。

6.63. Vim-7.4

Vim パッケージは強力なテキストエディターを提供します。

概算ビルド時間: 1.4 SBU
必要ディスク容量: 121 MB



Vim の代替ソフトウェア

もし Emacs、Joe、Nano など他のエディターを用いたい場合は <http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/postlfs/editors.html> に示される手順に従ってインストールしてください。

6.63.1. Vim のインストール

設定ファイル `vimrc` がインストールされるデフォルトディレクトリを `/etc` に変更します。

```
echo '#define SYS_VIMRC_FILE "/etc/vimrc"' >> src/feature.h
```

Vim をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --enable-multibyte
```

`configure` オプションの意味:

`--enable-multibyte`

このスイッチは、マルチバイトエンコーディングによるファイルの編集をサポートする指示を行います。マルチバイト文字を用いるロケールにとってはこれが必要です。例えば Fedora Core のようにデフォルトで UTF-8 を採用している Linux ディストリビューションにおいては、新規に生成するテキストファイルを編集できるようにするために、このオプションを指定することが有用です。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make test
```

このテストスイートは数多くのバイナリデータを端末画面に出力します。これは端末画面の設定によっては問題を引き起こします。これを避けるには出力をリダイレクトしてログファイルに出力するようにしてください。テストが成功すれば、最後に "ALL DONE" と表示されます。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

たいていのユーザーは `vim` ではなく `vi` を使うようです。 `vi` を入力しても `vim` が実行されるように、実行モジュールに対するシンボリックリンクを作成します。さらに指定された言語による `man` ページへのシンボリックリンクも作成します。

```
ln -sv vim /usr/bin/vi
for L in /usr/share/man/{,*/}man1/vim.1; do
  ln -sv vim.1 $(dirname $L)/vi.1
done
```

デフォルトでは Vim のドキュメントが `/usr/share/vim` にインストールされます。以下のようなシンボリックリンクを生成することで `/usr/share/doc/vim-7.4` へアクセスしてもドキュメントが参照できるようにし、他のパッケージが配置するドキュメントの場所と整合を取ります。

```
ln -sv ../vim/vim74/doc /usr/share/doc/vim-7.4
```

LFS システムに対して X ウィンドウシステムをインストールする場合 X のインストールの後で Vim を再コンパイルする必要があります。Vim には GUI 版があり X や他のライブラリがインストールされていて初めて構築できるためです。この作業の詳細については Vim のドキュメントと BLFS ブックの <http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/postlfs/editors.html#postlfs-editors-vim> に示されている Vim のインストール説明のページを参照してください。

6.63.2. Vim の設定

デフォルトで vim は Vi 非互換モード (vi-incompatible mode) で起動します。他のエディターを使ってきたユーザーにとっては、よく分からないものかもしれません。以下の設定における「nocompatible」(非互換)は、Vi の新しい機能を利用することを意味しています。もし「compatible」(互換)モードに変更したい場合は、この設定ファイルの冒頭にて行っておくことが必要です。このモード設定は他の設定を置き換えるものとなることから、まず初めに行っておかなければならないものだからです。以下のコマンドを実行して vim の設定ファイルを生成します。

```
cat > /etc/vimrc << "EOF"
" Begin /etc/vimrc

set nocompatible
set backspace=2
syntax on
if (&term == "iterm") || (&term == "putty")
    set background=dark
endif

" End /etc/vimrc
EOF
```

`set nocompatible` と設定しておくことで vi 互換モードでの動作に比べて有用な動作となります。(これがデフォルトになっています。) その設定の記述から「no」の文字を取り除けば、旧来の vi コマンドの動作となります。`set backspace=2` を設定しておくことで、行を超えてもバックスペースキーによる編集が可能となります。またインデントが自動的に行われ、コマンド起動時には自動的に挿入モードとなります。`syntax on` パラメーターを指定すれば vim の文法ハイライト (syntax highlighting) 機能が有効になります。最後にある if 文は、`set background=dark` を指定した場合に、特定の端末エミュレーター上において vim が背景色を誤って認識しないようにするためのものです。エミュレーターの背景色が黒色であった場合に、より適切なハイライトが実現できます。

この他に利用できるオプションについては、以下のコマンドを実行することで出力される説明を参照してください。

```
vim -c ':options'
```



注記

Vim がインストールするスペルファイル (spell files) はデフォルトでは英語に対するものだけです。必要とする言語のスペルファイルをインストールするならば <ftp://ftp.vim.org/pub/vim/runtime/spell/> から、特定の言語、エンコーディングによる *.spl ファイル、またオプションとして *.sug ファイルをダウンロードしてください。そしてそれらのファイルを `/usr/share/vim/vim74/spell/` ディレクトリに保存してください。

スペルファイルを利用するには `/etc/vimrc` ファイルにて、例えば以下のような設定が必要になります。

```
set spelllang=en,ru
set spell
```

詳しくは、上で説明した URL にて提供されている README ファイルを参照してください。

6.63.3. Vim の構成

インストールプログラム:	ex (vim へのリンク), rview (vim へのリンク), rvim (vim へのリンク), vi (vim へのリンク), view (vim へのリンク), vim, vimdiff (vim へのリンク), vimtutor, xxd
インストールディレクトリ:	/usr/share/vim

概略説明

ex	vim を ex モードで起動します。
rview	view の機能限定版。シェルは起動できず、サスペンドも行うことはできません。
rvim	vim の機能限定版。シェルは起動できず、サスペンドも行うことはできません。
vi	vim へのリンク。
view	vim を読み込み専用モード (read-only mode) で起動します。

vim	エディター。
vimdiff	vim により、同一ファイルにおける 2 つまたは 3 つの版を同時に編集し、差異を表示します。
vimtutor	vim の基本的なキー操作とコマンドについて教えてくれます。
xxd	指定されたファイルの内容を 16 進数ダンプとして変換します。逆の変換も行うことができるため、バイナリパッチにも利用されます。

6.64. デバッグシンボルについて

プログラムやライブラリの多くは、デフォルトではデバッグシンボルを含めてコンパイルされています。(gcc の `-g` オプションが用いられています。) デバッグ情報を含めてコンパイルされたプログラムやライブラリは、デバッグ時にメモリアドレスが参照できるだけでなく、処理ルーチンや変数の名称も知ることができます。

しかしそういったデバッグ情報は、プログラムやライブラリのファイルサイズを極端に大きくします。以下にデバッグシンボルが占める割合の例を示します。

- デバッグシンボルを含んだ bash の実行ファイル: 1200 KB
- デバッグシンボルを含まない bash の実行ファイル: 480 KB
- デバッグシンボルを含んだ Glibc と GCC の関連ファイル (`/lib` と `/usr/lib`): 87 MB
- デバッグシンボルを含まない Glibc と GCC の関連ファイル: 16MB

利用するコンパイラや C ライブラリの違いによって、生成されるファイルのサイズは異なります。デバッグシンボルを含む、あるいは含まないサイズを比較した場合、その差は 2倍から 5倍の違いがあります。

プログラムをデバッグするユーザーはそう多くはありません。デバッグシンボルを削除すればディスク容量はかなり節減できます。次節ではプログラムやライブラリからデバッグシンボルを取り除く (`strip` する) 方法を示します。

6.65. 再度のストリップ

対象ユーザーがプログラマーではなく、プログラム類をデバッグするような使い方をしないのであれば、実行ファイルやライブラリに含まれるデバッグシンボルを削除しても構いません。そうすれば 90 MB ものサイズ削減を図ることができます。たとえデバッグできなくなっても困らないはずです。

以下に示すコマンドは、いとも簡単なものです。ただし入力つづりは簡単に間違いやすいので、もし誤った入力をするるとシステムを利用不能にしてしまいます。したがって `strip` コマンドを実行する前に、現時点の LFS システムのバックアップを取っておくことをお勧めします。

ストリップを実行する前には、ストリップしようとしている実行ファイルが実行中でないことを十分確認してください。また 6.4. 「Chroot 環境への移行」に示したコマンドにより `chroot` 環境に入っているかどうか定かでない場合は、いったんログアウトしてください。

logout

再度 `chroot` 環境に入ります。

```
chroot $LFS /tools/bin/env -i \
  HOME=/root TERM=$TERM PS1='\u:\w\$ ' \
  PATH=/bin:/usr/bin:/sbin:/usr/sbin \
  /tools/bin/bash --login
```

以下により実行バイナリやライブラリを安全にストリップします。

```
/tools/bin/find /{,usr/}{bin,lib,sbin} -type f \
  -exec /tools/bin/strip --strip-debug '{}' ';'
```

ファイルフォーマットが認識できないファイルがいくつも警告表示されますが、無視して構いません。この警告は、処理したファイルが実行モジュールではなくスクリプトファイルであることを示しています。

6.66. 仕切り直し

それまで入っていた `chroot` 環境からいったん抜け出て、以下の `chroot` コマンドにより入り直します。

```
chroot "$LFS" /usr/bin/env -i \
  HOME=/root TERM="$TERM" PS1='\u:\w\$ ' \
  PATH=/bin:/usr/bin:/sbin:/usr/sbin \
  /bin/bash --login
```

上を実行するのは `/tools` ディレクトリがもう必要ないからです。ですから `/tools` ディレクトリが一切無くてよいなら削除しても構いません。



注記

/tools ディレクトリを削除すると、ツールチェーンのテストに用いていた Tcl、Expect、DejaGNU も削除することになります。後々これらのプログラムを用いるなら、再度コンパイルとインストールを行う必要があります。BLFS ブックにてその手順を説明しているので <http://www.linuxfromscratch.org/blfs/> を参照してください。

仮想カーネルファイルシステムを、手動により、あるいはリブートによりアンマウントした場合は chroot 環境に入る前にそれらがマウントされていることを確認してください。その作業手順は6.2.2、「/dev のマウントと有効化」と6.2.3、「仮想カーネルファイルシステムのマウント」で説明しています。

第7章 ブートスクリプトの設定

7.1. はじめに

この章では、設定ファイルやブートスクリプトについて説明します。まずはネットワークの設定に必要な一般的な設定ファイルに2つについて説明します。

- 7.2. 「一般的なネットワークの設定」
- 7.3. 「/etc/hosts ファイルの設定」

次にデバイス設定を適切に行う方法について説明します。

- 7.4. 「LFS システムにおけるデバイスとモジュールの扱い」
- 7.5. 「デバイスへのシンボリックリンクの生成」

その次の節では、ブートプロセスにて必要となる LFS システムのスクリプトについて、そのインストールや設定方法を示します。スクリプトのほとんどは修正する必要がありませんが、一部に追加修正を要するものもあります。それはハードウェアに依存する情報を取り扱うためです。

System V系のスクリプトが広く用いられていて比較的単純であることから、本書でもこれを利用します。これとは別の方法として BSD 系の初期化スクリプトがあり <http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/bsd-init.txt> にて説明されています。また LFS メーリングリストで「depinit」、「upstart」、「systemd」という語を検索してみれば、さらに別の方法が示されていますので確認してください。

初期化スクリプトに関して別の方法をとるのであれば、本章は読み飛ばしてください。

ブートスクリプトの一覧は 付録 D に示しています。

- 7.6. 「LFS-ブートスクリプト-20130821」
- 7.7. 「ブートスクリプトはどのようにして動くのか」
- 7.8. 「システムのホスト名の設定」
- 7.9. 「Setclock スクリプトの設定」
- 7.10. 「Linux コンソールの設定」
- 7.11. 「Sysklogd スクリプトの設定」

最後に、ユーザーログが出力される際に利用されるスクリプトや設定ファイルについて概略を示します。

- 7.13. 「Bash シェルの初期起動ファイル」
- 7.14. 「/etc/inputrc ファイルの生成」

7.2. 一般的なネットワークの設定

本節はネットワークカードを設定する場合にのみ作業を行っていきます。

ネットワークカードを利用しないのであれば、ネットワークカードに関する設定は、おそらくすべて不要なはずです。そのような場合は、ランレベルディレクトリ (/etc/rc.d/rc*.d) から、シンボリックリンク network を削除してください。これは 7.6. 「LFS-ブートスクリプト-20130821」 にてブートスクリプトをインストールした後に行ってください。

7.2.1. ネットワークインターフェースに対する固定名称の作成

設定を行うべきネットワークインターフェースが、システム内にただ一つであるなら、本節に示す内容は任意となります。設定を行ったとしても間違いにはなりません。ラップトップPCでのワイヤレスネットワークやケーブル接続のネットワークにおいては、たいていは本節における設定が必要となるでしょう。

Udev やモジュラー化されたネットワークドライバにおいて、ネットワークインターフェースの番号の割振りは再起動により変更されます。ドライバモジュールの読み込みが並列で行われるためランダムになるからです。例えば Intel 製と Realtek 製の二つのネットワークカードを持つコンピュータにおいて、Intel 製が eth0、Realtek 製が eth1 となったとします。しかし時にはシステムの再起動によって番号割り振りが逆転することもあります。これを避けるには Udev ルールを生成して、ネットワークカードの MAC アドレスに基づいて固定的に名称を定める方法があります。

このルールは、前章の udev (systemd) におけるビルド手順にて事前生成されています。/etc/udev/rules.d/70-persistent-net.rules を確認すれば、どんな名前がどのネットワークデバイスに割り当てられているかが分かります。

```
cat /etc/udev/rules.d/70-persistent-net.rules
```



注記

ネットワークカードに対して手動で MAC アドレスを割り当てた場合や Xen のような仮想環境における場合などにおいて、ネットワークルールファイルが生成されないことがあります。これはアドレスの割り当てが確定されないためです。こういった場合は次節に進んでください。

このファイルの先頭にはコメントが数行あり、続いてそれぞれの NIC に対する行があります。NIC ごとの記述では一行めがコメントで、そのハードウェア ID が記されています。(PCI カードである場合、PCI ベンダとデバイス ID が記述されます。) またドライバーが検出できている場合には、カッコ書きでドライバー名も示されます。ハードウェア ID もドライバー名も、インターフェースに対して与えられる名称とは無関係で、単に分かりやすくするために記されているにすぎません。二行めは Udev ルールであり、その NIC を定め、名称を割り当てている記述です。

Udev ルールはいくつかのキー項目で構成され、それぞれがカンマで区切られるか、場合によっては空白文字で区切られています。このキー項目とその内容は以下のようになります。

- `SUBSYSTEM=="net"` - ネットワークカードではないデバイスは無視することを指示します。
- `ACTION=="add"` - uevent の add イベントではないものは無視することを指示します。(uevent の "remove" イベントや "change" イベントも発生しますが、これらはネットワークインターフェースの名前を変更するものではありません。)
- `DRIVERS=="?*" - Udev に対して VLAN やブリッジサブインターフェース (bridge sub-interfaces) を無視することを指示します。(サブインターフェースにはドライバーがないためです。) サブインターフェースに名前が割り当てられたとすると、親デバイスの名前と衝突してしまうため、サブインターフェースの名前割り当てはスキップされます。`
- `ATTR{address}` - このキーの値は NIC の MAC アドレスを表します。
- `ATTR{type}=="1"` - 特定のワイヤレスドライバーでは複数の仮想インターフェースが生成されますが、そのうちの主となるインターフェースにのみルールが合致するようにします。二つめ以降のインターフェースに対する処理は、VLAN やブリッジサブインターフェースがスキップされるのと同じくスキップされます。名前割り当てが行われてしまうと名前衝突を起こすためです。
- `KERNEL=="eth*" - 複数のネットワークインターフェースを有するマシンを取り扱うためのルールを加えます。このルールでは全インターフェースに同一の MAC アドレスが用いられます。(PS3 などがそういったマシンになります。) 各インターフェースに対して個別の命名が行われたとすると Udev はそれぞれを別のものとして取り扱います。これはたいていの Linux From Scratch ユーザーにとって必要ありません。ただそうなったとしても問題はありません。`
- `NAME` - Udev がインターフェースに対して割り当てる名前をキーの値として指定します。

`NAME` に定義される値が重要です。どのネットワークカードにどんな名前が割り当てられているかをよく確認してください。そして以下において設定ファイルを生成する際には `NAME` に定義されている名称を利用してください。

7.2.2. ネットワークインターフェースに対する設定ファイルの生成

どのネットワークインターフェースが起動したり停止したりするかは `/etc/sysconfig/` ディレクトリ配下のファイルの指定によります。このディレクトリには、設定を行ないたい各ネットワークインターフェースに対するファイルを準備します。例えばネットワークインターフェースの名が「xyz」である場合 `ifconfig.xyz` というファイルとします。「xyz」は管理者が識別できるデバイス名、例えば `eth0` などとなります。このファイルにはネットワークインターフェースの属性、つまり IP アドレスやサブネットマスクなどを定義します。ファイルベース名は `ifconfig` とすることが必要です。

以下のコマンドは、`eth0` デバイスに対して固定 IP アドレスを設定するファイルを生成する例です。

```
cd /etc/sysconfig/
cat > ifconfig.eth0 << "EOF"
ONBOOT=yes
IFACE=eth0
SERVICE=ipv4-static
IP=192.168.1.1
GATEWAY=192.168.1.2
PREFIX=24
BROADCAST=192.168.1.255
EOF
```


各変数の値は各ファイルごとに適切なものに設定してください。

ONBOOT 変数を「yes」に設定した場合、システム起動時にネットワークスクリプトがネットワークインターフェースカード (network interface card; NIC) を起動します。「yes」以外に設定すると、ネットワークスクリプトからの NIC の起動がなくなり、NIC は自動では起動しなくなります。ネットワークインターフェースは ifup や ifdown といったコマンドを使って、起動や停止を行うことができます。

IFACE 変数は、インターフェース名を定義します。例えば eth0 といったものです。これはネットワークデバイスの設定を行うすべてのファイルにて必要な定義です。

SERVICE 変数は IP アドレスの取得方法を指定します。LFS-ブートスクリプトは IP アドレス割り当て方法をモジュール化しています。そして /lib/services/ ディレクトリに追加でファイルを生成すれば、他の IP アドレス割り当て方法をとることもできます。通常は DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) において利用されるものです。これについては BLFS ブックにて説明しています。

GATEWAY 変数は、デフォルトゲートウェイが存在するならばその IP アドレスを指定します。存在しない場合は、の変数設定を行っている一行をコメントにします。

PREFIX 変数はサブネットマスクにて用いられるビット数を指定します。IP アドレスの各オクテット (octet) は 8 ビットで構成されます。例えばサブネットマスクが 255.255.255.0 である場合、ネットワーク番号 (network number) を特定するには最初の三つのオクテット (24ビット) が用いられることを意味します。もし 255.255.255.240 であるなら、最初の 28 ビットということになります。24 ビットを超えるプレフィックスは、通常は DSL やケーブルを用いたインターネットサービスプロバイダー (Internet Service Provider; ISP) がよく利用しています。上の例 (PREFIX=24) では、サブネットマスクは 255.255.255.0 となります。PREFIX 変数の値は、ネットワーク環境に応じて変更してください。これが省略された場合は、デフォルトの 24 が用いられます。

より詳しくは ifup の man ページを参照してください。

7.2.3. /etc/resolv.conf ファイルの生成

インターネットへの接続を行う場合には、ドメイン名サービス (domain name service; DNS) による名前解決を必要とします。これによりインターネットドメイン名を IP アドレスに、あるいはその逆の変換を行います。これを行うには ISP やネットワーク管理者が指定する DNS サーバーの割り振り IP アドレスを /etc/resolv.conf ファイルに設定します。以下のコマンドによりこのファイルを生成します。

```
cat > /etc/resolv.conf << "EOF"
# Begin /etc/resolv.conf

domain <Your Domain Name>
nameserver <IP address of your primary nameserver>
nameserver <IP address of your secondary nameserver>

# End /etc/resolv.conf
EOF
```

domain ステートメントは省略するか、search ステートメントで代用することが可能です。詳しくは resolv.conf の man ページを参照してください。

<IP address of the nameserver> (ネームサーバーの IP アドレス) の部分には、DNS が割り振る適切な IP アドレスを記述します。IP アドレスの設定は複数行う場合もあります。(代替構成を必要とするなら二次サーバーを設けることでしょう。) 一つのサーバーのみで十分な場合は、二つめの nameserver の行は削除します。ローカルネットワークにおいてはルーターの IP アドレスを設定することになるでしょう。



注記

Google Public IPv4 DNS アドレスは 8.8.8.8 と 8.8.4.4 です。

7.3. /etc/hosts ファイルの設定

ネットワークカードの準備ができたら完全修飾ドメイン名 (fully-qualified domain name; FQDN) とそのエイリアス名を決定して /etc/hosts ファイルに記述します。記述書式は以下のとおりです。

```
IP_address myhost.example.org aliases
```

インターネットに公開されていないコンピュータである場合（つまり登録ドメインであったり、あらかじめ IP アドレスが割り当てられていたりする場合。普通のユーザーはこれを持ちません。）IP アドレスはプライベートネットワーク IP アドレスの範囲で指定します。以下がそのアドレス範囲です。

Private Network Address Range	Normal Prefix
10.0.0.1 - 10.255.255.254	8
172.x.0.1 - 172.x.255.254	16
192.168.y.1 - 192.168.y.254	24

x は 16 から 31、y は 0 から 255 の範囲の数値です。

IP アドレスの例は 192.168.11.1 となります。また FQDN の例としては lfs.example.org となります。

ネットワークカードを用いない場合でも FQDN の記述は行ってください。特定のプログラムが動作する際に必要となることがあるからです。

以下のようにして /etc/hosts ファイルを生成します。

```
cat > /etc/hosts << "EOF"
# Begin /etc/hosts (network card version)

127.0.0.1 localhost
<192.168.1.1> <HOSTNAME.example.org> [alias1] [alias2 ...]

# End /etc/hosts (network card version)
EOF
```

<192.168.1.1> や <HOSTNAME.example.org> の部分は利用状況に応じて書き換えてください。（ネットワーク管理者から IP アドレスを指定されている場合や、既存のネットワーク環境に接続する場合など。）エイリアスの記述 (alias1, alias2) は省略しても構いません。

ネットワークカードを設定しない場合は、以下のようにして /etc/hosts ファイルを生成します。

```
cat > /etc/hosts << "EOF"
# Begin /etc/hosts (no network card version)

127.0.0.1 <HOSTNAME.example.org> <HOSTNAME> localhost

# End /etc/hosts (no network card version)
EOF
```

7.4. LFS システムにおけるデバイスとモジュールの扱い

第6章にて Udev パッケージをインストールしました。このパッケージがどのように動作するかの詳細を説明する前に、デバイスを取り扱うかつての方法について順を追って説明していきます。

Linux システムは一般に、スタティックなデバイス生成方法を採用していました。この方法では /dev のもとに膨大な量の（場合によっては何千にもおよぶ）デバイスノードが生成されます。現実に存在するハードウェアデバイスが存在するかどうかに関わらずです。これは MAKEDEV スクリプトを通じて生成されます。このスクリプトからは mknod プログラムが呼び出されますが、その呼び出しは、この世に存在するありとあらゆるデバイスのメジャー/マイナー番号を用いて行われます。

Udev による方法では、カーネルが検知したデバイスだけがデバイスノードとなります。デバイスノードはシステムが起動するたびに生成されることになるので、devtmpfs ファイルシステム上に保存されます。（devtmpfs は仮想ファイルシステムであり、メモリ上に置かれます。）デバイスノードの情報はさほど多くないので、消費するメモリ容量は無視できるほど少ないものです。

7.4.1. 開発経緯

2000年2月に新しいファイルシステム devfs がカーネル 2.3.46 に導入され、2.4系の安定版カーネルにて利用できるようになりました。このファイルシステムはカーネルのソース内に含まれ実現されていましたが、デバイスを動的に生成するこの手法は、主要なカーネル開発者の十分な支援は得られませんでした。

devfs が採用した手法で問題になるのは、主にデバイスの検出、生成、命名の方法です。特にデバイスの命名方法がおそらく最も重大な問題です。一般的に言えることとして、デバイス名が変更可能であるならデバイス命名の規則はシステム管理者が考えることであって、特定の開発者に委ねるべきことではありません。また devfs にはその設計に

起因した競合の問題があるため、根本的にカーネルを修正しなければ解消できる問題ではありません。そこで長い間、保守されることがなかったために非推奨 (deprecated) として位置づけられ、最終的に 2006年6月にはカーネルから取り除かれました。

開発版の 2.5 系カーネルと、後にリリースされた安定版のカーネル 2.6 系を経て、新しい仮想ファイルシステム `sysfs` が登場しました。 `sysfs` が実現したのは、システムのハードウェア設定をユーザー空間のプロセスとして表に出したことです。ユーザー空間での設定を可視化したことによって `devfs` が為していたことを、ユーザー空間にて現実に見ることが可能になったわけです。

7.4.2. Udev の実装

7.4.2.1. Sysfs ファイルシステム

`sysfs` ファイルシステムについては上で簡単に触れました。 `sysfs` はどのようにしてシステム上に存在するデバイスを知るのか、そしてどのデバイス番号を用いるべきなのか。そこが知りたいところです。カーネルに直接組み込まれて構築されたドライバーの場合は、対象のオブジェクトをカーネルが検出し、そのオブジェクトを `sysfs` (内部的には `devtmpfs`) に登録します。モジュールとしてコンパイルされたドライバーの場合は、その登録がモジュールのロード時に行われます。 `sysfs` ファイルシステムが (`/sys` に) マウントされると、ドライバーによって `sysfs` に登録されたデータは、ユーザー空間のプロセスと (デバイスノードの修正を含む) さまざまな処理を行う `udev` にて利用可能となります。

7.4.2.2. デバイスノードの生成

デバイスファイルはカーネルによって、`devtmpfs` ファイルシステム上に作り出されます。デバイスノードを登録しようとするドライバーは (デバイスコア経由で) `devtmpfs` を通じて登録を行います。 `devtmpfs` のインスタンスが `/dev` 上にマウントされると、デバイスノードには固定的な名称、パーミッション、所有者の情報が設定され生成されます。

この後にカーネルは `udev` に対して `uevent` を送信します。 `udev` は、`/etc/udev/rules.d`、`/lib/udev/rules.d`、`/run/udev/rules.d` の各ディレクトリ内にあるファイルの設定ルールに従って、デバイスノードに対するシンボリックリンクを生成したり、パーミッション、所有者、グループの情報を変更したり、内部的な `udev` データベースの項目を修正したりします。

上の三つのディレクトリ内にて指定されるルールは、LFS ブートスクリプトパッケージと同様の方法で番号づけされており、三つのディレクトリの内容は一つにまとめられます。デバイスノードの生成時に `udev` がそのルールを見つけ出せなかった時は、`devtmpfs` が利用される際の初期のパーミッションと所有者の情報のままととなります。

7.4.2.3. Udev ブートスクリプト

初期に起動される LFS ブートスクリプト `/etc/init.d/mountvirtfs` は、`/lib/udev/devices` に存在するデバイスノードを、すべて `/dev` にコピーします。デバイスやディレクトリ、シンボリックリンクがこの時点で利用可能になっていないと、システム起動の初期段階において動的デバイスを扱う処理が動作しないためです。あるいは `udev` 自身がそれを必要とするからでもあります。 `/lib/udev/devices` 内に静的なデバイスノードを生成することで、動的デバイスを取り扱うことができないデバイスも動作させることができます。

初期起動スクリプト `/etc/rc.d/init.d/udev` は `udev` を起動し、カーネルにより既に生成されている "コールドプラグ" のデバイスをすべて稼働させます。そしてすべてのルールが起動完了するのを待ちます。このスクリプトは `/sbin/hotplug` のデフォルトから `uevent` ハンドラーを取り除きます。この時点でカーネルは、他の実行モジュールを呼び出す必要がないからです。そのかわりに、`udev` は、カーネルが起動する `uevent` をネットリンクソケット (`netlink socket`) 上で待ち受けます。

初期起動スクリプト `/etc/rc.d/init.d/udev_retry` は、サブシステムに対するイベントの再起動を行いません。そのサブシステムとはファイルシステムに依存するもので、`mountfs` が実行されるまでマウントされません。(特に `/usr` や `/var` がこれに該当します。) `mountfs` スクリプトの後にこのスクリプトが実行されるので、(イベントが再起動されるものであれば) 二度目には成功します。このスクリプトは `/etc/sysconfig/udev_retry` ファイルにより設定が可能で、コメントを除く記述項目はすべてサブシステム名を表わし、二度目の起動時のリトライ対象となります。(デバイスのサブシステムを知るには `udevadm info --attribute-walk <device>` を実行します。ここで `<device>` は、`/dev` や `/sys` から始まる絶対パスであり `/dev/sr0` や `/sys/class/rtc` などを表します。)

7.4.2.4. モジュールのロード

モジュールとしてコンパイルされたデバイスドライバーの場合、デバイス名の別名が作り出されています。その別名は `modinfo` プログラムを使えば確認することができます。そしてこの別名は、モジュールがサポートするバス固有の識別子に関連づけられます。例えば `snd-fm801` ドライバーは、ベンダーID `0x1319` とデバイスID `0x0801`

の PCI ドライバーをサポートします。そして「pci:v00001319d00000801sv*sd*bc04sc01i*」というエイリアスがあります。たいいていのデバイスでは、`sysfs` を通じてドライバーがデバイスを扱うものであり、ドライバーのエイリアスをバスドライバーが提供します。`/sys/bus/pci/devices/0000:00:0d.0/modalias` ファイルならば「pci:v00001319d00000801sv00001319sd00001319bc04sc01i00」という文字列を含んでいるはずですが、`Udev` が提供するデフォルトの生成規則によって `udev` から `/sbin/modprobe` が呼び出されることになり、その際には `uevent` に関する環境変数 `MODALIAS` の設定内容が利用されます。（この環境変数の内容は `sysfs` 内の `modalias` ファイルの内容と同じはらずです。）そしてワイルドカードが指定されているならそれが展開された上で、エイリアス文字列に合致するモジュールがすべてロードされることとなります。

上の例で `forte` ドライバーがあったとすると、`snd-fm801` の他にそれもロードされてしまいます。これは古いものでありロードされて欲しくないものです。不要なドライバーのロードを防ぐ方法については後述しているので参照してください。

カーネルは、ネットワークプロトコル、ファイルシステム、NLS サポートといった各種モジュールも、要求に応じてロードすることもできます。

7.4.2.5. ホットプラグ可能な/ダイナミックなデバイスの扱い

USB (Universal Serial Bus) で MP3 プレイヤーを接続しているような場合、カーネルは現在そのデバイスが接続されているということを認識しており、`uevent` が生成済の状態にあります。その `uevent` は上で述べたように `udev` が取り扱うこととなります。

7.4.3. モジュールロードとデバイス生成の問題

自動的にデバイスが生成される際には、いくつか問題が発生します。

7.4.3.1. カーネルモジュールが自動的にロードされない問題

`Udev` がモジュールをロードできるためには、バス固有のエイリアスがあって、バスドライバーが `sysfs` に対して適切なエイリアスを提供していることが必要です。そうでない場合は、別の手段を通じてモジュールのロードを仕組みなければなりません。Linux-3.10.10 における `Udev` は、`INPUT`、`IDE`、`PCI`、`USB`、`SCSI`、`SERIO`、`FireWire` の各デバイスに対するドライバーをロードします。それらのデバイスドライバーが適切に構築されているからです。

目的のデバイスドライバーが `Udev` に対応しているかどうかは、`modinfo` コマンドに引数としてモジュール名を与えて実行します。`/sys/bus` ディレクトリ配下にあるそのデバイス用のディレクトリを見つけ出して、`modalias` ファイルが存在しているかどうかを見ることで分かります。

`sysfs` に `modalias` ファイルが存在しているなら、そのドライバーはデバイスをサポートし、デバイスとの直接のやり取りが可能であることを表します。ただしエイリアスを持っていなければ、それはドライバーのバグです。その場合は `Udev` に頼ることなくドライバーをロードするしかありません。そしてそのバグが解消されるのを待つしかありません。

`/sys/bus` ディレクトリ配下の対応するディレクトリ内に `modalias` ファイルがなかったら、これはカーネル開発者がそのバス形式に対する `modalias` のサポートをまだ行っていないことを意味します。Linux-3.10.10 では ISA バスがこれに該当します。最新のカーネルにて解消されることを願うしかありません。

`Udev` は `snd-pcm-oss` のような「ラッパー (wrapper)」ドライバーや `loop` のような、現実のハードウェアに対するものではないドライバーは、ロードすることができません。

7.4.3.2. カーネルモジュールが自動的にロードされず `Udev` もロードしようとしらない問題

「ラッパー (wrapper)」モジュールが単に他のモジュールの機能を拡張するだけのものであるなら（例えば `snd-pcm-oss` は `snd-pcm` の機能拡張を行うもので、OSS アプリケーションに対してサウンドカードを利用可能なものにするだけのものであるため）`modprobe` の設定によってラッパーモジュールを先にロードし、その後でラップされるモジュールがロードされるようになります。これは以下のように `/etc/modprobe.d/<filename>.conf` ファイル内にて「`softdep`」の記述行を加えることで実現します。

```
softdep snd-pcm post: snd-pcm-oss
```

「`softdep`」コマンドは `pre:` を付与することもでき、あるいは `pre:` と `post:` の双方を付与することもできます。その記述方法や機能に関する詳細は `man` ページ `modprobe.d(5)` を参照してください。

問題のモジュールがラッパーモジュールではなく、単独で利用できるものであれば、`modules` ブートスクリプトを編集して、システム起動時にこのモジュールがロードされるようにします。これは `/etc/sysconfig/modules` ファイルにて、そのモジュール名を単独の行に記述することで実現します。この方法はラッパーモジュールに対しても動作しますが、この場合は次善策となります。

7.4.3.3. Udev が不必要なモジュールをロードする問題

不必要なモジュールはこれをビルドしないことにするか、あるいは `/etc/modprobe.d/blacklist.conf` ファイルにブラックリスト (blacklist) として登録してください。例えば `forte` モジュールをブラックリストに登録するには以下のようにします。

```
blacklist forte
```

ブラックリストに登録されたモジュールは `modprobe` コマンドを使えば手動でロードすることもできます。

7.4.3.4. Udev が不正なデバイスを生成する、または誤ったシンボリックリンクを生成する問題

デバイス生成規則が意図したデバイスに合致していないと、この状況が往々にして起こります。例えば生成規則の記述が不十分であった場合、SCSI ディスク (本来望んでいるデバイス) と、それに対応づいたものとしてベンダーが提供する SCSI ジェネリックデバイス (これは誤ったデバイス) の両方に生成規則が合致してしまいます。記述されている生成規則を探し出して正確に記述してください。その際には `udevadm info` コマンドを使って情報を確認してください。

7.4.3.5. Udev 規則が不審な動きをする問題

この問題は、一つ前に示したものが別の症状となって現れたものかもしれません。そのような理由でなく、生成規則が正しく `sysfs` の属性を利用しているのであれば、それはカーネルの処理タイミングに関わる問題であって、カーネルを修正すべきものです。今の時点では、該当する `sysfs` の属性の利用を待ち受けるような生成規則を生成し、`/etc/udev/rules.d/10-wait_for_sysfs.rules` ファイルにそれを追加することで対処できます。(`/etc/udev/rules.d/10-wait_for_sysfs.rules` ファイルがなければ新規に生成します。) もしこれを実施してうまくいった場合は LFS 開発メーリングリストにお知らせください。

7.4.3.6. Udev がデバイスを生成しない問題

ここでは以下のことを前提としています。まずドライバーがカーネル内に静的に組み入れられて構築されているか、あるいは既にモジュールとしてロードされていること。そして Udev が異なった名前のデバイスを生成していないことです。

Udev がデバイスノード生成のために必要となる情報を知るためには、カーネルドライバーが `sysfs` に対して属性データを提供していなければなりません。これはカーネルツリーの外に配置されるサードパーティ製のドライバーであれば当たり前のことです。したがって `/lib/udev/devices` において、適切なメジャー、マイナー番号を用いた静的なデバイスノードを生成してください。(カーネルのドキュメント `devices.txt` またはサードパーティベンダーが提供するドキュメントを参照してください。) この静的デバイスノードは、udev ブートスクリプトによって `/dev` にコピーされます。

7.4.3.7. 再起動後にデバイスの命名順がランダムになってしまう問題

これは Udev の設計仕様に従って発生するもので、`uevent` の扱いとモジュールのロードが平行して行われるためです。このために命名順が予期できないものになります。これを「固定的に」することはできません。ですからカーネルがデバイス名を固定的に定めるようなことを求めるのではなく、シンボリックリンクを用いた独自の生成規則を作り出して、そのデバイスの固定的な属性を用いた固定的な名前を用いる方法を取ります。固定的な属性とは例えば、Udev によってインストールされるさまざまな `*_id` という名のユーティリティが出力するシリアル番号などです。設定例については 7.5. 「デバイスへのシンボリックリンクの生成」や 7.2. 「全般的なネットワークの設定」を参照してください。

7.4.4. 参考情報

さらに参考になるドキュメントが以下のサイトにあります：

- `devfs` のユーザー空間での実装方法 http://www.kroah.com/linux/talks/ols_2003_udev_paper/Reprint-Kroah-Hartman-OLS2003.pdf
- `sysfs` ファイルシステム <http://www.kernel.org/pub/linux/kernel/people/mochel/doc/papers/ols-2005/mochel.pdf>

7.5. デバイスへのシンボリックリンクの生成

7.5.1. CD-ROM のシンボリックリンク

後にインストールしていくソフトウェア（例えばメディアプレーヤーなど）では、`/dev/cdrom` や `/dev/dvd` といったシンボリックリンクを必要とするものがあります。これらはそれぞれ CD-ROM、DVD-ROM を指し示しています。こういったシンボリックリンクは `/etc/fstab` ファイルに設定しておくのが便利です。Udev が提供するスクリプトファイルで、ルールファイル (rules files) を生成するものがあります。そのルールファイルは、各デバイスの性能に応じてシンボリックリンクを構成します。もっともこのスクリプトファイルを利用する際には、二つ存在する動作モードのいずれを用いるかを決めなければなりません。

一つは「パス (by-path)」モードです。これは USB デバイスやファームウェアデバイスに対してデフォルトで利用されます。これによって作り出されるルールは CD や DVD デバイスに対して物理パスが用いられます。二つめは「ID (by-id)」モードです。デフォルトで IDE や SCSI デバイスに利用されます。このモードで作られるルールは CD や DVD デバイス自身が持つ識別文字列が用いられます。パスは Udev の `path_id` スクリプトによって決定します。一方、識別文字列は `ata_id` プログラムまたは `scsi_id` プログラムによってハードウェアから読み出されます。`ata_id`、`scsi_id` のいずれであるかは、そのデバイスによって決まります。

二つの方法にはそれぞれに利点があります。どちらの方法が適切であるかは、デバイスがどのように変更されるかによります。デバイスに対する物理パス（そのデバイスが接続しているポートやスロット）を変更したい場合、例えば IDE ポートや USB コネクタを切り替えたいような場合、「ID (by-id)」モードを使うべきです。一方、デバイスの識別文字列を変えたい場合、つまりデバイスが故障したために、同等の性能の新しいデバイスを同一コネクタに接続しようとする場合は、「パス (by-path)」モードを使うべきです。

いずれの変更の可能性もあるならば、より変更の可能性の高いケースに従ってモードを選ぶべきです。



重要項目

外部接続のデバイス（例えば USB 接続の CD ドライブなど）はパス (by-path) モードを用いるべきではありません。そのようなデバイスは接続するたびに外部ポートが新しくなり、物理パスが変わってしまうためです。こういった外部接続のデバイスを物理パスで認識させ Udev ルールを構成した場合は、あらゆるデバイスがこの問題を抱えることとなります。これは CD や DVD ドライブだけに限った話ではありません。

Udev スクリプトが利用しているキーの値を確認したい場合は `/sys` ディレクトリ配下を確認します。例えば CD-ROM デバイスについては `/sys/block/hdd` を確認します。そして以下のようなコマンドを実行します。

```
udevadm test /sys/block/hdd
```

出力結果には `*_id` というプログラム名を示した行がたくさん表示されます。「ID (by-id)」モードは `ID_SERIAL` 値が存在して空でなければこれを利用します。そうでない時は `ID_MODEL` と `ID_REVISION` を利用します。「パス (by-path)」モードは `ID_PATH` の値を利用します。

デフォルトモードが利用状況に合わない場合は、`/etc/udev/rules.d/83-cdrom-symlinks.rules` ファイルに対して以下のように修正を行います。`mode` の部分は「by-id」か「by-path」に置き換えます。

```
sed -i -e 's/"write_cd_rules"/"write_cd_rules mode"/' \  
/etc/udev/rules.d/83-cdrom-symlinks.rules
```

ここでルールファイルやシンボリックリンクを作成する必要はありません。この時点ではホストの `/dev` ディレクトリに対して LFS システムに向けてのバインドマウント (bind-mounted) を行っており、ホスト上にシンボリックリンクが存在していると仮定しているからです。ルールファイルとシンボリックリンクは LFS システムを初めてブートした時に生成されます。

もっとも CD-ROM デバイスが複数あると、ブート時に生成されるシンボリックリンクが、ホスト利用時に指し示されていたものとは異なる場合が発生します。デバイスの検出順は予測できないものだからです。LFS システムを初めて起動した時の割り当ては、たぶん固定的に行われるはずですが、つまりこのことは、ホストシステムと LFS システムの双方で、シンボリックリンクが同じデバイスを指し示すことが必要である場合にのみ問題となります。これが必要であるなら、生成されている `/etc/udev/rules.d/70-persistent-cd.rules` ファイルを起動後に調査して（おそらくは編集して）割り当てられたシンボリックリンクが望むものになっているかどうかを確認してください。

7.5.2. 重複するデバイスの取り扱い方

7.4. 「LFS システムにおけるデバイスとモジュールの扱い」で説明したように、`/dev` 内に同一機能を有するデバイスがあったとすると、その検出順は本質的にランダムです。例えば USB 接続のウェブカメラと TV チューナーがあったとして、`/dev/video0` がウェブカメラを、また `/dev/video1` がチューナーをそれぞれ参照していたとしても、シス

テム起動後はその順が逆になることがあります。サウンドカードやネットワークカードを除いた他のハードウェアであれば、Udev ルールを適切に記述することで、固定的なシンボリックリンクを作り出すことができます。ネットワークカードについては、別途 7.2. 「全般的なネットワークの設定」にて説明しています。またサウンドカードの設定方法は BLFS にて説明しています。

利用しているデバイスに上の問題の可能性がある場合（お使いの Linux ディストリビューションではそのような問題がなかったとしても）`/sys/class` ディレクトリや `/sys/block` ディレクトリ配下にある対応ディレクトリを探してください。ビデオデバイスであれば `/sys/class/video4linux/videoX` といったディレクトリです。そしてそのデバイスを一意に特定する識別情報を確認してください。（通常はベンダー名、プロダクトID、シリアル番号などです。）

```
udevadm info -a -p /sys/class/video4linux/video0
```

シンボリックリンクを生成するルールを作ります。

```
cat > /etc/udev/rules.d/83-duplicate_devs.rules << "EOF"

# Persistent symlinks for webcam and tuner
KERNEL=="video*", ATTRS{idProduct}=="1910", ATTRS{idVendor}=="0d81", \
    SYMLINK+="webcam"
KERNEL=="video*", ATTRS{device}=="0x036f", ATTRS{vendor}=="0x109e", \
    SYMLINK+="tvtuner"

EOF
```

こうしたとしても `/dev/video0` と `/dev/video1` はチューナーとウェブカメラのいずれかをランダムに指し示すことになりありません。（したがって直接このデバイス名を使ってはなりません。）しかしシンボリックリンク `/dev/tvtuner` と `/dev/webcam` は常に正しいデバイスを指し示すようになります。

7.6. LFS-ブートスクリプト-20130821

LFS-ブートスクリプトパッケージは LFS システムの起動、終了時に利用するスクリプトを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 260 KB

7.6.1. LFS ブートスクリプト のインストール

パッケージをインストールします。

```
make install
```

7.6.2. LFS ブートスクリプト の構成

インストールスクリプト: checkfs, cleanfs, console, functions, halt, ifdown, ifup, localnet, modules, mountfs, mountvirtfs, network, rc, reboot, sendsignals, setclock, ipv4-static, swap, sysctl, sysklogd, template, udev, udev_retry
インストールディレクトリ: /etc/rc.d, /etc/init.d (シンボリックリンク), /etc/sysconfig, /lib/services, /lib/lsb (シンボリックリンク)

概略説明

checkfs	ファイルシステムがマウントされる前にその整合性をチェックします。(ただしジャーナルファイルシステムとネットワークベースのファイルシステムは除きます。)
cleanfs	リブートの際に不要となるファイルを削除します。例えば /var/run/ ディレクトリや /var/lock/ ディレクトリの配下にあるファイルです。/var/run/utmp ファイルは再生成されます。また /etc/nologin、/fastboot、/forcefsck がおそらく存在しており、これらは削除されます。
console	必要となるキーボードレイアウトに対しての正しいキーマップテーブルをロードします。同時にスクリーンフォントもセットします。
functions	共通的な関数を提供します。例えばエラーやステータスのチェックなどであり、これはブートスクリプトの多くが利用します。
halt	システムを停止します。
ifdown	ネットワークデバイスを停止します。
ifup	ネットワークデバイスを初期化します。
localnet	システムのホスト名とローカルループバックデバイスを設定します。
modules	/etc/sysconfig/modules にて一覧設定されているカーネルモジュールをロードします。その際には引数が指定され利用されます。
mountfs	ファイルシステムをすべてマウントします。ただし noauto が設定されているものやネットワークベースのファイルシステムは除きます。
mountvirtfs	仮想カーネルファイルシステムをマウントします。例えば proc などです。
network	ネットワークカードなどのネットワークインターフェースを設定します。そして(可能であれば)デフォルトゲートウェイを設定します。
rc	ランレベルを制御するマスタースクリプト。他のブートスクリプトを一つずつ実行します。その際には実行されるシンボリックの名前によって実行順序を決定します。
reboot	システムを再起動します。
sendsignals	システムが再起動または停止する前に、プロセスすべてが停止していることを確認します。
setclock	ハードウェアクロックが UTC 時刻に設定されていない場合は、カーネルクロックをローカル時刻としてリセットします。
ipv4-static	ネットワークインターフェースに対して固定 IP (Internet Protocol) アドレスを割り当てるために必要となる機能を提供します。
swap	スワップファイルやスワップパーティションを有効または無効にします。
sysctl	/etc/sysctl.conf ファイルが存在している場合、実行中のカーネルに対してシステム設定値をロードします。
sysklogd	システムログデーモンおよびカーネルログデーモンの起動と停止を行います。
template	他のデーモン用としてブートスクリプトを生成するためのテンプレート。

udev /dev ディレクトリを準備して Udev を起動します。

udev_retry Udev の uevent が失敗した場合にこれを再実行します。そして必要に応じて、生成されたルールファイルを /dev/.udev から /etc/udev/rules.d へコピーします。

7.7. ブートスクリプトはどのようにして動くのか

Linux では SysVinit という特別なブート機能があり ランレベル (run-levels) という考え方に基づいています。ランレベルの扱いはシステムによって異なりますので、ある Linux において動作しているからといって LFS においても全く同じように動くわけではありません。LFS では独自の方法でこれを取り入れることにします。ただし標準として受け入れられるような方法を取ります。

SysVinit (これ以降は「init」と表現します) はランレベルという仕組みにより動作します。ランレベルには7つのレベル (0 から 6) があります。(実際にはランレベルはそれ以上あるのですが、特殊な場合であって普通は利用されません。詳しくは `init(8)` を参照してください。) 各レベルは、コンピューターの起動時における処理動作に対応しており、デフォルトのランレベルは 3 となっています。ランレベルの詳細を以下に説明します。

```
0: コンピューターの停止
1: シングルユーザーモード
2: マルチユーザーモード、ネットワークなし
3: マルチユーザーモード、ネットワークあり
4: 将来の拡張用として予約されています。 3 と同じものとして扱われます。
5: 4 と同様。通常 (X の xdm や KDE の kdm のような) GUI ログインに用いられます。
6: コンピューターの再起動
```

7.7.1. Sysvinit の設定

カーネルの初期化にあたって最初に起動するプログラムは、コマンドラインから指定されるものか、あるいはデフォルトでは `init` です。このプログラムは初期設定ファイル `/etc/inittab` を読み込みます。そのファイルは以下のようにして生成します。

```
cat > /etc/inittab << "EOF"
# Begin /etc/inittab

id:3:initdefault:

si::sysinit:/etc/rc.d/init.d/rc S

10:0:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 0
11:S1:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 1
12:2:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 2
13:3:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 3
14:4:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 4
15:5:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 5
16:6:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 6

ca:12345:ctrlaltdel:/sbin/shutdown -t1 -a -r now

su:S016:once:/sbin/sulogin

1:2345:respawn:/sbin/agetty --noclear tty1 9600
2:2345:respawn:/sbin/agetty tty2 9600
3:2345:respawn:/sbin/agetty tty3 9600
4:2345:respawn:/sbin/agetty tty4 9600
5:2345:respawn:/sbin/agetty tty5 9600
6:2345:respawn:/sbin/agetty tty6 9600

# End /etc/inittab
EOF
```

この初期化ファイルに関することは `inittab` の man ページにて説明されています。LFS において重要となるコマンドは `rc` です。初期化ファイルは `rc` コマンドに対してスクリプトの実行を指示します。実行されるスクリプトは `/etc/rc.d/rcS.d` ディレクトリにて `S` で始まるスクリプトです。そしてその後に `/etc/rc.d/rc?.d` ディレクトリにて、同じく `S` で始まるスクリプトも実行されます。ここで `?` は、初期化を行う際の数値を示します。

扱いやすさを考慮して、rc スクリプトは `/lib/lsb/init-functions` ディレクトリにあるライブラリ群を読み込む形にしています。このライブラリは、さらにオプションで設定ファイル `/etc/sysconfig/rc.site` を読み込みます。本節以降に説明している、各種の設定ファイルにおけるパラメーターは、上のファイルにて設定することもできます。上のファイルは、システム上のパラメーターを1つのファイルに集約して設定できるようになっています。

デバッグがしやすいように、各ライブラリの関数スクリプトは、すべて `/run/var/bootlog` にログを出力するようになっています。`/run` ディレクトリは `tmpfs` であることから、`/run/var/bootlog` ファイルはブート前後にて恒常的なファイルではありません。ただしブート処理の最後には、恒常的なファイルである `/var/log/boot.log` に情報が出力されます。

7.7.2. ランレベルの変更

ランレベルを変更するには `init <runlevel>` を実行します。`<runlevel>` はランレベルを示す数字です。例えばコンピューターを再起動するには `init 6` コマンドを実行します。これは `reboot` コマンドのエイリアスとなっています。同様に `init 0` は `halt` のエイリアスです。

`/etc/rc.d` ディレクトリの配下には複数のサブディレクトリがあります。そのディレクトリ名は `rc?.d` のようになっています。(? はランレベルの数字を表します。) また `rcsysinit.d` というサブディレクトリもあります。それらサブディレクトリ内には数多くのシンボリックリンクがあります。シンボリックリンクの先頭一文字には `K` や `S` が用いられ、続いて二桁の数値文字がつけられています。`K` はサービスの停止 (`kill`)、`S` はサービスの起動 (`start`) を意味します。二桁の数字はスクリプトの起動順を定めるもので、`00` から `99` までが割振られ、小さな数字から順に実行されます。`init` コマンドによってランレベルが変更される時は、そのランレベルに応じて必要なサービスが起動するか停止することになります。

スクリプトファイルは `/etc/rc.d/init.d` ディレクトリにあります。実際の処理はここにあるファイルが用いられます。これらに対してはシンボリックリンクが用意されています。サービスの起動 (`S` で始まる) と停止 (`K` で始まる) を行うシンボリックリンクは `/etc/rc.d/init.d` ディレクトリにあるスクリプトを指し示しています。このようにしているのは、各スクリプトが `start`、`stop`、`restart`、`reload`、`status` といったさまざまなパラメーターにより呼び出されるためです。`K` の名前を持つシンボリックリンクが起動されるということは `stop` パラメーターをつけて該当するスクリプトが実行されるということです。同様に `S` の名前を持つシンボリックリンクが起動されるということは `start` パラメーターをつけて呼び出されるということになります。

上の説明には例外があります。`rc0.d` ディレクトリと `rc6.d` ディレクトリにある、`S` で始まるシンボリックリンクはサービスを何も起動させません。`stop` パラメーターが与えられ、何らかのサービスを停止します。ユーザーがシステムを再起動したり停止したりする際には、サービスを起動させる必要はないわけで、システムを停止するだけで済むからです。

スクリプトに対するパラメーターは以下のとおりです。

`start`

サービスを起動します。

`stop`

サービスを停止します。

`restart`

サービスをいったん停止し再起動します。

`reload`

サービスの設定ファイルを更新します。設定ファイルが変更されたものの、サービスの再起動は必要ではない場合に利用します。

`status`

サービスがどの PID 値で動いているかを表示します。

ブート機能を動作させる方法は自由に取り決めて設定して構いません。このシステムはつまるところあなた自身のシステムだからです。上に示したファイル類はブート機能を定めた一例に過ぎません。

7.8. システムのホスト名の設定

`localnet` スクリプトの行う作業の1つが、システムのホスト名を定めることです。この設定は `/etc/sysconfig/network` ファイルにて行います。

以下のコマンドにより `/etc/sysconfig/network` ファイルを生成しホスト名を定めます。

```
echo "HOSTNAME=<lfs>" > /etc/sysconfig/network
```

`<lfs>` の部分はコンピューターに与える名称に置き換えてください。ここには完全修飾ドメイン名 (Fully Qualified Domain Name; FQDN) を記述しないでください。それは `/etc/hosts` ファイルにて設定します。

7.9. Setclock スクリプトの設定

setclock スクリプトはハードウェアクロックから時刻を読み取ります。ハードウェアクロックは BIOS クロック、あるいは CMOS (Complementary Metal Oxide Semiconductor) クロックとしても知られているものです。ハードウェアクロックが UTC に設定されていると setclock スクリプトは /etc/localtime ファイルを参照して、ハードウェアクロックの示す時刻をローカル時刻に変換します。/etc/localtime ファイルは hwclock プログラムに対して、ユーザーがどのタイムゾーンに位置するかを伝えます。ハードウェアクロックが UTC に設定されているかどうかを知る方法はないので、手動で設定を行う必要があります。

setclock スクリプトは udev によって起動されます。この時というのはブート時であり、カーネルがハードウェアを検出する時です。停止パラメータを与えて手動でこのスクリプトを実行することもできます。その場合 CMOS クロックに対してシステム時刻が保存されます。

ハードウェアクロックが UTC に設定されているかどうか忘れた場合は **hwclock --localtime --show** を実行すれば確認できます。このコマンドにより、ハードウェアクロックに基づいた現在時刻が表示されます。その時刻が手元の時計と同じ時刻であれば、ローカル時刻として設定されているわけです。一方それがローカル時刻でなかった場合は、おそらくは UTC に設定されているからでしょう。hwclock によって示された時刻からタイムゾーンに応じた一定時間を加減してみてください。例えばタイムゾーンが MST であった場合、これは GMT -0700 なので、7時間を加えればローカル時刻となります。

ハードウェアクロックが UTC 時刻として設定されていない場合は、以下に示す変数 UTC の値を 0 (ゼロ) にしてください。

以下のコマンドを実行して /etc/sysconfig/clock ファイルを新規に作成します。

```
cat > /etc/sysconfig/clock << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/clock

UTC=1

# Set this to any options you might need to give to hwclock,
# such as machine hardware clock type for Alphas.
CLOCKPARAMS=

# End /etc/sysconfig/clock
EOF
```

LFS において時刻の取り扱い方を示した分かりやすいヒントが <http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/time.txt> にあります。そこではタイムゾーン、UTC、環境変数 TZ などについて説明しています。



注記

CLOCKPARAMS と UTC パラメーターは /etc/sysconfig/rc.site ファイルにて設定することもできます。

7.10. Linux コンソールの設定

この節ではブートスクリプト console の設定方法について説明します。このスクリプトはキーボードマップ、コンソールフォント、カーネルログレベルを設定します。非アスキー文字 (例えば著作権、ポンド記号、ユーロ記号など) を使わず、キーボードが US 配列であるなら、本節は読み飛ばしてください。console ブートスクリプトの設定ファイルが存在しない場合 (あるいはこれと同等の設定が rc.site にない場合) は、このスクリプトは何も行いません。

console スクリプトは、設定情報を /etc/sysconfig/console ファイルから読み込みます。まずは利用するキーボードマップとスクリーンフォントを定めます。さまざまな言語に応じた設定方法については <http://www.tldp.org/HOWTO/HOWTO-INDEX/other-lang.html> を参照してください。よく分からない場合は /lib/kbd ディレクトリを見て、正しいキーマップとスクリーンフォントを探してください。マニュアルページ loadkeys(1) と setfont(8) を見て、これらのプログラムに対する適切な引数を決定してください。

/etc/sysconfig/console ファイルの各行には、変数 = "値" という記述を行います。そして変数には以下に示すものが利用可能です。

LOGLEVEL

この変数は、コンソールに出力されるカーネルメッセージのログレベルを指定するもので dmesg コマンドにより設定されます。有効な設定値は "1" (メッセージ出力なし) から "8" までであり、デフォルトは "7" です。

KEYMAP

この変数は `loadkeys` プログラムに対する引数を指定します。このプログラムは「`es`」などのキーマップをロードします。この変数がセットされていない場合、ブートスクリプトは `loadkeys` プログラムを実行せず、デフォルトのカーネルキーマップが用いられます。

KEYMAP_CORRECTIONS

この変数は（あまり利用されませんが）`loadkeys` プログラムを二度目に呼び出す際の引数を指定します。普通のキーマップでは十分な設定にならない時の微調整を行うために利用します。例えばユーロ記号がキーマップの中に含まれておらずこれを付け加える場合には、この変数に対して「`euro2`」を設定します。

FONT

この変数は `setfont` プログラムへの引数を指定します。一般にこの変数にはフォント名、「`-m`」、アプリケーションキャラクターマップ (`application character map`) を順に指定します。例えばフォントとして「`lat1-16`」、アプリケーションキャラクターマップとして「`8859-1`」を指定する場合、この変数には「`lat1-16 -m 8859-1`」を設定します。（これは米国にて適当な設定となります。）UTF-8 モードの場合、カーネルは UTF-8 キーマップ内の 8 ビットキーコードを変換するためにアプリケーションキャラクターマップを利用します。したがって「`-m`」パラメーターには、キーマップ内キーコードのエンコーディングを指定する必要があります。

UNICODE

コンソールを UTF-8 モードにするには、この変数を「`1`」、「`yes`」、「`true`」のいずれかに指定します。UTF-8 ベースのロケールであればこの設定を行います。そうでないロケールにおいて設定するのは不適切です。

LEGACY_CHARSET

キーボードレイアウトの多くに対して、`Kbd` パッケージは標準的な Unicode キーマップを提供していません。この変数にて UTF-8 ではないキーマップのエンコーディングが指定されていたら `console` ブートスクリプトは利用可能な UTF-8 キーマップに変換します。

以下はいくつかの設定例です。

- Unicode を用いない設定では、普通は `KEYMAP` 変数と `FONT` 変数のみを定めます。例えばポーランド語の設定であれば以下ようになります。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

KEYMAP="pl2"
FONT="lat2a-16 -m 8859-2"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- 上で述べたように、普通のキーマップの設定に対して多少の修正を必要とする場合もあります。以下の例はドイツ語のキーマップにユーロ記号を加える例です。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

KEYMAP="de-latin1"
KEYMAP_CORRECTIONS="euro2"
FONT="lat0-16 -m 8859-15"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- 以下は Unicode を用いたブルガリア語の設定例です。通常のキーマップが存在しているものと仮定しています。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

UNICODE="1"
KEYMAP="bg_bds-utf8"
FONT="LatArCyrHeb-16"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- 上の例においては 512 個のグリフを持つ LatArCyrHeb-16 フォントを利用しています。この場合、フレームバッファを利用していなければ Linux コンソール上に鮮やかな色づけを行うことは出来なくなります。フレームバッファがない状態で文字フォントを変更することなく色づけを適切に行いたい場合は、以下に示すように 256 個のグリフを持った、この言語に固有のフォントを用いる方法もあります。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

UNICODE="1"
KEYMAP="bg_bds-utf8"
FONT="cyr-sun16"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- 以下の例では ISO-8859-15 から UTF-8 へのキーマップ変換の自動化 (keymap autoconversion) を指定し、Unicode におけるデッドキー (dead keys) を有効にするものです。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

UNICODE="1"
KEYMAP="de-latin1"
KEYMAP_CORRECTIONS="euro2"
LEGACY_CHARSET="iso-8859-15"
FONT="LatArCyrHeb-16 -m 8859-15"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- キーマップにデッドキー (dead keys) を持つものがあります。そのキー自身は文字を意味するものではなく、次のキー入力による文字に対するアクセント記号をつける目的のものなどです。または複合的な入力規則を定義するもの、例えば「Ctrl+,、A、E を入力することで \mathbb{E} を得るもの」があります。Linux-3.10.10 ではキーマップに応じてデッドキーや複合的な入力規則を解釈します。ただしこれが正しく動作するのは、元の文字がマルチバイトではない場合に限りです。このような欠点は西欧のキーマップでは問題にはなりません。アクセント記号なら、アクセント記号がついていない ASCII 文字を使ったり、ASCII 文字を二つ使って工夫したりするからです。しかし UTF-8 モードでは問題になります。例えばギリシャ語にて「alpha」の文字の上にアクセント記号を付けたい場合が問題です。これを解決するには、一つには UTF-8 の利用を諦めることであり、もう一つは X ウィンドウシステムを使うことで、そのような入力処理の制約を解消することです。
- 中国語、日本語、韓国語などを利用する場合 Linux コンソールにはそれらの文字を表示できません。この言語を利用するユーザーは X ウィンドウシステムを使ってください。そこで用いるフォントは、必要となるコード範囲の文字を有しており、入力メソッドも用意されています。(例えば SCIM は数多くの言語入力をサポートしています。)



注記

/etc/sysconfig/console ファイルは Linux のテキストコンソール上の言語設定を行うだけです。X ウィンドウシステム、SSH セッション、シリアルコンソールでのキーボードレイアウトや端末フォントの設定とは無関係です。それらに対しては、上に列記した最後の二項目における制約は適用されません。



日本語訳情報

日本の方であれば「日本語106キーボード」をほぼ間違いなくお使いかと思しますので KEYMAP 変数には「jp106」を設定することになるでしょう。FONT 変数について訳者は十分な知識がありません。ここに何を設定すべきか分からない（調べていない）ため、何も設定しないでいる状態です。訳者は LFS システム構築後は SSH 接続によりシステムアクセスしており、その場合ここでのフォントの設定がどうであろうと（おそらく）無関係であるため、あまり気にせずにあります。何か情報を頂けるのであればご教示よろしくお願いたします。

訳者が行っている設定は以下のとおりです。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

KEYMAP="jp106"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

7.11. Syslogd スクリプトの設定

syslogd スクリプトは syslogd プログラムをパラメーター `-m 0` で実行します。このオプションは syslogd がデフォルトで 20分おきにログファイルに対して周期的にタイムスタンプを書き込む機能を無効にします。この機能を有効にしたい場合は `/etc/sysconfig/rc.site` ファイルを新たに作るか既存のものを編集して、`SYSKLOGD_PARMS` 変数を必要な値に設定してください。例えばすべてのパラメーターを無効にする場合は、変数値をヌル値とします。

```
SYSKLOGD_PARMS=
```

詳しくは `man syslogd` を入力して man ページを参照してください。

7.12. rc.site ファイル

オプションファイル `/etc/sysconfig/rc.site` は、各ブートスクリプトにて自動的に設定される内容を含んでいます。`/etc/sysconfig/` ディレクトリにおける `hostname`, `console`, `clock` の各ファイルにて値の設定を行うこともできます。関係する変数が、これらのファイルと `rc.site` の双方に存在する場合、スクリプトにて指定されたファイル内の値が優先されます。

`rc.site` では、起動時におけるその他の機能をカスタマイズするためのパラメーターも含まれています。変数 `IPROMPT` を設定すると、起動するブートスクリプトを選択することができます。この他のオプションについては、このファイル内にてコメントとして記述されています。このファイルのデフォルト版は以下のとおりです。

```
# rc.site
# Optional parameters for boot scripts.

# Distro Information
# These values, if specified here, override the defaults
#DISTRO="Linux From Scratch" # The distro name
#DISTRO_CONTACT="lfs-dev@linuxfromscratch.org" # Bug report address
#DISTRO_MINI="LFS" # Short name used in filenames for distro config

# Define custom colors used in messages printed to the screen

# Please consult `man console_codes` for more information
# under the "ECMA-48 Set Graphics Rendition" section
#
# Warning: when switching from a 8bit to a 9bit font,
# the linux console will reinterpret the bold (1;) to
# the top 256 glyphs of the 9bit font. This does
# not affect framebuffer consoles

# These values, if specified here, override the defaults
#BRACKET="\033[1;34m" # Blue
#FAILURE="\033[1;31m" # Red
```

```

#INFO="\033[1;36m" # Cyan
#NORMAL="\033[0;39m" # Grey
#SUCCESS="\033[1;32m" # Green
#WARNING="\033[1;33m" # Yellow

# Use a colored prefix
# These values, if specified here, override the defaults
#BMPREFIX=" "
#SUCCESS_PREFIX="${SUCCESS} * ${NORMAL}"
#FAILURE_PREFIX="${FAILURE}*****${NORMAL}"
#WARNING_PREFIX="${WARNING} *** ${NORMAL}"

# Interactive startup
#IPROMPT="yes" # Whether to display the interactive boot prompt
#itime="3" # The amount of time (in seconds) to display the prompt

# The total length of the distro welcome string, without escape codes
#wlen=$(echo "Welcome to ${DISTRO}" | wc -c )
#welcome_message="Welcome to ${INFO}${DISTRO}${NORMAL}"

# The total length of the interactive string, without escape codes
#ilen=$(echo "Press 'I' to enter interactive startup" | wc -c )
#i_message="Press '${FAILURE}I${NORMAL}' to enter interactive startup"

# Set scripts to skip the file system check on reboot
#FASTBOOT=yes

# Skip reading from the console
#HEADLESS=yes

# Write out fsck progress if yes
#VERBOSE_FSCK=no

# Speed up boot without waiting for settle in udev
#OMIT_UDEV_SETTLE=y

# Speed up boot without waiting for settle in udev_retry
#OMIT_UDEV_RETRY_SETTLE=yes

# Skip cleaning /tmp if yes
#SKIPTMPCLEAN=no

# For setclock
#UTC=1
#CLOCKPARAMS=

# For consolelog
#LOGLEVEL=5

# For network
#HOSTNAME=mylfs

# Delay between TERM and KILL signals at shutdown
#KILLDELAY=3

# Optional syslogd parameters
#SYSLOGD_PARAMS="-m 0"

# Console parameters
#UNICODE=1
#KEYMAP="de-latin1"

```



```
#KEYMAP_CORRECTIONS="euro2"
#FONT="lat0-16 -m 8859-15"
#LEGACY_CHARSET=
```

7.12.1. ブート時/シャットダウン時のスクリプトのカスタマイズ

LFS のブートスクリプト類により、システムの起動および終了が適正に行われます。ただし `rc.site` ファイルにおいては改善の余地があって、処理性能を向上させたり出力メッセージを調整したりすることができます。種々の設定は、上に示した `/etc/sysconfig/rc.site` ファイルへの変更により実現します。

- ブートスクリプト `udev` の起動中には `udev settle` の呼び出しが行われます。ただこの呼び出しは特定の場合において必要となるものであり、それはシステム上に存在するデバイスに依存します。単純なパーティション設定を行っていて、またイーサネットカードを1つのみ利用している場合には、ブート時に上のコマンドを実行する必要はないかもしれません。このコマンドの実行をスキップする場合は、変数の設定として `OMIT_UDEV_SETTLE=y` を記述します。
- ブートスクリプト `udev_retry` も同様に、デフォルトで `udev settle` を実行します。このコマンドはデフォルトでは、`/var` ディレクトリが個別にマウントされている時にのみ必要となります。それはクロックが `/var/lib/hwclock/adjtime` ファイルを必要とするためです。これ以外にも `udev` の処理を待つことが必要になるケースがありますが、本当に必要になることはまれです。変数の設定として `OMIT_UDEV_RETRY_SETTLE=y` を行えば、コマンドをスキップすることができます。
- デフォルトにおいてファイルシステムのチェックは、何も表示されることなく処理が行われるので、処理が遅延して行われているかのように見えます。 `fsck` による出力を有効とするには、変数の設定を `VERBOSE_FSCK=y` とします。
- 再起動時にはファイルシステムのチェック、つまり `fsck` の実行を完全に行う必要はないと考えられる場合もあります。そうであるなら、ファイル `/fastboot` を生成するか、`/sbin/shutdown -f -r now` というコマンドを実行します。一方、ファイルシステムのチェックを必ず行うのであれば、ファイル `/forcefsck` を生成するか、`shutdown` コマンドの実行において `-f` ではなく `-F` というパラメーターをつける方法があります。

変数の設定として `FASTBOOT=y` を行えば、ブート時において `fsck` を実行しないようにすることができます。この設定を恒常的に行うことは推奨されません。

- 通常 `/tmp` ディレクトリ内にあるファイルは、ブート時にすべて削除されます。ファイル数やディレクトリ数が膨大になっていた場合は、ブート処理が極端に時間を要することにもなります。変数の設定 `SKIPTMPCLEAN=y` を行うと、ファイルの削除が行われなくなります。
- シャットダウン時には `init` プログラムが稼働中のプログラム (`agetty` など) に対して `TERM` シグナルを送信し、一定時間 (デフォルトでは3秒) 待ちます。そして各プロセスに対して `KILL` シグナルを送信して再度待ちます。各プロセスが自身のスクリプト内にてシャットダウンしないようであれば `sendsignals` スクリプトにて上の処理が繰り返されます。 `init` が起動するまでの時間は、パラメーターにより制御することができます。例えば `init` の遅延を無くす場合は、シャットダウンまたはリブート時のコマンドに `-t0` パラメーターを与えます。(つまり `/sbin/shutdown -t0 -r now` といったコマンド実行とします。) `sendsignals` スクリプトの遅延を無くすには、パラメーターの設定を `KILLDELAY=0` とします。

7.13. Bash シェルの初期起動ファイル

シェルプログラムである `/bin/bash` (これ以降は単に「シェル」と表現します) は、初期起動ファイルをいくつも利用して環境設定を行います。個々のファイルにはそれぞれに目的があり、ログインや対話環境をさまざまに制御します。 `/etc` ディレクトリにあるファイルは一般にグローバルな設定を行います。これに対応づいたファイルがユーザーのホームディレクトリにある場合は、グローバルな設定を上書きします。

対話型ログインシェルは `/bin/login` プログラムを利用して `/etc/passwd` ファイルを読み込み、ログインが成功することで起動します。同じ対話型でも非ログインシェルの場合は `[prompt]$/bin/bash` のようなコマンドラインからの入力を経て起動します。非対話型のシェルはシェルスクリプト動作中に実行されます。非対話型であるのは、スクリプトの実行の最中にユーザーからの入力を待つことがないためです。

より詳しい情報は `info bash` の `Bash Startup Files and Interactive Shells` の節を参照してください。

`/etc/profile` ファイルと `~/.bash_profile` ファイルは、対話型のログインシェルとして起動した時に読み込まれます。

本節の終わりに示す `/etc/profile` ファイルは言語を設定するために必要となる環境変数を定義します。これを設定することによって以下の内容が定められます。

- プログラムの出力結果を指定した言語で得ることができます。
- キャラクターを英字、数字、その他のクラスに分類します。この設定は、英語以外のロケールにおいて、コマンドラインに非アスキー文字が入力された場合に `bash` が正しく入力を受け付けるために必要となります。
- 各国ごとに正しくアルファベット順が並ぶようにします。
- 適切なデフォルト用紙サイズを設定します。
- 通貨、日付、時刻を正しい書式で出力するように設定します。

以下において `<ll>` と示しているものは、言語を表す2文字の英字（例えば「en」）に、また `<cc>` は、国を表す2文字の英字（例えば「GB」）にそれぞれ置き換えてください。`<charmap>` は、選択したロケールに対応したキャラクターマップ (`charmap`) に置き換えてください。オプションの修飾子として「@euro」といった記述もあります。

以下のコマンドを実行すれば `Glibc` が取り扱うロケールを一覧で見ることができます。

```
locale -a
```

キャラクターマップにはエイリアスがいくつもあります。例えば「ISO-8859-1」は「iso8859-1」や「iso88591」として記述することもできます。ただしアプリケーションによってはエイリアスを正しく取り扱うことができないものがあります。（「UTF-8」の場合、「UTF-8」と書かなければならず、これを「utf8」としてはならない場合があります。）そこでロケールに対する正規の名称を選ぶのが最も無難です。正規の名称は以下のコマンドを実行すれば分かります。ここで `<locale name>` は `locale -a` コマンドの出力から得られたロケールを指定します。（本書の例では「en_GB.iso88591」としています。）

```
LC_ALL=<locale name> locale charmap
```

「en_GB.iso88591」ロケールの場合、上のコマンドの出力は以下となります。

```
ISO-8859-1
```

出力された結果が「en_GB.ISO-8859-1」に対するロケール設定として用いるべきものです。こうして探し出したロケールは動作確認しておくことが重要です。`Bash` の起動ファイルに記述するのはその後です。

```
LC_ALL=<locale name> locale language
LC_ALL=<locale name> locale charmap
LC_ALL=<locale name> locale int_curr_symbol
LC_ALL=<locale name> locale int_prefix
```

上のコマンドを実行すると、言語名やロケールに応じたキャラクターエンコーディングが出力されます。また通貨や各国ごとの国際電話番号プレフィックスも出力されます。コマンドを実行した際に以下のようなメッセージが表示されたら、第6章にてロケールをインストールしていないか、あるいはそのロケールが `Glibc` のデフォルトのインストールではサポートされていないかのいずれかです。

```
locale: Cannot set LC_* to default locale: No such file or directory
```

このエラーが発生したら `localedef` コマンドを使って、目的とするロケールをインストールするか、別のロケールを選ぶ必要があります。これ以降の説明では `Glibc` がこのようなエラーを生成していないことを前提に話を進めます。

LFS には含まれない他のパッケージにて、指定したロケールをサポートしていないものがあります。例えば X ライブラリ (X ウィンドウシステムの一部) では、内部ファイルに指定されたキャラクターマップ名に合致しないロケールを利用した場合に、以下のようなメッセージを出力します。

```
Warning: locale not supported by Xlib, locale set to C
```

`Xlib` ではキャラクターマップはたいいてい、英大文字とダッシュ記号を用いて表現されます。例えば「iso88591」ではなく「ISO-8859-1」となります。ロケール設定におけるキャラクターマップ部分を取り除いてみれば、適切なロケール設定を見出すことができます。これはまた `locale charmap` コマンドを使って、設定を変えてみてロケールを指定してみれば確認できます。例えば「de_DE.ISO-8859-15@euro」という設定を「de_DE@euro」に変えてみて `Xlib` がそのロケールを認識するかどうか確認してみてください。

これ以外のパッケージでも、パッケージが求めるものとは異なるロケール設定がなされた場合に、適切に処理されないケースがあります。（そして必ずしもエラーメッセージが表示されない場合もあります。）そういったケースでは、利用している Linux ディストリビューションがどのようにロケール設定をサポートしているかを調べてみると、有用な情報が得られるかもしれません。

適切なロケール設定が決まったら `/etc/profile` ファイルを生成します。

```
cat > /etc/profile << "EOF"
# Begin /etc/profile

export LANG=<ll>_<CC>.<charmap><@modifiers>

# End /etc/profile
EOF
```

ロケール設定の「C」（デフォルト）と「en_US」（米国の英語利用ユーザーに推奨）は異なります。「C」は US-ASCII 7 ビットキャラクターセットを用います。もし最上位ビットがセットされたキャラクターがあれば不適當なものとして取り扱います。例えば `ls` コマンドにおいてクエスチョン記号が表示されることがあるのはこのためです。また Mutt や Pine などにより電子メールが送信される際に、そういった文字は RFC には適合しないメールとして送信されます。送信された文字は「不明な 8ビット (unknown 8-bit)」として示されます。そこで 8ビット文字を必要としない場合には「C」ロケールを指定してください。

UTF-8 ベースのロケールは多くのプログラムにおいてサポートされていません。この問題については <http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/introduction/locale-issues.html> にて説明しており、可能なものは解決を図っているところですので。

7.14. `/etc/inputrc` ファイルの生成

`inputrc` ファイルはキーボードに応じたキーボードマップを定めます。このファイルは入力に関連するライブラリ `Readline` が利用するもので、このライブラリは `Bash` などのシェルから呼び出されます。

ユーザー固有のキーボードマップを必要となるのはまれなので、以下の `/etc/inputrc` ファイルによって、ログインユーザーすべてに共通するグローバルな定義を生成します。各ユーザーごとにこのデフォルト定義を上書きする必要が出てきた場合は、ユーザーのホームディレクトリに `.inputrc` ファイルを生成して、修正マップを定義することもできます。

`inputrc` ファイルの設定方法については `info bash` により表示される `Readline Init File` の節に詳しい説明があります。`info readline` にも有用な情報があります。

以下はグローバルな `inputrc` ファイルの一般的な定義例です。コメントをつけて各オプションを説明しています。コメントはコマンドと同一行に記述することはできません。以下のコマンドを実行してこのファイルを生成します。

```
cat > /etc/inputrc << "EOF"
# Begin /etc/inputrc
# Modified by Chris Lynn <roryo@roryo.dynup.net>

# Allow the command prompt to wrap to the next line
set horizontal-scroll-mode Off

# Enable 8bit input
set meta-flag On
set input-meta On

# Turns off 8th bit stripping
set convert-meta Off

# Keep the 8th bit for display
set output-meta On

# none, visible or audible
set bell-style none

# All of the following map the escape sequence of the value
# contained in the 1st argument to the readline specific functions
"\eOd": backward-word
"\eOc": forward-word

# for linux console
"\e[1~": beginning-of-line
"\e[4~": end-of-line
"\e[5~": beginning-of-history
"\e[6~": end-of-history
"\e[3~": delete-char
"\e[2~": quoted-insert

# for xterm
"\eOH": beginning-of-line
"\eOF": end-of-line

# for Konsole
"\e[H": beginning-of-line
"\e[F": end-of-line

# End /etc/inputrc
EOF
```

第8章 LFS システムのブート設定

8.1. はじめに

ここからは LFS システムをブート可能にしていきます。この章では `fstab` ファイルを作成し、LFS システムのカーネルを構築します。また GRUB のブートローダーをインストールして LFS システムの起動時にブートローダーを選択できるようにします。

8.2. `/etc/fstab` ファイルの生成

`/etc/fstab` ファイルは、種々のプログラムがファイルシステムのマウント状況を確認するために利用するファイルです。ファイルシステムがデフォルトでどこにマウントされ、それがどういう順序であるか、マウント前に（整合性エラーなどの）チェックを行うかどうか、という設定が行われます。新しいファイルシステムに対する設定は以下のようにして生成します。

```
cat > /etc/fstab << "EOF"
# Begin /etc/fstab

# file system  mount-point  type      options          dump  fsck
#                                     order

/dev/<xxx>      /                <fff>     defaults         1     1
/dev/<yyy>      swap            swap      pri=1             0     0
proc           /proc           proc      nosuid,noexec,nodev 0     0
sysfs          /sys            sysfs     nosuid,noexec,nodev 0     0
devpts         /dev/pts        devpts    gid=5,mode=620    0     0
tmpfs          /run            tmpfs     defaults          0     0
devtmpfs       /dev            devtmpfs  mode=0755,nosuid  0     0

# End /etc/fstab
EOF
```

`<xxx>`、`<yyy>`、`<fff>` の部分はシステムに合わせて正しい記述に書き換えてください。例えば `sda2`、`sda5`、`ext4` といったものです。上のファイルの6行分の記述内容の詳細は `man 5 fstab` により確認してください。

MS-DOS や Windows において利用されるファイルシステム（例えば `vfat`、`ntfs`、`smbfs`、`cifs`、`iso9660`、`udf`）では、ファイル名称内に用いられた非アスキー文字を正しく認識させるために、マウントオプションとして「`iocharset`」を指定することが必要となります。オプションに設定する値は使用するロケールとすることが必要で、カーネルが理解できる形でなければなりません。またこれを動作させるために、対応するキャラクタセット定義（File systems -> Native Language Support にあります）をカーネルに組み入れるか、モジュールとしてビルドすることが必要です。`vfat` や `smbfs` ファイルシステムを用いるなら、さらに「`codepage`」オプションも必要です。このオプションには、国情報に基づいて MS-DOS にて用いられるコードページ番号をセットします。例えば USB フラッシュドライブをマウントし `ru_RU.KOI8-R` をセットするユーザーであれば `/etc/fstab` ファイルの設定は以下のようになります。

```
noauto,user,quiet,showexec,iocharset=koi8r,codepage=866
```

`ru_RU.UTF-8` をセットするなら以下のように変わります。

```
noauto,user,quiet,showexec,iocharset=utf8,codepage=866
```



注記

後者の設定では、カーネルが以下のようなメッセージを出力します。

```
FAT: utf8 is not a recommended IO charset for FAT filesystems,
      filesystem will be case sensitive!
```

否定的な設定を勧めるメッセージですが、これは無視して構いません。「`iocharset`」オプションに他の設定を行ったとしても UTF-8 ロケールでは結局はファイル名の表示を正しく処理できないためです。

ファイルシステムによっては `codepage` と `iocharset` のデフォルト値をカーネルにおいて設定することもできます。カーネルにおいて対応する設定は「Default NLS Option」(`CONFIG_NLS_DEFAULT`)、「Default Remote NLS Option」(`CONFIG_SMB_NLS_DEFAULT`)、「Default codepage for FAT」(`CONFIG_FAT_DEFAULT_CODEPAGE`)、「Default iocharset for FAT」(`CONFIG_FAT_DEFAULT_IOCHARSET`) です。なお `ntfs` ファイルシステムに対しては、カーネルのコンパイル時に設定する項目はありません。

特定のハードディスクにおいて `ext3` ファイルシステムでの電源供給不足時の信頼性を向上させることができます。これは `/etc/fstab` での定義においてマウントオプション `barrier=1` を指定します。ハードディスクがこのオプションをサポートしているかどうかは `hdparm` を実行することで確認できます。例えば以下のコマンドを実行します。

```
hdparm -I /dev/sda | grep NCQ
```

何かが出力されたら、このオプションがサポートされていることを意味します。

論理ボリュームマネージャー (Logical Volume Management; LVM) に基づいたパーティションでは `barrier` オプションは利用できません。

8.3. Linux-3.10.10

Linux パッケージは Linux カーネルを提供します。

概算ビルド時間: 3.0 - 49.0 SBU (一般的には 6 SBU 程度)
必要ディスク容量: 700 - 6800 MB (一般的には 800-900 MB)

8.3.1. カーネル のインストール

カーネルの構築は、カーネルの設定、コンパイル、インストールの順に行っていきます。本書が行っているカーネル設定の方法以外については、カーネルソースツリー内にある README ファイルを参照してください。

コンパイルするための準備として以下のコマンドを実行します。

```
make mrproper
```

これによりカーネルソースが完全にクリーンなものになります。カーネル開発チームは、カーネルコンパイルするなら、そのたびにこれを実行することを推奨しています。tar コマンドにより伸張しただけのソースではクリーンなものにはなりません。

メニュー形式のインターフェースによりカーネルを設定します。カーネルの設定方法に関する一般的な情報が <http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/kernel-configuration.txt> にあるので参照してください。BLFS では LFS が取り扱わない各種パッケージに対して、必要となるカーネル設定項目を説明しています。 <http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/longindex.html#kernel-config-index> を参照してください。さらに詳しくカーネルの構築や設定を説明している <http://www.kroah.com/lkn/> もあります。



注記

カーネル設定を行うにあたって、分かりやすいやり方として `make defconfig` を実行する方法があります。これを実行することで基本的な設定がなされ、現在のシステム構成が考慮された、より良い設定が得られるかもしれません。

udev の最近の更新に合わせて、以下のカーネル設定項目が選択されていることを確認してください。

```
Device Drivers --->
Generic Driver Options --->
Maintain a devtmpfs filesystem to mount at /dev
```

```
make LANG=<host_LANG_value> LC_ALL= menuconfig
```

make パラメーターの意味:

```
LANG=<host_LANG_value> LC_ALL=
```

これはホストのロケール設定を指示するものです。この設定は UTF-8 での表示設定がされたテキストコンソールにて `menuconfig` の `ncurses` による行表示を適切に行うために必要となります。

`<host_LANG_value>` の部分は、ホストの `$LANG` 変数の値に置き換えてください。ホストにてその値が設定されていない場合は `$LC_ALL` あるいは `$LC_CTYPE` の値を設定してください。

上のコマンドではなく、状況によっては `make oldconfig` を実行することが適当な場合もあります。詳細についてはカーネルソース内の README ファイルを参照してください。

カーネル設定は行わずに、ホストシステムにあるカーネル設定ファイル `.config` をコピーして利用することもできます。そのファイルが存在すればの話です。その場合は `linux-3.10.10` ディレクトリにそのファイルをコピーしてください。もっともこのやり方はお勧めしません。設定項目をメニューから探し出して、カーネル設定を一から行っていくことが望ましいことです。

カーネルイメージとモジュールをコンパイルします。

```
make
```

カーネルモジュールを利用する場合 `/etc/modprobe.d` ディレクトリ内での設定を必要とします。モジュールやカーネル設定に関する情報は 7.4. 「LFS システムにおけるデバイスとモジュールの扱い」や `linux-3.10.10/Documentation` ディレクトリにあるカーネルドキュメントを参照してください。また `modprobe.conf(5)` も有用です。

カーネル設定においてモジュールを利用することにした場合、モジュールをインストールします。

```
make modules_install
```

カーネルのコンパイルが終わったら、インストールの完了に向けてあと少し作業を行います。 /boot ディレクトリにいくつかのファイルをコピーします。

カーネルイメージへのパスは、利用しているプラットフォームによってさまざまです。そのファイル名は、好みにより自由に変更して構いません。ただし vmlinuz という語は必ず含めてください。これにより、次節で説明するブートプロセスを自動的に設定するために必要なことです。以下のコマンドは x86 アーキテクチャーの場合の例です。

```
cp -v arch/x86/boot/bzImage /boot/vmlinuz-3.10.10-lfs-7.4
```

System.map はカーネルに対するシンボルファイルです。このファイルはカーネル API の各関数のエントリポイントをマッピングしています。同様に実行中のカーネルのデータ構成のアドレスを保持します。このファイルは、カーネルに問題があった場合にその状況を調べる手段として利用できます。マップファイルをインストールするには以下を実行します。

```
cp -v System.map /boot/System.map-3.10.10
```

カーネル設定ファイル .config は、上で実行した make menuconfig によって生成されます。このファイル内には、今コンパイルしたカーネルの設定項目の情報がすべて保持されています。将来このファイルを参照する必要があるかもしれないため、このファイルを保存しておきます。

```
cp -v .config /boot/config-3.10.10
```

Linux カーネルのドキュメントをインストールします。

```
install -d /usr/share/doc/linux-3.10.10
cp -r Documentation/* /usr/share/doc/linux-3.10.10
```

カーネルのソースディレクトリは所有者が root ユーザーになっていません。我々は chroot 環境内の root ユーザーとなってパッケージを展開してきましたが、展開されたファイル類はパッケージ開発者が用いていたユーザー ID、グループ ID が適用されています。このことは普通はあまり問題になりません。というのもパッケージをインストールした後のソースファイルは、たいていは削除するからです。一方 Linux のソースファイルは、削除せずに保持しておくことがよく行われます。このことがあるため開発者の用いたユーザーIDが、インストールしたマシン内の誰かの ID に割り当たった状態となりえます。その人はカーネルソースを自由に書き換えてしまう権限を持つことになるわけです。

カーネルのソースファイルを保持しておくつもりなら linux-3.10.10 ディレクトリにおいて chown -R 0:0 を実行しておいてください。これによりそのディレクトリの所有者は root ユーザーとなります。



警告

カーネルを説明する書の中には、カーネルのソースディレクトリに対してシンボリックリンク /usr/src/linux の生成を勧めているものがあります。これはカーネル 2.6 系以前におけるものであり LFS システム上では生成してはなりません。ベースとなる LFS システムを構築し、そこに新たなパッケージを追加していくようにした際に、そのことが問題となるからです。



警告

さらに include ディレクトリにあるヘッダーファイルは、必ず Glibc のコンパイルによって得られるものでなければならず、つまりは Linux カーネルの tarball によって提供されるものでなければなりません。したがってカーネルヘッダーによって上書きされてしまうのは避けなければなりません。

8.3.2. Linux モジュールのロード順の設定

たいていの場合 Linux モジュールは自動的にロードされます。しかし中には特定の指示を必要とするものもあります。モジュールをロードするプログラム、modprobe または insmod は、そのような指示を行う目的で /etc/modprobe.d/usb.conf を利用します。USB ドライバー (ehci_hcd, ohci_hcd, uhci_hcd) がモジュールとしてビルドされていた場合には、それらを正しい順でロードしなければならず、そのために /etc/modprobe.d/usb.conf ファイルが必要となります。ehci_hcd は ohci_hcd や uhci_hcd よりも先にロードしなければなりません。これを行わないとブート時に警告メッセージが出力されます。

以下のコマンドを実行して `/etc/modprobe.d/usb.conf` ファイルを生成します。

```
install -v -m755 -d /etc/modprobe.d
cat > /etc/modprobe.d/usb.conf << "EOF"
# Begin /etc/modprobe.d/usb.conf

install ohci_hcd /sbin/modprobe ehci_hcd ; /sbin/modprobe -i ohci_hcd ; true
install uhci_hcd /sbin/modprobe ehci_hcd ; /sbin/modprobe -i uhci_hcd ; true

# End /etc/modprobe.d/usb.conf
EOF
```

8.3.3. Linux の構成

インストールファイル: `config-3.10.10, vmlinuz-3.10.10-lfs-7.4, System.map-3.10.10`
 インストールディレクトリ: `/lib/modules, /usr/share/doc/linux-3.10.10`

概略説明

<code>config-3.10.10</code>	カーネルの設定をすべて含みます。
<code>vmlinuz-3.10.10-lfs-7.4</code>	Linux システムのエンジンです。 コンピューターを起動した際には、オペレーティングシステム内にて最初にロードされるものです。 カーネルはコンピューターのハードウェアを構成するあらゆるコンポーネントを検知して初期化します。 そしてそれらのコンポーネントをツリー階層のファイルとして、ソフトウェアが利用できるようにします。 ただひとつの CPU からマルチタスクを処理するマシンとして、あたかも多数のプログラムが同時稼動しているように仕向けます。
<code>System.map-3.10.10</code>	アドレスとシンボルのリストです。 カーネル内のすべての関数とデータ構成のエントリポイントおよびアドレスを示します。

8.4. GRUB を用いたブートプロセスの設定

8.4.1. はじめに



警告

GRUB の設定を誤ってしまうと、CD-ROM のような他のデバイスからもブートできなくなってしまうかもしれません。読者の LFS システムをブート可能とするためには、本節の内容は必ずしも必要ではありません。読者が利用している現在のブートローダー、例えば Grub-Legacy, GRUB2, LILO などの設定を修正することが必要かもしれません。

コンピューターが利用不能に（ブート不能に）なってしまいうこともありますが。そんな事態に備えてコンピューターを「復旧 (rescue)」するブートディスクの生成を必ず行ってください。ブートデバイスを用意していない場合は作成してください。以降に示す手順を実施するために、必要に応じて BLFS ブックを参照し libisoburn にある **xorriso** をインストールしてください。

```
cd /tmp &&
grub-mkrescue --output=grub-img.iso &&
xorriso -as cdrecord -v dev=/dev/cdrw blank=as_needed grub-img.iso
```

8.4.2. GRUB の命名規則

GRUB ではドライブやパーティションに対して (hdm, n) といった書式の命名法を採用しています。n はハードドライブ番号、m はパーティション番号を表します。ハードドライブ番号はゼロから数え始めます。一方パーティション番号は、基本パーティションであれば 1 から、拡張パーティションであれば 5 から数え始めます。かつてのバージョンでは共にゼロから数え始めていましたが、今はそうではないので注意してください。例えば sda1 は GRUB では (hd0, 1) と表記され、sdb3 は (hd1, 3) と表記されます。Linux システムでの取り扱いとは違って GRUB では CD-ROM ドライブをハードドライブとしては扱いません。例えば CD が hdb であり、2 番めのハードドライブが hdc であった場合、2 番めのハードドライブは (hd1) と表記されます。

8.4.3. 設定作業

GRUB は、ハードディスク上の最初の物理トラックにデータを書き出します。この領域は、どのファイルシステムにも属していません。ここに配置されているプログラムは、ブートパーティションにある GRUB モジュールにアクセスします。モジュールのデフォルト位置は /boot/grub/ です。

ブートパーティションをどこにするかは各人に委ねられていて、それによって設定方法が変わります。推奨される 1 つの手順としては、ブートパーティションとして独立した小さな (100MB 程度のサイズの) パーティションを設けることです。こうしておく、この後に LFS であろうが商用ディストリビューションであろうが、システム導入する際に同一のブートファイルを利用することが可能です。つまりどのようなブートシステムからでもアクセスが可能となります。この方法をとるなら、新たなパーティションをマウントした上で、現在 /boot ディレクトリにある全ファイルを (例えば前節にてビルドした Linux カーネルも) 新しいパーティションに移動させる必要があります。そしていったんパーティションをアンマウントし、再度 /boot としてマウントしなおすことになります。これを行った後は /etc/fstab を適切に書き換えてください。

現時点での LFS パーティションでも問題なく動作します。ただし複数システムを取り扱うための設定は、より複雑になります。

ここまでの情報に基づいて、ルートパーティションの名称を (あるいはブートパーティションを別パーティションとするならそれも含めて) 決定します。以下では例として、ルートパーティション (あるいは別立てのブートパーティション) が sda2 であるとしします。

以下を実行して GRUB ファイル類を /boot/grub にインストールし、ブートトラックを構築します。



警告

以下に示すコマンドを実行すると、現在のブートローダーを上書きします。上書きするのが不相当であるならコマンドを実行しないでください。例えばマスターブートレコード (Master Boot Record; MBR) を管理するサードパーティ製のブートマネージャーソフトウェアを利用している場合などがこれに該当します。

```
grub-install /dev/sda
```

8.4.4. 設定ファイルの生成

/boot/grub/grub.cfg ファイルを生成します。

```
cat > /boot/grub/grub.cfg << "EOF"
# Begin /boot/grub/grub.cfg
set default=0
set timeout=5

insmod ext2
set root=(hd0,2)

menuentry "GNU/Linux, Linux 3.10.10-lfs-7.4" {
    linux /boot/vmlinuz-3.10.10-lfs-7.4 root=/dev/sda2 ro
}
EOF
```



注記

GRUB にとってカーネルファイル群は、配置されるパーティションからの相対位置となります。したがって /boot パーティションを別に作成している場合は、上記の linux の行から /boot の記述を取り除いてください。また set root 行でのブートパーティションの指定も、正しく設定する必要があります。

GRUB は大変強力なプログラムであり、ブート処理に際しての非常に多くのオプションを提供しています。これにより、各種デバイス、オペレーティングシステム、パーティションタイプに幅広く対応しています。さらにカスタマイズのためのオプションも多く提供されていて、グラフィカルなスプラッシュ画面、サウンド、マウス入力などについてカスタマイズが可能です。オプションの細かな説明は、ここでの手順説明の範囲を超えるため割愛します。



注意

grub-mkconfig というコマンドは、設定ファイルを自動的に生成するものです。このコマンドは /etc/grub.d/ にある一連のスクリプトを利用しており、それまでに設定していた内容は失われることになります。その一連のスクリプトは、ソースコードを提供しない Linux ディストリビューションにて用いられるのが主であるため、LFS では推奨されません。商用 Linux ディストリビューションをインストールする場合には、それらのスクリプトを実行する、ちょうど良い機会となるはずです。こういった状況ですから、grub.cfg のバックアップは忘れずに行うようにしてください。

第9章 作業終了

9.1. 作業終了

できました！ LFS システムのインストール終了です。 あなたの輝かしいカスタムメイドの Linux システムが完成したことでしよう。

`/etc/lfs-release` というファイルをここで作成することにします。 このファイルを作っておけば、どのバージョンの LFS をインストールしたのか、すぐに判別できます。（もしあなたが質問を投げた時には、我々もすぐに判別できることになります。）以下のコマンドによりこのファイルを生成します。

```
echo 7.4 > /etc/lfs-release
```

またもう一つのファイルを生成することにします。 これは Linux Standards Base (LSB) の観点で、あなたのシステムがどのような状況にあるかを示すものです。 これを作成するために以下のコマンドを実行します。

```
cat > /etc/lsb-release << "EOF"
DISTRIB_ID="Linux From Scratch"
DISTRIB_RELEASE="7.4"
DISTRIB_CODENAME="<your name here>"
DISTRIB_DESCRIPTION="Linux From Scratch"
EOF
```

'DISTRIB_CODENAME' に対する設定は、あなたのシステムを特定できるように適切に書き換えてください。

9.2. ユーザー登録

これにより本書の作業は終了です。 LFS ユーザー登録を行ってカウンターを取得しますか？ 以下のページ <http://www.linuxfromscratch.org/cgi-bin/lfscounter.php> にて、初めて構築した LFS のバージョンと氏名を登録して下さい。

それではシステムの再起動を行ないましょう。

9.3. システムの再起動

ソフトウェアのインストールがすべて完了しました。 ここでコンピューターを再起動しますが、いくつか注意しておいて下さい。 本書を通じて構築したシステムは最小限のものです。 これ以降にさまざまなことを繰り返していくには、機能が不足しているはずで。 もうしばらくは今までと同じように chroot 環境を利用して BLFS ブックからいくつかのパッケージをインストールしていきましょう。 その後のリブートにより新しい LFS システムを起動すれば、より一層、満足できる環境を得ることになるはずで。 以下はその際の構築例です。

- Lynx のようなテキストブラウザをインストールしておけば、仮想端末からでも BLFS ブックを簡単に参照しながらパッケージビルド作業を進めることができます。
- GPM パッケージをインストールすれば、仮想端末内にてコピーペースト操作を行うことができます。
- ネットワーク環境内にて固定 IP アドレスを用いることが適当ではない場合は、dhcpcd パッケージや dhcp パッケージのクライアントモジュール部分を利用することが考えられます。
- sudo をインストールすれば、ルートユーザー以外であっても、パッケージビルドとインストールを容易に行うことができます。
- 利用しやすい GUI 操作を通じてリモート接続を行いたい場合は openssh とその依存パッケージである openssl をインストールします。
- インターネット経由により簡単にファイル取得を行うために wget をインストールします。
- ハードディスクドライブに GUID パーティションテーブル (GPT) があるなら、gptfdisk または parted が有用なものとなります。
- 最後に、以下に示す種々の設定ファイルが適切であるかどうかを確認します。
 - `/etc/bashrc`
 - `/etc/dircolors`
 - `/etc/fstab`
 - `/etc/hosts`

- /etc/inputrc
- /etc/profile
- /etc/resolv.conf
- /etc/vimrc
- /root/.bash_profile
- /root/.bashrc
- /etc/sysconfig/network
- /etc/sysconfig/ifconfig.eth0

さあよろしいですか。新しくインストールした LFS システムの再起動を行いましょう。まずは chroot 環境から抜けます。

logout

仮想ファイルシステムをアンマウントします。

```
umount -v $LFS/dev/pts

if [ -h $LFS/dev/shm ]; then
    link=$(readlink $LFS/dev/shm)
    umount -v $LFS/$link
    unset link
else
    umount -v $LFS/dev/shm
fi

umount -v $LFS/dev
umount -v $LFS/proc
umount -v $LFS/sys
```

LFS ファイルシステムもアンマウントします。

```
umount -v $LFS
```

複数のパーティションを生成していた場合は、以下のようにして複数パーティションをアンマウントします。メインのパーティションのアンマウントはその後に行います。

```
umount -v $LFS/usr
umount -v $LFS/home
umount -v $LFS
```

以下のようにしてシステムを再起動します。

```
shutdown -r now
```

これまでの作業にて GRUB ブートローダーが設定されているはずですが、そのメニューには LFS 7.4 を起動するためのメニュー項目があるはずですが。

再起動が無事行われ LFS システムを使うことができます。必要に応じてさらなるソフトウェアをインストールして行ってください。

9.4. 今度は何?

本書をお読み頂き、ありがとうございます。本書が皆さんにとって有用なものとなり、システムの構築方法について十分に学んで頂けたものと思います。

LFS システムをインストールしたら「次は何を？」とお考えになるかもしれません。その質問に答えるために以下に各種の情報をまとめます。

- 保守

あらゆるソフトウェアにおいて、バグやセキュリティの情報は日々報告されています。LFS システムはソースコードからコンパイルしていますので、そのような報告を見逃さずにおくことは皆さんの仕事となります。そのような報告をオンラインで提供する情報の場がありますので、いくつかを以下に示しましょう。

- Freecode (<http://freecode.com/>)
Freecode は、システムにインストールされているパッケージの新しいバージョンが提供されると、それを（電子メールで）通知してくれます。
- CERT (Computer Emergency Response Team)
CERT にはメーリングリストがあり、数々のオペレーティングシステムやアプリケーションにおけるセキュリティ警告を公開しています。購読に関する情報は <http://www.us-cert.gov/cas/signup.html> を参照してください。
- バグトラック (Bugtraq)
バグトラックは、完全公開のコンピューターセキュリティに関するメーリングリストです。これは新たに発見されたセキュリティに関する問題を公開しています。また時には、その問題を解消するフィックス情報も提供してくれます。購読に関する情報は <http://www.securityfocus.com/archive> を参照してください。
- Beyond Linux From Scratch
Beyond Linux From Scratch ブックは、LFS ブックが取り扱うソフトウェアの範囲を超えて、数多くのソフトウェアをインストールする手順を示しています。BLFS プロジェクトは以下にあります。 <http://www.linuxfromscratch.org/blfs/>。
- LFS ヒント (LFS Hints)
LFS ヒントは有用なドキュメントを集めたものです。LFS コミュニティのボランティアによって投稿されたものです。それらのヒントは <http://www.linuxfromscratch.org/hints/list.html> にて参照することができます。
- メーリングリスト
皆さんにも参加して頂ける LFS メーリングリストがあります。何かの助けが必要になったり、最新の開発を行いたかったり、あるいはプロジェクトに貢献したいといった場合に、参加して頂くことができます。詳しくは 第1章 - メーリングリストを参照してください。
- Linux ドキュメントプロジェクト (The Linux Documentation Project; TLDP)
Linux ドキュメントプロジェクトの目指すことは Linux のドキュメントに関わる問題を共同で取り組むことです。TLDP ではハウツー (HOWTO)、ガイド、man ページを数多く提供しています。以下のサイトにあります。 <http://www.tldp.org/>

第IV部 付録

付録 A. 略語と用語



日本語訳情報

本節における日本語訳は、訳語が一般的に普及していると思われるものは、その訳語とカッコ書き内に原語を示します。逆に訳語に適当なものがないと思われるものは、無理に訳出せず原語だけを示すことにします。この判断はあくまで訳者によるものであるため、不適切・不十分な個所についてはご指摘ください。

ABI	アプリケーション バイナリ インターフェース (Application Binary Interface)
ALFS	Automated Linux From Scratch
API	アプリケーション プログラミング インターフェース (Application Programming Interface)
ASCII	American Standard Code for Information Interchange
BIOS	ベーシック インプット/アウトプット システム; バイオス (Basic Input/Output System)
BLFS	Beyond Linux From Scratch
BSD	Berkeley Software Distribution
chroot	ルートのチェンジ (change root)
CMOS	シーモス (Complementary Metal Oxide Semiconductor)
COS	Class Of Service
CPU	中央演算処理装置 (Central Processing Unit)
CRC	巡回冗長検査 (Cyclic Redundancy Check)
CVS	Concurrent Versions System
DHCP	ダイナミック ホスト コンフィギュレーション プロトコル (Dynamic Host Configuration Protocol)
DNS	ドメインネームサービス (Domain Name Service)
EGA	Enhanced Graphics Adapter
ELF	Executable and Linkable Format
EOF	ファイルの終端 (End of File)
EQN	式 (equation)
ext2	second extended file system
ext3	third extended file system
ext4	fourth extended file system
FAQ	よく尋ねられる質問 (Frequently Asked Questions)
FHS	ファイルシステム階層標準 (Filesystem Hierarchy Standard)
FIFO	ファーストイン、ファーストアウト (First-In, First Out)
FQDN	完全修飾ドメイン名 (Fully Qualified Domain Name)
FTP	ファイル転送プロトコル (File Transfer Protocol)
GB	ギガバイト (gigabytes)
GCC	GNU コンパイラー コレクション (GNU Compiler Collection)
GID	グループ識別子 (Group Identifier)
GMT	グリニッジ標準時 (Greenwich Mean Time)
HTML	ハイパーテキスト マークアップ 言語 (Hypertext Markup Language)
IDE	Integrated Drive Electronics
IEEE	Institute of Electrical and Electronic Engineers
IO	入出力 (Input/Output)
IP	インターネット プロトコル (Internet Protocol)
IPC	プロセス間通信 (Inter-Process Communication)
IRC	インターネット リレー チャット (Internet Relay Chat)
ISO	国際標準化機構 (International Organization for Standardization)

ISP	インターネット サービス プロバイダー (Internet Service Provider)
KB	キロバイト (kilobytes)
LED	発光ダイオード (Light Emitting Diode)
LFS	Linux From Scratch
LSB	Linux Standard Base
MB	メガバイト (megabytes)
MBR	マスター ブート レコード (Master Boot Record)
MD5	Message Digest 5
NIC	ネットワーク インターフェース カード (Network Interface Card)
NLS	Native Language Support
NNTP	Network News Transport Protocol
NPTL	Native POSIX Threading Library
OSS	Open Sound System
PCH	プリコンパイル済みヘッダー (Pre-Compiled Headers)
PCRE	Perl Compatible Regular Expression
PID	プロセス識別子 (Process Identifier)
PTY	仮想端末 (pseudo terminal)
QOS	クオリティ オブ サービス (Quality Of Service)
RAM	ランダム アクセス メモリ (Random Access Memory)
RPC	リモート プロシージャ コール (Remote Procedure Call)
RTC	リアルタイムクロック (Real Time Clock)
SBU	標準ビルド時間 (Standard Build Unit)
SCO	サンタ クルズ オペレーション社 (The Santa Cruz Operation)
SHA1	Secure-Hash Algorithm 1
TLDP	The Linux Documentation Project
TFTP	Trivial File Transfer Protocol
TLS	スレッド ローカル ストレージ (Thread-Local Storage)
UID	ユーザー識別子 (User Identifier)
umask	user file-creation mask
USB	ユニバーサル シリアル バス (Universal Serial Bus)
UTC	協定世界時 (Coordinated Universal Time)
UUID	汎用一意識別子 (Universally Unique Identifier)
VC	仮想コンソール (Virtual Console)
VGA	ビデオ グラフィックス アレー (Video Graphics Array)
VT	仮想端末 (Virtual Terminal)

付録 B. 謝辞

Linux From Scratch プロジェクトへ貢献して下さった以下の方々および組織団体に感謝致します。

- Gerard Beekmans <gerard@linuxfromscratch.org> - LFS 構築者、LFS プロジェクトリーダー
- Matthew Burgess <matthew@linuxfromscratch.org> - LFS プロジェクトリーダー、LFS テクニカルライター/編集者
- Bruce Dubbs <bdubbs@linuxfromscratch.org> - LFS リリース管理者、LFS テクニカルライター/編集者
- Jim Gifford <jim@linuxfromscratch.org> - CLFS プロジェクト共同リーダー
- Bryan Kadzban <bryan@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター
- Randy McMurphy <randy@linuxfromscratch.org> - BLFS プロジェクトリーダー、LFS 編集者
- DJ Lucas <dj@linuxfromscratch.org> - LFS、BLFS 編集者
- Ken Moffat <ken@linuxfromscratch.org> - LFS、CLFS 編集者
- Ryan Oliver <ryan@linuxfromscratch.org> - CLFS プロジェクト共同リーダー
- この他に数多くの方々にも協力頂きました。皆さまには LFS や BLFS などのメーリングリストにて、提案、ブック内容のテスト、バグ報告、作業指示、パッケージインストールの経験談などを通じて、本ブック製作にご協力頂きました。

翻訳者

- Manuel Canales Esparcia <macana@macana-es.com> - スペインの LFS 翻訳プロジェクト
- Johan Lenglet <johan@linuxfromscratch.org> - フランスの LFS 翻訳プロジェクト
- Anderson Lizardo <lizardo@linuxfromscratch.org> - ポルトガルの LFS 翻訳プロジェクト
- Thomas Reitelbach <tr@erdfunkstelle.de> - ドイツの LFS 翻訳プロジェクト

ミラー管理者

北米のミラー

- Scott Kveton <scott@osuosl.org> - lfs.oregonstate.edu ミラー
- William Astle <lost@l-w.net> - ca.linuxfromscratch.org ミラー
- Eujon Sellers <jpolen@rackspace.com> - lfs.introspeed.com ミラー
- Justin Knierim <tim@idge.net> - lfs-matrix.net ミラー

南米のミラー

- Manuel Canales Esparcia <manuel@linuxfromscratch.org> - lfsmirror.lfs-es.info ミラー
- Luis Falcon <Luis Falcon> - torredehanoi.org ミラー

ヨーロッパのミラー

- Guido Passet <guido@primerelay.net> - nl.linuxfromscratch.org ミラー
- Bastiaan Jacques <baafie@planet.nl> - lfs.pagefault.net ミラー
- Sven Cranshoff <sven.cranshoff@lineo.be> - lfs.lineo.be ミラー
- Scarlet Belgium - lfs.scarlet.be ミラー
- Sebastian Faulborn <info@aliensoft.org> - lfs.aliensoft.org ミラー
- Stuart Fox <stuart@dontuse.ms> - lfs.dontuse.ms ミラー
- Ralf Uhlemann <admin@realhost.de> - lfs.oss-mirror.org ミラー
- Antonin Sprinzl <Antonin.Sprinzl@tuwien.ac.at> - at.linuxfromscratch.org ミラー
- Fredrik Danerklint <fredan-lfs@fredan.org> - se.linuxfromscratch.org ミラー
- Franck <franck@linuxpourtous.com> - lfs.linuxpourtous.com ミラー
- Philippe Baqué <baque@cict.fr> - lfs.cict.fr ミラー
- Vitaly Chekasin <gyouja@pilgrims.ru> - lfs.pilgrims.ru ミラー

- Benjamin Heil <kontakt@wankoo.org> - lfs.wankoo.org ミラー

アジアのミラー

- Satit Phermsawang <satit@wbac.ac.th> - lfs.phayoune.org ミラー
- Shizunet Co.,Ltd. <info@shizu-net.jp> - lfs.mirror.shizu-net.jp ミラー
- Init World <http://www.initworld.com/> - lfs.initworld.com ミラー

オーストラリアのミラー

- Jason Andrade <jason@dstc.edu.au> - au.linuxfromscratch.org ミラー

以前のプロジェクトチームメンバー

- Christine Barczak <theladyskye@linuxfromscratch.org> - LFS ブック編集者
- Archaic <archaic@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター/編集者、HLFS プロジェクトリーダー、BLFS 編集者、ヒントプロジェクトとパッチプロジェクトの管理者
- Nathan Coulson <nathan@linuxfromscratch.org> - LFS-ブートスクリプトの管理者
- Timothy Bauscher
- Robert Briggs
- Ian Chilton
- Jeroen Coumans <jeroen@linuxfromscratch.org> - ウェブサイト開発者、FAQ 管理者
- Manuel Canales Esparcia <manuel@linuxfromscratch.org> - LFS/BLFS/HLFS の XML と XSL の管理者
- Alex Groenewoud - LFS テクニカルライター
- Marc Heerdink
- Jeremy Huntwork <jhuntwork@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター、LFS LiveCD 管理者
- Mark Hymers
- Seth W. Klein - FAQ 管理者
- Nicholas Leippe <nicholas@linuxfromscratch.org> - Wiki 管理者
- Anderson Lizardo <lizardo@linuxfromscratch.org> - ウェブサイトのバックエンドスクリプトの管理者
- Dan Nicholson <dnicholson@linuxfromscratch.org> - LFS/BLFS 編集者
- Alexander E. Patrakov <alexander@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター、LFS 国際化に関する編集者、LFS Live CD 管理者
- Simon Perreault
- Scot Mc Pherson <scot@linuxfromscratch.org> - LFS NNTP ゲートウェイ管理者
- Greg Schafer <gschafer@zip.com.au> - LFS テクニカルライター、次世代 64 ビット機での構築手法の開発者
- Jesse Tie-Ten-Queue - LFS テクニカルライター
- James Robertson <jwrober@linuxfromscratch.org> - Bugzilla 管理者
- Tushar Teredesai <tushar@linuxfromscratch.org> - BLFS ブック編集者、ヒントプロジェクト・パッチプロジェクトのリーダー
- Jeremy Utley <jeremy@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター、Bugzilla 管理者、LFS-ブートスクリプト管理者
- Zack Winkles <zwinkles@gmail.com> - LFS テクニカルライター

付録 C. パッケージの依存関係

LFS にて構築するパッケージはすべて、他のいくつかのパッケージに依存していて、それらがあって初めて適切にインストールができます。パッケージの中には互いに依存し合っているものもあります。つまり一つめのパッケージが二つめのパッケージに依存しており、二つめが実は一つめのパッケージにも依存しているような例です。こういった依存関係があることから LFS においてパッケージを構築する順番は非常に重要なものとなります。本節は LFS にて構築する各パッケージの依存関係を示すものです。

ビルドするパッケージの個々には、3種類あるいは4種類の依存関係を示しています。一つめは対象パッケージをコンパイルしてビルドするために必要となるパッケージです。二つめは一つめのものに加えて、テストスイートを実行するために必要となるパッケージです。三つめは対象パッケージをビルドし、最終的にインストールするために必要となるパッケージです。たいていの場合、それらのパッケージに含まれているスクリプトが、実行モジュールへのパスを固定的に取り扱っています。所定の順番どおりにパッケージのビルドを行わないと、最終的にインストールされるシステムにおいて、スクリプトの中に `/tools/bin/[実行モジュール]` といったパスが含まれてしまうことになりかねません。これは明らかに不適切なことです。

依存関係として4つめに示すのは任意のパッケージであり LFS では説明していないものです。しかし皆さんにとっては有用なパッケージであるはずですが。それらのパッケージは、さらに別のパッケージを必要としていたり、互いに依存し合っていることがあります。そういった依存関係があるため、それらをインストールする場合には、LFS をすべて仕上げた後に再度 LFS 内のパッケージを再構築する方法をお勧めします。再インストールに関しては、たいていは BLFS にて説明しています。

Autoconf

インストール依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Automake, Diffutils, Findutils, GCC, Libtool
事前インストールパッケージ:	Automake
任意依存パッケージ:	Emacs

Automake

インストール依存パッケージ:	Autoconf, Bash, Coreutils, Gettext, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Binutils, Bison, Bzip2, DejaGNU, Diffutils, Expect, Findutils, Flex, GCC, Gettext, Gzip, Libtool, Tar
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Bash

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Readline, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Shadow
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Xorg

Bc

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, and Readline
テストスイート依存パッケージ:	Gawk
事前インストールパッケージ:	Linux Kernel
任意依存パッケージ:	None

Binutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, File, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Perl, Sed, Texinfo, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	DejaGNU, Expect
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Bison

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, M4, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Findutils, Flex
事前インストールパッケージ:	Kbd, Tar
任意依存パッケージ:	Doxygen (テストスイート用)

Bzip2

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Make, Patch
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Check

インストール依存パッケージ:	GCC, Grep, Make, Sed, and Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	None
事前インストールパッケージ:	None
任意依存パッケージ:	None

Coreutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, GMP, Grep, Make, Patch, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, E2fsprogs, Findutils, Shadow, Util-linux
事前インストールパッケージ:	Bash, Diffutils, Findutils, Man-DB, Udev
任意依存パッケージ:	Perl Expect と IO:Tty モジュール (テストスイート用)

DejaGNU

インストール依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Diffutils, GCC, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Diffutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Perl
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Expect

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Tcl
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

E2fsprogs

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Gzip, Make, Sed, Texinfo, Util-linux
テストスイート依存パッケージ:	Procps-ng, Psmisc
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

File

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Findutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	DejaGNU, Diffutils, Expect
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Flex

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, M4, Make, Patch, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Bison (suppressed), Gawk
事前インストールパッケージ:	IPRoute2, Kbd, Man-DB
任意依存パッケージ:	なし

Gawk

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Gcc

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, GMP, Grep, M4, Make, MPC, MPFR, Patch, Perl, Sed, Tar, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	DejaGNU, Expect
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	CLooG-PPL, GNAT, PPL

GDBM

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Gettext

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Perl, Tcl
事前インストールパッケージ:	Automake
任意依存パッケージ:	なし

Glibc

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Gettext, Grep, Gzip, Linux API ヘッダー, Make, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	File
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

GMP

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, M4, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	MPFR, GCC
任意依存パッケージ:	なし

Grep

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Gawk
事前インストールパッケージ:	Man-DB
任意依存パッケージ:	Pcre, Xorg, CUPS

Groff

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Man-DB, Perl
任意依存パッケージ:	GPL Ghostscript

GRUB

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Diffutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed, Texinfo, Xz
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Gzip

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Less
事前インストールパッケージ:	Man-DB
任意依存パッケージ:	なし

Iana-Etc

インストール依存パッケージ:	Coreutils, Gawk, Make
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Perl
任意依存パッケージ:	なし

Inetutils

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Sed, Texinfo, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Tar
任意依存パッケージ:	なし

IProute2

インストール依存パッケージ:	Bash, Bison, Coreutils, Flex, GCC, Glibc, Make, Linux API ヘッダー
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Kbd

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Flex, GCC, Gettext, Glibc, Gzip, Make, Patch, Sed
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Kmod

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Flex, GCC, Gettext, Glibc, Gzip, Make, Sed, Xz-Uutils, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Udev
任意依存パッケージ:	なし

Less

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Gzip
任意依存パッケージ:	Pcre

Libpipeline

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Check
事前インストールパッケージ:	Man-DB
任意依存パッケージ:	None

Libtool

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Findutils
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Linux Kernel

インストール依存パッケージ:	Bash, Bc, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, GCC, Glibc, Grep, Gzip, Kmod, Make, Ncurses, Perl, Sed
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

M4

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils
事前インストールパッケージ:	Autoconf, Bison
任意依存パッケージ:	libsigsegv

Make

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Perl, Procps-ng
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Man-DB

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bzip2, Coreutils, Flex, GCC, GDBM, Gettext, Glibc, Grep, Groff, Gzip, Less, Libpipeline, Make, Sed, Xz
テストスイート依存パッケージ:	動かすためには Man-DB テストスイートパッケージが必要
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Man-Pages

インストール依存パッケージ:	Bash, Coreutils, Make
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

MPC

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, GMP, Make, MPFR, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	GCC
任意依存パッケージ:	なし

MPFR

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, GMP, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	GCC
任意依存パッケージ:	なし

Ncurses

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Bash, GRUB, Inetutils, Less, Procps-ng, Psmisc, Readline, Texinfo, Util-linux, Vim
任意依存パッケージ:	なし

Patch

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Ed

Perl

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, GDBM, Glibc, Grep, Groff, Make, Sed, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	Iana-Etc, Procps-ng
事前インストールパッケージ:	Autoconf
任意依存パッケージ:	なし

Pkg-config

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Popt, Sed
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	Kmod
任意依存パッケージ:	なし

Popt

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Sed
事前インストールパッケージ:	Pkg-config
任意依存パッケージ:	なし

Procps-ng

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Ncurses
テストスイート依存パッケージ:	DejaGNU
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Psmisc

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Readline

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Bash
任意依存パッケージ:	なし

Sed

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Diffutils, Gawk
事前インストールパッケージ:	E2fsprogs, File, Libtool, Shadow
任意依存パッケージ:	Cracklib

Shadow

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	Coreutils
任意依存パッケージ:	Acl, Attr, Cracklib, PAM

Syslogd

インストール依存パッケージ:	Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Patch
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Sysvinit

インストール依存パッケージ:	Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Tar

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Bison, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Inetutils, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ:	Autoconf, Diffutils, Findutils, Gawk, Gzip
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Tcl

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Texinfo

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Sed
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Udev

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Kmod, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Glib, Pci-Uutils, Python, Systemd, USB-Uutils

Util-linux

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed, Zlib
テストスイート依存パッケージ:	テストスイートはありません
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	なし

Vim

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	なし
任意依存パッケージ:	Xorg, GTK+2, LessTif, Python, Tcl, Ruby, GPM

Xz

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Make
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	GRUB, Kmod, Man-DB, Udev
任意依存パッケージ:	なし

Zlib

インストール依存パッケージ:	Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ:	なし
事前インストールパッケージ:	File, Kmod, Perl, Util-linux
任意依存パッケージ:	なし

付録 D. ブートスクリプトと sysconfig スクリプト version-20130821

本付録に示すスクリプトは、それらが取容されているディレクトリごとに列記します。/etc/rc.d/init.d、/etc/sysconfig、/etc/sysconfig/network-devices、/etc/sysconfig/network-devices/servicesの順です。各ディレクトリにおいてのスクリプトは呼び出し順に説明します。

D.1. /etc/rc.d/init.d/rc

rc スクリプトは initによって呼び出される最初のスクリプトであり、ブート処理を初期化します。

```
#!/bin/bash
#####
# Begin rc
#
# Description : Main Run Level Control Script
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               : DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

. /lib/lsb/init-functions

print_error_msg()
{
    log_failure_msg
    # $i is set when called
    MSG="FAILURE:\n\nYou should not be reading this error message.\n\n"
    MSG="${MSG}It means that an unforeseen error took place in\n"
    MSG="${MSG}${i},\n"
    MSG="${MSG}which exited with a return value of ${error_value}.\n"

    MSG="${MSG}If you're able to track this error down to a bug in one of\n"
    MSG="${MSG}the files provided by the files provided by\n"
    MSG="${MSG}the ${DISTRO_MINI} book, please be so kind to inform us at\n"
    MSG="${MSG}${DISTRO_CONTACT}.\n"
    log_failure_msg "${MSG}"

    log_info_msg "Press Enter to continue..."
    wait_for_user
}

check_script_status()
{
    # $i is set when called
    if [ ! -f ${i} ]; then
        log_warning_msg "${i} is not a valid symlink."
        continue
    fi

    if [ ! -x ${i} ]; then
        log_warning_msg "${i} is not executable, skipping."
        continue
    fi
}
```

```

run()
{
    if [ -z $interactive ]; then
        ${1} ${2}
        return $?
    fi

    while true; do
        read -p "Run ${1} ${2} (Yes/no/continue)? " -n 1 runit
        echo

        case ${runit} in
            c | C)
                interactive=""
                ${i} ${2}
                ret=${?}
                break;
                ;;

            n | N)
                return 0
                ;;

            y | Y)
                ${i} ${2}
                ret=${?}
                break
                ;;

            esac
        done

        return $ret
    }

# Read any local settings/overrides
[ -r /etc/sysconfig/rc.site ] && source /etc/sysconfig/rc.site

DISTRO=${DISTRO:-"Linux From Scratch"}
DISTRO_CONTACT=${DISTRO_CONTACT:-"lfs-dev@linuxfromscratch.org (Registration required)"}
DISTRO_MINI=${DISTRO_MINI:-"LFS"}
IPROMPT=${IPROMPT:-"no"}

# These 3 signals will not cause our script to exit
trap "" INT QUIT TSTP

[ "${1}" != "" ] && runlevel=${1}

if [ "${runlevel}" == "" ]; then
    echo "Usage: ${0} <runlevel>" >&2
    exit 1
fi

previous=${PREVLEVEL}
[ "${previous}" == "" ] && previous=N

if [ ! -d /etc/rc.d/rc${runlevel}.d ]; then
    log_info_msg "/etc/rc.d/rc${runlevel}.d does not exist.\n"
    exit 1
fi

```

```

if [ "$runlevel" == "6" -o "$runlevel" == "0" ]; then IPROMPT="no"; fi

# Note: In ${LOGLEVEL:-7}, it is ':' 'dash' '7', not minus 7
if [ "$runlevel" == "S" ]; then
    [ -r /etc/sysconfig/console ] && source /etc/sysconfig/console
    dmesg -n "${LOGLEVEL:-7}"
fi

if [ "${IPROMPT}" == "yes" -a "$runlevel" == "S" ]; then
    # The total length of the distro welcome string, without escape codes
    wlen=${wlen:-$(echo "Welcome to ${DISTRO}" | wc -c )}
    welcome_message=${welcome_message:-"Welcome to ${INFO}${DISTRO}${NORMAL}"}

    # The total length of the interactive string, without escape codes
    ilen=${ilen:-$(echo "Press 'I' to enter interactive startup" | wc -c )}
    i_message=${i_message:-"Press '${FAILURE}I${NORMAL}' to enter interactive startup"}

    # dcol and icol are spaces before the message to center the message
    # on screen. itime is the amount of wait time for the user to press a key
    wcol=$(( ( ${COLUMNS} - ${wlen} ) / 2 ))
    icol=$(( ( ${COLUMNS} - ${ilen} ) / 2 ))
    itime=${itime:-"3"}

    echo -e "\n\n"
    echo -e "\\033[${wcol}G${welcome_message}"
    echo -e "\\033[${icol}G${i_message}${NORMAL}"
    echo ""
    read -t "${itime}" -n 1 interactive 2>&1 > /dev/null
fi

# Make lower case
[ "${interactive}" == "I" ] && interactive="i"
[ "${interactive}" != "i" ] && interactive=""

# Read the state file if it exists from runlevel S
[ -r /var/run/interactive ] && source /var/run/interactive

# Attempt to stop all services started by the previous runlevel,
# and killed in this runlevel
if [ "${previous}" != "N" ]; then
    for i in $(ls -v /etc/rc.d/rc${runlevel}.d/K* 2> /dev/null)
    do
        check_script_status

        suffix=${i#/etc/rc.d/rc${runlevel}.d/K[0-9][0-9]}
        prev_start=/etc/rc.d/rc${previous}.d/S[0-9][0-9]$suffix
        sysinit_start=/etc/rc.d/rcS.d/S[0-9][0-9]$suffix

        if [ "${runlevel}" != "0" -a "${runlevel}" != "6" ]; then
            if [ ! -f ${prev_start} -a ! -f ${sysinit_start} ]; then
                MSG="WARNING:\n\n${i} can't be "
                MSG="${MSG}executed because it was not "
                MSG="${MSG}not started in the previous "
                MSG="${MSG}runlevel (${previous})."
                log_warning_msg "$MSG"
                continue
            fi
        fi
    done
fi

run ${i} stop

```

```

    error_value=${?}

    if [ "${error_value}" != "0" ]; then print_error_msg; fi
done
fi

if [ "${previous}" == "N" ]; then export IN_BOOT=1; fi

if [ "$runlevel" == "6" -a -n "${FASTBOOT}" ]; then
    touch /fastboot
fi

# Start all functions in this runlevel
for i in $( ls -v /etc/rc.d/rc${runlevel}.d/S* 2> /dev/null )
do
    if [ "${previous}" != "N" ]; then
        suffix=${i#/etc/rc.d/rc${runlevel}.d/S[0-9][0-9]}
        stop=/etc/rc.d/rc${runlevel}.d/K[0-9][0-9]$suffix
        prev_start=/etc/rc.d/rc${previous}.d/S[0-9][0-9]$suffix

        [ -f ${prev_start} -a ! -f ${stop} ] && continue
    fi

    check_script_status

    case ${runlevel} in
        0|6)
            run ${i} stop
            ;;
        *)
            run ${i} start
            ;;
    esac

    error_value=${?}

    if [ "${error_value}" != "0" ]; then print_error_msg; fi
done

# Store interactive variable on switch from runlevel S and remove if not
if [ "${runlevel}" == "S" -a "${interactive}" == "i" ]; then
    echo "interactive=\"i\"" > /var/run/interactive
else
    rm -f /var/run/interactive 2> /dev/null
fi

# Copy the boot log on initial boot only
if [ "${previous}" == "N" -a "${runlevel}" != "S" ]; then
    cat /run/var/bootlog >> /var/log/boot.log

    # Mark the end of boot
    echo "-----" >> /var/log/boot.log

    # Remove the temporary file
    rm -f /run/var/bootlog 2> /dev/null
fi

# End rc

```

D.2. /lib/lsb/init-functions

```
#!/bin/sh
#####
#
# Begin /lib/lsb/init-funtions
#
# Description : Run Level Control Functions
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#              : DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
# Notes       : With code based on Matthias Benkmann's simpleinit-msb
#              http://winterdrache.de/linux/newboot/index.html
#
#              The file should be located in /lib/lsb
#
#####

## Environmental setup
# Setup default values for environment
umask 022
export PATH="/bin:/usr/bin:/sbin:/usr/sbin"

## Screen Dimensions
# Find current screen size
if [ -z "${COLUMNS}" ]; then
    COLUMNS=$(stty size)
    COLUMNS=${COLUMNS##* }
fi

# When using remote connections, such as a serial port, stty size returns 0
if [ "${COLUMNS}" = "0" ]; then
    COLUMNS=80
fi

## Measurements for positioning result messages
COL=$(( ${COLUMNS} - 8 ))
WCOL=$(( ${COL} - 2 ))

## Set Cursor Position Commands, used via echo
SET_COL="\033[${COL}G"      # at the $COL char
SET_WCOL="\033[${WCOL}G"   # at the $WCOL char
CURS_UP="\033[1A\033[0G"   # Up one line, at the 0'th char
CURS_ZERO="\033[0G"

## Set color commands, used via echo
# Please consult `man console_codes` for more information
# under the "ECMA-48 Set Graphics Rendition" section
#
# Warning: when switching from a 8bit to a 9bit font,
# the linux console will reinterpret the bold (1;) to
# the top 256 glyphs of the 9bit font. This does
# not affect framebuffer consoles

NORMAL="\033[0;39m"        # Standard console grey
SUCCESS="\033[1;32m"       # Success is green
```



```

WARNING="\033[1;33m"      # Warnings are yellow
FAILURE="\033[1;31m"      # Failures are red
INFO="\033[1;36m"        # Information is light cyan
BRACKET="\033[1;34m"     # Brackets are blue

# Use a colored prefix
BMPREFIX=" "
SUCCESS_PREFIX="${SUCCESS} * ${NORMAL}"
FAILURE_PREFIX="${FAILURE}*****${NORMAL}"
WARNING_PREFIX="${WARNING} *** ${NORMAL}"

SUCCESS_SUFFIX="${BRACKET}[$ {SUCCESS} OK ${BRACKET}]${NORMAL}"
FAILURE_SUFFIX="${BRACKET}[$ {FAILURE} FAIL ${BRACKET}]${NORMAL}"
WARNING_SUFFIX="${BRACKET}[$ {WARNING} WARN ${BRACKET}]${NORMAL}"

BOOTLOG=/run/var/bootlog
KILLDELAY=3

# Set any user specified environment variables e.g. HEADLESS
[ -r /etc/sysconfig/rc.site ] && . /etc/sysconfig/rc.site

#####
# start_daemon()
# Usage: start_daemon [-f] [-n nicelevel] [-p pidfile] pathname [args...]
#
# Purpose: This runs the specified program as a daemon
#
# Inputs: -f: (force) run the program even if it is already running.
#         -n nicelevel: specify a nice level. See 'man nice(1)'.
#         -p pidfile: use the specified file to determine PIDs.
#         pathname: the complete path to the specified program
#         args: additional arguments passed to the program (pathname)
#
# Return values (as defined by LSB exit codes):
#     0 - program is running or service is OK
#     1 - generic or unspecified error
#     2 - invalid or excessive argument(s)
#     5 - program is not installed
#####
start_daemon()
{
    local force=""
    local nice="0"
    local pidfile=""
    local pidlist=""
    local retval=""

    # Process arguments
    while true
    do
        case "${1}" in

            -f)
                force="1"
                shift 1
                ;;

            -n)
                nice="${2}"
                shift 2
                ;;

```

```

    -p)
        pidfile="${2}"
        shift 2
        ;;

    -*)
        return 2
        ;;

    *)
        program="${1}"
        break
        ;;
esac
done

# Check for a valid program
if [ ! -e "${program}" ]; then return 5; fi

# Execute
if [ -z "${force}" ]; then
    if [ -z "${pidfile}" ]; then
        # Determine the pid by discovery
        pidlist=`pidofproc "${1}"`
        retval="${?}"
    else
        # The PID file contains the needed PIDs
        # Note that by LSB requirement, the path must be given to pidofproc,
        # however, it is not used by the current implementation or standard.
        pidlist=`pidofproc -p "${pidfile}" "${1}"`
        retval="${?}"
    fi
fi

# Return a value ONLY
# It is the init script's (or distribution's functions) responsibility
# to log messages!
case "${retval}" in

    0)
        # Program is already running correctly, this is a
        # successful start.
        return 0
        ;;

    1)
        # Program is not running, but an invalid pid file exists
        # remove the pid file and continue
        rm -f "${pidfile}"
        ;;

    3)
        # Program is not running and no pidfile exists
        # do nothing here, let start_deamon continue.
        ;;

    *)
        # Others as returned by status values shall not be interpreted
        # and returned as an unspecified error.
        return 1
        ;;

```

```

    esac
fi

# Do the start!
nice -n "${nice}" "${@"}
}

#####
# killproc()
# Usage: killproc [-p pidfile] pathname [signal]
#
# Purpose: Send control signals to running processes
#
# Inputs: -p pidfile, uses the specified pidfile
#         pathname, pathname to the specified program
#         signal, send this signal to pathname
#
# Return values (as defined by LSB exit codes):
#     0 - program (pathname) has stopped/is already stopped or a
#         running program has been sent specified signal and stopped
#         successfully
#     1 - generic or unspecified error
#     2 - invalid or excessive argument(s)
#     5 - program is not installed
#     7 - program is not running and a signal was supplied
#####
killproc()
{
    local pidfile
    local program
    local prefix
    local progname
    local signal="-TERM"
    local fallback="-KILL"
    local nosig
    local pidlist
    local retval
    local pid
    local delay="30"
    local piddead
    local dtime

# Process arguments
while true; do
    case "${1}" in
        -p)
            pidfile="${2}"
            shift 2
            ;;

        *)
            program="${1}"
            if [ -n "${2}" ]; then
                signal="${2}"
                fallback=""
            else
                nosig=1
            fi

# Error on additional arguments
            if [ -n "${3}" ]; then

```

```

                return 2
            else
                break
            fi
        ;;
    esac
done

# Check for a valid program
if [ ! -e "${program}" ]; then return 5; fi

# Check for a valid signal
check_signal "${signal}"
if [ "${?}" -ne "0" ]; then return 2; fi

# Get a list of pids
if [ -z "${pidfile}" ]; then
    # determine the pid by discovery
    pidlist=`pidofproc "${1}"`
    retval="${?}"
else
    # The PID file contains the needed PIDs
    # Note that by LSB requirement, the path must be given to pidofproc,
    # however, it is not used by the current implementation or standard.
    pidlist=`pidofproc -p "${pidfile}" "${1}"`
    retval="${?}"
fi

# Return a value ONLY
# It is the init script's (or distribution's functions) responsibility
# to log messages!
case "${retval}" in

    0)
        # Program is running correctly
        # Do nothing here, let killproc continue.
        ;;

    1)
        # Program is not running, but an invalid pid file exists
        # Remove the pid file.
        rm -f "${pidfile}"

        # This is only a success if no signal was passed.
        if [ -n "${nosig}" ]; then
            return 0
        else
            return 7
        fi
        ;;

    3)
        # Program is not running and no pidfile exists
        # This is only a success if no signal was passed.
        if [ -n "${nosig}" ]; then
            return 0
        else
            return 7
        fi
        ;;

```

```

*)
    # Others as returned by status values shall not be interpreted
    # and returned as an unspecified error.
    return 1
    ;;
esac

# Perform different actions for exit signals and control signals
check_sig_type "${signal}"

if [ "${?}" -eq "0" ]; then # Signal is used to terminate the program

    # Account for empty pidlist (pid file still exists and no
    # signal was given)
    if [ "${pidlist}" != "" ]; then

        # Kill the list of pids
        for pid in ${pidlist}; do

            kill -0 "${pid}" 2> /dev/null

            if [ "${?}" -ne "0" ]; then
                # Process is dead, continue to next and assume all is well
                continue
            else
                kill "${signal}" "${pid}" 2> /dev/null

                # Wait up to ${delay}/10 seconds to for "${pid}" to
                # terminate in 10ths of a second

                while [ "${delay}" -ne "0" ]; do
                    kill -0 "${pid}" 2> /dev/null || piddead="1"
                    if [ "${piddead}" = "1" ]; then break; fi
                    sleep 0.1
                    delay=$(( ${delay} - 1 ))
                done

                # If a fallback is set, and program is still running, then
                # use the fallback
                if [ -n "${fallback}" -a "${piddead}" != "1" ]; then
                    kill "${fallback}" "${pid}" 2> /dev/null
                    sleep 1
                    # Check again, and fail if still running
                    kill -0 "${pid}" 2> /dev/null && return 1
                fi
            fi
        done
    fi

done
fi

# Check for and remove stale PID files.
if [ -z "${pidfile}" ]; then
    # Find the basename of $program
    prefix=`echo "${program}" | sed 's/[^/]*$//'`
    proname=`echo "${program}" | sed "s@${prefix}@@"`

    if [ -e "/var/run/${proname}.pid" ]; then
        rm -f "/var/run/${proname}.pid" 2> /dev/null
    fi
else
    if [ -e "${pidfile}" ]; then rm -f "${pidfile}" 2> /dev/null; fi
fi

```

```

# For signals that do not expect a program to exit, simply
# let kill do it's job, and evaluate kills return for value

else # check_sig_type - signal is not used to terminate program
    for pid in ${pidlist}; do
        kill "${signal}" "${pid}"
        if [ "${?}" -ne "0" ]; then return 1; fi
    done
fi
}

#####
# pidofproc() #
# Usage: pidofproc [-p pidfile] pathname #
# # #
# Purpose: This function returns one or more pid(s) for a particular daemon #
# # #
# Inputs: -p pidfile, use the specified pidfile instead of pidof #
#         pathname, path to the specified program #
# # #
# Return values (as defined by LSB status codes): #
#         0 - Success (PIDs to stdout) #
#         1 - Program is dead, PID file still exists (remaining PIDs output) #
#         3 - Program is not running (no output) #
#####
pidofproc()
{
    local pidfile
    local program
    local prefix
    local progname
    local pidlist
    local lpids
    local exitstatus="0"

    # Process arguments
    while true; do
        case "${1}" in

            -p)
                pidfile="${2}"
                shift 2
                ;;

            *)
                program="${1}"
                if [ -n "${2}" ]; then
                    # Too many arguments
                    # Since this is status, return unknown
                    return 4
                else
                    break
                fi
                ;;
        esac
    done

    # If a PID file is not specified, try and find one.
    if [ -z "${pidfile}" ]; then
        # Get the program's basename

```

```

prefix=`echo "${program}" | sed 's/[^/]*$//'`

if [ -z "${prefix}" ]; then
    procname="${program}"
else
    procname=`echo "${program}" | sed "s@${prefix}@@"`
fi

# If a PID file exists with that name, assume that is it.
if [ -e "/var/run/${procname}.pid" ]; then
    pidfile="/var/run/${procname}.pid"
fi

# If a PID file is set and exists, use it.
if [ -n "${pidfile}" -a -e "${pidfile}" ]; then

    # Use the value in the first line of the pidfile
    pidlist=`/bin/head -n1 "${pidfile}"`
    # This can optionally be written as 'sed 1q' to replace 'head -n1'
    # should LFS move /bin/head to /usr/bin/head
else
    # Use pidof
    pidlist=`pidof "${program}"`
fi

# Figure out if all listed PIDs are running.
for pid in ${pidlist}; do
    kill -0 ${pid} 2> /dev/null

    if [ "${?}" -eq "0" ]; then
        lpids="${lpids}${pid} "
    else
        exitstatus="1"
    fi
done

if [ -z "${lpids}" -a ! -f "${pidfile}" ]; then
    return 3
else
    echo "${lpids}"
    return "${exitstatus}"
fi
}

#####
# statusproc() #
# Usage: statusproc [-p pidfile] pathname #
# # #
# Purpose: This function prints the status of a particular daemon to stdout #
# # #
# Inputs: -p pidfile, use the specified pidfile instead of pidof #
#         pathname, path to the specified program #
# # #
# Return values: #
#     0 - Status printed #
#     1 - Input error. The daemon to check was not specified. #
#####
statusproc()
{
    local pidfile

```

```

local pidlist

if [ "${#}" = "0" ]; then
    echo "Usage: statusproc [-p pidfile] {program}"
    exit 1
fi

# Process arguments
while true; do
    case "${1}" in

        -p)
            pidfile="${2}"
            shift 2
            ;;

        *)
            if [ -n "${2}" ]; then
                echo "Too many arguments"
                return 1
            else
                break
            fi
            ;;

    esac
done

if [ -n "${pidfile}" ]; then
    pidlist=`pidofproc -p "${pidfile}" @$`
else
    pidlist=`pidofproc @$`
fi

# Trim trailing blanks
pidlist=`echo "${pidlist}" | sed -r 's/ +$//`

base="${1##*/}"

if [ -n "${pidlist}" ]; then
    /bin/echo -e "${INFO}${base} is running with Process" \
        "ID(s) ${pidlist}.${NORMAL}"
else
    if [ -n "${base}" -a -e "/var/run/${base}.pid" ]; then
        /bin/echo -e "${WARNING}${1} is not running but" \
            "/var/run/${base}.pid exists.${NORMAL}"
    else
        if [ -n "${pidfile}" -a -e "${pidfile}" ]; then
            /bin/echo -e "${WARNING}${1} is not running" \
                "but ${pidfile} exists.${NORMAL}"
        else
            /bin/echo -e "${INFO}${1} is not running.${NORMAL}"
        fi
    fi
fi
}

#####
# timespec()                                     #
#                                               #
# Purpose: An internal utility function to format a timestamp   #
#         a boot log file. Sets the STAMP variable.             #
#####

```



```

# Return value: Not used
#####
timespec()
{
    STAMP="$(echo `date +%b %d %T %:z` `hostname`)"
    return 0
}

#####
# log_success_msg()
# Usage: log_success_msg ["message"]
#
# Purpose: Print a successful status message to the screen and
#          a boot log file.
#
# Inputs:  $@ - Message
#
# Return values: Not used
#####
log_success_msg()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
    /bin/echo -e "${CURS_ZERO}${SUCCESS_PREFIX}${SET_COL}${SUCCESS_SUFFIX}"

    # Strip non-printable characters from log file
    logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\033[^a-zA-Z]*.//g'`

    timespec
    /bin/echo -e "${STAMP} ${logmessage} OK" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

log_success_msg2()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
    /bin/echo -e "${CURS_ZERO}${SUCCESS_PREFIX}${SET_COL}${SUCCESS_SUFFIX}"

    echo " OK" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

#####
# log_failure_msg()
# Usage: log_failure_msg ["message"]
#
# Purpose: Print a failure status message to the screen and
#          a boot log file.
#
# Inputs:  $@ - Message
#
# Return values: Not used
#####
log_failure_msg()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
    /bin/echo -e "${CURS_ZERO}${FAILURE_PREFIX}${SET_COL}${FAILURE_SUFFIX}"

    # Strip non-printable characters from log file

```

```

timespec
logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\033[^a-zA-Z]*./g'`
/bin/echo -e "${STAMP} ${logmessage} FAIL" >> ${BOOTLOG}

return 0
}

log_failure_msg2()
{
/bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
/bin/echo -e "${CURS_ZERO}${FAILURE_PREFIX}${SET_COL}${FAILURE_SUFFIX}"

echo "FAIL" >> ${BOOTLOG}

return 0
}

#####
# log_warning_msg()                                     #
# Usage: log_warning_msg ["message"]                   #
#                                                       #
# Purpose: Print a warning status message to the screen and #
#           a boot log file.                             #
#                                                       #
# Return values: Not used                               #
#####
log_warning_msg()
{
/bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
/bin/echo -e "${CURS_ZERO}${WARNING_PREFIX}${SET_COL}${WARNING_SUFFIX}"

# Strip non-printable characters from log file
logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\033[^a-zA-Z]*./g'`
timespec
/bin/echo -e "${STAMP} ${logmessage} WARN" >> ${BOOTLOG}

return 0
}

#####
# log_info_msg()                                       #
# Usage: log_info_msg message                           #
#                                                       #
# Purpose: Print an information message to the screen and #
#           a boot log file. Does not print a trailing #
#           newline character.                           #
#                                                       #
# Return values: Not used                               #
#####
log_info_msg()
{
/bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"

# Strip non-printable characters from log file
logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\033[^a-zA-Z]*./g'`
timespec
/bin/echo -n -e "${STAMP} ${logmessage}" >> ${BOOTLOG}

return 0
}

```

```

log_info_msg2()
{
    /bin/echo -n -e "${@}"

    # Strip non-printable characters from log file
    logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\033[^a-zA-Z]*.//g`
    /bin/echo -n -e "${logmessage}" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

#####
# evaluate_retval()                                     #
# Usage: Evaluate a return value and print success or failyure as appropriate #
#                                                                 #
# Purpose: Convenience function to terminate an info message    #
#                                                                 #
# Return values: Not used                                       #
#####
evaluate_retval()
{
    local error_value="${?}"

    if [ ${error_value} = 0 ]; then
        log_success_msg2
    else
        log_failure_msg2
    fi
}

#####
# check_signal()                                       #
# Usage: check_signal [ -{signal} | {signal} ]         #
#                                                                 #
# Purpose: Check for a valid signal. This is not defined by any LSB draft, #
#         however, it is required to check the signals to determine if the #
#         signals chosen are invalid arguments to the other functions.    #
#                                                                 #
# Inputs: Accepts a single string value in the form or -{signal} or {signal} #
#                                                                 #
# Return values:                                           #
#     0 - Success (signal is valid)                      #
#     1 - Signal is not valid                            #
#####
check_signal()
{
    local valsig

    # Add error handling for invalid signals
    valsig="-ALRM -HUP -INT -KILL -PIPE -POLL -PROF -TERM -USR1 -USR2"
    valsig="${valsig} -VTALRM -STKFLT -PWR -WINCH -CHLD -URG -TSTP -TTIN"
    valsig="${valsig} -TTOU -STOP -CONT -ABRT -FPE -ILL -QUIT -SEGV -TRAP"
    valsig="${valsig} -SYS -EMT -BUS -XCPU -XFSZ -0 -1 -2 -3 -4 -5 -6 -8 -9"
    valsig="${valsig} -11 -13 -14 -15"

    echo "${valsig}" | grep -- " ${1} " > /dev/null

    if [ "${?}" -eq 0 ]; then
        return 0
    else
        return 1
    fi
}

```

```

fi
}

#####
# check_sig_type()
# Usage: check_signal [ -{signal} | {signal} ]
#
# Purpose: Check if signal is a program termination signal or a control signal
#           This is not defined by any LSB draft, however, it is required to
#           check the signals to determine if they are intended to end a
#           program or simply to control it.
#
# Inputs: Accepts a single string value in the form or -{signal} or {signal}
#
# Return values:
#           0 - Signal is used for program termination
#           1 - Signal is used for program control
#####
check_sig_type()
{
    local valsig

    # The list of termination signals (limited to generally used items)
    valsig="-ALRM -INT -KILL -TERM -PWR -STOP -ABRT -QUIT -2 -3 -6 -9 -14 -15"

    echo "${valsig}" | grep -- " ${1} " > /dev/null

    if [ "${?}" -eq "0" ]; then
        return 0
    else
        return 1
    fi
}

#####
# wait_for_user()
#
# Purpose: Wait for the user to respond if not a headless system
#
#####
wait_for_user()
{
    # Wait for the user by default
    [ "${HEADLESS=0}" = "0" ] && read ENTER
    return 0
}

#####
# is_true()
#
# Purpose: Utility to test if a variable is true | yes | 1
#
#####
is_true()
{
    [ "$1" = "1" ] || [ "$1" = "yes" ] || [ "$1" = "true" ] || [ "$1" = "y" ] ||
    [ "$1" = "t" ]
}

# End /lib/lsb/init-functions

```

D.3. /etc/rc.d/init.d/functions

```
#!/bin/sh
#####
# Begin boot functions
#
# Description : Run Level Control Functions
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
# Notes        : With code based on Matthias Benkmann's simpleinit-msb
#                http://winterdrache.de/linux/newboot/index.html
#
#                This file is only present for backward BLFS compatibility
#
#####

## Environmental setup
# Setup default values for environment
umask 022
export PATH="/bin:/usr/bin:/sbin:/usr/sbin"

# Signal sent to running processes to refresh their configuration
RELOADSIG="HUP"

# Number of seconds between STOPSIG and FALLBACK when stopping processes
KILLDELAY="3"

## Screen Dimensions
# Find current screen size
if [ -z "${COLUMNS}" ]; then
    COLUMNS=$(stty size)
    COLUMNS=${COLUMNS##* }
fi

# When using remote connections, such as a serial port, stty size returns 0
if [ "${COLUMNS}" = "0" ]; then
    COLUMNS=80
fi

## Measurements for positioning result messages
COL=$(( ${COLUMNS} - 8 ))
WCOL=$(( ${COL} - 2 ))

## Provide an echo that supports -e and -n
# If formatting is needed, $ECHO should be used
case "`echo -e -n test`" in
    -[en]*)
        ECHO=/bin/echo
        ;;
    *)
        ECHO=echo
        ;;
esac

## Set Cursor Position Commands, used via $ECHO
SET_COL="\033[${COL}G"      # at the $COL char
```

```

SET_WCOL="\033[${WCOL}G"    # at the $WCOL char
CURS_UP="\033[1A\033[0G"   # Up one line, at the 0'th char

## Set color commands, used via $ECHO
# Please consult `man console_codes for more information
# under the "ECMA-48 Set Graphics Rendition" section
#
# Warning: when switching from a 8bit to a 9bit font,
# the linux console will reinterpret the bold (1;) to
# the top 256 glyphs of the 9bit font. This does
# not affect framebuffer consoles
NORMAL="\033[0;39m"        # Standard console grey
SUCCESS="\033[1;32m"       # Success is green
WARNING="\033[1;33m"       # Warnings are yellow
FAILURE="\033[1;31m"       # Failures are red
INFO="\033[1;36m"         # Information is light cyan
BRACKET="\033[1;34m"       # Brackets are blue

STRING_LENGTH="0"         # the length of the current message

#####
# Function - boot_mesg()
#
# Purpose:      Sending information from bootup scripts to the console
#
# Inputs:       $1 is the message
#               $2 is the colorcode for the console
#
# Outputs:      Standard Output
#
# Dependencies: - sed for parsing strings.
#               - grep for counting string length.
#
# Todo:
#####
boot_mesg()
{
    local ECHOPARM=""

    while true
    do
        case "${1}" in
            -n)
                ECHOPARM=" -n "
                shift 1
                ;;
            -*)
                echo "Unknown Option: ${1}"
                return 1
                ;;
            *)
                break
                ;;
        esac
    done

    ## Figure out the length of what is to be printed to be used
    ## for warning messages.
    STRING_LENGTH=$(( ${#1} + 1 ))

    # Print the message to the screen

```

```

    ${ECHO} ${ECHOPARM} -e "${2}${1}"

    # Log the message
    [ -d /run/var ] || return
    ${ECHO} ${ECHOPARM} -e "${2}${1}" >> /run/var/bootlog
}

boot_mesg_flush()
{
    # Reset STRING_LENGTH for next message
    STRING_LENGTH="0"
}

echo_ok()
{
    ${ECHO} -n -e "${CURS_UP}${SET_COL}${BRACKET}[$SUCCESS] OK ${BRACKET}]"
    ${ECHO} -e "${NORMAL}"
    boot_mesg_flush

    [ -d /run/var ] || return
    ${ECHO} -e "[ OK ]" >> /run/var/bootlog
}

echo_failure()
{
    ${ECHO} -n -e "${CURS_UP}${SET_COL}${BRACKET}[$FAILURE] FAIL ${BRACKET}]"
    ${ECHO} -e "${NORMAL}"
    boot_mesg_flush

    [ -d /run/var ] || return
    ${ECHO} -e "[ FAIL]" >> /run/var/bootlog
}

echo_warning()
{
    ${ECHO} -n -e "${CURS_UP}${SET_COL}${BRACKET}[$WARNING] WARN ${BRACKET}]"
    ${ECHO} -e "${NORMAL}"
    boot_mesg_flush

    [ -d /run/var ] || return
    ${ECHO} -e "[ WARN ]" >> /run/var/bootlog
}

echo_skipped()
{
    ${ECHO} -n -e "${CURS_UP}${SET_COL}${BRACKET}[$WARNING] SKIP ${BRACKET}]"
    ${ECHO} -e "${NORMAL}"
    boot_mesg_flush

    [ -d /run/var ] || return
    ${ECHO} -e " [ SKIP ]" >> /run/var/bootlog
}

wait_for_user()
{
    # Wait for the user by default
    [ "${HEADLESS=0}" = "0" ] && read ENTER
}

evaluate_retval()
{

```

```

error_value="${?}"

if [ ${error_value} = 0 ]; then
    echo_ok
else
    echo_failure
fi

# This prevents the 'An Unexpected Error Has Occurred' from trivial
# errors.
return 0
}

print_status()
{
    if [ "${#}" = "0" ]; then
        echo "Usage: ${0} {success|warning|failure}"
        return 1
    fi

    case "${1}" in

        success)
            echo_ok
            ;;

        warning)
            # Leave this extra case in because old scripts
            # may call it this way.
            case "${2}" in
                running)
                    ${ECHO} -e -n "${CURS_UP}"
                    ${ECHO} -e -n "\\033[${STRING_LENGTH}G    "
                    boot_mesg "Already running." ${WARNING}
                    echo_warning
                    ;;
                not_running)
                    ${ECHO} -e -n "${CURS_UP}"
                    ${ECHO} -e -n "\\033[${STRING_LENGTH}G    "
                    boot_mesg "Not running." ${WARNING}
                    echo_warning
                    ;;
                not_available)
                    ${ECHO} -e -n "${CURS_UP}"
                    ${ECHO} -e -n "\\033[${STRING_LENGTH}G    "
                    boot_mesg "Not available." ${WARNING}
                    echo_warning
                    ;;
                *)
                    # This is how it is supposed to
                    # be called
                    echo_warning
                    ;;
            esac
            ;;

        failure)
            echo_failure
            ;;

    esac
}

esac

```



```

}

reloadproc()
{
    local pidfile=""
    local failure=0

    while true
    do
        case "${1}" in
            -p)
                pidfile="${2}"
                shift 2
                ;;
            -*)
                log_failure_msg "Unknown Option: ${1}"
                return 2
                ;;
            *)
                break
                ;;
        esac
    done

    if [ "${#}" -lt "1" ]; then
        log_failure_msg "Usage: reloadproc [-p pidfile] pathname"
        return 2
    fi

    # This will ensure compatibility with previous LFS Bootscripts
    if [ -n "${PIDFILE}" ]; then
        pidfile="${PIDFILE}"
    fi

    # Is the process running?
    if [ -z "${pidfile}" ]; then
        pidofproc -s "${1}"
    else
        pidofproc -s -p "${pidfile}" "${1}"
    fi

    # Warn about stale pid file
    if [ "$?" = 1 ]; then
        boot_mesg -n "Removing stale pid file: ${pidfile}. " ${WARNING}
        rm -f "${pidfile}"
    fi

    if [ -n "${pidlist}" ]; then
        for pid in ${pidlist}
        do
            kill -"${RELOADSIG}" "${pid}" || failure="1"
        done

        (exit ${failure})
        evaluate_retval
    else
        boot_mesg "Process ${1} not running." ${WARNING}
        echo_warning
    fi
}

```

```

}

statusproc()
{
    local pidfile=""
    local base=""
    local ret=""

    while true
    do
        case "${1}" in
            -p)
                pidfile="${2}"
                shift 2
                ;;
            -*)
                log_failure_msg "Unknown Option: ${1}"
                return 2
                ;;
            *)
                break
                ;;
        esac
    done

    if [ "${#}" != "1" ]; then
        shift 1
        log_failure_msg "Usage: statusproc [-p pidfile] pathname"
        return 2
    fi

    # Get the process basename
    base="${1##*/}"

    # This will ensure compatibility with previous LFS Bootscripts
    if [ -n "${PIDFILE}" ]; then
        pidfile="${PIDFILE}"
    fi

    # Is the process running?
    if [ -z "${pidfile}" ]; then
        pidofproc -s "${1}"
    else
        pidofproc -s -p "${pidfile}" "${1}"
    fi

    # Store the return status
    ret=$?

    if [ -n "${pidlist}" ]; then
        ${ECHO} -e "${INFO}${base} is running with Process"\
            "ID(s) ${pidlist}.${NORMAL}"
    else
        if [ -n "${base}" -a -e "/var/run/${base}.pid" ]; then
            ${ECHO} -e "${WARNING}${1} is not running but"\
                "/var/run/${base}.pid exists.${NORMAL}"
        else
            if [ -n "${pidfile}" -a -e "${pidfile}" ]; then
                ${ECHO} -e "${WARNING}${1} is not running"\
                    "but ${pidfile} exists.${NORMAL}"
            else

```

```

        ${ECHO} -e "${INFO}${1} is not running.${NORMAL}"
    fi
fi
fi

# Return the status from pidofproc
return $ret
}

# The below functions are documented in the LSB-generic 2.1.0
#####
# Function - pidofproc [-s] [-p pidfile] pathname
#
# Purpose: This function returns one or more pid(s) for a particular daemon
#
# Inputs: -p pidfile, use the specified pidfile instead of pidof
#         pathname, path to the specified program
#
# Outputs: return 0 - Success, pid's in stdout
#          return 1 - Program is dead, pidfile exists
#          return 2 - Invalid or excessive number of arguments,
#                  warning in stdout
#          return 3 - Program is not running
#
# Dependencies: pidof, echo, head
#
# Todo: Remove dependency on head
#       This replaces getpids
#       Test changes to pidof
#
#####
pidofproc()
{
    local pidfile=""
    local lpids=""
    local silent=""
    pidlist=""
    while true
    do
        case "${1}" in
            -p)
                pidfile="${2}"
                shift 2
                ;;
            -s)
                # Added for legacy operation of getpids
                # eliminates several '> /dev/null'
                silent="1"
                shift 1
                ;;
            -*)
                log_failure_msg "Unknown Option: ${1}"
                return 2
                ;;
            *)
                break
                ;;
        esac
    done
}

```

```

if [ "${#}" != "1" ]; then
    shift 1
    log_failure_msg "Usage: pidofproc [-s] [-p pidfile] pathname"
    return 2
fi

if [ -n "${pidfile}" ]; then
    if [ ! -r "${pidfile}" ]; then
        return 3 # Program is not running
    fi

    lpids=`head -n 1 ${pidfile}`
    for pid in ${lpids}
    do
        if [ "${pid}" -ne "$$" -a "${pid}" -ne "${PPID}" ]; then
            kill -0 "${pid}" 2>/dev/null &&
            pidlist="${pidlist} ${pid}"
        fi

        if [ "${silent}" != "1" ]; then
            echo "${pidlist}"
        fi

        test -z "${pidlist}" &&
        # Program is dead, pidfile exists
        return 1
        # else
        return 0
    done

else
    pidlist=`pidof -o $$ -o $PPID -x "$1"`
    if [ "${silent}" != "1" ]; then
        echo "${pidlist}"
    fi

    # Get provide correct running status
    if [ -n "${pidlist}" ]; then
        return 0
    else
        return 3
    fi

fi

if [ "$?" != "0" ]; then
    return 3 # Program is not running
fi
}

*****
# Function - loadproc [-f] [-n nicelevel] [-p pidfile] pathname [args]
#
# Purpose: This runs the specified program as a daemon
#
# Inputs: -f, run the program even if it is already running
#         -n nicelevel, specifies a nice level. See nice(1).
#         -p pidfile, uses the specified pidfile
#         pathname, pathname to the specified program
#         args, arguments to pass to specified program

```

```

#
# Outputs: return 0 - Success
#           return 2 - Invalid of excessive number of arguments,
#                   warning in stdout
#           return 4 - Program or service status is unknown
#
# Dependencies: nice, rm
#
# Todo: LSB says this should be called start_daemon
#       LSB does not say that it should call evaluate_retval
#       It checks for PIDFILE, which is deprecated.
#       Will be removed after BLFS 6.0
#       loadproc returns 0 if program is already running, not LSB compliant
#
#*****
loadproc()
{
    local pidfile=""
    local forcestart=""
    local nicelevel="10"

# This will ensure compatibility with previous LFS Bootscripts
    if [ -n "${PIDFILE}" ]; then
        pidfile="${PIDFILE}"
    fi

    while true
    do
        case "${1}" in
            -f)
                forcestart="1"
                shift 1
                ;;
            -n)
                nicelevel="${2}"
                shift 2
                ;;
            -p)
                pidfile="${2}"
                shift 2
                ;;
            -*)
                log_failure_msg "Unknown Option: ${1}"
                return 2 #invalid or excess argument(s)
                ;;
            *)
                break
                ;;
        esac
    done

    if [ "${#}" = "0" ]; then
        log_failure_msg "Usage: loadproc [-f] [-n nicelevel] [-p pidfile] pathname [args]"
        return 2 #invalid or excess argument(s)
    fi

    if [ -z "${forcestart}" ]; then
        if [ -z "${pidfile}" ]; then
            pidofproc -s "${1}"
        else
            pidofproc -s -p "${pidfile}" "${1}"
        fi
    fi
}

```

```

fi

case "${?}" in
    0)
        log_warning_msg "Unable to continue: ${1} is running"
        return 0 # 4
        ;;
    1)
        boot_mesg "Removing stale pid file: ${pidfile}" ${WARNING}
        rm -f "${pidfile}"
        ;;
    3)
        ;;
    *)
        log_failure_msg "Unknown error code from pidofproc: ${?}"
        return 4
        ;;
esac
fi

nice -n "${nicelevel}" "${@"}
evaluate_retval # This is "Probably" not LSB compliant,
#               but required to be compatible with older bootscripts
return 0
}

#####
# Function - killproc [-p pidfile] pathname [signal]
#
# Purpose:
#
# Inputs: -p pidfile, uses the specified pidfile
#         pathname, pathname to the specified program
#         signal, send this signal to pathname
#
# Outputs: return 0 - Success
#          return 2 - Invalid of excessive number of arguments,
#                  warning in stdout
#          return 4 - Unknown Status
#
# Dependencies: kill, rm
#
# Todo: LSB does not say that it should call evaluate_retval
#       It checks for PIDFILE, which is deprecated.
#       Will be removed after BLFS 6.0
#
#####
killproc()
{
    local pidfile=""
    local killsig=TERM # default signal is SIGTERM
    pidlist=""

    # This will ensure compatibility with previous LFS Bootscripts
    if [ -n "${PIDFILE}" ]; then
        pidfile="${PIDFILE}"
    fi

    while true
    do
        case "${1}" in

```

```

    -p)
        pidfile="${2}"
        shift 2
        ;;
    -*)
        log_failure_msg "Unknown Option: ${1}"
        return 2
        ;;
    *)
        break
        ;;
esac
done

if [ "${#}" = "2" ]; then
    killsig="${2}"
elif [ "${#}" != "1" ]; then
    shift 2
    log_failure_msg "Usage: killproc [-p pidfile] pathname [signal]"
    return 2
fi

# Is the process running?
if [ -z "${pidfile}" ]; then
    pidofproc -s "${1}"
else
    pidofproc -s -p "${pidfile}" "${1}"
fi

# Remove stale pidfile
if [ "$?" = 1 ]; then
    boot_mesg "Removing stale pid file: ${pidfile}." ${WARNING}
    rm -f "${pidfile}"
fi

# If running, send the signal
if [ -n "${pidlist}" ]; then
for pid in ${pidlist}
do
    kill -${killsig} ${pid} 2>/dev/null

    # Wait up to 3 seconds, for ${pid} to terminate
    case "${killsig}" in
        TERM|SIGTERM|KILL|SIGKILL)
            # sleep in 1/10ths of seconds and
            # multiply KILLDELAY by 10
            local dtime="${KILLDELAY}0"
            while [ "${dtime}" != "0" ]
            do
                kill -0 ${pid} 2>/dev/null || break
                sleep 0.1
                dtime=$(( ${dtime} - 1))
            done
            # If ${pid} is still running, kill it
            kill -0 ${pid} 2>/dev/null && kill -KILL ${pid} 2>/dev/null
            ;;
    esac
done

# Check if the process is still running if we tried to stop it
case "${killsig}" in

```

```

TERM|SIGTERM|KILL|SIGKILL)
    if [ -z "${pidfile}" ]; then
        pidofproc -s "${1}"
    else
        pidofproc -s -p "${pidfile}" "${1}"
    fi

    # Program was terminated
    if [ "$?" != "0" ]; then
        # Remove the pidfile if necessary
        if [ -f "${pidfile}" ]; then
            rm -f "${pidfile}"
        fi
        echo_ok
        return 0
    else # Program is still running
        echo_failure
        return 4 # Unknown Status
    fi
;;
*)
    # Just see if the kill returned successfully
    evaluate_retval
    ;;
esac
else # process not running
print_status warning not_running
fi
}

#####
# Function - log_success_msg "message"
#
# Purpose: Print a success message
#
# Inputs: $@ - Message
#
# Outputs: Text output to screen
#
# Dependencies: echo
#
# Todo: logging
#
#####
log_success_msg()
{
    ${ECHO} -n -e "${BOOTMSG_PREFIX}${@}"
    ${ECHO} -e "${SET_COL}" "${BRACKET}" [" "${SUCCESS}" " OK " "${BRACKET}" " ] "${NORMAL}"

    [ -d /run/var ] || return 0
    ${ECHO} -n -e "${@} [ OK ]" >> /run/var/bootlog
    return 0
}

#####
# Function - log_failure_msg "message"
#
# Purpose: Print a failure message
#
# Inputs: $@ - Message

```



```

#
# Outputs: Text output to screen
#
# Dependencies: echo
#
# Todo: logging
#
#####
log_failure_msg() {
    ${ECHO} -n -e "${BOOTMSG_PREFIX}${@"}
    ${ECHO} -e "${SET_COL}" "${BRACKET}" [" "${FAILURE}" " FAIL "${BRACKET}" ] "${NORMAL}"

    [ -d /run/var ] || return 0
    ${ECHO} -e "${@" [ FAIL ]" >> /run/var/bootlog
    return 0
}

#####
# Function - log_warning_msg "message"
#
# Purpose: print a warning message
#
# Inputs: @$ - Message
#
# Outputs: Text output to screen
#
# Dependencies: echo
#
# Todo: logging
#
#####
log_warning_msg() {
    ${ECHO} -n -e "${BOOTMSG_PREFIX}${@"}
    ${ECHO} -e "${SET_COL}" "${BRACKET}" [" "${WARNING}" " WARN "${BRACKET}" ] "${NORMAL}"

    [ -d /run/var ] || return 0
    ${ECHO} -e "${@" [ WARN ]" >> /run/var/bootlog
    return 0
}

#####
# Function - log_skipped_msg "message"
#
# Purpose: print a message that the script was skipped
#
# Inputs: @$ - Message
#
# Outputs: Text output to screen
#
# Dependencies: echo
#
# Todo: logging
#
#####
log_skipped_msg() {
    ${ECHO} -n -e "${BOOTMSG_PREFIX}${@"}
    ${ECHO} -e "${SET_COL}" "${BRACKET}" [" "${WARNING}" " SKIP "${BRACKET}" ] "${NORMAL}"

    [ -d /run/var ] || return 0
    ${ECHO} -e "${@" [ SKIP ]" >> /run/var/bootlog
    return 0
}

```

```
}
# End boot functions
```

D.4. /etc/rc.d/init.d/mountvirtfs

```
#!/bin/sh
#####
# Begin mountvirtfs
#
# Description : Mount proc, sysfs, and run
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          mountvirtfs
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:     S
# Default-Stop:
# Short-Description: Mounts /sys and /proc virtual (kernel) filesystems.
#                   Mounts /run (tmpfs) and /dev (devtmpfs).
# Description:       Mounts /sys and /proc virtual (kernel) filesystems.
#                   Mounts /run (tmpfs) and /dev (devtmpfs).
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        # Make sure /run/var is available before logging any messages
        if ! mountpoint /run >/dev/null; then
            mount /run || failed=1
        fi

        mkdir -p /run/var /run/lock /run/shm
        chmod 1777 /run/shm

        log_info_msg "Mounting virtual file systems: ${INFO}/run"

        if ! mountpoint /proc >/dev/null; then
            log_info_msg2 " ${INFO}/proc"
            mount -o nosuid,noexec,nodev /proc || failed=1
        fi

        if ! mountpoint /sys >/dev/null; then
            log_info_msg2 " ${INFO}/sys"
            mount -o nosuid,noexec,nodev /sys || failed=1
        fi

        if ! mountpoint /dev >/dev/null; then
```

```

    log_info_msg2 " ${INFO}/dev"
    mount -o mode=0755,nosuid /dev || failed=1
fi

# Copy devices that Udev >= 155 doesn't handle to /dev
cp -a /lib/udev/devices/* /dev

ln -sf /run/shm /dev/shm

(exit ${failed})
evaluate_retval
exit $failed
;;

*)
echo "Usage: ${0} {start}"
exit 1
;;
esac

# End mountvirtfs

```

D.5. /etc/rc.d/init.d/modules

```

#!/bin/sh
#####
# Begin modules
#
# Description : Module auto-loading script
#
# Authors      : Zack Winkles
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          modules
# Required-Start:    mountvirtfs sysctl
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:     S
# Default-Stop:
# Short-Description: Loads required modules.
# Description:       Loads modules listed in /etc/sysconfig/modules.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

# Assure that the kernel has module support.
[ -e /proc/ksyms -o -e /proc/modules ] || exit 0

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        # Exit if there's no modules file or there are no
        # valid entries

```

```

[ -r /etc/sysconfig/modules ] || exit 0
egrep -qv '^(#|)' /etc/sysconfig/modules || exit 0

log_info_msg "Loading modules:"

# Only try to load modules if the user has actually given us
# some modules to load.

while read module args; do

    # Ignore comments and blank lines.
    case "$module" in
        ""|"#"*) continue ;;
    esac

    # Attempt to load the module, passing any arguments provided.
    modprobe ${module} ${args} >/dev/null

    # Print the module name if successful, otherwise take note.
    if [ $? -eq 0 ]; then
        log_info_msg2 " ${module}"
    else
        failedmod="${failedmod} ${module}"
    fi
done < /etc/sysconfig/modules

# Print a message about successfully loaded modules on the correct line.
log_success_msg2

# Print a failure message with a list of any modules that
# may have failed to load.
if [ -n "${failedmod}" ]; then
    log_failure_msg "Failed to load modules:${failedmod}"
    exit 1
fi
;;

*)
echo "Usage: ${0} {start}"
exit 1
;;
esac

exit 0

# End modules

```

D.6. /etc/rc.d/init.d/udev

```

#!/bin/sh
#####
# Begin udev
#
# Description : Udev cold-plugging script
#
# Authors      : Zack Winkles, Alexander E. Patrakov
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0

```

```

#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          udev $time
# Required-Start:
# Should-Start:     modules
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:    S
# Default-Stop:
# Short-Description: Populates /dev with device nodes.
# Description:      Mounts a tempfs on /dev and starts the udevd daemon.
#                   Device nodes are created as defined by udev.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        log_info_msg "Populating /dev with device nodes... "
        if ! grep -q '[:space:]sysfs' /proc/mounts; then
            log_failure_msg2
            msg="FAILURE:\n\nUnable to create "
            msg="${msg}devices without a SysFS filesystem\n\n"
            msg="${msg}After you press Enter, this system "
            msg="${msg}will be halted and powered off.\n\n"
            log_info_msg "$msg"
            log_info_msg "Press Enter to continue..."
            wait_for_user
            /etc/rc.d/init.d/halt stop
        fi

        # Udev handles uevents itself, so we don't need to have
        # the kernel call out to any binary in response to them
        echo > /proc/sys/kernel/hotplug

        # Start the udev daemon to continually watch for, and act on,
        # uevents
        /lib/udev/udev --daemon

        # Now traverse /sys in order to "coldplug" devices that have
        # already been discovered
        /sbin/udevadm trigger --action=add      --type=subsystems
        /sbin/udevadm trigger --action=add      --type=devices
        /sbin/udevadm trigger --action=change  --type=devices

        # Now wait for udevd to process the uevents we triggered
        if ! is_true "$OMIT_UDEV_SETTLE"; then
            /sbin/udevadm settle
        fi

        # If any LVM based partitions are on the system, ensure they
        # are activated so they can be used.
        if [ -x /sbin/vgchange ]; then /sbin/vgchange -a y >/dev/null; fi

        log_success_msg2
        ;;
*)

```

```

    echo "Usage ${0} {start}"
    exit 1
    ;;
esac

exit 0

# End udev

```

D.7. /etc/rc.d/init.d/swap

```

#!/bin/sh
#####
# Begin swap
#
# Description : Swap Control Script
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          swap
# Required-Start:    udev
# Should-Start:      modules
# Required-Stop:     localnet
# Should-Stop:
# Default-Start:     S
# Default-Stop:      0 6
# Short-Description: Mounts and unmounts swap partitions.
# Description:       Mounts and unmounts swap partitions defined in
#                   /etc/fstab.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        log_info_msg "Activating all swap files/partitions..."
        swapon -a
        evaluate_retval
        ;;

    stop)
        log_info_msg "Deactivating all swap files/partitions..."
        swapoff -a
        evaluate_retval
        ;;

    restart)
        ${0} stop
        sleep 1
        ${0} start
        ;;

```

```

status)
    log_success_msg "Retrieving swap status."
    swapon -s
    ;;

*)
    echo "Usage: ${0} {start|stop|restart|status}"
    exit 1
    ;;
esac

exit 0

# End swap

```

D.8. /etc/rc.d/init.d/setclock

```

#!/bin/sh
#####
# Begin setclock
#
# Description : Setting Linux Clock
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#              : DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:
# Required-Start:
#   Should-Start:      modules
# Required-Stop:
#   Should-Stop:       $syslog
# Default-Start:      S
# Default-Stop:
# Short-Description:  Stores and restores time from the hardware clock
# Description:         On boot, system time is obtained from hwclock. The
#                       hardware clock can also be set on shutdown.
# X-LFS-Provided-By:  LFS BLFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

[ -r /etc/sysconfig/clock ] && . /etc/sysconfig/clock

case "${UTC}" in
    yes|true|1)
        CLOCKPARAMS="${CLOCKPARAMS} --utc"
        ;;
    no|false|0)
        CLOCKPARAMS="${CLOCKPARAMS} --localtime"
        ;;
esac

```

```

case ${1} in
    start)
        hwclock --hctosys ${CLOCKPARAMS} >/dev/null
        ;;

    stop)
        log_info_msg "Setting hardware clock..."
        hwclock --systohc ${CLOCKPARAMS} >/dev/null
        evaluate_retval
        ;;

    *)
        echo "Usage: ${0} {start|stop}"
        exit 1
        ;;

esac

exit 0

```

D.9. /etc/rc.d/init.d/checkfs

```

#!/bin/sh
#####
# Begin checkfs
#
# Description : File System Check
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               A. Luebke - luebke@users.sourceforge.net
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
# Based on checkfs script from LFS-3.1 and earlier.
#
# From man fsck
# 0      - No errors
# 1      - File system errors corrected
# 2      - System should be rebooted
# 4      - File system errors left uncorrected
# 8      - Operational error
# 16     - Usage or syntax error
# 32     - Fsck canceled by user request
# 128    - Shared library error
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          checkfs
# Required-Start:    udev swap $time
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:     S
# Default-Stop:
# Short-Description: Checks local filesystems before mounting.
# Description:       Checks local filesystems before mounting.

```



```

# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        if [ -f /fastboot ]; then
            msg="/fastboot found, will omit "
            msg="${msg} file system checks as requested.\n"
            log_info_msg "${msg}"
            exit 0
        fi

        log_info_msg "Mounting root file system in read-only mode... "
        mount -n -o remount,ro / >/dev/null

        if [ ${?} != 0 ]; then
            log_failure_msg2
            msg="\n\nCannot check root "
            msg="${msg}filesystem because it could not be mounted "
            msg="${msg}in read-only mode.\n\n"
            msg="${msg}After you press Enter, this system will be "
            msg="${msg}halted and powered off.\n\n"
            log_failure_msg "${msg}"

            log_info_msg "Press Enter to continue..."
            wait_for_user
            /etc/rc.d/init.d/halt stop
        else
            log_success_msg2
        fi

        if [ -f /forcefsck ]; then
            msg="\n/forcefsck found, forcing file"
            msg="${msg} system checks as requested."
            log_success_msg "${msg}"
            options="-f"
        else
            options=""
        fi

        log_info_msg "Checking file systems..."
        # Note: -a option used to be -p; but this fails e.g. on fsck.minix
        if is_true "$VERBOSE_FSCK"; then
            fsck ${options} -a -A -C -T
        else
            fsck ${options} -a -A -C -T >/dev/null
        fi

        error_value=${?}

        if [ "${error_value}" = 0 ]; then
            log_success_msg2
        fi

        if [ "${error_value}" = 1 ]; then
            msg="\nWARNING:\n\nFile system errors "
            msg="${msg}were found and have been corrected.\n"
            msg="${msg}You may want to double-check that "
            msg="${msg}everything was fixed properly."
        fi
    ;;
)

```

```

    log_warning_msg "$msg"
fi

if [ "${error_value}" = 2 -o "${error_value}" = 3 ]; then
    msg="\nWARNING:\n\nFile system errors "
    msg="${msg}were found and have been been "
    msg="${msg}corrected, but the nature of the "
    msg="${msg}errors require this system to be rebooted.\n\n"
    msg="${msg}After you press enter, "
    msg="${msg}this system will be rebooted\n\n"
    log_failure_msg "$msg"

    log_info_msg "Press Enter to continue..."
    wait_for_user
    reboot -f
fi

if [ "${error_value}" -gt 3 -a "${error_value}" -lt 16 ]; then
    msg="\nFAILURE:\n\nFile system errors "
    msg="${msg}were encountered that could not be "
    msg="${msg}fixed automatically. This system "
    msg="${msg}cannot continue to boot and will "
    msg="${msg}therefore be halted until those "
    msg="${msg}errors are fixed manually by a "
    msg="${msg}System Administrator.\n\n"
    msg="${msg}After you press Enter, this system will be "
    msg="${msg}halted and powered off.\n\n"
    log_failure_msg "$msg"

    log_info_msg "Press Enter to continue..."
    wait_for_user
    /etc/rc.d/init.d/halt stop
fi

if [ "${error_value}" -ge 16 ]; then
    msg="\nFAILURE:\n\nUnexpected Failure "
    msg="${msg}running fsck. Exited with error "
    msg="${msg} code: ${error_value}."
    log_failure_msg $msg
    exit ${error_value}
fi

exit 0
;;
*)
echo "Usage: ${0} {start}"
exit 1
;;
esac

# End checkfs

```

D.10. /etc/rc.d/init.d/mountfs

```

#!/bin/sh
#####
# Begin mountfs
#
# Description : File System Mount Script
#

```

```

# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#              : DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          $local_fs
# Required-Start:    udev checkfs
# Should-Start:
# Required-Stop:     swap
# Should-Stop:
# Default-Start:     S
# Default-Stop:      0 6
# Short-Description: Mounts/unmounts local filesystems defined in /etc/fstab.
# Description:       Remounts root filesystem read/write and mounts all
#                    remaining local filesystems defined in /etc/fstab on
#                    start. Remounts root filesystem read-only and unmounts
#                    remaining filesystems on stop.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        log_info_msg "Remounting root file system in read-write mode..."
        mount -o remount,rw / >/dev/null
        evaluate_retval

        # Remove fsck-related file system watermarks.
        rm -f /fastboot /forcefsck

        # This will mount all filesystems that do not have _netdev in
        # their option list. _netdev denotes a network filesystem.

        log_info_msg "Mounting remaining file systems..."
        mount -a -O no_netdev >/dev/null
        evaluate_retval
        exit $failed
        ;;

    stop)
        # Don't unmount virtual file systems like /run
        log_info_msg "Unmounting all other currently mounted file systems..."
        umount -a -d -r -t notmpfs,nosysfs,nodevtmpfs,noproc,nodevpts >/dev/null
        evaluate_retval

        # Make sure / is mounted read only (umount bug)
        mount -o remount,ro /

        # Make all LVM volume groups unavailable, if appropriate
        # This fails if swap or / are on an LVM partition
        #if [ -x /sbin/vgchange ]; then /sbin/vgchange -an > /dev/null; fi
        ;;

    *)
        echo "Usage: ${0} {start|stop}"
        exit 1

```

```

;;
esac

# End mountfs

```

D.11. /etc/rc.d/init.d/udev_retry

```

#!/bin/sh
#####
# Begin udev_retry
#
# Description : Udev cold-plugging script (retry)
#
# Authors      : Alexander E. Patrakov
#                DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#                Bryan Kadzban -
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:      udev_retry
# Required-Start: udev
# Should-Start:  $local_fs
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start: S
# Default-Stop:
# Short-Description: Replays failed uevents and creates additional devices.
# Description:      Replays any failed uevents that were skipped due to
#                    slow hardware initialization, and creates those needed
#                    device nodes
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        log_info_msg "Retrying failed uevents, if any..."

        # As of udev-186, the --run option is no longer valid
        #rundir=$(/sbin/udevadm info --run)
        rundir=/run/udev
        # From Debian: "copy the rules generated before / was mounted
        # read-write":

        for file in ${rundir}/tmp-rules--*; do
            dest=${file##*tmp-rules--}
            [ "$dest" = '*' ] && break
            cat $file >> /etc/udev/rules.d/$dest
            rm -f $file
        done

        # Re-trigger the uevents that may have failed,
        # in hope they will succeed now
        /bin/sed -e 's/#.*$// ' /etc/sysconfig/udev_retry | /bin/grep -v '^$' | \
        while read line ; do

```

```

        for subsystem in $line ; do
            /sbin/udevadm trigger --subsystem-match=$subsystem --action=add
        done
    done

    # Now wait for udevd to process the uevents we triggered
    if ! is_true "$OMIT_UDEV_RETRY_SETTLE"; then
        /sbin/udevadm settle
    fi

    evaluate_retval
    ;;

*)
    echo "Usage ${0} {start}"
    exit 1
    ;;
esac

exit 0

# End udev_retry

```

D.12. /etc/rc.d/init.d/cleanfs

```

#!/bin/sh
#####
# Begin cleanfs
#
# Description : Clean file system
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          cleanfs
# Required-Start:    $local_fs
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:     S
# Default-Stop:
# Short-Description: Cleans temporary directories early in the boot process.
# Description:       Cleans temporary directories /var/run, /var/lock, and
#                   optionally, /tmp. cleanfs also creates /var/run/utmp
#                   and any files defined in /etc/sysconfig/createfiles.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

# Function to create files/directory on boot.
create_files()
{
    # Input to file descriptor 9 and output to stdin (redirection)

```

```

exec 9>&0 < /etc/sysconfig/createfiles

while read name type perm usr grp dtype maj min junk
do
    # Ignore comments and blank lines.
    case "${name}" in
        ""|\#*) continue ;;
    esac

    # Ignore existing files.
    if [ ! -e "${name}" ]; then
        # Create stuff based on its type.
        case "${type}" in
            dir)
                mkdir "${name}"
                ;;
            file)
                :> "${name}"
                ;;
            dev)
                case "${dtype}" in
                    char)
                        mknod "${name}" c ${maj} ${min}
                        ;;
                    block)
                        mknod "${name}" b ${maj} ${min}
                        ;;
                    pipe)
                        mknod "${name}" p
                        ;;
                    *)
                        log_warning_msg "\nUnknown device type: ${dtype}"
                        ;;
                esac
                ;;
            *)
                log_warning_msg "\nUnknown type: ${type}"
                continue
                ;;
        esac

        # Set up the permissions, too.
        chown ${usr}:${grp} "${name}"
        chmod ${perm} "${name}"
    fi
done

# Close file descriptor 9 (end redirection)
exec 0>&9 9>&-
return 0
}

case "${1}" in
    start)
        log_info_msg "Cleaning file systems:"

        if [ "${SKIPTMPCLEAN}" = "" ]; then
            log_info_msg2 " /tmp"
            cd /tmp &&
            find . -xdev -mindepth 1 ! -name lost+found -delete || failed=1
        fi

```

```

> /var/run/utmp

if grep -q '^utmp:' /etc/group ; then
    chmod 664 /var/run/utmp
    chgrp utmp /var/run/utmp
fi

(exit ${failed})
evaluate_retval

if egrep -qv '^(#|$)' /etc/sysconfig/createfiles 2>/dev/null; then
    log_info_msg "Creating files and directories... "
    create_files    # Always returns 0
    evaluate_retval
fi

exit $failed
;;
*)
echo "Usage: ${0} {start}"
exit 1
;;
esac

# End cleanfs

```

D.13. /etc/rc.d/init.d/console

```

#!/bin/sh
#####
# Begin console
#
# Description : Sets keymap and screen font
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#                Alexander E. Patrakov
#                DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          console
# Required-Start:
# Should-Start:     $local_fs
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:    S
# Default-Stop:
# Short-Description: Sets up a localised console.
# Description:       Sets up fonts and language settings for the user's
#                    local as defined by /etc/sysconfig/console.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

```

```

# Native English speakers probably don't have /etc/sysconfig/console at all
[ -r /etc/sysconfig/console ] && . /etc/sysconfig/console

is_true()
{
    [ "$1" = "1" ] || [ "$1" = "yes" ] || [ "$1" = "true" ]
}

failed=0

case "${1}" in
    start)
        # See if we need to do anything
        if [ -z "${KEYMAP}" ] && [ -z "${KEYMAP_CORRECTIONS}" ] &&
            [ -z "${FONT}" ] && [ -z "${LEGACY_CHARSET}" ] &&
            ! is_true "${UNICODE}"; then
            exit 0
        fi

        # There should be no bogus failures below this line!
        log_info_msg "Setting up Linux console..."

        # Figure out if a framebuffer console is used
        [ -d /sys/class/graphics/fb0 ] && use_fb=1 || use_fb=0

        # Figure out the command to set the console into the
        # desired mode
        is_true "${UNICODE}" &&
            MODE_COMMAND="echo -en '\033%G' && kbd_mode -u" ||
            MODE_COMMAND="echo -en '\033@\033(K' && kbd_mode -a"

        # On framebuffer consoles, font has to be set for each vt in
        # UTF-8 mode. This doesn't hurt in non-UTF-8 mode also.

        ! is_true "${use_fb}" || [ -z "${FONT}" ] ||
            MODE_COMMAND="${MODE_COMMAND} && setfont ${FONT}"

        # Apply that command to all consoles mentioned in
        # /etc/inittab. Important: in the UTF-8 mode this should
        # happen before setfont, otherwise a kernel bug will
        # show up and the unicode map of the font will not be
        # used.

        for TTY in `grep '^[^#].*respawn:/sbin/agetty' /etc/inittab |
            grep -o '\btty[[:digit:]]*\b'`
        do
            openvt -f -w -c ${TTY#tty} -- \
                /bin/sh -c "${MODE_COMMAND}" || failed=1
        done

        # Set the font (if not already set above) and the keymap
        [ "${use_fb}" == "1" ] || [ -z "${FONT}" ] || setfont $FONT || failed=1

        [ -z "${KEYMAP}" ] ||
            loadkeys ${KEYMAP} >/dev/null 2>&1 ||
            failed=1

        [ -z "${KEYMAP_CORRECTIONS}" ] ||
            loadkeys ${KEYMAP_CORRECTIONS} >/dev/null 2>&1 ||
            failed=1

```



```

# Convert the keymap from $LEGACY_CHARSET to UTF-8
[ -z "$LEGACY_CHARSET" ] ||
    dumpkeys -c "$LEGACY_CHARSET" | loadkeys -u >/dev/null 2>&1 ||
    failed=1

# If any of the commands above failed, the trap at the
# top would set $failed to 1
( exit $failed )
evaluate_retval

exit $failed
;;

*)
echo "Usage:  ${0} {start}"
exit 1
;;
esac

# End console

```

D.14. /etc/rc.d/init.d/localnet

```

#!/bin/sh
#####
# Begin localnet
#
# Description : Loopback device
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          localnet
# Required-Start:    $local_fs
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:     S
# Default-Stop:      0 6
# Short-Description: Starts the local network.
# Description:       Sets the hostname of the machine and starts the
#                   loopback interface.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions
[ -r /etc/sysconfig/network ] && . /etc/sysconfig/network

case "${1}" in
    start)
        log_info_msg "Bringing up the loopback interface..."
        ip addr add 127.0.0.1/8 label lo dev lo
        ip link set lo up
        evaluate_retval

```

```

    log_info_msg "Setting hostname to ${HOSTNAME}..."
    hostname ${HOSTNAME}
    evaluate_retval
    ;;

stop)
    log_info_msg "Bringing down the loopback interface..."
    ip link set lo down
    evaluate_retval
    ;;

restart)
    ${0} stop
    sleep 1
    ${0} start
    ;;

status)
    echo "Hostname is: $(hostname)"
    ip link show lo
    ;;

*)
    echo "Usage: ${0} {start|stop|restart|status}"
    exit 1
    ;;
esac

exit 0

# End localnet

```

D.15. /etc/rc.d/init.d/sysctl

```

#!/bin/sh
#####
# Begin sysctl
#
# Description : File uses /etc/sysctl.conf to set kernel runtime
#               parameters
#
# Authors      : Nathan Coulson (nathan@linuxfromscratch.org)
#               Matthew Burgess (matthew@linuxfromscratch.org)
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          sysctl
# Required-Start:    mountvirtfs
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:     S
# Default-Stop:
# Short-Description: Makes changes to the proc filesystem

```

```

# Description:          Makes changes to the proc filesystem as defined in
#                      /etc/sysctl.conf.  See 'man sysctl(8)'.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        if [ -f "/etc/sysctl.conf" ]; then
            log_info_msg "Setting kernel runtime parameters..."
            sysctl -q -p
            evaluate_retval
        fi
        ;;

    status)
        sysctl -a
        ;;

    *)
        echo "Usage: ${0} {start|status}"
        exit 1
        ;;
esac

exit 0

# End sysctl

```

D.16. /etc/rc.d/init.d/sysklogd

```

#!/bin/sh
#####
# Begin sysklogd
#
# Description : Sysklogd loader
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          $syslog
# Required-Start:    localnet
# Should-Start:
# Required-Stop:     $local_fs sendsignals
# Should-Stop:
# Default-Start:     2 3 4 5
# Default-Stop:      0 1 6
# Short-Description: Starts kernel and system log daemons.
# Description:       Starts kernel and system log daemons.
#                   /etc/fstab.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

```

```

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        log_info_msg "Starting system log daemon..."
        parms=${SYSKLOGD_PARAMS--'-m 0'}
        start_daemon /sbin/syslogd $parms
        evaluate_retval

        log_info_msg "Starting kernel log daemon..."
        start_daemon /sbin/klogd
        evaluate_retval
        ;;

    stop)
        log_info_msg "Stopping kernel log daemon..."
        killproc /sbin/klogd
        evaluate_retval

        log_info_msg "Stopping system log daemon..."
        killproc /sbin/syslogd
        evaluate_retval
        ;;

    reload)
        log_info_msg "Reloading system log daemon config file..."
        pid=`pidofproc syslogd`
        kill -HUP "${pid}"
        evaluate_retval
        ;;

    restart)
        ${0} stop
        sleep 1
        ${0} start
        ;;

    status)
        statusproc /sbin/syslogd
        statusproc klogd
        ;;

    *)
        echo "Usage: ${0} {start|stop|reload|restart|status}"
        exit 1
        ;;
esac

exit 0

# End syslogd

```

D.17. /etc/rc.d/init.d/network

```

#!/bin/sh
#####
# Begin network
#
# Description : Network Control Script
#

```

```

# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#              Nathan Coulson - nathan@linuxfromscratch.org
#              Kevin P. Fleming - kpffleming@linuxfromscratch.org
#              DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          $network
# Required-Start:    $local_fs swap localnet
# Should-Start:     $syslog
# Required-Stop:    $local_fs swap localnet
# Should-Stop:     $syslog
# Default-Start:    3 4 5
# Default-Stop:    0 1 2 6
# Short-Description: Starts and configures network interfaces.
# Description:      Starts and configures network interfaces.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

case "${1}" in
  start)
    # Start all network interfaces
    for file in /etc/sysconfig/ifconfig.*
    do
      interface=${file##*/ifconfig.}

      # Skip if $file is * (because nothing was found)
      if [ "${interface}" = "*" ]
      then
        continue
      fi

      /sbin/ifup ${interface}
    done
    ;;

  stop)
    # Reverse list
    net_files=""
    for file in /etc/sysconfig/ifconfig.*
    do
      net_files="${file} ${net_files}"
    done

    # Stop all network interfaces
    for file in ${net_files}
    do
      interface=${file##*/ifconfig.}

      # Skip if $file is * (because nothing was found)
      if [ "${interface}" = "*" ]
      then
        continue
      fi

      /sbin/ifdown ${interface}
    done
  ;;
)

```

```

;;

restart)
    ${0} stop
    sleep 1
    ${0} start
    ;;

*)
    echo "Usage: ${0} {start|stop|restart}"
    exit 1
    ;;
esac

exit 0

# End network

```

D.18. /etc/rc.d/init.d/sendsignals

```

#!/bin/sh
#####
# Begin sendsignals
#
# Description : Sendsignals Script
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          sendsignals
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:     $local_fs swap localnet
# Should-Stop:
# Default-Start:
# Default-Stop:      0 6
# Short-Description: Attempts to kill remaining processes.
# Description:       Attempts to kill remaining processes.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    stop)
        log_info_msg "Sending all processes the TERM signal..."
        killall5 -15
        error_value=${?}

        sleep ${KILLDELAY}

        if [ "${error_value}" = 0 -o "${error_value}" = 2 ]; then
            log_success_msg
        else

```

```

        log_failure_msg
    fi

    log_info_msg "Sending all processes the KILL signal..."
    killall5 -9
    error_value=${?}

    sleep ${KILLDELAY}

    if [ "${error_value}" = 0 -o "${error_value}" = 2 ]; then
        log_success_msg
    else
        log_failure_msg
    fi
    ;;

*)
    echo "Usage: ${0} {stop}"
    exit 1
    ;;

esac

exit 0

# End sendsignals

```

D.19. /etc/rc.d/init.d/reboot

```

#!/bin/sh
#####
# Begin reboot
#
# Description : Reboot Scripts
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          reboot
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:    6
# Default-Stop:
# Short-Description: Reboots the system.
# Description:       Reboots the System.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    stop)

```

```

log_info_msg "Restarting system..."
reboot -d -f -i
;;

*)
echo "Usage: ${0} {stop}"
exit 1
;;

esac

# End reboot

```

D.20. /etc/rc.d/init.d/halt

```

#!/bin/sh
#####
# Begin halt
#
# Description : Halt Script
#
# Authors      : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          halt
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:    0
# Default-Stop:
# Short-Description: Halts the system.
# Description:       Halts the System.
# X-LFS-Provided-By: LFS
### END INIT INFO

case "${1}" in
  stop)
    halt -d -f -i -p
    ;;

  *)
    echo "Usage: {stop}"
    exit 1
    ;;

esac

# End halt

```

D.21. /etc/rc.d/init.d/template

```

#!/bin/sh
#####
# Begin scriptname

```



```

#
# Description :
#
# Authors      :
#
# Version      : LFS x.x
#
# Notes       :
#
#####

### BEGIN INIT INFO
# Provides:          template
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:
# Default-Stop:
# Short-Description:
# Description:
# X-LFS-Provided-By:
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
    start)
        log_info_msg "Starting..."
        start_daemon fully_qualified_path
        ;;

    stop)
        log_info_msg "Stopping..."
        killproc fully_qualified_path
        ;;

    restart)
        ${0} stop
        sleep 1
        ${0} start
        ;;

    *)
        echo "Usage: ${0} {start|stop|restart}"
        exit 1
        ;;
esac

exit 0

# End scriptname

```

D.22. /etc/sysconfig/modules

```

#####
# Begin /etc/sysconfig/modules
#
# Description : Module auto-loading configuration
#

```

```
# Authors      :
#
# Version      : 00.00
#
# Notes       : The syntax of this file is as follows:
#               <module> [<arg1> <arg2> ...]
#
# Each module should be on it's own line, and any options that you want
# passed to the module should follow it.  The line delimitator is either
# a space or a tab.
#####
# End /etc/sysconfig/modules
```

D.23. /etc/sysconfig/createfiles

```
#####
# Begin /etc/sysconfig/createfiles
#
# Description  : Createfiles script config file
#
# Authors     :
#
# Version     : 00.00
#
# Notes      : The syntax of this file is as follows:
#               if type is equal to "file" or "dir"
#                 <filename> <type> <permissions> <user> <group>
#               if type is equal to "dev"
#                 <filename> <type> <permissions> <user> <group> <devtype>
#                 <major> <minor>
#
#               <filename> is the name of the file which is to be created
#               <type> is either file, dir, or dev.
#                 file creates a new file
#                 dir creates a new directory
#                 dev creates a new device
#               <devtype> is either block, char or pipe
#                 block creates a block device
#                 char creates a character device
#                 pipe creates a pipe, this will ignore the <major> and
#                 <minor> fields
#               <major> and <minor> are the major and minor numbers used for
#               the device.
#####
# End /etc/sysconfig/createfiles
```

D.24. /etc/sysconfig/udev-retry

```
#####
# Begin /etc/sysconfig/udev_retry
#
# Description  : udev_retry script configuration
#
# Authors     :
#
# Version     : 00.00
#
# Notes      : Each subsystem that may need to be re-triggered after mountfs
```

```
#          runs should be listed in this file.  Probable subsystems to be
#          listed here are rtc (due to /var/lib/hwclock/adjtime) and sound
#          (due to both /var/lib/alsa/asound.state and /usr/sbin/alsactl).
#          Entries are whitespace-separated.
#####

rtc

# End /etc/sysconfig/udev_retry
```

D.25. /sbin/ifup

```
#!/bin/sh
#####
# Begin /sbin/ifup
#
# Description : Interface Up
#
# Authors      : Nathan Coulson - nathan@linuxfromscratch.org
#               Kevin P. Fleming - kpfleming@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.2
#
# Notes        : The IFCONFIG variable is passed to the SERVICE script
#               in the /lib/services directory, to indicate what file the
#               service should source to get interface specifications.
#
#####

up()
{
    if ip link show $1 > /dev/null 2>&1; then
        link_status=`ip link show $1`

        if [ -n "${link_status}" ]; then
            if ! echo "${link_status}" | grep -q UP; then
                ip link set $1 up
            fi
        fi

    else
        log_failure_msg "\nInterface ${IFACE} doesn't exist."
        exit 1
    fi
}

RELEASE="7.2"

USAGE="Usage: $0 [ -hV ] [--help] [--version] interface"
VERSTR="LFS ifup, version ${RELEASE}"

while [ $# -gt 0 ]; do
    case "$1" in
        --help | -h)      help="y"; break ;;

        --version | -V)   echo "${VERSTR}"; exit 0 ;;

        -*)               echo "ifup: ${1}: invalid option" >&2
                          echo "${USAGE}" >& 2
    esac
done
```

```

        exit 2 ;;

    *)
        break ;;
    esac
done

if [ -n "$help" ]; then
    echo "${VERSTR}"
    echo "${USAGE}"
    echo
    cat << HERE_EOF
ifup is used to bring up a network interface. The interface
parameter, e.g. eth0 or eth0:2, must match the trailing part of the
interface specifications file, e.g. /etc/sysconfig/ifconfig.eth0:2.

HERE_EOF
    exit 0
fi

file=/etc/sysconfig/ifconfig.${1}

# Skip backup files
[ "${file}" = "${file%*"~"}" ] || exit 0

. /lib/lsb/init-functions

log_info_msg "Bringing up the ${1} interface... "

if [ ! -r "${file}" ]; then
    log_failure_msg2 "${file} is missing or cannot be accessed."
    exit 1
fi

. $file

if [ "$IFACE" = "" ]; then
    log_failure_msg2 "${file} does not define an interface [IFACE]."
    exit 1
fi

# Do not process this service if started by boot, and ONBOOT
# is not set to yes
if [ "${IN_BOOT}" = "1" -a "${ONBOOT}" != "yes" ]; then
    log_info_msg2 "skipped"
    exit 0
fi

for S in ${SERVICE}; do
    if [ ! -x "/lib/services/${S}" ]; then
        MSG="\nUnable to process ${file}. Either "
        MSG="${MSG}the SERVICE '${S} was not present "
        MSG="${MSG}or cannot be executed."
        log_failure_msg "$MSG"
        exit 1
    fi
done

# Create/configure the interface
for S in ${SERVICE}; do
    IFCONFIG=${file} /lib/services/${S} ${IFACE} up
done

```

```

# Bring up the interface and any components
for I in $IFACE $INTERFACE_COMPONENTS; do up $I; done

# Set MTU if requested. Check if MTU has a "good" value.
if test -n "${MTU}"; then
  if [[ ${MTU} =~ ^[0-9]+$ ]] && [[ $MTU -ge 68 ]]; then
    for I in $IFACE $INTERFACE_COMPONENTS; do
      ip link set dev $I mtu $MTU;
    done
  else
    log_info_msg2 "Invalid MTU $MTU"
  fi
fi

# Set the route default gateway if requested
if [ -n "${GATEWAY}" ]; then
  if ip route | grep -q default; then
    log_warning_msg "\nGateway already setup; skipping."
  else
    log_info_msg "Setting up default gateway..."
    ip route add default via ${GATEWAY} dev ${IFACE}
    evaluate_retval
  fi
fi

# End /sbin/ifup

```

D.26. /sbin/ifdown

```

#!/bin/bash
#####
# Begin /sbin/ifdown
#
# Description : Interface Down
#
# Authors      : Nathan Coulson - nathan@linuxfromscratch.org
#               Kevin P. Fleming - kpffleming@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
# Notes        : the IFCONFIG variable is passed to the scripts found
#               in the /lib/services directory, to indicate what file the
#               service should source to get interface specifications.
#
#####

RELEASE="7.0"

USAGE="Usage: $0 [ -hV ] [--help] [--version] interface"
VERSTR="LFS ifdown, version ${RELEASE}"

while [ $# -gt 0 ]; do
  case "$1" in
    --help | -h)      help="y"; break ;;

    --version | -V)   echo "${VERSTR}"; exit 0 ;;

    -*)               echo "ifup: ${1}: invalid option" >&2
  esac
done

```

```

        echo "${USAGE}" >& 2
        exit 2 ;;

    *)
        break ;;
esac
done

if [ -n "$help" ]; then
    echo "${VERSTR}"
    echo "${USAGE}"
    echo
    cat << HERE_EOF
ifdown is used to bring down a network interface.  The interface
parameter, e.g. eth0 or eth0:2, must match the trailing part of the
interface specifications file, e.g. /etc/sysconfig/ifconfig.eth0:2.

HERE_EOF
    exit 0
fi

file=/etc/sysconfig/ifconfig.${1}

# Skip backup files
[ "${file}" = "${file%*"~"}" ] || exit 0

. /lib/lsb/init-functions

if [ ! -r "${file}" ]; then
    log_warning_msg "${file} is missing or cannot be accessed."
    exit 1
fi

. ${file}

if [ "$IFACE" = "" ]; then
    log_failure_msg "${file} does not define an interface [IFACE]."
    exit 1
fi

# We only need to first service to bring down the interface
S=`echo ${SERVICE} | cut -f1 -d" "`

if ip link show ${IFACE} > /dev/null 2>&1; then
    if [ -n "${S}" -a -x "/lib/services/${S}" ]; then
        IFCONFIG=${file} /lib/services/${S} ${IFACE} down
    else
        MSG="Unable to process ${file}.  Either "
        MSG="${MSG}the SERVICE variable was not set "
        MSG="${MSG}or the specified service cannot be executed."
        log_failure_msg "$MSG"
        exit 1
    fi
else
    log_warning_msg "Interface ${1} doesn't exist."
fi

# Leave the interface up if there are additional interfaces in the device
link_status=`ip link show ${IFACE} 2>/dev/null`

if [ -n "${link_status}" ]; then
    if [ "$(echo "${link_status}" | grep UP)" != "" ]; then

```

```

    if [ "$(ip addr show ${IFACE} | grep 'inet ')" == "" ]; then
        log_info_msg "Bringing down the ${IFACE} interface..."
        ip link set ${IFACE} down
        evaluate_retval
    fi
fi
fi

# End /sbin/ifdown

```

D.27. /lib/services/ipv4-static

```

#!/bin/sh
#####
# Begin /lib/services/ipv4-static
#
# Description : IPV4 Static Boot Script
#
# Authors      : Nathan Coulson - nathan@linuxfromscratch.org
#               Kevin P. Fleming - kpflaming@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

. /lib/lsb/init-functions
. ${IFCONFIG}

if [ -z "${IP}" ]; then
    log_failure_msg "\nIP variable missing from ${IFCONFIG}, cannot continue."
    exit 1
fi

if [ -z "${PREFIX}" -a -z "${PEER}" ]; then
    log_warning_msg "\nPREFIX variable missing from ${IFCONFIG}, assuming 24."
    PREFIX=24
    args="${args} ${IP}/${PREFIX}"
elif [ -n "${PREFIX}" -a -n "${PEER}" ]; then
    log_failure_msg "\nPREFIX and PEER both specified in ${IFCONFIG}, cannot continue."
    exit 1
elif [ -n "${PREFIX}" ]; then
    args="${args} ${IP}/${PREFIX}"
elif [ -n "${PEER}" ]; then
    args="${args} ${IP} peer ${PEER}"
fi

if [ -n "${BROADCAST}" ]; then
    args="${args} broadcast ${BROADCAST}"
fi

case "${2}" in
    up)
        if [ "$(ip addr show ${1} 2>/dev/null | grep ${IP}/)" = "" ]; then

            # Cosmetic output not needed for multiple services
            if ! $(echo ${SERVICE} | grep -q " "); then

```

```

        log_info_msg2 "\n" # Terminate the previous message
    fi

    log_info_msg "Adding IPv4 address ${IP} to the ${1} interface..."
    ip addr add ${args} dev ${1}
    evaluate_retval
else
    log_warning_msg "Cannot add IPv4 address ${IP} to ${1}.  Already present."
fi
;;

down)
    if [ "$(ip addr show ${1} 2>/dev/null | grep ${IP}/)" != "" ]; then
        log_info_msg "Removing IPv4 address ${IP} from the ${1} interface..."
        ip addr del ${args} dev ${1}
        evaluate_retval
    fi

    if [ -n "${GATEWAY}" ]; then
        # Only remove the gateway if there are no remaining ipv4 addresses
        if [ "$(ip addr show ${1} 2>/dev/null | grep 'inet ')" != "" ]; then
            log_info_msg "Removing default gateway..."
            ip route del default
            evaluate_retval
        fi
    fi
fi
;;

*)
    echo "Usage: ${0} [interface] {up|down}"
    exit 1
;;
esac

# End /lib/services/ipv4-static

```

D.28. /lib/services/ipv4-static-route

```

#!/bin/sh
#####
# Begin /lib/services/ipv4-static-route
#
# Description : IPV4 Static Route Script
#
# Authors      : Kevin P. Fleming - kpfleming@linuxfromscratch.org
#              : DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update       : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version      : LFS 7.0
#
#####

. /lib/lsb/init-functions
. ${IFCONFIG}

case "${TYPE}" in
    (" | "network")
        need_ip=1
        need_gateway=1
    ;;

```



```

("default")
    need_gateway=1
    args="${args} default"
    desc="default"
;;

("host")
    need_ip=1
;;

("unreachable")
    need_ip=1
    args="${args} unreachable"
    desc="unreachable "
;;

(*)
    log_failure_msg "Unknown route type (${TYPE}) in ${IFCONFIG}, cannot continue."
    exit 1
;;
esac

if [ -n "${GATEWAY}" ]; then
    MSG="The GATEWAY variable cannot be set in ${IFCONFIG} for static routes.\n"
    log_failure_msg "$MSG Use STATIC_GATEWAY only, cannot continue"
    exit 1
fi

if [ -n "${need_ip}" ]; then
    if [ -z "${IP}" ]; then
        log_failure_msg "IP variable missing from ${IFCONFIG}, cannot continue."
        exit 1
    fi

    if [ -z "${PREFIX}" ]; then
        log_failure_msg "PREFIX variable missing from ${IFCONFIG}, cannot continue."
        exit 1
    fi

    args="${args} ${IP}/${PREFIX}"
    desc="${desc}${IP}/${PREFIX}"
fi

if [ -n "${need_gateway}" ]; then
    if [ -z "${STATIC_GATEWAY}" ]; then
        log_failure_msg "STATIC_GATEWAY variable missing from ${IFCONFIG}, cannot continue."
        exit 1
    fi
    args="${args} via ${STATIC_GATEWAY}"
fi

if [ -n "${SOURCE}" ]; then
    args="${args} src ${SOURCE}"
fi

case "${2}" in
    up)
        log_info_msg "Adding '${desc}' route to the ${1} interface..."
        ip route add ${args} dev ${1}
        evaluate_retval

```

```
;;

down)
    log_info_msg "Removing '${desc}' route from the ${1} interface..."
    ip route del ${args} dev ${1}
    evaluate_retval
;;

*)
    echo "Usage: ${0} [interface] {up|down}"
    exit 1
;;
esac

# End /lib/services/ipv4-static-route
```

付録 E. Udev 設定ルール

本付録にて `udev-lfs-206-1.tar.bz2` に含まれるルールを列記します。インストール手順は 6.62. 「Udev-206 (systemd-206 から抽出)」を参照してください。

E.1. 55-lfs.rules

```
# /etc/udev/rules.d/55-lfs.rules: Rule definitions for LFS.

# Core kernel devices

# This causes the system clock to be set as soon as /dev/rtc becomes available.
SUBSYSTEM=="rtc", ACTION=="add", MODE="0644", RUN+=" /etc/rc.d/init.d/setclock start"
KERNEL=="rtc", ACTION=="add", MODE="0644", RUN+=" /etc/rc.d/init.d/setclock start"

# Comms devices

KERNEL=="ipp[0-9]*",          GROUP="dialout"
KERNEL=="isd[0-9]*",         GROUP="dialout"
KERNEL=="isdnctrl[0-9]*",    GROUP="dialout"
KERNEL=="dcbri[0-9]*",       GROUP="dialout"
```

付録 F. LFS ライセンス

本ブックはクリエイティブコモンズ (Creative Commons) の 表示-非営利-継承 (Attribution-NonCommercial-ShareAlike) 2.0ライセンスに従います。

本書のインストール手順のコマンドを抜き出したものは MIT ライセンスに従ってください。

F.1. クリエイティブコモンズライセンス



日本語訳情報

以下は日本語へ訳出することなく、原文のライセンス条項をそのまま示します。

Creative Commons Legal Code

Attribution-NonCommercial-ShareAlike 2.0



重要項目

CREATIVE COMMONS CORPORATION IS NOT A LAW FIRM AND DOES NOT PROVIDE LEGAL SERVICES. DISTRIBUTION OF THIS LICENSE DOES NOT CREATE AN ATTORNEY-CLIENT RELATIONSHIP. CREATIVE COMMONS PROVIDES THIS INFORMATION ON AN "AS-IS" BASIS. CREATIVE COMMONS MAKES NO WARRANTIES REGARDING THE INFORMATION PROVIDED, AND DISCLAIMS LIABILITY FOR DAMAGES RESULTING FROM ITS USE.

License

THE WORK (AS DEFINED BELOW) IS PROVIDED UNDER THE TERMS OF THIS CREATIVE COMMONS PUBLIC LICENSE ("CCPL" OR "LICENSE"). THE WORK IS PROTECTED BY COPYRIGHT AND/OR OTHER APPLICABLE LAW. ANY USE OF THE WORK OTHER THAN AS AUTHORIZED UNDER THIS LICENSE OR COPYRIGHT LAW IS PROHIBITED.

BY EXERCISING ANY RIGHTS TO THE WORK PROVIDED HERE, YOU ACCEPT AND AGREE TO BE BOUND BY THE TERMS OF THIS LICENSE. THE LICENSOR GRANTS YOU THE RIGHTS CONTAINED HERE IN CONSIDERATION OF YOUR ACCEPTANCE OF SUCH TERMS AND CONDITIONS.

1. Definitions

- a. "Collective Work" means a work, such as a periodical issue, anthology or encyclopedia, in which the Work in its entirety in unmodified form, along with a number of other contributions, constituting separate and independent works in themselves, are assembled into a collective whole. A work that constitutes a Collective Work will not be considered a Derivative Work (as defined below) for the purposes of this License.
- b. "Derivative Work" means a work based upon the Work or upon the Work and other pre-existing works, such as a translation, musical arrangement, dramatization, fictionalization, motion picture version, sound recording, art reproduction, abridgment, condensation, or any other form in which the Work may be recast, transformed, or adapted, except that a work that constitutes a Collective Work will not be considered a Derivative Work for the purpose of this License. For the avoidance of doubt, where the Work is a musical composition or sound recording, the synchronization of the Work in timed-relation with a moving image ("synching") will be considered a Derivative Work for the purpose of this License.
- c. "Licensor" means the individual or entity that offers the Work under the terms of this License.
- d. "Original Author" means the individual or entity who created the Work.
- e. "Work" means the copyrightable work of authorship offered under the terms of this License.
- f. "You" means an individual or entity exercising rights under this License who has not previously violated the terms of this License with respect to the Work, or who has received express permission from the Licensor to exercise rights under this License despite a previous violation.
- g. "License Elements" means the following high-level license attributes as selected by Licensor and indicated in the title of this License: Attribution, Noncommercial, ShareAlike.

2. Fair Use Rights. Nothing in this license is intended to reduce, limit, or restrict any rights arising from fair use, first sale or other limitations on the exclusive rights of the copyright owner under copyright law or other applicable laws.

3. License Grant. Subject to the terms and conditions of this License, Licensor hereby grants You a worldwide, royalty-free, non-exclusive, perpetual (for the duration of the applicable copyright) license to exercise the rights in the Work as stated below:

- a. to reproduce the Work, to incorporate the Work into one or more Collective Works, and to reproduce the Work as incorporated in the Collective Works;
- b. to create and reproduce Derivative Works;
- c. to distribute copies or phonorecords of, display publicly, perform publicly, and perform publicly by means of a digital audio transmission the Work including as incorporated in Collective Works;
- d. to distribute copies or phonorecords of, display publicly, perform publicly, and perform publicly by means of a digital audio transmission Derivative Works;

The above rights may be exercised in all media and formats whether now known or hereafter devised. The above rights include the right to make such modifications as are technically necessary to exercise the rights in other media and formats. All rights not expressly granted by Licensor are hereby reserved, including but not limited to the rights set forth in Sections 4(e) and 4(f).

4. Restrictions. The license granted in Section 3 above is expressly made subject to and limited by the following restrictions:
- a. You may distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Work only under the terms of this License, and You must include a copy of, or the Uniform Resource Identifier for, this License with every copy or phonorecord of the Work You distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform. You may not offer or impose any terms on the Work that alter or restrict the terms of this License or the recipients' exercise of the rights granted hereunder. You may not sublicense the Work. You must keep intact all notices that refer to this License and to the disclaimer of warranties. You may not distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Work with any technological measures that control access or use of the Work in a manner inconsistent with the terms of this License Agreement. The above applies to the Work as incorporated in a Collective Work, but this does not require the Collective Work apart from the Work itself to be made subject to the terms of this License. If You create a Collective Work, upon notice from any Licensor You must, to the extent practicable, remove from the Collective Work any reference to such Licensor or the Original Author, as requested. If You create a Derivative Work, upon notice from any Licensor You must, to the extent practicable, remove from the Derivative Work any reference to such Licensor or the Original Author, as requested.
 - b. You may distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform a Derivative Work only under the terms of this License, a later version of this License with the same License Elements as this License, or a Creative Commons iCommons license that contains the same License Elements as this License (e.g. Attribution-NonCommercial-ShareAlike 2.0 Japan). You must include a copy of, or the Uniform Resource Identifier for, this License or other license specified in the previous sentence with every copy or phonorecord of each Derivative Work You distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform. You may not offer or impose any terms on the Derivative Works that alter or restrict the terms of this License or the recipients' exercise of the rights granted hereunder, and You must keep intact all notices that refer to this License and to the disclaimer of warranties. You may not distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Derivative Work with any technological measures that control access or use of the Work in a manner inconsistent with the terms of this License Agreement. The above applies to the Derivative Work as incorporated in a Collective Work, but this does not require the Collective Work apart from the Derivative Work itself to be made subject to the terms of this License.
 - c. You may not exercise any of the rights granted to You in Section 3 above in any manner that is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation. The exchange of the Work for other copyrighted works by means of digital file-sharing or otherwise shall not be considered to be intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation, provided there is no payment of any monetary compensation in connection with the exchange of copyrighted works.
 - d. If you distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Work or any Derivative Works or Collective Works, You must keep intact all copyright notices for the Work and give the Original Author credit reasonable to the medium or means You are utilizing by conveying the name (or pseudonym if applicable) of the Original Author if supplied; the title of the Work if supplied; to the extent reasonably practicable, the Uniform Resource Identifier, if any, that Licensor specifies to be associated with the Work, unless such URI does not refer to the copyright notice or licensing information for the Work; and in the case of a Derivative Work, a credit identifying the use of the Work in the Derivative Work (e.g., "French translation of the Work by Original Author," or "Screenplay based on original Work by Original Author"). Such credit may be implemented in any reasonable manner;

provided, however, that in the case of a Derivative Work or Collective Work, at a minimum such credit will appear where any other comparable authorship credit appears and in a manner at least as prominent as such other comparable authorship credit.

- e. For the avoidance of doubt, where the Work is a musical composition:
 - i. Performance Royalties Under Blanket Licenses. Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a performance rights society (e.g. ASCAP, BMI, SESAC), royalties for the public performance or public digital performance (e.g. webcast) of the Work if that performance is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation.
 - ii. Mechanical Rights and Statutory Royalties. Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a music rights agency or designated agent (e.g. Harry Fox Agency), royalties for any phonorecord You create from the Work ("cover version") and distribute, subject to the compulsory license created by 17 USC Section 115 of the US Copyright Act (or the equivalent in other jurisdictions), if Your distribution of such cover version is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation.
- f. Webcasting Rights and Statutory Royalties. For the avoidance of doubt, where the Work is a sound recording, Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a performance-rights society (e.g. SoundExchange), royalties for the public digital performance (e.g. webcast) of the Work, subject to the compulsory license created by 17 USC Section 114 of the US Copyright Act (or the equivalent in other jurisdictions), if Your public digital performance is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation.

5. Representations, Warranties and Disclaimer

UNLESS OTHERWISE MUTUALLY AGREED TO BY THE PARTIES IN WRITING, LICENSOR OFFERS THE WORK AS-IS AND MAKES NO REPRESENTATIONS OR WARRANTIES OF ANY KIND CONCERNING THE WORK, EXPRESS, IMPLIED, STATUTORY OR OTHERWISE, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, WARRANTIES OF TITLE, MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE, NONINFRINGEMENT, OR THE ABSENCE OF LATENT OR OTHER DEFECTS, ACCURACY, OR THE PRESENCE OF ABSENCE OF ERRORS, WHETHER OR NOT DISCOVERABLE. SOME JURISDICTIONS DO NOT ALLOW THE EXCLUSION OF IMPLIED WARRANTIES, SO SUCH EXCLUSION MAY NOT APPLY TO YOU.

6. Limitation on Liability. EXCEPT TO THE EXTENT REQUIRED BY APPLICABLE LAW, IN NO EVENT WILL LICENSOR BE LIABLE TO YOU ON ANY LEGAL THEORY FOR ANY SPECIAL, INCIDENTAL, CONSEQUENTIAL, PUNITIVE OR EXEMPLARY DAMAGES ARISING OUT OF THIS LICENSE OR THE USE OF THE WORK, EVEN IF LICENSOR HAS BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.
7. Termination
 - a. This License and the rights granted hereunder will terminate automatically upon any breach by You of the terms of this License. Individuals or entities who have received Derivative Works or Collective Works from You under this License, however, will not have their licenses terminated provided such individuals or entities remain in full compliance with those licenses. Sections 1, 2, 5, 6, 7, and 8 will survive any termination of this License.
 - b. Subject to the above terms and conditions, the license granted here is perpetual (for the duration of the applicable copyright in the Work). Notwithstanding the above, Licensor reserves the right to release the Work under different license terms or to stop distributing the Work at any time; provided, however that any such election will not serve to withdraw this License (or any other license that has been, or is required to be, granted under the terms of this License), and this License will continue in full force and effect unless terminated as stated above.
8. Miscellaneous
 - a. Each time You distribute or publicly digitally perform the Work or a Collective Work, the Licensor offers to the recipient a license to the Work on the same terms and conditions as the license granted to You under this License.
 - b. Each time You distribute or publicly digitally perform a Derivative Work, Licensor offers to the recipient a license to the original Work on the same terms and conditions as the license granted to You under this License.

- c. If any provision of this License is invalid or unenforceable under applicable law, it shall not affect the validity or enforceability of the remainder of the terms of this License, and without further action by the parties to this agreement, such provision shall be reformed to the minimum extent necessary to make such provision valid and enforceable.
- d. No term or provision of this License shall be deemed waived and no breach consented to unless such waiver or consent shall be in writing and signed by the party to be charged with such waiver or consent.
- e. This License constitutes the entire agreement between the parties with respect to the Work licensed here. There are no understandings, agreements or representations with respect to the Work not specified here. Licensor shall not be bound by any additional provisions that may appear in any communication from You. This License may not be modified without the mutual written agreement of the Licensor and You.



重要項目

Creative Commons is not a party to this License, and makes no warranty whatsoever in connection with the Work. Creative Commons will not be liable to You or any party on any legal theory for any damages whatsoever, including without limitation any general, special, incidental or consequential damages arising in connection to this license. Notwithstanding the foregoing two (2) sentences, if Creative Commons has expressly identified itself as the Licensor hereunder, it shall have all rights and obligations of Licensor.

Except for the limited purpose of indicating to the public that the Work is licensed under the CCPL, neither party will use the trademark "Creative Commons" or any related trademark or logo of Creative Commons without the prior written consent of Creative Commons. Any permitted use will be in compliance with Creative Commons' then-current trademark usage guidelines, as may be published on its website or otherwise made available upon request from time to time.

Creative Commons may be contacted at <http://creativecommons.org/>.

F.2. MIT ライセンス (The MIT License)



日本語訳情報

以下は日本語へ訳出することなく、原文のライセンス条項をそのまま示します。

Copyright © 1999–2013 Gerard Beekmans

Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of this software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the Software without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify, merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to permit persons to whom the Software is furnished to do so, subject to the following conditions:

The above copyright notice and this permission notice shall be included in all copies or substantial portions of the Software.

THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.

項目別もくじ

パッケージ

Autoconf: 140
 Automake: 141
 Bash: 130
 ツール: 52
 Bc: 132
 Binutils: 92
 ツール, 1回め: 31
 ツール, 2回め: 41
 Bison: 127
 Bootscripts: 190
 利用方法: 192
 Bzip2: 102
 ツール: 53
 Check: 50
 Coreutils: 120
 ツール: 54
 DejaGNU: 49
 Diffutils: 143
 ツール: 55
 E2fsprogs: 117
 Expect: 48
 File: 91
 ツール: 56
 Findutils: 145
 ツール: 57
 Flex: 126
 Gawk: 144
 ツール: 58
 GCC: 97
 ツール, 1回め: 33
 ツール, 2回め: 43
 ツール, libstdc++: 40
 GDBM: 134
 Gettext: 146
 ツール: 59
 Glibc: 82
 ツール: 37
 GMP: 94
 Grep: 128
 ツール: 60
 Groff: 148
 GRUB: 152
 Gzip: 155
 ツール: 61
 Iana-Etc: 124
 Inetutils: 135
 IPRoute2: 156
 Kbd: 158
 Kmod: 160
 Less: 154
 Libpipeline: 162
 Libtool: 133
 Linux: 205
 API ヘッダー: 80
 ツール, API ヘッダー: 36

M4: 125
 ツール: 62
 Make: 163
 ツール: 63
 Man-DB: 164
 Man-pages: 81
 MPC: 96
 MPFR: 95
 Ncurses: 105
 ツール: 51
 Patch: 167
 ツール: 64
 Perl: 137
 ツール: 65
 pkgconfig: 104
 Procps-ng: 115
 Psmisc: 114
 rc.site: 197
 Readline: 129
 Sed: 101
 ツール: 66
 Shadow: 107
 設定: 107
 Sysklogd: 168
 設定: 168
 Sysvinit: 169
 設定: 192
 Tar: 171
 ツール: 67
 Tcl: 46
 Texinfo: 172
 ツール: 68
 Udev: 174
 利用方法: 184
 Util-linux: 110
 Vim: 176
 xz: 150
 ツール: 69
 Zlib: 90

プログラム

a2p: 137, 138
 accessdb: 164, 165
 acinstall: 141, 141
 aclocal: 141, 141
 aclocal-1.14: 141, 141
 addftinfo: 148, 148
 addpart: 110, 111
 addr2line: 92, 93
 afmtodit: 148, 148
 agetty: 110, 111
 apropos: 164, 165
 ar: 92, 93
 as: 92, 93
 ata_id: 174, 174
 autoconf: 140, 140
 autoheader: 140, 140
 autom4te: 140, 140
 automake: 141, 141
 automake-1.14: 141, 141

autopoint: 146, 146
 autoreconf: 140, 140
 autoscan: 140, 140
 autoupdate: 140, 140
 awk: 144, 144
 badblocks: 117, 118
 base64: 120, 121
 basename: 120, 121
 bash: 130, 130
 bashbug: 130, 131
 bc: 132, 132
 bigram: 145, 145
 bison: 127, 127
 blkid: 110, 111
 blockdev: 110, 111
 bootlogd: 169, 169
 bridge: 156, 156
 bunzip2: 102, 102
 bzip2: 102, 102
 bzcat: 102, 102
 bzcmp: 102, 102
 bzdiff: 102, 102
 bzegrep: 102, 103
 bzfgrep: 102, 103
 bzgrep: 102, 103
 bzip2: 102, 103
 bzip2recover: 102, 103
 bzless: 102, 103
 bzmored: 102, 103
 c++: 97, 100
 c++filt: 92, 93
 c2ph: 137, 138
 cal: 110, 111
 captinfo: 105, 106
 cat: 120, 121
 catchsegv: 82, 86
 catman: 164, 165
 cc: 97, 100
 cdrom_id: 174, 174
 cfdisk: 110, 111
 chage: 107, 108
 chattr: 117, 118
 chcon: 120, 121
 chcpu: 110, 111
 checkmk: 50, 50
 chem: 148, 148
 chfn: 107, 108
 chgpasswd: 107, 108
 chgrp: 120, 121
 chmod: 120, 121
 chown: 120, 121
 chpasswd: 107, 108
 chroot: 120, 121
 chrt: 110, 111
 chsh: 107, 108
 chvt: 158, 159
 cksum: 120, 121
 clear: 105, 106
 cmp: 143, 143
 code: 145, 145
 col: 110, 111
 colcrt: 110, 111
 collect: 174, 174
 colrm: 110, 111
 column: 110, 111
 comm: 120, 121
 compile: 141, 141
 compile_et: 117, 118
 config.charset: 146, 146
 config.guess: 141, 141
 config.rpath: 146, 146
 config.sub: 141, 141
 config_data: 137, 138
 corelist: 137, 138
 cp: 120, 121
 cpan: 137, 138
 cpan2dist: 137, 138
 cpanp: 137, 138
 cpanp-run-perl: 137, 138
 cpp: 97, 100
 csplit: 120, 121
 ctrlaltdel: 110, 111
 ctstat: 156, 156
 cut: 120, 121
 cytune: 110, 111
 date: 120, 121
 dc: 132, 132
 dd: 120, 121
 deallocvt: 158, 159
 debugfs: 117, 118
 delpart: 110, 111
 depcomp: 141, 141
 depmod: 160, 160
 df: 120, 121
 diff: 143, 143
 diff3: 143, 143
 dir: 120, 121
 dircolors: 120, 121
 dirname: 120, 122
 dmesg: 110, 111
 du: 120, 122
 dumpe2fs: 117, 118
 dumpkeys: 158, 159
 e2fsck: 117, 118
 e2image: 117, 118
 e2label: 117, 118
 e2undo: 117, 118
 echo: 120, 122
 egrep: 128, 128
 eject: 110, 111
 elfedit: 92, 93
 enc2xs: 137, 138
 env: 120, 122
 envsubst: 146, 146
 eqn: 148, 148
 eqn2graph: 148, 148
 ex: 176, 177
 expand: 120, 122
 expect: 48, 48
 expiry: 107, 108
 expr: 120, 122
 factor: 120, 122
 faillog: 107, 108

fallocate: 110, 111
 false: 120, 122
 fdformat: 110, 111
 fdisk: 110, 111
 fgconsole: 158, 159
 fgrep: 128, 128
 file: 91, 91
 find: 145, 145
 find2perl: 137, 138
 findfs: 110, 111
 findmnt: 110, 111
 flex: 126, 126
 flex++: 126, 126
 flock: 110, 111
 fmt: 120, 122
 fold: 120, 122
 frcode: 145, 145
 free: 115, 115
 fsck: 110, 111
 fsck.cramfs: 110, 111
 fsck.ext2: 117, 118
 fsck.ext3: 117, 118
 fsck.ext4: 117, 118
 fsck.ext4dev: 117, 118
 fsck.minix: 110, 111
 fsfreeze: 110, 111
 fstab-decode: 169, 169
 fstrim: 110, 111
 ftp: 135, 136
 fuser: 114, 114
 g++: 97, 100
 gawk: 144, 144
 gawk-4.1.0: 144, 144
 gcc: 97, 100
 gc-ar: 97, 100
 gc-nm: 97, 100
 gc-ranlib: 97, 100
 gcov: 97, 100
 gdiffmk: 148, 148
 gencat: 82, 86
 genl: 156, 156
 geqn: 148, 148
 getconf: 82, 86
 getent: 82, 86
 getkeycodes: 158, 159
 getopt: 110, 112
 gettext: 146, 146
 gettext.sh: 146, 146
 gettextize: 146, 146
 gpasswd: 107, 108
 gprof: 92, 93
 grap2graph: 148, 148
 grep: 128, 128
 grn: 148, 148
 grodvi: 148, 148
 groff: 148, 148
 groffer: 148, 149
 grog: 148, 149
 grolbp: 148, 149
 grolj4: 148, 149
 groups: 148, 149
 grotty: 148, 149
 groupadd: 107, 108
 groupdel: 107, 108
 groupmems: 107, 109
 groupmod: 107, 109
 groups: 120, 122
 grpck: 107, 109
 grpconv: 107, 109
 grpunconv: 107, 109
 grub-bios-setup: 152, 152
 grub-editenv: 152, 152
 grub-fstest: 152, 152
 grub-install: 152, 152
 grub-kbdcomp: 152, 152
 grub-menulst2cfg: 152, 152
 grub-mkconfig: 152, 152
 grub-mkimage: 152, 152
 grub-mklayout: 152, 152
 grub-mknetdir: 152, 152
 grub-mkpasswd-pbkdf2: 152, 152
 grub-mkrelpath: 152, 152
 grub-mkrescue: 152, 152
 grub-mkstandalone: 152, 153
 grub-ofpathname: 152, 153
 grub-probe: 152, 153
 grub-reboot: 152, 153
 grub-script-check: 152, 153
 grub-set-default: 152, 153
 grub-setup: 152, 153
 gtbl: 148, 149
 gunzip: 155, 155
 gzexe: 155, 155
 gzip: 155, 155
 h2ph: 137, 138
 h2xs: 137, 138
 halt: 169, 169
 head: 120, 122
 hexdump: 110, 112
 hostid: 120, 122
 hostname: 135, 136
 hostname: 146, 146
 hpftodit: 148, 149
 hwclock: 110, 112
 i386: 110, 112
 iconv: 82, 86
 iconvconfig: 82, 86
 id: 120, 122
 ifcfg: 156, 156
 ifnames: 140, 140
 ifstat: 156, 156
 igawk: 144, 144
 indxbib: 148, 149
 info: 172, 172
 infocmp: 105, 106
 infokey: 172, 173
 infotocap: 105, 106
 init: 169, 169
 insmod: 160, 160
 install: 120, 122
 install-info: 172, 173
 install-sh: 141, 141

instmodsh: 137, 138
 ionice: 110, 112
 ip: 156, 156
 ipcmk: 110, 112
 ipcrm: 110, 112
 ipcs: 110, 112
 isosize: 110, 112
 join: 120, 122
 json_pp: 137, 138
 kbdfinfo: 158, 159
 kbdrate: 158, 159
 kbd_mode: 158, 159
 kill: 110, 112
 killall: 114, 114
 killall5: 169, 169
 klogd: 168, 168
 kmod: 160, 160
 last: 169, 169
 lastb: 169, 169
 lastlog: 107, 109
 ld: 92, 93
 ld.bfd: 92, 93
 ldattach: 110, 112
 ldconfig: 82, 86
 ldd: 82, 86
 lddlibc4: 82, 86
 less: 154, 154
 lessecho: 154, 154
 lesskey: 154, 154
 lex: 126, 126
 lexgrog: 164, 165
 lfskernel-3.10.10: 205, 207
 libnetcfg: 137, 138
 libtool: 133, 133
 libtoolize: 133, 133
 link: 120, 122
 linux32: 110, 112
 linux64: 110, 112
 lkbib: 148, 149
 ln: 120, 122
 lnstat: 156, 157
 loadkeys: 158, 159
 loadunimap: 158, 159
 locale: 82, 86
 localedef: 82, 86
 locate: 145, 145
 logger: 110, 112
 login: 107, 109
 logname: 120, 122
 logoutd: 107, 109
 logsave: 117, 118
 look: 110, 112
 lookbib: 148, 149
 losetup: 110, 112
 ls: 120, 122
 lsattr: 117, 118
 lsblk: 110, 112
 lscpu: 110, 112
 lslocks: 110, 112
 lsmod: 160, 160
 lzcat: 150, 150
 lzcmp: 150, 150
 lzdiff: 150, 150
 lzegrep: 150, 150
 lzfgrep: 150, 150
 lzgrep: 150, 150
 lzless: 150, 150
 lzma: 150, 150
 lzmadec: 150, 150
 lzmainfo: 150, 150
 lzmore: 150, 150
 m4: 125, 125
 make: 163, 163
 makedb: 82, 86
 makeinfo: 172, 173
 man: 164, 166
 mandb: 164, 166
 manpath: 164, 166
 mapscrn: 158, 159
 mcookie: 110, 112
 md5sum: 120, 122
 mdate-sh: 141, 141
 msg: 169, 169
 missing: 141, 141
 mkdir: 120, 122
 mke2fs: 117, 119
 mkfifo: 120, 122
 mkfs: 110, 112
 mkfs.bfs: 110, 112
 mkfs.cramfs: 110, 112
 mkfs.ext2: 117, 119
 mkfs.ext3: 117, 119
 mkfs.ext4: 117, 119
 mkfs.ext4dev: 117, 119
 mkfs.minix: 110, 112
 mkinstalldirs: 141, 142
 mknod: 120, 122
 mkswap: 110, 112
 mktemp: 120, 122
 mk_cmds: 117, 118
 mmroff: 148, 149
 modinfo: 160, 161
 modprobe: 160, 161
 more: 110, 112
 mount: 110, 112
 mountpoint: 110, 112
 msgattrib: 146, 146
 msgcat: 146, 146
 msgcmp: 146, 146
 msgcomm: 146, 146
 msgconv: 146, 146
 msgen: 146, 146
 msgexec: 146, 146
 msgfilter: 146, 147
 msgfmt: 146, 147
 msggrep: 146, 147
 msginit: 146, 147
 msgmerge: 146, 147
 msgunfmt: 146, 147
 msguniq: 146, 147
 mtrace: 82, 86
 mv: 120, 122

```

namei: 110, 112
ncursesw5-config: 105, 106
neqn: 148, 149
newgrp: 107, 109
newusers: 107, 109
nggettext: 146, 147
nice: 120, 122
nl: 120, 122
nm: 92, 93
nohup: 120, 122
nologin: 107, 109
nproc: 120, 122
nroff: 148, 149
nscd: 82, 86
nstat: 156, 157
objcopy: 92, 93
objdump: 92, 93
od: 120, 122
oldfind: 145, 145
openvt: 158, 159
partx: 110, 112
passwd: 107, 109
paste: 120, 122
patch: 167, 167
pathchk: 120, 122
pcprofiledump: 82, 86
pdfroff: 148, 149
pdftexi2dvi: 172, 173
peekfd: 114, 114
perl: 137, 138
perl5.18.1: 137, 138
perlbug: 137, 138
perldoc: 137, 138
perlivp: 137, 138
perlthanks: 137, 138
pfbtops: 148, 149
pg: 110, 112
pgrep: 115, 115
pic: 148, 149
pic2graph: 148, 149
piconv: 137, 138
pidof: 169, 169
ping: 135, 136
ping6: 135, 136
pinky: 120, 122
pivot_root: 110, 112
pkg-config: 104, 104
pkill: 115, 115
pl2pm: 137, 138
pldd: 82, 86
pmap: 115, 115
pod2html: 137, 138
pod2latex: 137, 138
pod2man: 137, 138
pod2texi: 172, 173
pod2text: 137, 138
pod2usage: 137, 138
podchecker: 137, 138
podselect: 137, 138
post-grohtml: 148, 149
poweroff: 169, 169
pr: 120, 122
pre-grohtml: 148, 149
preconv: 148, 149
printenv: 120, 122
printf: 120, 122
prlimit: 110, 112
prove: 137, 138
prtstat: 114, 114
ps: 115, 115
psed: 137, 138
psfaddtable: 158, 159
psfgettable: 158, 159
psfstriptime: 158, 159
psfxtable: 158, 159
pstree: 114, 114
pstree.x11: 114, 114
pstruct: 137, 139
ptar: 137, 139
ptardiff: 137, 139
ptargrep: 137, 139
ptx: 120, 122
pwck: 107, 109
pwconv: 107, 109
pwd: 120, 122
pwdx: 115, 115
pwunconv: 107, 109
py-compile: 141, 142
ranlib: 92, 93
raw: 110, 112
rcp: 135, 136
readelf: 92, 93
readlink: 120, 122
readprofile: 110, 112
realpath: 120, 122
reboot: 169, 170
recode-sr-latin: 146, 147
refer: 148, 149
rename: 110, 112
renice: 110, 112
reset: 105, 106
resize2fs: 117, 119
resizepart: 110, 112
rev: 110, 112
rexec: 135, 136
rlogin: 135, 136
rm: 120, 122
rmdir: 120, 123
rmmod: 160, 161
rmt: 171, 171
roff2dvi: 148, 149
roff2html: 148, 149
roff2pdf: 148, 149
roff2ps: 148, 149
roff2text: 148, 149
roff2x: 148, 149
routef: 156, 157
routel: 156, 157
rpcgen: 82, 86
rsh: 135, 136
rtacct: 156, 157
rtcwake: 110, 112

```

```

rtmon: 156, 157
rtpr: 156, 157
rtstat: 156, 157
runcon: 120, 123
runlevel: 169, 170
runtest: 49, 49
rview: 176, 177
rvim: 176, 177
s2p: 137, 139
script: 110, 112
scriptreplay: 110, 112
scsi_id: 174, 174
sdiff: 143, 143
sed: 101, 101
seq: 120, 123
setarch: 110, 113
setfont: 158, 159
setkeycodes: 158, 159
setleds: 158, 159
setmetamode: 158, 159
setsid: 110, 113
setterm: 110, 113
sfdisk: 110, 113
sg: 107, 109
sh: 130, 131
shasum: 120, 123
sha224sum: 120, 123
sha256sum: 120, 123
sha384sum: 120, 123
sha512sum: 120, 123
shasum: 137, 139
showconsolefont: 158, 159
showkey: 158, 159
shred: 120, 123
shuf: 120, 123
shutdown: 169, 170
size: 92, 93
slabtop: 115, 115
sleep: 120, 123
sln: 82, 86
soelim: 148, 149
sort: 120, 123
sotruss: 82, 86
splain: 137, 139
split: 120, 123
sprof: 82, 86
ss: 156, 157
stat: 120, 123
stdbuf: 120, 123
strings: 92, 93
strip: 92, 93
stty: 120, 123
su: 107, 109
sulogin: 169, 170
sum: 120, 123
swapon: 110, 113
swapoff: 110, 113
swapon: 110, 113
switch_root: 110, 113
sync: 120, 123
sysctl: 115, 116
syslogd: 168, 168
tabs: 105, 106
tac: 120, 123
tail: 120, 123
tailf: 110, 113
talk: 135, 136
tar: 171, 171
taskset: 110, 113
tbl: 148, 149
tc: 156, 157
tclsh: 46, 46
tclsh8.6: 46, 46
tee: 120, 123
telinit: 169, 170
telnet: 135, 136
test: 120, 123
testgdbm: 134, 134
texi2dvi: 172, 173
texi2pdf: 172, 173
texi2any: 172, 173
texindex: 172, 173
tfmtodit: 148, 149
tftp: 135, 136
tic: 105, 106
timeout: 120, 123
tload: 115, 116
toe: 105, 106
top: 115, 116
touch: 120, 123
tput: 105, 106
tr: 120, 123
traceroute: 135, 136
troff: 148, 149
true: 120, 123
truncate: 120, 123
tset: 105, 106
tsort: 120, 123
tty: 120, 123
tune2fs: 117, 119
tzselect: 82, 86
udevadm: 174, 174
udevvd: 174, 175
ul: 110, 113
umount: 110, 113
uname: 120, 123
uncompress: 155, 155
unexpand: 120, 123
unicode_start: 158, 159
unicode_stop: 158, 159
uniq: 120, 123
unlink: 120, 123
unlzma: 150, 150
unshare: 110, 113
unxz: 150, 150
updatedb: 145, 145
uptime: 115, 116
useradd: 107, 109
userdel: 107, 109
usermod: 107, 109
users: 120, 123
utmpdump: 110, 113

```

uuidd: 110, 113
 uuidgen: 110, 113
 vdir: 120, 123
 vi: 176, 177
 view: 176, 177
 vigr: 107, 109
 vim: 176, 178
 vimdiff: 176, 178
 vimtutor: 176, 178
 vipw: 107, 109
 vmstat: 115, 116
 w: 115, 116
 wall: 110, 113
 watch: 115, 116
 wc: 120, 123
 wdctl: 110, 113
 whatis: 164, 166
 whereis: 110, 113
 who: 120, 123
 whoami: 120, 123
 wipefs: 110, 113
 x86_64: 110, 113
 xargs: 145, 145
 xgettext: 146, 147
 xsubpp: 137, 139
 xtrace: 82, 86
 xxd: 176, 178
 xz: 150, 150
 xzcat: 150, 150
 xzcmp: 150, 150
 xzdec: 150, 150
 xzdiff: 150, 150
 xzegrep: 150, 151
 xzfgrep: 150, 151
 xzgrep: 150, 151
 xzless: 150, 151
 xzmore: 150, 151
 yacc: 127, 127
 yes: 120, 123
 ylwrap: 141, 142
 zcat: 155, 155
 zcmp: 155, 155
 zdiff: 155, 155
 zdump: 82, 86
 zegrep: 155, 155
 zfgrep: 155, 155
 zforce: 155, 155
 zgrep: 155, 155
 zic: 82, 86
 zipdetails: 137, 139
 zless: 155, 155
 zmore: 155, 155
 znew: 155, 155
 zsoelim: 164, 166

ライブラリ

ld.so: 82, 86
 libanl: 82, 87
 libasprintf: 146, 147
 libbfd: 92, 93

libblkid: 110, 113
 libBrokenLocale: 82, 87
 libbsd-compat: 82, 87
 libbz2*: 102, 103
 libc: 82, 87
 libcheck: 50, 50
 libcidn: 82, 87
 libcom_err: 117, 119
 libcrypt: 82, 87
 libcurses: 105, 106
 libdl: 82, 87
 libe2p: 117, 119
 libexpect-5.45: 48, 48
 libext2fs: 117, 119
 libfl.a: 126, 126
 libform: 105, 106
 libg: 82, 87
 libgcc*: 97, 100
 libgcov: 97, 100
 libgdbm: 134, 134
 libgettextlib: 146, 147
 libgettextpo: 146, 147
 libgettextsrc: 146, 147
 libgmp: 94, 94
 libgmpxx: 94, 94
 libgomp: 97, 100
 libhistory: 129, 129
 libiberty: 92, 93
 libieee: 82, 87
 libkmod: 160
 libltdl: 133, 133
 liblto_plugin*: 97, 100
 liblzma*: 150, 151
 libm: 82, 87
 libmagic: 91, 91
 libman: 164, 166
 libmandb: 164, 166
 libmcheck: 82, 87
 libmemusage: 82, 87
 libmenu: 105, 106
 libmount: 110, 113
 libmpc: 96, 96
 libmpfr: 95, 95
 libmudflap*: 97, 100
 libncurses: 105, 106
 libnsl: 82, 87
 libnss: 82, 87
 libopcodes: 92, 93
 libpanel: 105, 106
 libpcprofile: 82, 87
 libpipeline: 162
 libprocps: 115, 116
 libpthread: 82, 87
 libquadmath*: 97, 100
 libquota: 117, 119
 libreadline: 129, 129
 libresolv: 82, 87
 librpcsvc: 82, 87
 librt: 82, 87
 libSegFault: 82, 87
 libss: 117, 119

libssp*: 97, 100	/etc/modprobe.d/usb.conf: 206
libstdbuf.so: 120, 123	/etc/nsswitch.conf: 84
libstdc++: 97, 100	/etc/passwd: 77
libsupc++: 97, 100	/etc/profile: 199
libtcl8.6.so: 46, 46	/etc/protocols: 124
libtclstub8.6.a: 46, 47	/etc/resolv.conf: 183
libthread_db: 82, 87	/etc/services: 124
libudev: 174, 175	/etc/syslog.conf: 168
libutil: 82, 87	/etc/udev: 174, 175
libuuid: 110, 113	/etc/vimrc: 177
liby.a: 127, 127	/usr/include/asm-generic/*.h: 80, 80
libz: 90, 90	/usr/include/asm/*.h: 80, 80
preloadable_libintl: 146, 147	/usr/include/drm/*.h: 80, 80
	/usr/include/linux/*.h: 80, 80
	/usr/include/mtd/*.h: 80, 80
	/usr/include/rdma/*.h: 80, 80
	/usr/include/scsi/*.h: 80, 80
	/usr/include/sound/*.h: 80, 80
	/usr/include/video/*.h: 80, 80
	/usr/include/xen/*.h: 80, 80
	/var/log/btmp: 77
	/var/log/lastlog: 77
	/var/log/wtmp: 77
	/var/run/utmp: 77
	man ページ: 81, 81

スクリプト

checkfs: 190, 190
 cleanfs: 190, 190
 console: 190, 190
 設定: 194
 functions: 190, 190
 halt: 190, 190
 hostname
 設定: 193
 ifdown: 190, 190
 ifup: 190, 190
 ipv4-static: 190, 190
 localnet: 190, 190
 /etc/hosts: 183
 modules: 190, 190
 mountfs: 190, 190
 mountvirtfs: 190, 190
 network: 190, 190
 /etc/hosts: 183
 設定: 181
 rc: 190, 190
 reboot: 190, 190
 sendsignals: 190, 190
 setclock: 190, 190
 設定: 194
 swap: 190, 190
 sysctl: 190, 190
 sysklogd: 190, 190
 設定: 197
 template: 190, 190
 udev: 190, 191
 udev_retry: 190, 191

その他

/boot/config-3.10.10: 205, 207
 /boot/System.map-3.10.10: 205, 207
 /dev/*: 72
 /etc/fstab: 203
 /etc/group: 77
 /etc/hosts: 183
 /etc/inittab: 192
 /etc/inputrc: 201
 /etc/ld.so.conf: 85
 /etc/lfs-release: 210
 /etc/localtime: 84